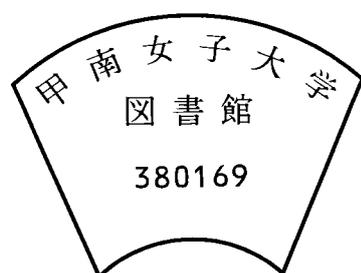


自叙写真法による自己認知の測定に関する研究

自叙写真法による自己認知の測定に関する研究

向山 泰代



目次

第 I 部 序論

第 1 章 自己研究における写真の使用	6
1.1 写真の使用目的と特長	6
1.1.1 情報源としての写真の使用	6
1.1.2 撮影活動や写真呈示による効果を目的とした使用	8
1.2 自叙写真としての使用	10
1.2.1 自叙写真法の概要と目的	10
1.2.2 自叙写真法の特長	14
1.3 自叙写真法を用いた先行研究	16
1.3.1 自叙写真法の手続き	16
1.3.2 自叙写真のカテゴリー分類	18
1.3.3 自叙写真冊子の印象評定	20
1.3.4 事例的アプローチ	22
1.3.5 日本における自叙写真の研究	23
第 2 章 問題の所在と本研究の目的	28

第 II 部 自叙写真に表現された自己関連世界

第 3 章 被写体からみた自己関連世界	33
3.1 被写体にもとづく自叙写真の分類	33
3.1.1 人物・場所・物の分類	35
3.1.2 下位カテゴリー別の分類	39
3.2 分類に使用されたカテゴリーの数	43
3.3 自分を表現する上で重要な対象	45

3.3.1	重要度の高い自叙写真の被写体	46
3.3.2	重要度と被写体の撮影枚数・出現比率との関係	50
3.3.3	自叙写真への評価と重要度との関係	50
3.4	人物写真に表現される内容	52
3.4.1	自分を単独で写した自叙写真の表現内容	53
3.4.2	被写体に他者を含む自叙写真の表現内容	53
3.5	物写真と場所写真に表現される内容	56
3.5.1	物を被写体とした自叙写真の表現内容	57
3.5.2	場所を被写体とした自叙写真の表現内容	60
3.6	第3章まとめ	61
第4章	情緒的意味からみた自己関連世界	65
4.1	情緒的意味にもとづく自叙写真の分類	65
4.1.1	SD法による自叙写真の評定	67
4.1.2	情緒的意味にもとづく自叙写真の類型化	69
4.1.3	被写体からみた自叙写真の5類型の特徴	70
4.1.4	自叙写真の5類型の特徴記述	71
4.1.5	自叙写真への評価と自叙写真の5類型との関係	79
4.2	自叙写真の5類型からみた研究参加者の特徴	81
4.3	第4章まとめ	85
第Ⅲ部	個人要因と自己関連世界との関係	
第5章	心理的特性と自叙写真との関係	91
5.1	パーソナリティ特性との関係	91
5.1.1	5因子性格特性と人物写真の撮影枚数との関係	91

5.1.2	5 因子性格特性と使用カテゴリー数との関係	95
5.2	自己意識特性および社会的不安特性との関係	96
5.2.1	自己意識・社会的不安と人物写真の撮影枚数との関係	96
5.2.2	自己意識・社会的不安と使用カテゴリー数との関係	99
5.3	先行研究との比較	100
5.3.1	人物写真の分析について	100
5.3.2	使用カテゴリー数について	103
5.4	第5章まとめ	104
第6章	20 答法による自己記述と自叙写真との関係	105
6.1	自叙写真に表現される内容	105
6.1.1	表現内容にもとづく自叙写真の分類	106
6.1.2	20 答法と自叙写真法の表現内容の比較	110
6.1.3	研究参加者の自由記述からみた表現内容	110
6.2	自叙写真の表現の特徴	113
6.2.1	自叙写真の表現の具体例	113
6.2.2	20 答法と自叙写真法の回答事例	116
6.3	第6章まとめ	122
第IV部	自叙写真法の適用の実際	
第7章	自叙写真法の臨床現場への適用	127
7.1	自叙写真法の実施事例	127
7.1.1	撮影日数と撮影枚数からみた特徴	131
7.1.2	被写体の選択からみた特徴	132
7.1.3	被写体・表現内容・表現理由・撮影への取組み	133

7.2	第7章まとめ	149
第8章	自叙写真法の再実施	150
8.1	5か月後の再実施結果	150
8.1.1	再参加者の参加理由	151
8.1.2	撮影日数・撮影枚数・被写体の比較	151
8.2	2冊の自叙写真集の表現内容やテーマからみた参加者の類型化	153
8.3	第8章まとめ	175
第9章	自叙写真集・自叙写真法に対する研究参加者の評価	177
9.1	研究への参加の面白さと自叙写真への取り組み	177
9.1.1	研究への参加と取り組み	177
9.1.2	自叙写真および自叙写真集への評価	178
9.2	自叙写真集に対する研究参加者の感想	180
9.3	第9章まとめ	184
第V部	総括	
第10章	本研究のまとめと今後の課題	187
10.1	本研究のまとめ	187
10.2	今後の課題	192
引用文献		197
謝辞		

資料

- 資料 1 被写体の分類カテゴリーの設定
- 資料 2 主要な先行研究で使用された自叙写真の分類カテゴリーと内容
- 資料 3 自叙写真の実施方法の吟味
- 資料 4 自叙写真集の記録用紙と質問票
- 資料 5 高垣（1974）による 20 答法の分類カテゴリーとその内容
- 資料 6 自叙写真のクラスター分析結果の詳細
- 資料 7 自叙写真のクラスター別の被写体と表現内容
- 資料 8 半構造化面接における振り返りシート

第 I 部 序論

カメラや写真は、我々にとって身近なものである。カメラの歴史は 16 世紀のカメラ・オブスキュラに始まるが、1839 年のタゲレオタイプ・カメラによる写真技術の実用化を経て、1889 年にコダック社がロールタイプのフィルムを発売して以降、大衆化し、我々の生活に広く浸透したと言われている。かつて写真は肖像画の代替物であり、旅先や記念日の出来事などの非日常を記録するものであった。現代の日本では、多くの人がロールフィルムを装填する通常のカメラに代わってデジタル・カメラを所持しており、これらに加えて撮影機能付き携帯電話やインスタント・カメラ、プリクラのような街頭の機器等を利用して手軽に大量に写真を撮るようになった。写真を撮り、所有し、折々に写真について語ったり、交換したり、加工したり、といった写真をめぐる様々な行為は、安価で操作しやすい機器の普及によって、我々にとって日常的なものになったと言えよう。

その一方で、写真や写真に関する行為についての心理学的な研究は少ない。写真を撮る一連の行為——撮影の対象を見出す、構図を決める、撮影する（シャッターを押す）、現像する、見る、所有する、語る、交換する、加工する——は、全てが選択と決定を必要とする極めて主体的・能動的な行為である。このような行為自体、あるいはこのような行為を経て我々の目に触れることになる写真は、当人にとって、また見る人にとって心理学的な意味を持つものであろうし、それゆえ自己理解や他者理解のための手段・素材として利用できると思われる。しかしながら、心理学の研究の中では写真という素材や写真を撮る行為が、自己理解や他者理解のための手段として積極的に評価されてきたとは言いがたい。

Allport (1942 大場訳 1970) は手紙・詩・描画などの個人的資料を人間理解のために利用することを提案したが、ここに写真を加えることは可能であろうか。また、個人的資料としての写真は、どのような点で人間理解に有用なものであろうか。本論文は、写真、特に自分自身を表す目的で撮影された“自叙写真 (auto-photography)”を自己理解や他者理解のために利用することを主唱するものである。本論文は以下のように構成される。

第 I 部では、自己研究における写真の使用について先行研究を展望し、これまでの研究結果から導かれた問題意識と本研究の目的について述べる。第 1 章

では、写真という素材の特長を明らかにするため、まず自己研究の中でこれまで写真がどのような目的で使用されてきたかを述べる。続いて自叙写真法の概要と創案の目的、研究方法および査定・治療の手段としての特長をまとめ、自叙写真法を用いた先行研究を展望する。第2章では、先行研究でこれまで明らかにされていることおよび何が課題として残っているのかを論じ、本研究の目的を示す。

本論文のⅡ部からⅣ部は実証部分である。

第Ⅱ部では、研究参加者の自叙写真に見られる一般的特徴について報告する。第3章では、被写体にもとづいて自叙写真を分類した結果を示し、併せて自分を表現する上で重要と判断された自叙写真について報告する。第4章では、セマンティック・ディファレンシャル法を用いて自叙写真の情緒的意味を調べ、その結果にもとづいて自叙写真を分類した結果を示す。これらの分析を通じて、研究参加者の自己に関連した世界がどのような対象を通じて表現されるのか、何が重視されているのか、またそれぞれの自叙写真に対していかなる情緒的意味づけがなされているのかを検討する。

第Ⅲ部は、個人要因と自叙写真との関連について報告する。第5章では、パーソナリティ特性や自己意識・社会的不安といった心理的特性と自叙写真の被写体との関係について、人物を被写体とした自叙写真の結果を中心に報告する。第6章では、20 答法と自叙写真法に表現された内容について比較を行う。両方法から得られた表現内容の相違について述べるとともに、事例の検討を通じて自叙写真法による表現の特徴について考察する。これらの分析を通じて、既存の性格検査や心理尺度等から得られる回答と自叙写真法から得られる回答との関連や相違を示し、自叙写真法を用いることで分かること、およびそれが自叙写真法のどのような特徴によるものかを考察する。

第Ⅳ部は、自叙写真法の適用の実際として、個人の自叙写真集に焦点を当てた分析結果を報告する。加えて、自叙写真や自叙写真集に対する研究参加者の評価について述べる。第7章では、自叙写真法を臨床現場で実施した事例を報告する。第8章では、5ヶ月の期間を経て2度の撮影を行った者の自叙写真集を紹介する。第9章では、自叙写真や自叙写真法に対する研究参加者の意見や評価を調査した結果を示す。これらの分析を通じて、個々人の自叙写真を冊子

として見ることの意義を示し、自己理解や他者理解のための手段として自叙写真や自叙写真法がいかなる点で有用であるかを考察する。

第V部は、先の実証部分を受けての総括である。ここでは、本研究のまとめと今後の課題について述べる。

第1章 自己研究における写真の使用

1.1 写真の使用目的と特長

1.1.1 情報源としての写真の使用

まず、写真がこれまで自己研究の中でどのような目的で使用されてきたのかについて、写真を情報源とする、撮影活動による効果を得る、写真を見ることにより効果を得るという3点から整理し、それぞれの使用目的が写真という手段や素材の持ついかなる特長を踏まえたものかを述べる。

第1の使用目的は、写真を何らかの情報を得るための資料として用いる場合である。写真は表情や姿勢や空間位置など、人の非言語的な表出を記録するためにしばしば用いられてきた。非言語的な表出は言語による表出と比較して無意図的・無意識的になされることも多い。このような無意図的・無意識的な表出をはじめ、言語による表出からは捉えきれない表出の有様を写真はありのままに写しとって伝えるものと見なされてきたのである。人々の自然な姿勢から性別による表出の違いを検討する (Mills, 1984; Klein, 1984) とか、家族療法において家族写真の人物間の距離からメンバー間の情緒的繋がりを調べる (Kaslow & Friedman, 1977) などがこの例である。

写真は現実を伝える情報源としてだけでなく、人の内面を理解するための情報源とみなして使用されることもある。特に当事者自らが撮影した写真は、これを深層心理の表現と見なして治療の中で用いたり (Akeret, 1973; 山中, 1976)、心的世界の表現と見なして投影的に解釈したり (野田, 1988) といった使用例がある。このうち野田 (1988) は、1980年代の都市に住む子どもや若者の生活や成長を理解し、彼らの生きる世界を描写する調査の一環として子どもや若者達に一日の生活を撮影してもらうことを試みた。具体的には、30人程度の子どもと若者に2、3本のフィルムを渡して“一日の生活、および好きなモノ”を撮影してもらい、同時に子ども自身による撮影日の行動記録と両親による子どもの情報を収集した¹。“カメラを人間の心を覗き、写真を人間の心を写すものとして使用する”という着想のもと、野田によって発案されたこの

¹ 子ども自身による行動記録は普段の日と休日の2日の朝から夜まで一日にしたこと(上段)、それについての感想(下段)を記入するものであり、両親が子どもの情報として記入することは住宅地環境、家族構成、通学校等であった。

方法は、写真による環境世界の投影的分析法、略して写真投影法と呼ばれている。解読は、まず写真を見てその子どもの世界を構成し、子どもの体験を想像し、その後に行動記録と子どもについての情報を参照するという方法で行われた。解読の視点となったのは、何を写したか、何度繰り返し写したか、どんな角度でどこからモノに向かったか、被写体と子どもの関係、人がいるかいないか、生活のストーリーはあるか、等であった。

結果を紹介する中で、野田（1988）は一日が物語として構成された写真と自分の行動について生き生きした感情を行動記録に書いているという農山村部の子どもの例を冒頭に挙げ、次いで一日の物語が構成されていない写真と感動の少ない行動記録を書いた都市部の子どもの例を挙げて両者を対比させている。また都市部の子どもの写真として、室内の事物や家の周囲の無機的な構造物、空やテレビ番組の画面を繰り返し写すといった事例や、人間（特に仲間）の写真が乏しく、代わってぬいぐるみ、ラジコン、ゲーム機という事物を多く写した事例を挙げ、これらの結果をもとに文化精神医学の立場から、この時代の都市に生きる子どもの状況や世界について論じている。

野田（1988）の写真投影法は、青少年を対象に“一日の生活、および好きなモノ”を撮影させるものであったが、何らかの教示のもとで研究参加者に写真撮影を求め、撮影された写真を研究の対象とすることはこれ以外にも実施されている。都筑（2005）は写真投影法による研究²を展望する中で、研究参加者が写真を撮影すると言う。方法には“個人が見た環境（外界）を捉える”という側面と、“個人の心理的世界を捉える”という2つの側面が含まれていると述べている。そして、これら2つの側面は相互に関連しているものの、これまでの研究ではどちらか一方に重点が置かれてきたと言う。

都筑（2005）では、前者の個人が見た環境（外界）の特性を捉えるという視点からの研究として、地理学や都市デザイン・都市計画・ランドスケープ研究等を紹介している。この中には、子どもの生活環境の調査や住人による街の景観評価などの地域空間や生活環境への認識を調べたもの（e.g. 上山・土肥,

² 都筑（2005）は、自叙写真法を含め、研究参加者自身が撮影した写真を研究対象とするもの全てを“写真投影法”という名称のもとで紹介、展望している。後続の研究は写真投影法という名称は用いながらも様々な教示のもとで実施されており、必ずしも野田（1988）の手続きを踏襲するものではない。

1996)、あるいは公園や水辺など自然景観に対する認識を調べたもの (e.g. 中村・小林・高橋・萩原, 2001) などを含めている。一方、後者の個人の心理的世界の特性を捉えるという視点からの研究として、文化比較・老年学・心理学等の研究を紹介している。この中には Ziller の自叙写真法の研究をはじめ、高齢期夫婦のパートナーシップの調査 (植村, 1996) といった対人関係、価値観や自己表現等を扱った研究を含めている³。

1.1.2 撮影活動や写真呈示による効果を目的とした使用

第2の使用目的は撮影活動による効果を得る、すなわち撮影という行為を刺激として用いる場合である。写真撮影という活動には自分自身や周囲の事物・事象へと注意を向けさせ、周囲の世界への関与を促す効果が期待できる。また、撮影活動そのものが適度の集中力や統制力を必要とするとともに、人の興味や意欲を喚起すると見なされてきた。従って撮影活動への参加は、結果として参加者の対他者関係や自己評価、自尊心に影響を及ぼすことがあると言う。このような効果を期待して、心理臨床や看護の現場で写真撮影を治療に導入した例が複数報告されている。

Hunsberger (1984) はクライアント自身による写真撮影を活動療法 (activity therapy) における効果的な課題として紹介しており、撮影活動はクライアントの統御力・自己信頼・自尊心を高める効果があるほか、特にグループでの撮影活動は社会的相互作用の増大や社会的スキルの促進、問題解決やリーダーシップの発揮などによる自尊心の高揚が期待できると述べている。また写真撮影という活動は、低い精神機能、器質障害、情緒障害を示すクライアントなどへも幅広く活用できると言う。高齢者への適用 (Aronson & Graziano, 1976; Zwick, 1978) や、統合失調症患者への適用 (中里・坂野・磯部・榎並・日比・青木・米澤・藤本・岡本・祖父江, 1988) はその例と言えよう。なお、撮影活動が対他者関係に影響を与えることは健常な大学生を研究参加者とした実験でも確認されており、Burgess, Enzle, & Morry (2000) は他者とともに写真を撮ることによって互いを同類と見なし親近感が高まることを“写真の絆効果

³ 心理臨床大辞典による投影法の一般的定義とは、与えられる刺激の非構造的・曖昧性、求められる反応の自由度の高さ、人の内部状態を表すパーソナリティ要因を推測する手続き、の3つである。“写真投影法”の語を冠している研究の全てが、このような投影法の定義を踏まえた上で“写真投影法”の名称を使用しているとは言えないようである。

(photo-bonding effect)”として紹介している。

第3の使用目的は写真を見ることによる効果、すなわち写真という素材を刺激として用いる場合である。これは写真が過去に生じた事象や現実についての情報を伝える媒体であり、写真のフィードバックは受け手に現実を認識させるとともに、感情や連想を喚起したり記憶の活性化を促したりする効果があると見なされてきたことによる。従って、写真のフィードバックによって受け手の自己洞察を促進させることがある。このような理由により、写真のフィードバックは撮影活動による効果を目的とした使用と同様に、治療現場での活用が試みられている。

治療現場での写真の使用としては、これまでに投影的技法のための材料や治療時のラポールの形成に利用されているほか、過去に撮影された写真をクライアントの自己報告の確認や歪んだ知覚や記憶の修正のために使う、幸福だった頃の写真を見せて同様の感情を喚起させる、老年期において人生を振り返る手助けとする、意識されていない事柄や葛藤を意識化するために用いる、悲嘆や喪失体験への取り組みを促進するなどの例がある (Hunsberger, 1984; 志村, 1997)。また、写真を掲示して行動修正のための強化子として用いたり (Bacon-Prue, Blount, Hosey, & Drabman, 1980)、クライアントを被写体としたポートレートを自己イメージの認識や修正、自尊心の高揚を目的としたエクスポージャーの材料として使用したりすることもある。ポートレートの呈示による治療的な試みには、統合失調症患者 (Miller, 1962; Spire, 1973) や非行少年 (Fryrear, Nuell, & Ridley, 1974) を対象とした報告がある⁴。なお、写真の持つ可能性を積極的にセラピーに取り入れている Weiser (1999) のフォト・セラピーでは、クライアント自身のポートレートだけでなく、他者が撮影したクライアントの写真、クライアントが収集している写真、家族アルバム等の自叙伝的な写真がセラピーの中で使用されている。

治療場面で写真が果たす役割については日本でも一定の関心が寄せられており、写真の臨床的利用に関する特集が組まれる等、写真の治療場面における位

⁴ これらの研究については、実験の中で写真を呈示することの効果とフィードバック時に治療者が積極的に関与することの効果が分離できていないという手続き上の問題が指摘されており、写真呈示そのものの治療効果は確認されていない。

置づけや利用の体系化の試みがなされている（日本描画テスト・描画療法学会，1997）。その中で松下・石川（1997）は、患者や家族が治療場面に持参する家族写真やアルバムを査定や治療や教育に活かすための視点についてまとめている。

以上では撮影活動と写真の呈示による効果を分けて述べたが、写真撮影と写真の呈示を組み合わせた使用方法もあり、特に撮影者が自分の写した写真を見たり語ったりすることによる治療的、教育的効果が期待されている。親と子のそれぞれが撮影した写真アルバムを親子の対話の材料として学級カウンセリングで用いたり（寺田・白石，2000）、青年が個としての自信と自覚を獲得していくための教育に活かす（野村，2004）などがその例である。

1.2 自叙写真としての使用

1.2.1 自叙写真法の概要と目的

自叙写真法とは、“あなたは誰ですか？”という問いかけに写真で回答するよう求め、撮影された写真を通して回答者の自己に関連する世界を把握しようとする方法である。この方法は1977年にCombs & Zillerにより創案され、米国を中心にその後の研究が展開されてきている。

従来、自己概念や自己認知の測定には質問紙法、特に評定法によるものが使用されてきた。評定法による質問紙は、通常、自己に関する内容のうちで多くの人に共通かつ重要と見なされる項目で構成されるが、質問紙法の中には回答者の個性や独自性により重点をおき、これらを捉えようとする試みもある。文章完成法の一つともいえるBugental & Zelen（1950）の“あなたは誰ですかテスト（Who are you? technique; 以下WAYとする）”やKuhn & McPartland（1954）の20答法（Twenty statements test; 以下TSTとする）がこの例である。WAYやTSTは、回答者が自分自身について自由に記述できることから、予め選出された項目に回答する質問紙（e.g. 長島・藤原・原野・斎藤・堀，1966，1967）での調査に比べ、各人の個性や独自性を捉え得ると主張されてきた。

自叙写真法での“あなたは誰ですか”という問いかけはWAYと同様ながら、回答者はこの問いに言語ではなく写真という視覚的素材を用いて答える。この

ことから、自叙写真法は WAY や TST の持つ回答の自由度の高さと、“イメージを凍結させる機械としてのカメラ (Milgram, 1976)” の特徴を生かした測定方法と見なされている。加えて、カメラと写真による表現は、言語による表現よりも年齢・文化・能力等による制約を受けにくいという利点があると言う。

Combs & Ziller (1977) では、カウンセリングを受けた経験のある者とカウンセリング未経験者の自叙写真を比較し、それぞれの特徴を報告しているが、この論文では冒頭に Rogers と Jourard を引用しながら、カウンセラーには“クライアントの内的枠組み (internal reference of each client)” を知覚する能力が重要であること、カウンセラーが“クライアントの現象的な場 (the phenomenal field of the client)” を経験することで自己開示を促進し得ることを述べている。つまり Ziller らは、他者を理解することとはその個人が自己を含む世界をどのように理解し、経験しているのかを知ることであり、撮影者の視点から自分を表現するために撮影された自叙写真は、その人が自己を含む世界をどのように理解し、経験しているのかを知ることがかりになると考えているのである。

個人カウンセリングの中で自叙写真法を実践した報告 (Amerikaner, Schauble, & Ziller, 1980) では、上記のようなクライアント自身の参照枠やクライアントにとって重要な意味次元を強調する考えは Kelly (1955) の個人構成体理論に依拠していることを述べている。クライアントが世界を理解するために発展させてきた次元には言語的なものと非言語的なものがあり、レパトリー・グリッド・テスト (Repertory Grid Test) などを用いた言語的次元の査定に加えて、非言語的な次元を査定する必要性を主張し、そのための最初の試みとして自叙写真法を提案している。またこの論文の中では、クライアント理解のために自叙写真をどのような次元で利用するかについても具体的な提案を行っている⁵。

個人の世界を理解するにあたって、Ziller らが用いるのが“オリエンテーシ

⁵ カウンセリングで自叙写真を使用するための視点として内容 (content) と過程 (process) の2つを提案している。内容とはクライアントの自己知覚において中心的・重要なもの、過程とはクライアントが自己や世界を解釈したり応答したりする際の様式を意味する。内容の例として“情動的なテーマ”“言語では表現されているのに写真には含まれない事物”“他のメンバーには見られるがクライアントの写真には見られないカテゴリー”など、過程の例として“抽象度—具体度”“複雑—単純”“教示への態度”などが挙げられている。

オン (orientations)” という概念である。オリエンテーションとは、自己定義と関連した行動であり、この行動は環境内にある特定の記号に向けて高められた動機づけを示すものと定義される (Ziller, 1990 p.32, p.142)。すなわち、オリエンテーションという語には、自己を環境との関係や環境への働きかけを通じて捉えようとする考えが含意されている。オリエンテーションには特異的なものもあるが、環境や経験が共通であれば万人に共通するもの (e.g. 自己、社会的、美的) も仮定できるという。

“あなたは誰か” という問いに写真で回答する自叙写真法では、人は回答の過程で周囲の環境に注意を向ける必要に迫られる。そして環境内にある無数の選択肢の中から、特定の対象に選択的に注意を向けることになる。Ziller によると、このようにして環境内から選ばれた人、対象、情景などは、個人のオリエンテーションを具体化したものであり、オリエンテーションの指標となるものである。従って、これら対象を知ることがオリエンテーションを知ること、ひいては個人の自己を理解することにつながるという。

Ziller らは、個人がいかなる環境を選択し、他方、選択された環境によってどのようにその人の行動が制限、あるいは統制されるのかといった人と環境との相互作用に関心を持つ。このような自己・環境・行動の相互作用を Ziller は、双方向の矢印で結ばれた三角形の図で示している (Ziller, 1990, p.31)。この図では、自己は3つの要素の一部でありながらこれらを統合するものであり、所与の環境下での行動を統制すると言う。ここでの自己とは自己理論 (自分自身についての自分なりの理論) のことであり、情報の処理については理論一般と同様の働きをすると考えられている。すなわち、新しい情報を既存のシステムの中に編制し、既存の理論にもとづいて将来的な出来事を予測し、処理する。また、一旦理論が形成されると後続の行動はこれによって統制を受ける。その他、理論に一致する情報を求めて他を無視したり、理論に合致するよう反応を制限することで環境を作り上げたりする。

人はこのように自己・環境・行動が相互作用し、環境と行動との関係を統制する上で自己が中心的役割を果たす場、すなわち自身の統制が知覚できるような場を発達させるが、このような場を Ziller らは心理的ニッチ (psychological niche) と呼んでいる。そして心理的ニッチとは、環境と行動と自己が調和した

領域であるとする（先述の三角形の図では自己・環境・行動に囲まれた部分を心理的ニッチに充てている）。ここでは、自己理論は個人が特定の環境を選択することに関わり、選択によって環境はその人にとって有意味なものとなる。その一方で、選択した環境はそこで可能となる行動の幅を限定し、さらに後続の行動を規定する。そして、このような選択することと制約されることの関係の中で自己理論は維持され、個人の心理的ニッチが構成されていくことになると考えている。従って、自己定義に関わる行動とされるオリエンテーションを探索することは、心理的ニッチという自己と環境との関わり方の様相を探索することにも繋がるものであろう。

なお、このようなオリエンテーションや心理的ニッチは個人において生来的で不変なものとして仮定されているわけではない。それらはある環境下での自己と世界との関係性を示すものであり、例えば発達の各段階や結婚や疾病などのライフイベントを経験することによって異なる様相を示すことが予測されるものである。実際、Ziller (1990, chap.6) においても離婚・結婚・刑務所からの釈放といったライフイベントを経験した者の自叙写真や、車椅子の学生から見た大学キャンパス（撮影者である車椅子の学生とすれ違う学生達の視線は交錯しない）を事例として挙げながら、所与の環境下でのその人自身の目から見た自己と世界との関わり方の特徴を論じている。

Ziller & Rorer (1985) によれば、オリエンテーションを写真で記録するという自叙写真法のルーツはナバホ・インディアン達に自らが選んだ対象を映像化するよう求めた 1972 年の Worth と Adair による研究にあると言う。彼らはこれに“生態記録 (biodocumentary)” という名称を与えた。この言葉が示すように、Ziller らは実験室での実験や質問紙による測定を超えて、その個人が現実に生活している環境下で人間を研究することの重要性を強調している。写真を用いて個人が生活している環境をその人の視点から具体的、かつありのままに記録する自叙写真法は、研究参加者にとって侵害感や抵抗感の少ない測定法となると考えている。

研究参加者は“あなたは誰であるかを写真で表現する”という課題に答えるために写真に写すもの（自己に関連する対象）を探索するが、この過程で通常はほとんど意識することなく過ごしている自分の周囲の環境に改めて注意を向

けることになろう。そして“写真を撮る”という行為を通じて、被写体として選択された事物・事象が自分自身にとっていかなる意味を持つのかを考えることになるだろう。つまり自叙写真の撮影という行為は Ziller らが意図したように、研究参加者にとっては人と環境との相互作用のあり方を再確認させ、他方、研究者にとっては当該個人と環境との相互作用を調べるための有効な資料を提供することになるといえよう。

1.2.2 自叙写真法の特長

自叙写真法を心理学における研究法や臨床実践での査定や治療の手法として見た場合、従来の方法とは何が異なり、どのような長所があるだろうか。写真という素材や撮影活動の特長、あるいは先行研究での記述をもとに自叙写真法の利点を整理してみる。

研究法としてみた場合、自叙写真法の特長とはどのようなものであろうか。自叙写真法は画像という質的データを扱う。データから見れば、写真という素材のもつ具体性・現実性・多様な情報という特徴が挙げられる。写真の具体性は、通常、言語表現に勝るものである。そして過去の、しかも一視点から切り取られた現実とはいえ、写真は現実の記録である。また、周到に計画された広告写真や芸術写真でない限り、スナップ写真のフレーム内には様々な事物・事象が撮影者の意図を超えて写し込まれる。このような写真の特徴ゆえに自叙写真は意図的・無意図的なものを含め、撮影者に関連した多様な情報を具体的かつリアルに伝えるものとなり、豊かな読解と語りを引き出す素材となる。

写真撮影は通常、撮影者が現実生活中に生活している環境下で行われるという点でフィールド・ワーク的な要素を持つ。自叙写真法もその要素を活かした手法であり、実験室での実験や質問紙調査を超えるものとして Ziller が重視する自叙写真の特長である。生活環境の中での人の行動を捉える方法として観察法（特に参与観察法）があるが、研究者による観察はあくまで研究者の視点からみた現実世界である。これに対し、自叙写真は撮影者の視点からみた自分や自分を含む世界（撮影者の現象学的世界）を見る者に伝える。自叙写真法は当事者の視点により忠実で、当事者が見た現実世界により肉薄する方法と考えられる。

また写真による表現は言語による制約が少ない。これは年少児から高齢者まで幅広い年齢層を対象とした研究や地域・文化比較を目的とした研究、あるいは

は言語によるコミュニケーションに障害を持つ人を対象とした研究に有用である (e.g. Ziller, 1990)。また、写真はこれまでもイメージを捉える手段として使用されてきているように (Milgram, 1976; Noji, 1999; Ziller, 1990)、言語化が難しい自己のイメージや自己を象徴的に表現することも写真を用いれば比較的容易であろう。さらに、写真や撮影活動が治療場面に導入されていることから考えると、調査用紙への回答や実験への参加に比べ自叙写真を用いた研究に参加することは、当事者として積極的に関与し、過程を楽しみ、研究への参加に意義を見出す等、研究参加者にとっての利益が大きいことが予測される。

次に、臨床実践における査定や治療の手法としてみた場合、自叙写真法にはどのような特長があるだろうか。記憶と内省にもとづく方法とは異なり、自叙写真法では撮影者の周囲の環境や生活の様態の実際を知ることができる。治療的面接では生活空間のイメージを共有する目的で部屋の間取り図等が効果的に使われることがあるが (神田橋, 1995)、面接においてクライアントが暮らす物理的環境の情報をどの程度収集できるかは面接者の技能等に依存する部分が大い。また、一般に面接の中では個人が生活する環境世界よりも個人の内面世界に関心が向けられがちである。このように面接という手段では収集されにくい環境情報を補うために、自叙写真は役立つと思われる。

従来の査定法と比較しても、投影法は個人の内的世界 (実体のないもの) の査定に焦点があるのに対し、自叙写真法ではまず外的世界 (実体のあるもの) の査定に焦点が置かれることになろう。例えば、投影法のうちで描画は写真と同様に画像を扱うものであり、家族画等では時に周囲の環境 (e.g. 家具や部屋等)、写真は描画よりも多様な環境内の事物を描写する上では技能や時間等のが描かれることもある。しかし、写真は描画に比べて現実に存在したという点でより明白さや確実さを持つ。さらに、写真は描画よりも多様な環境内の事物を描写する上では技能や時間等の制約が小さい。それゆえ複数枚を撮影したり、繰り返し撮影を行ったりする場合でも撮影者と依頼者双方にとって比較的負担が少ないことが予想される。自叙写真法では複数枚の撮影を求めるが、1枚の写真のみならず一連の写真をセットとして見る、あるいは期間を置いて繰り返し撮影した結果を見ることによって、多面的かつ継時的に撮影者の自己に関連する世界を把握できることも利点の一つとなろう。

治療に関しては、松下・石川（1997）によると、写真が明示している“確実に存在した過去の一場面”という現実、良くも悪くも治療場面での幻想を打ち砕くと言う。また、事実をもとにした治療的やりとりは比較的安定しており、現実的で健康な防衛の強化と治療関係の維持に寄与するとも述べている。これ以外にも、写真が現実の記録であること、現実を写しだす媒体であることが治療場面で有用に働く可能性を示唆する報告がある。例えば、描画と写真を用いた試みにおいて、写真映像の確実さ・明白さが治療者の現実検討力を高め、解釈の先走りを防止した例（小森，1997）や過去の患者の写真を見て過去の現実を知ることにより、当該患者への認識や対応の変化をもたらした例（志村，1997）がある。このことから考えると、自叙写真もまた、治療場面に現実を持ち込むことにおいて一定の治療的意義や効果を持つことが期待できる。

その他、治療施設で写真や撮影活動が取り入れられていることから、自叙写真を撮影するという行為の主体性・能動性、そして自己表現の可能性が治療面での効果を生むことが予想される。自叙写真の撮影は自分を積極的に表現する機会となるし、個々の自叙写真は撮影者の独自性を反映したものとなる。このようにして得られた自叙写真を見たり、それらについて語ったりすることは撮影者の自己洞察や周囲への気づきを促す等の治療的・教育的効果が期待できる。

以上のような特長を持つゆえに、自叙写真法は調査手法としては質的調査と量的調査の両者を補うものとなり得るし、臨床実践における査定や治療場面では従来からの手法を補うものとして利用できるのではないかと考える。

1.3 自叙写真法を用いた先行研究

1.3.1 自叙写真法の手続き

自叙写真は、これまで概ね次のような手続きに従って撮影されてきた。研究参加者には、まず“あなたが自分自身をどのように見ているのかを写真で記述して欲しいのです。写真であなたが誰であるかを語って下さい。撮影し終わった時には、あなた自身についての1冊の写真集ができあがることになるでしょう”と教示し、操作の簡単なフラッシュ付きのインスタント・カメラを使って一定期間内に自分の思うままに写真を撮影してくるよう求める。撮影の際の留意点として、研究参加者自身について語るものなら何をどのように写しても自

由であること、自分で撮れない場合は他人に撮影を依頼しても良いこと、研究者は研究参加者の撮影技術の優劣には関心がないことが伝えられる。加えて、撮影される写真は“研究参加者自身が見た自分”を伝えるものになるよう教示の中で繰り返され、強調される。

これまでの研究は Ziller & Lewis (1981) の教示を踏襲しているものが多いが、教示や実施方法は研究の発展に伴って、また研究目的や利用目的に応じて一部変更や改良が試みられてきている。例えば、撮影期間については、期間は一応 6 日間としておくが、研究参加者の意向を尊重して希望があれば期間を延長するとか (Ziller & Rorer, 1985)、セメスターの最初に教示を行ってセメスター中の任意の時期に撮影させる (Dollinger & Clancy, 1993)、あるいはセメスター中の 11 週間を指定する (Dollinger, Robinson, & Ross, 1999) などの例がある。撮影枚数については、自叙写真法を最初に公表した Ziller らの撮影枚数に倣って後続の研究の多くが 12 枚を採択しているが、手続きの簡易化のために 6 枚としたものや (Ziller & Rorer, 1985, Study2)、自己に関連した世界をより確実に把握するための試みとして 20 枚を指定した研究もある (Dollinger, Preston, O'Brien, & DiLalla, 1996) ⁶。

教示についても、Ziller & Lewis (1981) に準じた標準的な教示に加えて、研究参加者からのよくある質問に対処するために新たな教示を加えた研究もある (Dollinger, Cook, & Robinson, 1999; Dollinger, Robinson, et al., 1999) ⁷。その一方で、個人カウンセリングで自叙写真を用いた例では、写真撮影の過程や写真の内容はカウンセリングの関連資料と見なして意図的に教示の中では詳述せず、クライアントからの質問に対しても指示的な回答は行わないという手続きをとっているものもある (Amerikaner, et al., 1980)。

収集する資料についても、創案当初は自叙写真のみを資料としていたが、その後、研究目的に応じて様々な工夫が加味されてきている。集団を対象とした

⁶ 先行研究からは、撮影枚数 12 枚の根拠は明らかではない。撮影枚数と撮影期間についての結果は向山 (2003, 2004a) および資料 3 を参照のこと。

⁷ 追加された教示は次のようなものである。“例えば、次のようなものを撮影のために選べます。あなたの典型的な毎日の環境や現在の生活様式、(他の人にならない) 自分のユニークさの程度や他の誰かあるいは他の全ての人とどれ程似ているか、自分を定義する特性や性格特徴、現在取り組んでいる個人的プロジェクトや重要な人生の課題、あなたが大切にしている内的な価値を伝える想像、あなたやあなたの人生物語にとって最も重要な事物など、です”。

研究では、各写真を台紙に貼り冊子として提出させる (Dollinger & Clancy, 1993)、写真冊子と併せて写真や写真冊子へのコメントを提出させる (Dollinger, Cook, et al., 1999; Dollinger, Robinson, et al., 1999)、現像した写真を返却する際に研究参加者に解釈を求める (Ziller & Rorer, 1985, Study2) といった資料収集の他に、個人カウンセリングで自叙写真を用いた例では、クライアントに写真に関する簡単な説明を書かせるとともに、自分をよく記述していると思うものから順位を付けさせ、その順位に従って一枚の大きな台紙に写真を貼るよう求める手続きが採られている (Amerikaner, et. al., 1980)。

以上のように、先行研究では様々な手続きが採択されてきている。実施手続きは使用目的や対象者の属性に応じて変更や配慮が必要な場合もあるが、標準的な手続きが示されることで、自叙写真法はより利用しやすくなるだろう。このような考えにもとづき、自叙写真法の日本での標準的な実施手続について検討が行われている (向山, 2003, 2004a 資料3 参照)。

なお、収集された自叙写真は、主として被写体や内容にもとづいて個々の自叙写真をカテゴリー分類する方法と、自叙写真を通覧して冊子全体の印象を評定する方法によって分析・検討されてきている。以下では、これら2つに事例的アプローチを加え、それぞれの分析方法に沿って先行研究を展望し、続いて日本における自叙写真研究の成果をまとめる。

1.3.2 自叙写真のカテゴリー分類

被写体や表現内容にもとづいて自叙写真をカテゴリー分類する方法は Ziller の研究グループが主に採択してきた方法で、ある特徴を持つ研究参加者とそれ以外の者として自叙写真の被写体や表現内容、あるいは自叙写真を分類するためにどの程度のカテゴリー数を必要としたかというカテゴリー範囲 (range) を各群で比較し、研究参加者らが自己を含む世界をどのように理解し、経験しているかを捉えようとするものである。従って、個々の写真を通じて個人の現象学的世界を把握することにその目的がある。これまでの研究では、研究参加者の個人特性や特定の経験等によって自叙写真の被写体に選ばれる対象が異なることが示されてきている。以下ではその概要を紹介する。

自叙写真を最初に紹介した Combs & Ziller (1977) では、大学内のクリニックへの来談者とカウンセリング経験のない大学生の自叙写真を9つのカテゴリー

一に分類して比較し、来談者の自叙写真には家族や過去カテゴリーに分類される写真が多い一方で、自分自身・活動・書籍カテゴリーに含まれる写真が少ないことを報告し、来談者の自己認知の特徴を指摘している。また Ziller & Lewis (1981, Study2) では、美的・学業達成・学校・社会（人物）カテゴリーについて矯正施設入所中の非行少年と公立高校の非行歴のない少年の自叙写真を比較し、非行少年群で美的・学業達成・学校カテゴリーの写真が少なく、社会（人物）カテゴリーの写真が多いことを示した。そして非行少年群では美的あるいは学校や学業達成といった社会的に承認されるオリエンテーションではなく、社会（人物、ここでは仲間）オリエンテーションへの偏好が見られることを取り上げ、彼らの指向と環境について考察を行っている。

個人特性と自叙写真の関係を見たものとして、Ziller & Rorer (1985) のシャイネスと自叙写真についての研究がある。彼らはシャイネス調査での高得点者は低得点者に比べて自分自身や他者を写した人物写真が少なく、美的カテゴリーに含まれる写真（芸術作品、樹木、湖や池、花）が多いことを報告し、シャイネスの程度によって Ziller の言う心理的ニッチが異なることを示した。そして、シャイな人々は通常ネガティブに評価されやすいとして、自叙写真を通じて彼らの視点から環境を理解することの重要性を論じている。この他、Ziller & Lewis (1981) では、書籍の写真の多さと学業達成、植物・風景・芸術作品の写真の多さ（美的志向）とオールポート・ヴァーノンの美的価値志向の尺度得点との関係を調べ、それぞれに関連が見られたことを報告している。また、パーソナリティ特性を取り上げた Dollinger & Clancy (1993) では、NEO-PI の外向性 (E) および調和性 (A) の高さが対人カテゴリーに分類される写真（自分が他者とともにいる写真・背景の人・グループ・触れ合っている人・子どもの写真等）の撮影枚数の多さと関連していることを示した。

さらに Clancy & Dollinger (1993) は自叙写真の性差にも着目している。対人カテゴリーに分類される写真を男女で比較すると、男性は女性よりも自分自身を単独で写した写真が多く、女性は男性よりも笑ったり触れ合ったりしている人々・自分が他者とともにいる写真・グループ・子ども等の家族写真が多いことを報告し、この結果を分離性 (separateness) と社会的な結合性 (social connectedness) という男女の自己定義の違いとして考察している。さらに予

備的な結果として、人物以外を被写体とした写真についても触れ、両性を比較すると男性には身体活動や乗物の写真が多く、女性には動物あるいはペット・社交場面の写真が多く見られたことを報告し、この結果を先の男女の自己定義の違いに関する傍証として報告している。

この他、文化差を取り上げたものとして日米の高齢者の自叙写真を比較した研究 (Okura, Ziller, & Osawa, 1985-1986) がある。Okura らは、日本の高齢者では庭・住宅・自宅内やその周辺の写真が多く、米国の高齢者は様々な人を被写体とした写真が多かったことから、老年期の平穩 (peace) を何に求めるかが日米で異なるのではないかと考察している。

1.3.3 自叙写真冊子の印象評定

個々人が撮影した一連の自叙写真を通覧して自叙写真冊子全体の印象を評定する方法は、主として Dollinger らの研究グループが採択している。彼らは Ziller らに倣った被写体や表現内容にもとづく分類と併せて写真冊子全体の印象評定を行う。従って、個々の写真を通じて個人の現象学的世界を把握することに加え、自叙写真に示された撮影者の自己表現の様式や質を査定することも目的となる。彼らの研究は、数百の自叙写真冊子について複数の訓練された評定者が評定を行う手続きを経ており、評定にはリッカート式の 5 段階尺度を使用している。このため、様々な数量的処理や他測度との関連を分析することが可能であり、データの数量化と分析という点で先のカテゴリー分類にもとづく分析を補い、発展させたものと言えよう。先行研究では、自己叙述の豊かさや個性といった観点からの自叙写真の印象評定とパーソナリティ等の個人特性との関連が報告されている。

まず、Dollinger & Clancy (1993) は、抽象度・自己内省度・芸術的質の高さの観点から写真冊子の“自己叙述の豊かさ (richness of self-description)”を 5 段階で評定し、パーソナリティ特性を NEO-PI で測定して開放性 (O) の高い者に自己叙述の豊かな写真が多いことを報告した。この後、Dollinger らによる一連の研究は写真冊子の評価に多次元性という観点を加え、自叙写真によって研究参加者の“個性 (individuality)”の程度を査定する方向へと発展している。写真冊子を評価する基準や具体例は Dollinger & Clancy Dollinger (1997) の付録に詳しいが、“具体的・想像力が乏しい・平凡・繰り返しが多

い（単次元）・自己の記述が表面的”というレベル1から、“抽象的・創造力に富む・多次的・自己内省的・美的感性に富む”というレベル5までに分かれる。彼らは自叙写真を個性の表現と捉え、写真冊子の評定結果とアイデンティティや自我発達 (Dollinger, et al., 1996)、アイデンティティの地位やスタイル (Dollinger & Clancy Dollinger, 1997)、孤独感 (Dollinger, Cook, et al., 1999)、創造性 (Dollinger, Robinson, et al., 1999) 等との関係について検討した。

これまで大学生を対象とした調査から、最も高いレベル5に評定された個性の程度の高い個人について、次のような特徴が示されている。彼らをパーソナリティ特性からみると、開放性 (O) と神経症傾向 (N) が高く、内向的 (E-) であるため、人間よりも美的なものや観念的なものに興味を示し、想像力が豊かだがネガティブな感情を感じやすい (Dollinger, et al., 1996)。創造性に関する側面として、パーソナリティ検査では興味の幅や複雑さの尺度得点が高く、創造性検査の課題では語彙連想と流暢さに関して高得点を示した。また、普遍的志向や精神的境界の柔軟性と呼ばれるような態度や価値観を持ち、可能自己 (possible self) として将来に様々な文化に触れる体験を含める傾向があると言う (Dollinger, Robinson, et al., 1999)。

また、対人的な傾向から見ると個性の程度の高い者は孤独感や疎外感、仲間との違和感を抱きやすく、個人カウンセリングを受けた経験も多いことが示された (Dollinger, Cook, et al., 1999)。さらにアイデンティティや自我発達との関係では、彼らは社会的あるいは表面的な特徴 (例えば、年齢・性別・外見・所有物など) よりも内的、個人的な性質 (夢・想像など) によって自分を定義づける傾向があり、集団に従いにくく、共同体としてのアイデンティティ (collective identity) をあまり重視せず、社会で一般的と見なされるような自己定義をしない。例えば、個性の高い者は低い者に比べて、自分の宗教・家族・友人関係などを自己定義のための重要な事柄と見なさない傾向があると言う (Dollinger, et al., 1996; Dollinger & Clancy Dollinger, 1997)。

さらに Dollinger & Clancy Dollinger (2003) では、自叙写真法を使って青年期から中年期 (18 歳～54 歳) の男女 844 名を対象に、加齢に伴う個性変化の様相について調べている。この結果では、概ね加齢に従って個性の得点は上昇するが、特に 35 歳後半から 40 歳前半の年齢グループで得点が高いことが示

された。この研究は発達的な視点から自叙写真を検討した一例と言えよう。今後は各年齢層における個性の様相が、青年期を対象に行われた個人差研究で取り上げられてきたパーソナリティその他の要因とどのような関係にあるのか、今後の研究の発展が期待される。

1.3.4 事例的アプローチ

先述の自叙写真の分類や写真冊子の印象評定の部分で紹介した研究は、シャイネスやパーソナリティ等の個人特性、孤独感等の感情傾向や価値、非行歴の有無、文化、性、アイデンティティ等の属性によって個人を幾つかの群として括り、各群の研究参加者の自叙写真に見られる特徴を、例えば撮影枚数のような数値で代表させて平均像として描くものである。しかしながら、個人が自己や自己と関連した世界をどのように捉えているかを“内から外 (inside-out)”すなわち当事者の視点から捉えるという自叙写真法の目的からみれば、自己と世界との関わり方を個別に記述する事例的アプローチに、この方法の利点が最も発揮されると考えられる。

Ziller (1990) では、個人が撮影した自叙写真のセットを幾つか事例として紹介している。例えば、10年間の平穏な結婚生活を送っている女性の自叙写真と離婚直後の女性が撮影した自叙写真を示して両者を比較したり、一人の女性の2組の自叙写真——交際相手との結婚に確信が持てない時期と結婚を決意し間近に控えた時期——を示したりして、男女の関係性（愛着と分離に関するライフイベント）が自叙写真にどのように表れるかを検討している。またこれらの研究では、自叙写真の撮影に加えて写真を手がかりとしたインタビュー（photo-assisted interview）が実施されたことが記されており、自叙写真と言語による記録を併用しながら個々人への理解を深める試みがなされている。

Ziller により事例として紹介された自叙写真集には、愛着と分離に関する主題が明らかに示されており（e.g. 夫・子ども・交際相手といった重要な他者が写っているか否か、焦点が現在にあるか過去にあるか等）、自叙写真法を用いてライフイベント（e.g. 結婚や離婚等）に遭遇した人の世界を観察することで、当事者の視点から自分と他者を含む世界との関係性の在り方（e.g. 分離やサポートや愛着等）を把握できることが示唆されている。ライフイベントへの意味づけは個々人にとって異なることが予想されることから、ここで紹介したよう

な個人にとってのライフイベントの意味を探索するには、事例的アプローチが適当であると思われる。

また、Ziller 以外にも個人カウンセリングの中で自叙写真法を実践した報告 (Amerikaner, et al., 1980) や、ブラジルのスラム街の子ども達を対象とした研究 (Monteiro & Dollinger, 1998) は自叙写真法を用いた事例的アプローチに含めることができよう。このうち Monteiro & Dollinger (1998) では、子ども達の環境に対するイメージ、社会的・集団的志向性、思春期の子どもとしてのアイデンティティという 3 つの視点から、男女各 10 名のストリート・チルドレンの自叙写真集を事例的に記述し、この種の環境下にある子ども達へのステレオ・タイプの見方や大規模な調査研究では見過ごされてしまいがちな彼らの現実と苦境を報告している。

1.3.5 日本における自叙写真の研究

これまで述べたように、自叙写真法による研究は主に米国で進められてきたが、日本では安川 (2005, 2008) による大学生男女を対象とした研究がある。安川 (2005, 2008) は Ziller らや Dollinger らによる研究を視覚社会学の立場から捉えなおし、人の視覚体験そのものや生活世界を探求する手法として自叙写真法を位置付けた⁸。そして、撮影された写真と撮影場所等の記録を収集して日常生活世界のデータベース化を進めるとともに、“写真を説明して下さい”という教示下で実施された写真誘出的インタビューをもとに、写真がいかにかに語られるのか、写真の説明がいかになされるのかを言説分析することへと研究を展開させている。

安川の研究は、撮影された写真を素材として人の知覚世界や知覚体験を探求することを目的としており、Ziller らや Dollinger らのように自叙写真をもとに研究参加者の内的・心理的世界の探求を目指すものではない。ただし、“あなた (研究参加者) が見るあなたを撮影して下さい”という教示や実施手続きは Ziller らや Dollinger らの研究を踏襲しており、撮影された写真を分類するといったデータ処理の方法や使用されている分類カテゴリーの一部も先行研究と

⁸ 安川 (2005, 2008) は、研究目的が自己概念ではなく自叙という部分に重きをおかない、写真は紙媒体から画像自体を指すものに変化しておりイメージの語が適当、動画による調査も視野に入れるという立場から、“自叙的写真法”“自叙的イメージ法”の語を用いている。

重なることから、データそのものはこれまでの結果との対応が可能である。以下では安川（2008）に掲載されている143名1430枚の写真についての結果を紹介する。

まず、撮影場所や撮影場面についての分類結果をみると、撮影場所では自室・自宅が最多で撮影総数の約4割を占め、撮影場面では“生活（特に何をしたわけではない繰り返されている日常の一コマ）”というカテゴリーに分類されるものが半数を超えていたと言う⁹。さらに、米国での先行研究で“活動（人が何かしている、あるいは活動のシンボルが写っている）”がしばしば取り上げられていることを踏まえ、撮影場面が日常か非日常（行事やイベント等の写真）かを調べたところ、約7割が“常時的・持続的な存在や事柄”に分類され、非日常に分類されるものは少なかったと言う。この結果を見る限り、撮影された写真は自室や自宅を拠点とした大学生のごく日常の生活が撮影されていると考えて良いだろう。

被写体の分類にあたっては、5つの分類カテゴリー（人、モノ、生物、場・場所、その他）を設定している。分類の結果、撮影総数の40%がモノに分類され、人に分類された写真の33%を上回った（cf. 場・場所は21%、生物3%、その他2%）。さらに、人物が写っている写真を自他別に分類した結果では、研究参加者自身を単独で写した写真が約45%と最多であり、以下、撮影枚数の多い順に他者だけ21%、自分と他者17%、自分と集団あるいは他者集団のみが8%となったと言う。また、撮影の対象となった他者は友人が75%を占め、家族や恋人を撮影したものは少なかったと述べている（家族10%、恋人5%）。この結果からは、被写体には人よりモノが選択されやすく、人物写真に限定した場合には研究参加者自身が、他者を含む人物写真では友人が被写体として多く選択されていることが分かる。

この他、人物写真についてはDollingerらの研究の関係性（relatedness）の分類カテゴリーから微笑み・近接・タッチを取り上げ、これらにピースサイン

⁹ 撮影場所・撮影場面については、検定は実行されていないが調査対象となった2大学間の差について言及がある（自宅・自室の写真の撮影比率が高い大学で、生活場面の写真の比率が高い）。同様に検定は実行されていないが、性差については安川（2005）で言及がある（自室・自宅での撮影比率には性差がないが、その他屋内では女性、屋外では男性の撮影比率が高い。生活場面の写真では性差はないが、大学の写真は女性、その他の写真では男性の撮影比率が高い）。

を加えた4カテゴリーを用いて、これらの指標を顕した人物を含む写真を選出した。結果、人物写真のうち35%が微笑み、12%が近接、タッチは2%とごく少数であったと述べている (cf. ピースサインは14%)。この結果からは、人物を撮影した写真の約半数において何らかの関係性の指標が呈示されていることが分かる。以上の結果について安川 (2008) は、大学生の生活世界がモノによって表象されていること、その一方で、友人が中心の比較的狭い範囲ではあるものの対人関係によって表象される生活世界が存在することを述べている¹⁰。

なお、安川 (2005) では被写体の選択について性差を示唆する結果が示されている¹¹。撮影された写真のうち、モノに分類された写真は女性では人とほぼ同率撮影されているのに対し (人が45%、モノが43%)、男性ではモノよりもむしろ人に分類された写真の比率が高かった (人が48%、モノが32%) と言う。また、自分単独の写真は男性で比率が高く (男性は57%、女性は44%)、自分と他者および自分と集団を写した写真は女性で比率が高かった (男性は20%、女性は32%)。さらに、女性は男性よりも微笑み・近接・タッチという関係性の指標を示す写真の比率が高かったと言う。(微笑み: 男性26%・女性46%、近接: 男性9%・女性19%、タッチ: 男性3%・女性5%)。これらの結果について安川 (2005) は、女性は人物写真の撮影が多いという先行研究での知見とは異なり、女性にモノへの指向性が男性よりも強いことを指摘するとともに、先行研究での知見と一致した結果として、女性の撮影した人物写真にはより多くの関係性の表現が見られたことを報告している。

この他、自叙写真を日米の自己表現の文化差を検討するために使用した Leuers と園田の研究がある (Leuers・園田, 1998; Sonoda, Leuers, & Shapiro, 2000; 園田, 2001)。Leuers・園田 (1998) では、Ziller (1990) の手続きに沿って日本の大学生男女50名 (男性11名、女性39名) を対象に20枚の自叙写

¹⁰ 安川 (2008) では、被写体にモノが多く撮影されていたことから、研究参加者にとってのモノの意味づけをカテゴリー分類する試みや、自叙写真冊子から個別性 (individuality) を評価する研究 (Dollinger & Clancy Dollinger, 1997) から着想を得た写真評価の試みがなされているが、分類カテゴリーが未成熟で現時点では成果に繋がらなかったと報告している。

¹¹ 安川 (2005) では205名 (男子 N=64、女子 N=141) による2050枚の結果が報告されているが、これは予備調査と位置づけられており、コーディングの方法等の違いから2008年の報告と直接比較できない部分がある。従って、ここでは2005年の報告のうち2008年の報告と比較可能な部分、特に性差について記された部分の結果を引用する。なお、ここでの性差については、検定は実行されていない。

真を撮影するよう求め¹²、この 20 枚と未知の他者が撮影した 20 枚の自叙写真を示して、それぞれの写真のセットについて TST (20 の文章を作成させる調査) を実施した。自叙写真をもとに記された TST と通常の手続きで実施された TST を比較すると¹³、撮影者が自分か他者かに関わらず、自叙写真をもとにして書かれた TST の叙述ではその約 50–60% がポジティブに分類されたと報告している (ニュートラルは約 40%、ネガティブは約 10%)。

また、Sonoda, et.al. (2000) では、同様に日米の大学生 (日本 61 名、米国 20 名) に自叙写真の撮影・TST・自叙写真をもとにした TST を実施し、3 つの表現に対する撮影者自身と研究者の評価を比較した。その結果、日本の大学生では先の研究と同様、通常の手続きで実施された TST の評価が自叙写真をもとに書かれた TST の評価よりも低いことが示されたと言う (米国では両者に差なし)。

Sonoda, et al. (2000) では、撮影された自叙写真の特徴を演出 (staged) の有無と過程 (in progress) 表現の有無という視点からも日米を比較している。その結果、演出の有無については、日本での研究参加者の自叙写真の約 65% で演出が見られ¹⁴、自然な場面は約 20% と少なかった (不明は約 15%)。一方、米国での研究参加者の自叙写真では演出ありが約 30%、演出なしが約 25% (不明は約 45%) であり、一般的に望ましくないような行動や生活場面 (e.g. 散らかった部屋、洗っていない食器、無頓着な表情、無作法な態度等) が多く含まれていたと言う¹⁵。

過程表現の有無については、日本の研究参加者の自叙写真では何かが進行している過程の場面は約 25% と少なく、物事が完了した場面は約 50% と多かった (不明は約 25%)。これに対し、米国の研究参加者の自叙写真は進行中の場

¹² Leuers・園田 (1998) では TPT (Twenty Picture Test) と称している。

¹³ ここで比較対象とされた通常の TST での反応は、Leuers・園田 (1998) とは別途に彼らが日米で実施した研究の結果であり、通常の TST への反応は日本ではニュートラルが多く約 45%、次いでネガティブが約 30% であったのに対し、米国ではポジティブが多く約 60%、次いでニュートラルが約 25% であったことが報告されている。

¹⁴ 演出の有無は、対象が人の場合はカメラの方を向く・列に並ぶ・ポーズをとる・表情を作る等、対象がモノの場合はいつもの場所から移動して並べる等で判断された。

¹⁵ 同様の日米の自叙写真における表現内容の違いは、園田 (2001) においても報告されている。

面を写したものが約 15%、完了場面が約 25%（不明は約 60%）であったと報告している。以上の 2 つの研究から得られた結果について、Leuers・園田らは映像で自己を表現した場合と言語で自己を表現した場合の差異を、日米の自己の在り方の違いとして比較文化の観点から論考している。

Leuers・園田らの結果を自叙写真の表現内容という面から見ると、日本の研究参加者の自叙写真に映しだされた自己関連の事項は、通常の TST で得られる自己関連の叙述に比べて相対的に好ましい自己の側面が示される可能性があること、また自叙写真の撮影時には姿勢や表情を整えたりする等の表現の様式ないしは型が示されやすく、画面構成の整った写真が撮影される可能性を示唆している。

最後に、自叙写真法とは別途に考案された方法ではあるが、野田（1988）による写真投影法について触れておく。写真投影法は“一日の生活と好きなモノ”を撮影するのは私（自分）であること、研究参加者が撮影した写真をもとにその人の生活する世界と心的世界を探求しようとする点では自叙写真法と軌を一にするものである。しかしながら、自叙写真に撮影者の内界が投影されている、あるいは自叙写真法を投影法に含めることについては、データが蓄積されていない現時点では判断を保留せざるを得ないと考える。この点において、自叙写真法と写真投影法の見解は異なるものである。加えて、野田の報告以降は個々の研究の目的に応じて様々に教示の変更がなされている。このことに象徴されるように、現時点では写真投影法について特定の研究領域での理論構築を目指す志向は弱いように思われるため、写真投影法の研究成果についてはここでは詳述しないこととする。

第2章 問題の所在と本研究の目的

自己理解や他者理解のための手段として自叙写真法を活用するためには、現時点でどのようなことが課題となるであろうか。先行研究の展望で示したとおり、自叙写真法による研究はこれまで米国を中心に実施されてきている。日本での研究は、現在のところ安川と Leuers・園田らによる報告に留まっていることから、この方法による基礎的資料の収集は十分とは言えない。従って、まずは日本における自叙写真法を用いた研究成果の蓄積が必要である。本論文では、以下の2点を目的として研究を行う。

本研究の第1の目的は、自叙写真をもとに研究参加者の自己関連世界の特徴を記述し、日本で実施された自叙写真法についての基礎的資料を提供することである。その際、従来からの分析に新たな分析の観点を加えたり、自叙写真法の特長である“当事者の視点”を生かすために事例の検討を行ったりして、自己理解や他者理解に有用となる資料の呈示を目指す。

本研究では、多くの先行研究で採択されてきた被写体の分類に加え、被写体の重要度やその表現内容（被写体への意味づけ）といった幾つかの新しい分析の観点を提案する。例えば、被写体について重要度や表現している内容の情報が加わることによって、自己関連世界を構成する個々の被写体が回答者にとって異なる重みや意味を持つものとして捉えられていることが分かるだろう。このように、分析に際して複数の観点を導入することで個人の自己関連世界の特徴がより明確になり、自己理解や他者理解が深まることが期待される。

また、自叙写真の撮影の際に自分に関係するとして選択される対象は個人の属性によって異なることが予想されるため、得られた自己関連世界の特徴と個人要因との関係を見ていくことも必要である。米国での先行研究では、性格特性・シャイネス・創造性等の個人要因が取り上げられているが、日本においても心理検査や心理尺度で測定された研究参加者の特性と自叙写真との関係を見てゆくことは、自己関連世界の個人差について考える助けとなるだろう。

多人数のデータから得られた基準となる資料を示す一方で、自叙写真法の特長である“当事者の視点を生かした”資料として事例の検討結果を示すことも必要と考える。前者は先行研究でも採択されてきたように、例えば自叙写真をカテゴリー分類して集計し、集団の特徴を示すという方法である。後者は個々

人の自叙写真集の分析を通じて、その人の自己関連世界にみられる独自のテーマや構成等を見出すことである。本研究では、日本の女子大学生の自叙写真や自叙写真集の分析を通じて、集団としての特徴や個人の自叙写真集に見られる特徴を検討する。

なお、先述した安川や Leuers・園田らの研究も日本の大学生を対象としたものであるが、安川の研究では人の視覚体験や生活世界を探求することが目的とされており、収集された画像データと自己との関連づけや個人の心理的世界には関心がないとする。また Leuers・園田らの研究は、写真と言語による自己表現（自己呈示）様式の文化差に焦点を当てたものであり、研究参加者の撮影した世界そのものの理解を目指すものではない。従って、これらの研究は日本の大学生の自叙写真を対象とした研究であっても、自己理解や他者理解に自叙写真法を活用しようとする意図のもとで分析や資料の呈示がなされている訳ではない。

本研究の第2の目的は、従来の方法と自叙写真法との比較から、自叙写真法によってどのような資料が新たに得られるのかを示し、自己研究の方法としての自叙写真法の有用性について考察することである。自叙写真法の特長は既に第1章第2節で述べたとおりであるが、例えば言語化が難しいような自己イメージや環境の情報は、自叙写真では比較的容易に表現できると考えられている。自叙写真に自己イメージや環境の情報がどのように表現されているのかを示し、他の方法と比較しながらそれらの表現が自叙写真法のいかなる特徴によるものなのかを考察する。また、自叙写真や自叙写真法に対する研究参加者の意見や評価についても調べ、自叙写真法のどのような点が研究参加者に有益かという観点からの検討を行う。これらの分析を通じて、従来の検査や質問紙調査を補完する研究法としての、あるいは臨床実践における一手法としての自叙写真法の特長を示し、自己研究における自叙写真法の有用性について考察する。

ところで Ziller (1990) によると、オリエンテーションとは自己定義と関連した行動であり、この行動は環境内にある様々な記号に向けて高められた動機づけを示すものである。そして、自叙写真はこの環境への指向性（オリエンテーション）や、自己と世界との関係性のあり方の様相（心理的ニッチ）を写真で表現したものと捉えている。しかし、自叙写真には Ziller の言うオリエンテ

ーションが単純に表現されるのであろうか。自叙写真の撮影という事態は研究参加者に自己表現の機会を与える。その際、研究参加者には幾つかの動機——例えば、自己認知欲求、自己開示欲求、自己呈示欲求等——が生じるであろう。自叙写真は環境世界への動機づけの反映であると同時に、写真を撮影する者や写真を見る者への動機づけを含むものと考えられる。従って、カメラを渡せば写真にはオリエンテーションがそのまま写しだされると考えることには慎重にならざるを得ない。

本研究では、自叙写真には上記のような研究参加者の様々な動機が反映されることを踏まえた上で、Ziller らの論考をもとに、自叙写真を自己に関連する世界を表現したのと考えられる。そして、まずは自叙写真に映しだされた自己に関連する世界とはどのような世界なのか、その特徴はどのようなものなのかを記述し、考察することから始めたい。なお、研究を進めるにあたっては、当事者の視点を重視するというこの方法の本来の目的にも沿い、先行研究でも成果をあげていることから、研究参加者自身の記述や口述を収集して自叙写真の分析に加えることとする。

また、本研究では Ziller が著作の中で使っている自己概念 (self-concept) の語ではなく、自己認知 (self-cognition) の語を使用する。自叙写真法の研究に着手した当初、向山は Ziller に倣って自己概念の語を使用していた (e.g. 向山, 2001; 2002a, b; 2004b)。しかしながら、自己概念という語には自分自身についての比較的永続した知識構造という含意がある。本研究を進める中で、自叙写真に表現される自己に関連した世界には、自分自身についての知識構造に組み込まれる以前の概念化されていない漠然とした自己イメージも含まれるという考えに至った。このような前概念的な自己を包含する意味で、また Ziller の考える“オリエンテーション”や“心理的ニッチ”の可変性にも沿う語として、本研究では自己認知の語を使用することとした。

第Ⅱ部 自叙写真に表現された自己関連世界

第3章 被写体からみた自己関連世界

3.1 被写体にもとづく自叙写真の分類

被写体は“あなたが誰かを写真で表現する”という状況において、個々人が環境内にある無数の選択肢の中から選んだものであり、人が自分や世界をどのような対象と関連づけて記述し、定義づけるのかを知る上で重要である。また被写体の分析は、環境との関わりで自己を捉える自叙写真法の特長を生かすものであり、分析の観点として最も基本的なものとする。第3章第1節では自叙写真を被写体にもとづいて分類し、被写体からみた研究参加者の自己関連世界の特徴を示し、先行研究の結果と本研究の結果の異同について報告する。

なお、自叙写真には通常、人が他者に開示している世界に加えて個人の極めて私的な世界が表現されることが予測される。研究参加者には研究の目的や意義を十分に理解した上で、納得して研究に参加してもらう必要がある。そのためには研究者と研究参加者との関係性が重要になると考え、調査は筆者が担当する講義の受講生である女子大学生を対象として実施した。

方法

自叙写真の撮影

教示は、先行研究で多く用いられてきた Ziller & Lewis (1981) と Dollinger & Clancy (1993) を参考に作成した教示 (向山, 2002c 資料1参照) を改訂して使用した (表 3-1-1)。改訂点の概要は次のとおりである。研究参加者の募集方法を授業の課題として自叙写真を実施することから、研究への参加希望者を募ることへと変更した。また、実施にかかる費用 (e.g. 現像代、インスタント・カメラ代、記録用紙のコピー代等) を研究者負担とし、希望者には自叙写真とフィルムを返却した。さらに、最低撮影枚数を 12 枚として上限は定めず自身が必要と思うだけ撮影するよう求めた¹⁶。記録用紙は 1 枚にまとめて複数の質問項目を追加し、撮影後に記入する質問票を加えた。

¹⁶ 具体的には、配布された 25 枚撮りのインスタント・カメラで不足した場合には新たにインスタント・カメラかフィルムを各自で購入し、必要なだけ撮影するよう教示した。なお、ここで撮影枚数の下限とした 12 枚という枚数は先行研究で採択されてきた撮影枚数を踏襲したものであるが、自己を表すために必要な撮影枚数を研究参加者自身に尋ねた調査結果では 12 枚を適当とする意見が 7 割を超えたことから (向山, 2003, 2004a)、ここでは 12 枚を撮影枚数の下限とした (資料3参照)。

以上の改訂点のうち、研究参加者の募集・資料の扱い・費用の負担については自叙写真への動機づけの高い者を研究参加者とするとともに、参加した者の関与を高めることを意図し、撮影枚数・記録用紙の改良・質問票の追加は自叙写真と他変数との関係を調べることを意図したものである。研究参加者にはデータは研究用としてのみ使用することとプライバシーの保護について説明し、了承を得た後で表 3-1-1 に示した教示文、インスタント・カメラ、記録用紙、質問票、諸費用精算票を封筒に入れて配布した（資料 4 参照）。

表 3-1-1. 自叙写真撮影と写真集作成についての手順と留意点の教示

「テーマ：自分自身をテーマにした小写真集をつくる」

人は自分自身についていろいろなイメージを持っているものですが、あなたは自分自身のことをどのように思っていますか。写真で“あなたは誰であるか”を表してください。“あなたが誰であるか”を表すものであれば、何を撮ってもかまいません。撮り終わると、自分自身をテーマにした小さな写真集ができあがることになるはずで、以下に実施手順や留意点を挙げます。

「実施手続き・留意点」

- ①“あなたが誰であるか”を表すことだけを考えて写してください。写真は上手に撮る必要はありません。技術のことは考えずに気楽に撮ってください。
- ②自分で撮ることができない場合は人に撮ってもらっても構いません。
- ③“あなたが誰であるか”を分かりやすくするために、1枚の写真撮り終わることに記録用紙の1～5にある撮影日時や何を撮って何を表そうとしたのかなどを記録しておいてください。
- ④各自で現像し、記録用紙の記載に合わせて、写真を1枚ずつ剥がれないように用紙に貼ってください。写真を貼った後で記録用紙の6～8の質問に回答して下さい。
- ⑤必ず12枚は撮って下さい。それ以上は何枚撮っても構いません。25枚で足りない場合は、フィルム（あるいはインスタント・カメラ）を各自購入して使ってください。記録用紙が不足した場合は、コピーして使ってください。
- ⑥本日以降、いつから撮り始めても構いませんが、最初の1枚を撮ってから1～2週間以内に撮り終わるようにして下さい。X月X日を撮影の最終日としますからそれまでに撮り終わってください。
- ⑦一旦、撮り始めたら、そのフィルムは別の目的には使わないようにして下さい。フィルムは余っても、そのまま現像して下さい。
- ⑧撮影に失敗したら撮りなおしても構いませんが、撮りなおしたことは記録用紙の備考欄にメモしておき、失敗写真も捨てずに取っておいてください（失敗写真は記録用紙に貼らなくてもよい）。
- ⑨写真を撮影した順に並べて、上部を紐で綴じ、写真集を完成させてください。続いて質問票に答えてください。
- ⑩現像代、フィルム（インスタント・カメラ）の追加購入代、記録用紙の追加コピー代は立替えておいてください。後日、清算します。諸費用精算書に金額を記入し、レシートを添付してください。
- ⑪小写真集、フィルム、質問票、諸費用精算書を封筒に入れ、後期（前期）の初回授業で提出してください。希望者には小写真集とフィルムは後日、返却します。
- ⑫データは研究以外に使うことはありませんし、内容について匿名性は保証されますから、あなたの思ったとおりに撮ってみて下さい。
- ⑬質問やトラブル等が生じた場合は、下記の連絡先に問い合わせてください（続いて研究者の連絡先の記載）。

研究参加者と実施期間

関西圏の3大学（女子大学2、共学1）から、144名の女子大学生が研究に参加した。専攻は文学系・社会科学系・家政系・福祉系であった。2001年から

2006年に自叙写真の撮影を実施し、撮影期間はいずれも夏季あるいは冬季休暇を含む40日間とした。研究参加者にはこの間の任意の1~2週間を選んで撮影を開始・終了するよう伝えた。行動の自由度が高まり時間に余裕のできる長期休暇を撮影実施期間に含めることで、研究参加者が自由にかつ熟慮して撮影対象を選択できるようにすること、撮影日を一定の期間に区切ることで研究参加者が撮影等に集中して取り組むことを狙った。

回収した資料のうち、質問票の“研究への取り組み態度”の質問¹⁷に“非常に不真面目”“やや不真面目”と回答した者を除く133名（自叙写真1915枚）を分析の対象とした。133名による撮影枚数の平均は14.36枚（Me=13.0, SD=3.86）、撮影日数の平均は8.34日（Mo=7.00, R=32.1, SD=4.99）であった。

結果と考察

3.1.1 人物・場所・物の分類

表3-1-2に示した分類カテゴリー¹⁸にもとづいて、1915枚の自叙写真の被写体を“写真に何が写っているか”という基準から人物・場所・物に分類した。なお、人物を被写体とした写真については、Zillerらの先行研究を参考に対象者の人数とともに研究参加者自身（自分）が写っているか否かを含めて分類を行った。図3-1-1には分類カテゴリーに対応する自叙写真の例を示した¹⁹。

表3-1-3に示すとおり、撮影枚数の多い被写体は順に、物(1044枚, 54.52%)、人(530枚, 27.68%)、場所(341枚, 17.81%)となった。一人当たりの撮影枚数で見ると、およそ物が8枚、人物が4枚、場所が3枚となる。なお、1915枚のうち室内で撮影されたものが約7割(1355枚, 70.78%)を占め、屋外での撮影は556枚(29.03%)と少なかった(不明は4枚, 0.21%)。

¹⁷ 研究への取り組み態度を問う質問は、研究参加者に配布した質問票(資料4)に含まれており、研究参加者が自叙写真集を作成した後で取り組み態度を5段階(非常に不真面目~非常に真面目)で自己評定するものである。

¹⁸ 向山(2002c)で見出された分類カテゴリーである。分類カテゴリー設定に関する詳細は、資料1を参照のこと。今回のデータでは183枚(総数の約10%)の自叙写真について2名3組の評定者が独立にカテゴリー分類を行い、0.82~0.84の一致率を得た。日本の大学生を対象とした安川(2005, 2008)やSonoda, et. al., (2000)、園田(2001)の分類カテゴリーは資料3参照のこと。

¹⁹ 事例の公開にあたって、該当する研究参加者には了解を得て自叙写真や発話等を掲載した。プライバシー保護のため、一部の自叙写真には修正を加えた。

133名の研究参加者のうち、物を撮影した者は128名(96.24%)で、人物を撮影した者105名(78.95%)、場所を撮影した者103名(77.44%)を上回った。すなわち、自叙写真に物を全く写さない者は稀であるが、人物や場所を写さない者は2割程度いることが分かる²⁰。

表 3-1-2. 被写体の分類カテゴリーと内容

カテゴリー		内容
上位	下位	
人物	ひとり(自分のみ/他者のみ)	ひとりの人を写している。
	ふたり(自分と他者/他者のみ)	2人の人を写している。
	3人以上(自分と他者/他者のみ)	3人以上の人を写している。
場所	部屋	部屋や室内を写している。
	建物	建物全体か一部を写している。
	風景	景色や眺めを写している。
	風景(遠景に人)	人が写真の中心ではないが、遠景あるいは背景にひとり以上の人が写っている。
物	日用品	日常生活で使うもの。
	音楽	楽器・音響機器・音楽や映像ソフトなど音楽に関連するもの。
	運動	スポーツ活動やその用具。
	服飾	洋服・靴・アクセサリ・髪留・化粧品・香水など服飾品。
	証明や記録	所属・地位・資格・存在の証明や過去の記録(写真を除く)。
	写真	アルバム・写真立て・プリクラなどの写真を含む。
	置物	飾りや鑑賞のための置物(ぬいぐるみを除く)。
	ぬいぐるみ	ぬいぐるみ。
	書籍	書籍・雑誌・漫画などの冊子。
	リーフレット	ポスター・パンフレット・ポストカードなど一枚物の印刷物。
	動物	犬・猫・魚・鳥などの動物。
	植物	草・木・花などの植物。
	食物	飲物・アルコール・薬を含む。
その他の物	上記以外の物。	
その他		不明。



1. 人物—ひとり(自分のみ)



2. 人物—ふたり(自分と他者)



3. 人物—3人以上(他者のみ)

図 3-1-1. 被写体の分類カテゴリーに含まれる自叙写真の例

²⁰ 人物写真が0枚は28名、場所写真が0枚は30名、物写真が0枚は5名であった。



4. 場所—部屋



5. 場所—建物



6. 場所—風景



7. 場所—風景(背景に人)



8. 物—日用品



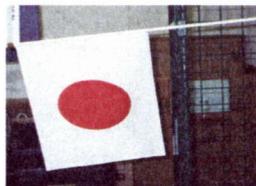
9. 物—音楽



10. 物—運動



11. 物—服飾



12. 物—証明や記録



13. 物—写真



14. 物—置物



15. 物—ぬいぐるみ



16. 物—書籍



17. 物—リーフレット



18. 物—動物



19. 物—植物



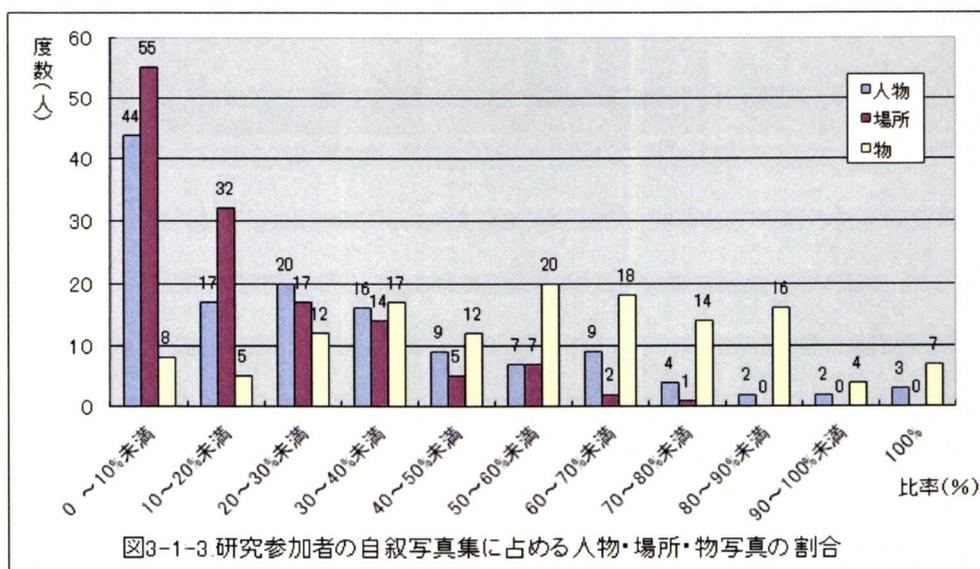
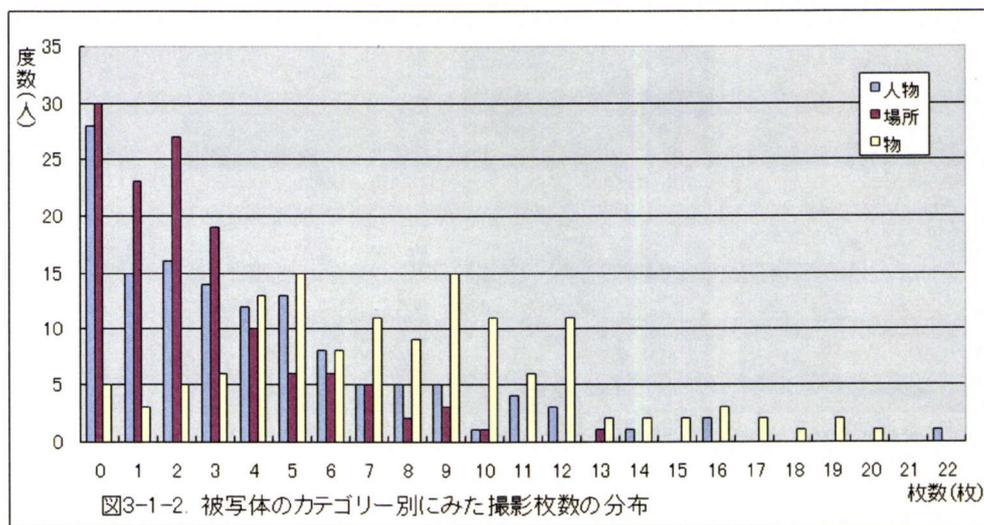
20. 物—食物

図 3-1-1. 被写体の分類カテゴリーに含まれる自叙写真の例(続き)

表 3-1-3. 被写体別撮影枚数の基本統計量

	人物	場所	物	合計
平均値(標準偏差)	3.98(3.98)	2.56(2.52)	7.85(4.38)	14.40(3.86)
中央値	3	2	8	13.00
最頻値	0	0	5と9	12
範囲	22-0	13-0	20-0	32-7
合計(%)	530(27.68)	341(17.81)	1044(54.52)	1915(100.00)

図 3-1-2 には、撮影枚数の分布を人物・場所・物のカテゴリー別に示した。物写真では最頻値が 5 と 9 にある釣鐘型様の分布を示しており、人物写真や場所写真よりも分布の偏りは小さく、個人間差異が大きい。一方、人物写真と場所写真では最頻値が共に 0 で、撮影枚数が多くなるにつれ概ね撮影者数が減少してゆく分布型を示している。



研究参加者ごとに撮影枚数が異なることから、図 3-1-3 には撮影枚数に占める人物・場所・物写真の比率を算出し、この比率によって研究参加者を分類した結果を示した。撮影枚数の 50%以上を人物写真が占める者は 27 名 (20.30%)、

場所写真が50%以上を占める者は10名(7.52%)であるのに対し、物写真が50%以上を占める者は79名(59.40%)となっている。すなわち、撮影した写真のうちで場所写真が半数以上を占める者は1割弱と少なく、人物写真が半数以上を占める者は2割程度、物写真が半数以上を占める者は6割程度いることが分かる。

3.1.2 下位カテゴリー別の分類

人物写真の下位カテゴリー別分類

記録用紙に研究参加者自身が記した被写体(何を撮ったか)の記述にもとづいて撮影対象を特定した。表3-1-4には、人物の対象ごとに撮影枚数を掲載した。自分のみ(研究参加者を単独で撮った写真)は最も撮影枚数が多いが、他者のみを写した写真では友人および親の撮影枚数が多く(表3-1-5)、自分と他者を写した写真では友人の撮影枚数が目立って多い(表3-1-6)。

表3-1-4. 人物写真撮影者における対象別の基本統計量

	自分のみ	他者のみ	自分と他者
平均値	1.91	1.64	1.50
標準偏差	2.67	1.99	2.29
範囲	14-0	11-0	11-0
合計(%)	201(37.92)	172(32.45)	157(29.62)

注)人物写真の撮影者 N=105、撮影総数 530 枚。

表3-1-5. 人物写真撮影者における“他者のみ”写真の基本統計量

	友人	恋人	親	きょうだい	家族	祖父母	その他
平均値	0.50	0.10	0.39	0.15	0.10	0.10	0.30
標準偏差	0.88	0.33	0.61	0.43	0.34	0.34	0.92
範囲	5-0	2-0	2-0	2-0	2-0	2-0	7-0
合計	52	10	41	16	11	11	31

注)人物写真の撮影者 N=105。“家族”には親・兄弟姉妹・祖父母を交えた3名以上の親族を対象とした写真を分類した。“親”は両親9枚、父親11枚、母親21枚の合計。

表3-1-6. 人物写真撮影者における“自分と他者”写真の基本統計量

	自分と友人	自分と恋人	自分と父親	自分と母親	自分と両親	自分ときょうだい	自分と家族	自分とその他
平均値	0.94	0.07	0.01	0.05	0.02	0.11	0.02	0.28
標準偏差	1.73	0.32	0.10	0.25	0.14	0.45	0.20	1.00
範囲	10-0	2-0	1-0	2-0	1-0	3-0	2-0	8-0
合計	99	7	1	5	2	12	2	29

注)人物写真の撮影者 N=105。“家族”には親・兄弟姉妹・祖父母を交えた3名以上の親族を対象とした写真を分類した。

人物写真を撮影した 105 名のうち、自分単独の写真を少なくとも 1 枚は撮影した者が 66 名、他者単独の写真を撮影した者は 69 名、自他（自分と他者）が写った写真を撮影した者は 52 名であった。

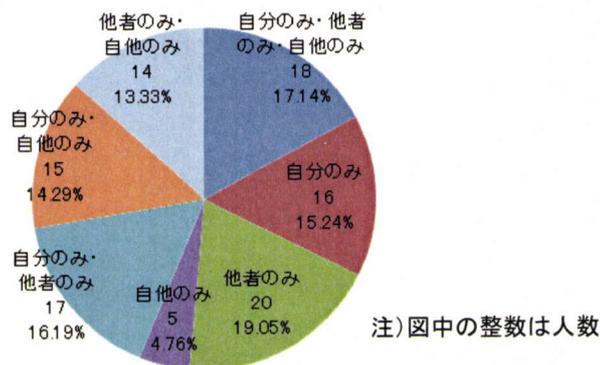


図3-1-4 人物写真撮影者における人物撮影パターン

すなわち、6 割強の者が自分や他者を単独で撮影し、約 5 割の者が自分と他者をともに写したことが分かる。また、対象人物の組み合わせから人物撮影者を分類してみると、自叙写真集に自他（自分と他者）のみを含む者は 5 名（4.76%）と少ないが、それ以外の対象人物の選択については選択者数に大きな差は見られず、自他のみを除く対象人物の組み合わせはほぼ一様に出現していることが分かる（図 3-1-4）。

物写真の下位カテゴリー別分類

表 3-1-7 には、物写真を撮影した 128 名について、下位カテゴリー別に撮影枚数を示した。撮影枚数の多い順から 5 位までを見ると、日用品・音楽・書籍・動物・服飾となった。撮影枚数の多かった 5 つの下位カテゴリーについて、それぞれの下位カテゴリーに含まれる写真を 1 枚以上撮影した者を調べると、日用品 91 名、音楽 63 名、服飾 56 名、書籍 56 名、動物 57 名であった。

表 3-1-7. 物写真撮影者における下位カテゴリー別基本統計量

	日用品	音楽	運動	服飾	証明	写真	置物
平均値	1.70	0.74	0.23	0.66	0.41	0.32	0.33
標準偏差	1.58	1.01	0.54	0.91	0.76	0.66	0.62
範囲	6-0	6-0	3-0	4-0	4-0	4-0	3-0
合計	219	96	29	85	52	41	42
	ぬいぐるみ	書籍	リーフレット	動物	植物	食物	その他
平均値	0.45	0.74	0.25	0.71	0.38	0.59	0.61
標準偏差	0.77	1.16	0.52	1.11	1.14	0.91	0.97
範囲	4-0	7-0	2-0	6-0	7-0	4-0	4-0
合計	58	95	32	91	50	75	79

注)物写真撮影者 N=128、撮影総数 1044 枚。

場所写真の下位カテゴリー別にみた撮影枚数

場所写真を撮影した103名について、下位カテゴリ別に撮影枚数を調べた。表3-1-8より、風景・建物・部屋の順で撮影枚数が多いことが分かる。それぞれの下位カテゴリに含まれる写真を1枚以上撮影した者を調べると、部屋39名、建物56名、風景77名であった。

表3-1-8. 場所写真撮影者における下位カテゴリ別基本統計量

	部屋	建物	風景
平均値	0.53	1.16	1.62
標準偏差	0.81	1.51	1.59
範囲	3-0	7-0	7-0
合計	55	119	167

注)場所写真撮影者 N=103、撮影総数 341 枚。

ここまでの結果を先行研究と比較しながらまとめる。人物や場所よりも物の撮影枚数が多いという本研究の結果は、日本で実施された大学生を対象とした他研究(向山, 2002c; 安川, 2008)の結果とも一致しており、研究参加者らにとって物との関係によって自分を表現したり定義づけたりすることは比較的容易であることが推察される。このような物と関係づけた自己定義は、撮影できる具体的な対象を必要とする写真という表現手段によって顕現化しやすいと考えられ、自叙写真法によって収集される資料の特徴と言えるかもしれない。従って、物写真の分析は自叙写真法の特徴を生かすものになる。以降の章では、物写真の撮影枚数に加えて物への意味づけを考えることで、個々人の自己関連世界について考察を試みる。

人物写真に着目した場合には、研究参加者自身を単独で写した写真(自分のみ)が最も多いという結果は、他研究と同様に本研究でも確認された。この結果は、写真で自分を表現する事態では自分自身を写すことは最も一般的な反応であることを示唆している。その一方で、本研究と他研究の結果には違いも見られる。女子大学生を調査対象とした向山(2002c)との比較では、本研究の方が自分単独の写真の比率が低い(それぞれ64%と38%、資料1の付表1-2参照)。この理由として、向山(2002c)では自叙写真の撮影が授業の課題(自分自身をテーマにした写真集を作り、それをもとに自己分析する)として実施されたことにより、自己を対象化する課題としての方向づけが強くなり、この

結果、自分を被写体とした写真が多く撮影された可能性が考えられる。これまでに自分を被写体とした自叙写真は女性よりも男性に多いという報告もあるが (e.g. 安川, 2008)、撮影時の教示や課題の設定によって撮影が影響を受ける可能性もある。

他者を含む人物写真については、安川 (2008) の結果では 75%を友人が占めているが、本研究では友人と並んで父母・きょうだい・家族・祖父母といった肉親の撮影枚数が多い (友人 46%、肉親 31%)。安川の研究は男女大学生を合わせた結果であるため、まずは性別の影響が考えられる。特に本研究において母親を写した写真の枚数が多かったことは、母一娘の緊密な関係を示唆しているように思われる。その他、本研究で肉親の写真が多かった理由として、本研究の参加者は自宅からの通学生が比較的多いことや、安川の研究では撮影期間が 2 週間であるのに対し、本研究では長期休暇を含む 40 日間のうち任意の 1 ~2 週間を撮影期間としたことも影響している可能性がある (e.g. 休暇中に下宿生が帰省して実家で両親を撮影する等)。

物を被写体とした写真については、本研究では特に日用品・音楽・書籍・動物・服飾の順で撮影枚数が多かった。物を写した写真については、分類の視点や分類カテゴリーが異なる安川 (2008) との比較はできないが、向山 (2002c) との比較では日用品・服飾・音楽・書籍の撮影枚数が多いことは本研究の結果と共通している (資料 1, 付表 1-5 参照)。これより、日用品・服飾・音楽・書籍は、女性・青年・大学生の自己に関連する世界を構成する代表的な物品と考えてよいだろう。自叙写真に表現された物の多くは研究参加者の所有物であり、彼らにとって身近な物品が選択されたと思われる。米国での先行研究の中では主として研究参加者の興味や活動と関連から物が分類されているが (資料 2 参照)、本研究では研究参加者の過去や ID (e.g. パスポート) 等の“証明や記録”カテゴリーに含まれるものもあり、個人の記憶や生活歴との関係で物が撮影される場合もある。物は人物や場所に比べ被写体の選択の幅が広く、その意味づけも多様と考えておくべきだろう。

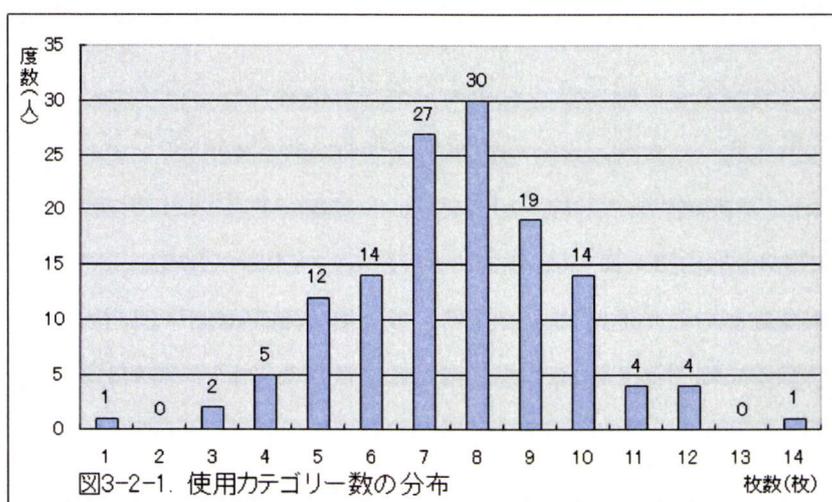
場所を写した写真では風景の撮影枚数が最も多く、次いで建物、部屋となった。風景の撮影枚数の多いことは向山 (2002c) とも一致している。撮影対象となった風景は山や川などの自然や空、道路や街並みなどであり、建物や部屋

では対象の多くは自宅・自室であった。場所の写真は、研究参加者の生活空間についての情報を示すだけでなく、その意味づけからみると物を写した写真と同様に個人の記憶や生活歴と結びついている可能性がある。

これまで、人物を写した自叙写真は人との関係性や社会的結合の表現とみなされてきた (e.g. Clancy & Dollinger, 1993)。写真を撮影するという状況は対象が自分か他者か、単独か複数かに関わらず、通常は写すー写される (見るー見られる) ことを許諾し合う関係性が想定される。その意味でも人物を被写体とした自叙写真は、先行研究で主張されてきたように人との関係性や社会的結合性を示す指標と考えてよいだろう。これに対して物や場所がどのような意味をもつのかについては、ほとんど議論されてきていない。自叙写真には多くの物や場所の写真が含まれている。被写体としての物や場所の持つ意味については、以降の章における結果の分析を通じて考察していきたい。

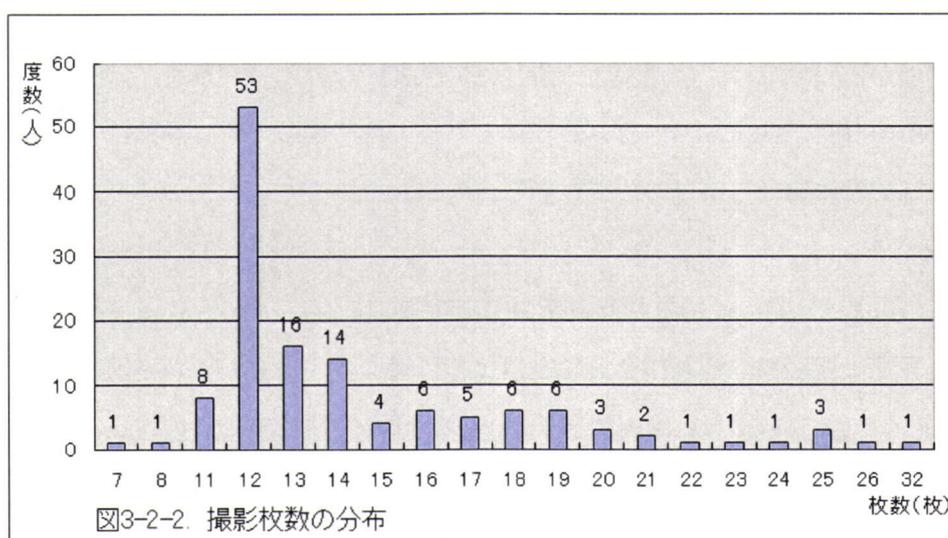
3.2 分類に使用されたカテゴリーの数

第3章第2節では、被写体を分類するために幾つのカテゴリーが必要とされたかについて、特に撮影枚数との関係から検討する。研究参加者の自叙写真の分類には20のカテゴリー(人物3・場所3・物14)を用い、その結果を図3-2-1に示した(M=7.65, SD=2.07)²¹。カテゴリー数は14~1までの範囲をとり、7と8で研究参加者の4割強(57名, 42.86%)を占めていることが分かる。



²¹ ここでの分類を含め、以降、分類カテゴリーが20と表示される場合は、「風景(遠景に人)」を「風景」に含めて分類している。

図 3-2-2 には撮影枚数の分布を示した。平均撮影枚数は 14.36 枚 (SD=3.86) であるが、最多では 32 枚を撮影した者もいた。本研究での撮影枚数の上限を設けない手続きは、研究参加者が必要だと思うだけ撮影するという状況において自己を表現するためにどの程度の枚数が必要とされるのかを調べる試みであったが、撮影枚数には相当の個人差が見られることが分かる。ただし、最低撮影枚数である 12 枚を撮影した者が 53 名 (39.85%) と最も多く、撮影枚数の下限を教示した場合には、撮影者にとってこの日数が撮影枚数を決める基準となるようである²²。



通常、多くの写真を撮影すれば、そこに様々な被写体を含めることができるので、撮影枚数が増えると自叙写真を分類するために必要となるカテゴリー数も多くなると予想される。実際、ここでの研究参加者 133 名においても、撮影枚数と使用カテゴリーとの間には $r=.384$ ($p<.01$) の有意な正相関が見られる。本研究では、人物 3・場所 3・物 14 (計 20) の分類カテゴリーを用いて自叙写真を分類していることから、通常は人物写真を多く写すと相対的に使用カテゴリー数は少なくなり、物を多く撮影すると相対的に使用カテゴリー数は多くなると考えられる。

²² 12 枚未満は、撮影失敗等により現像されなかったことによるものである。なお、撮影日数の平均は 8.34 日 (Mo=7.00, R=32.1, SD=4.99) であった。撮影枚数と撮影日数の相関係数は $r=-.01$ と無相関に近く、撮影枚数と撮影日数に関連は見られない。

自叙写真の分類に使用されたカテゴリーの数は、米国の先行研究ではシャイネスとの関連が取り上げられ、シャイな人は相対的に使用カテゴリー数が少ないことが報告されている (Ziller & Rorer, 1985)。自叙写真の分類に使用されるカテゴリーは、幾つのカテゴリーを設定するかで数値が変わってくるので他研究結果との直接の比較はできないが、本研究で用いた分類カテゴリーに従うと、一人当たりの平均が 7~8 程度で 14 から 1 までの範囲であることが示された。また、撮影枚数と使用カテゴリーとの間には有意な正相関が見られたが、教示で最低撮影枚数を提示しなければ、撮影枚数と使用カテゴリーの関連がより明確になった可能性もある。撮影者に撮影枚数を自由に決定してもらう形での実施は今後の課題としたい。

3.3 自分を表現する上で重要な対象

自叙写真に写された対象のうち、どのような対象が自分を表現する上で重要視されているだろうか。被写体にもとづくカテゴリー分類で得た知見に新たに重要度という観点を導入することで、自己に関連する事物が異なる重みづけを持つことを示し、個々人の自己関連世界の特徴がより明確になることが期待される。第 3 章第 3 節では、自叙写真に対して研究参加者自身が行った“自分を表す上での重要度”の評定に着目し、被写体を重要度との関係から検討する。

方法

自叙写真の撮影・研究参加者・実施期間・有効資料

自叙写真の撮影の手続きや研究参加者、実施期間、有効資料は第 3 章第 1 節と同様である。個々の自叙写真の“自分を表す上での重要度”は質問票 (資料 4 参照) に記載されており、表 3-3-1 で示した教示に従って研究参加者自身が自叙写真の撮影後に記入する²³。

表 3-3-1. 重要度に従って自叙写真を順位づけるための教示

写真集を見て、あなたが自分自身を表す上で重要(これがないと私が誰であるか言えない)と思う写真から順に 1、2、3、... と順位をつけてください。全ての写真に順位を付け、記録用紙の右上の口に記入してください。どうしても順位が決められない場合は、“同順位〇番”と記入しておいて下さい。(例:重要度 3 位が 2 枚あれば 2 枚ともに“同順位 3 番”と書く)。

²³ 同順位を認めたため、重要度の判断の際に複数の写真に同順位を付与した研究参加者がいる。このため、重要度 1 位~3 位の写真枚数は研究参加者の人数と同数ではない。

結果と考察

3.3.1 重要度の高い自叙写真の被写体

研究参加者 133 名が“最も自分を表す写真、これがないと自分を表すとは言えない”と判断して重要度 1 位をつけた 156 枚、重要度 2 位をつけた 125 枚、重要度 3 位をつけた 134 枚（計 415 枚、総撮影枚数の 21.67%）を重要度の高い自叙写真とした（以下、重要度上位の自叙写真とする）。表 3-3-2 のとおり、重要度上位の自叙写真は人物写真が 182 枚・場所写真 40 枚・物写真 193 枚となった。これら写真についても物カテゴリーに分類されるものが最も多いが、重要度 4 位以下に比べると人物カテゴリーに含まれる写真の比率が高い。特に重要度 1 位の写真では、人物写真の占める割合が高い。

表 3-3-2. 重要度と被写体からみた自叙写真の枚数

重要度	カテゴリー			合計
	人物	場所	物	
1 位	76(48.72)	14(8.97)	66(42.31)	156(100.00)
2 位	55(44.00)	13(10.40)	57(45.60)	125(100.00)
3 位	51(38.06)	13(9.70)	70(52.24)	134(100.00)
4 位以下	348(23.20)	301(20.07)	851(56.73)	1500(100.00)
合計	530(27.68)	341(17.81)	1044(54.52)	1915(100.00)

注 1) 数字は写真枚数、()内数字は重要度ごとの合計枚数を分母とした比率。

注 2) 重要度 1 位から 3 位までの合計枚数は 415 枚。うち、人物 182 枚(43.86%)、場所 40 枚(9.64%)、物 193 枚(46.51%)。

重要度上位の自叙写真を下位カテゴリーに分類した（表 3-3-3）。合計をみると、人物カテゴリーでは“ひとり”、すなわち単独の人物を被写体とした写真、場所カテゴリーでは建物、物カテゴリーでは日用品の撮影枚数が最も多い。

表 3-3-4 には人物写真の対象別に撮影枚数を示した。重要度上位の自叙写真でも自分のみ（研究参加者を単独で撮った写真）は 49 枚と最多であるが、重要度 4 位以下と比較すると重要度上位の自叙写真では他者を撮影した写真が多い。なお、重要度上位と 4 位以下の撮影枚数を対象別に比較すると、枚数の偏りは有意であった（ $\chi^2(2)=14.90, p<.001$ ）。残差分析の結果、重要度上位の自叙写真では自分のみを単独で写した写真の枚数が少なく、他者のみを写した写真の枚数が多かった（自分と他者をともに写した写真は有意差なし）。

表 3-3-3. 被写体にもとづく重要度上位の自叙写真の分類

カテゴリー		重要度別にみた度数と比率						合計 度数
上位	下位	重要 1 位		重要 2 位		重要 3 位		
		度数	%	度数	%	度数	%	
人物	ひとり(自分のみ/他者のみ)	39	25.00	26	20.80	29	21.64	94
	ふたり(自分と他者/他者のみ)	18	11.54	13	10.40	11	8.21	42
	3人以上(自分と他者/他者のみ)	19	12.18	16	12.80	11	8.21	46
場所	部屋	2	1.28	2	1.60	2	1.49	6
	建物	5	3.21	7	5.60	8	5.97	20
	風景	7	4.49	4	3.20	3	2.24	14
物	日用品	11	7.05	12	9.60	14	10.45	37
	音楽	9	5.77	5	4.00	8	5.97	22
	運動	2	1.28	0	.00	1	.75	3
	服飾	9	5.77	8	6.40	4	2.99	21
	証明や記録	4	2.56	3	2.40	4	2.99	11
	写真	6	3.85	3	2.40	5	3.73	14
	置物	1	.64	0	.00	2	1.49	3
	ぬいぐるみ	4	2.56	3	2.40	5	3.73	12
	書籍	8	5.13	9	7.20	5	3.73	22
	リーフレット	1	.64	0	.00	0	.00	1
	動物	3	1.92	6	4.80	10	7.46	19
	植物	2	1.28	3	2.40	2	1.49	7
	食物	1	.64	3	2.40	5	3.73	9
その他の物	5	3.21	2	1.60	5	3.73	12	
合計		156	100.00	125	100.00	134	100.00	415

注) %欄は重要度 1 位、2 位、3 位の合計枚数を分母とした比率を示す。

3-3-4. 重要度上位の自叙写真における対象別の撮影枚数

重要度	自分のみ	他者のみ	自分と他者	合計
1 位	21	32	23	76
2 位	13	20	22	55
3 位	15	21	15	51
4 位以下	152	99	97	348
合計	201	172	157	530

注)重要度上位(1 位~3 位)の撮影枚数は、“自分のみ”は 49 枚、“他者のみ”は 73 枚、“自分と他者”は 60 枚、計 182 枚。

では、重要度上位の人物写真にはどのような“他者”が選択されているのだろうか。表 3-3-5 と表 3-3-6 に対象となった他者についての結果を示した。他者のみの写真では友人よりも親を対象とした写真の撮影枚数が多く、自分と他者をともに写した写真では友人を対象とした写真の撮影枚数が多いことが分かる。

表 3-3-7 には、場所カテゴリーについての結果を示した。重要度上位の自叙

写真の中で最も撮影枚数が多かった場所は、自宅・自室であった（自宅 9 枚、自分の部屋 4 枚）。

表 3-3-5. 重要度上位の自叙写真における“他者のみ”写真の撮影枚数

重要度	友人	恋人	親	きょうだい	祖父母	家族	その他
1 位	5	3	16	3	1	4	0
2 位	5	1	7	2	2	2	1
3 位	7	1	4	3	2	1	3
合計	17	5	27	8	5	7	4

注) “家族”には親・兄弟姉妹・祖父母を交えた 3 名以上の親族を対象とした写真を分類した。

表 3-3-6. 重要度上位の自叙写真における“自分と他者”写真の撮影枚数

重要度	自分と友人	自分と恋人	自分と父親	自分と母親	自分と両親	自分ときょうだい	自分と家族	自分とその他
1 位	12	2	1	1	1	3	0	3
2 位	16	1	0	1	1	1	1	1
3 位	12	1	0	0	0	2	0	0
合計	40	4	1	2	2	6	1	4

注) “家族”には親・兄弟姉妹・祖父母を交えた 3 名以上の親族を対象とした写真を分類した。

表 3-3-7. “場所”カテゴリの詳細

重要度	下位 カテゴリ	被写体	度数
1 位	部屋	自分の部屋 1, 自分の部屋以外 1(スーパーのお菓子コーナー)	14
	建物	自宅 3, 校舎 1(大学), ビルディング 1(YMCA 会館)	
	風景	自宅の庭 1, 空 2, 山脈と田園 2, 海 1, 竹藪 1	
2 位	部屋	自分の部屋以外 2(図書館・レッスン場)	13
	建物	自宅 3, 校舎 2(大学・小学校), 駅 1, ビルディング(ジム) 1	
	風景	空 1, 田園 1, 沼 1, モニュメントのある風景 1	
3 位	部屋	自分の部屋 2	13
	建物	自宅 3, 校舎 3(大学・中学校), 店 1, 病院 1	
	風景	空 1, 海峡と橋 1, 古墳 1	

注) 数字は写真枚数。

物カテゴリに分類された重要度上位の自叙写真については、撮影枚数の多い順に日用品・音楽・書籍・服飾・動物となった（表 3-3-8）。なお、物写真の中で重要度の上位に挙げた日用品・音楽・書籍・服飾・動物は、第 3 章第 1 節で示した物写真での一人当たりの撮影枚数の多い下位カテゴリと重なる（物写真で撮影枚数が多かったのは、日用品 219 枚、音楽 96 枚、書籍 95 枚、服飾 85 枚、動物 91 枚）。つまり、自分を表現する上で研究参加者が重要と判断した物品は、一人当たりの撮影枚数が多いといえる。

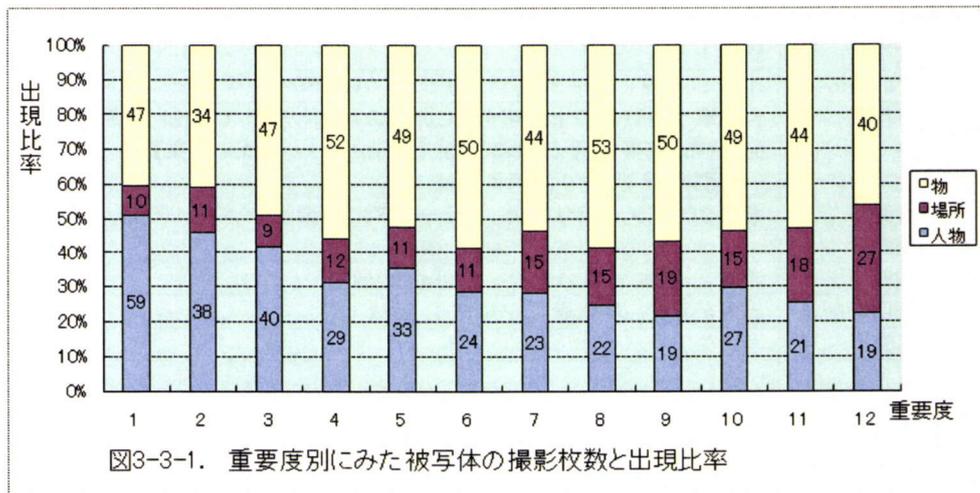
表 3-3-8. “物”カテゴリーの詳細

重要度	下位 カテゴリー	被写体	度数	
1 位	日用品	自転車 1, 机(机の上や引き出しの中の写真も含む)1, 時計 2, ベッド 1, 虫眼鏡 1, 携帯電話 2, パソコン 2, 文具(ノート・レポート用紙・筆箱など)1	11	
	音楽	楽器 8(ピアノ, 箏, フルート, エレクトーン, 銅鑼, ピック) 音楽映像ソフト 1(DVD)	9	
	運動	バレシューズ 1, 柔道衣 1	2	
	服飾	洋服 5, 香水 1, 装飾品 2(ネックレス・ブレスレット), 化粧品 1	9	
	証明や記録	氏名を示すもの 1(表札), 証明書(免許書)1, 日記帳 1, 国旗 1	4	
	写真	写真やアルバム 6	6	
	置物	人形 1	1	
	ぬいぐるみ	ぬいぐるみ 4	4	
	書籍	書籍 8(単行本・漫画・雑誌・教科書・絵本・参考書)	8	
	リーフレット	パンフレット 1	1	
	動物	犬 2, ウサギ 1	3	
	植物	樹木 2	2	
	食物	飲物 1	1	
	その他の物	作品 1(書道), ゲーム機 1(パチンコ), キャラクターやアーティストグッズ 3	5	
	2 位	日用品	自転車 2, 机(机の上や引き出しの中の写真も含む)1, 時計 1, 鞆 1, 携帯品(財布・携帯電話・時計など)3, ひざかけ 1, パソコン 1, 文具(ノート, レポート用紙, 筆箱など)1, 消毒用品 1	12
		音楽	楽器 3(ピアノ, クラリネット, ステージア), 音楽映像ソフト 1(CD), 楽譜 1	5
		運動	-	0
服飾		洋服 2, 香水 1, スカーフ 1, 化粧品 2, 靴 2	8	
証明や記録		氏名を示すもの 1(表札), 国旗 1, 手紙 1	3	
写真		写真やアルバム 3	3	
置物		-	0	
ぬいぐるみ		ぬいぐるみ 3	3	
書籍		書籍 9(単行本, 漫画, 教科書, 辞書, 絵本, 図録)	9	
リーフレット		-	0	
動物		犬 4, 猫 1, ペンギン 1	6	
植物		草木 3	3	
食物		飲物 1, 果物 1, 煙草 1	3	
その他の物		作品 1(掛け軸), 色(ピンク色)1	2	
3 位		日用品	車 2, 机(机の上や引き出しの中の写真も含む)1, 時計 1, 鞆 1, ベッド 1, 携帯電話 1, スケジュール帳 1, 文具(ノート, レポート用紙, 筆箱など)3, 電卓 1, 体重計 1, 洋裁道具 1	14
		音楽	楽器 4(ピアノ, フルート, ハンドベル, DJ ブース), 音楽映像ソフト 2(MD・ビデオテープ), コンサート・チケット 2	8
		運動	バレーボール 1	1
	服飾	洋服 3, 装飾品 1(ネックレス)	4	
	証明や記録	証明書(住民票・学生証)2, 手紙 1, 記念品 1	4	
	写真	写真やアルバム 5	5	
	置物	人形 2	2	
	ぬいぐるみ	ぬいぐるみ 5	5	
	書籍	書籍 5(単行本, 漫画, 雑誌, 教科書, 辞書, 絵本)	5	
	リーフレット	-	0	
	動物	犬 6, ハムスター 2, 鮫 1, ヤギ 1	10	
	植物	草木 2	2	
	食物	菓子 1, 薬 1, 野菜 1, 食事 2	5	
	その他の物	扉 1, アロマオイル 1, 蛍光灯 1, 蜂 1, 浮木 1	5	

注) 数字は写真枚数。

3.3.2 重要度と被写体の撮影枚数・出現比率との関係

重要度上位の自叙写真は4位以下と比べて人物を対象とした写真の比率が高いこと、特に重要度1位の写真では人物写真の枚数が最多であったことを述べた。重要度と被写体の出現頻度についてより詳しく調べるため、順位を12位まで広げて重要度と被写体の撮影枚数や出現頻度を調べた。結果、重要度1位では人物を被写体とした写真が50%を超えるが、2位以降の自叙写真では人物写真の占める割合が50%以下になり、かわって場所や物を被写体とした写真の出現比率が高くなることが示された（図3-3-1）。



注) 棒グラフ内の数字は枚数。重要度1位～12位に含まれる1086枚の結果を図示した。

3.3.3 自叙写真への評価と重要度との関係

重要度の評定は自叙写真への評価とどのような関係にあるのだろうか。記録用紙では各写真について、“被写体の想起しやすさ” “写真の出来ばえ” “写真があなたを表す程度” を尋ね、5件法で回答を求めている（資料4参照）²⁴。これら3つの問いへの回答が重要度によって異なるかを調べるため、自叙写真を表3-3-9に示した①から④の4群に分け、4群間で評定平均値を比較した。

この結果、3つの問い全てで有意差がみられ、重要度上位にあたる1位から

²⁴ 想起しやすさは“撮るものは簡単に思い浮かんだか”について“非常に困難～非常に簡単”、写真の出来ばえは“非常に不満足～非常に満足”、写真があなたを表す程度は“非常に表さない～非常に表す”の5段階で評定を求めた。

3位の自叙写真はそれ以外の自叙写真に比べ、撮影時に被写体は想起しやすく ($F_{(3,246)}=12.97, p<.001$)、写真の出来ばえは良く ($F_{(3,225)}=5.34, p<.01$)、写真は自分自身を表している ($F_{(3,206)}=37.75, p<.001$)、と評価されていた。特に“自分自身を表現する程度”についての回答結果は重要度と良く対応しており、重要度上位の写真ほど自分自身をより表現していると判断されていた。

表 3-3-9. 重要度の4群別にみた自叙写真への評価

		重要度				F値
		①1~3位	②4~6位	③7~9位	④10~12位	
想起しやすさ	平均値	4.40	4.25	4.09	3.93	12.97***
	標準偏差	0.684	0.685	0.749	0.738	①>③, ①>④, ②>④
出来ばえ	平均値	3.77	3.71	3.52	3.40	5.34**
	標準偏差	0.824	0.873	0.890	0.830	①>③, ①>④, ②>④
自分表現	平均値	4.58	4.37	4.07	3.84	37.75***
	標準偏差	0.514	0.518	0.632	0.745	①>②, ①>③, ①>④, ②>③, ②>④, ③>④

注) 分析では欠損値のあるデータは除外したため N=83。表中の**は $p<.01$ 、***は $p<.001$ を表す。F値欄の不等号は多重比較(Bonferroni)により $p<.05\sim p<.001$ で有意差のあった群間を示す。

以上の結果をまとめると、被写体にもとづく分類の結果では物を被写体とする写真の撮影枚数が最も多かったが、自分を表す上での重要度に着目すると、重要度の高い写真にはより多くの人物写真が含まれており、特に重要度1位の写真で人物写真の占める割合が高かった。また、重要度上位の自叙写真の被写体は研究参加者にとって自分自身と結びつけて想起しやすく、写真の出来ばえからみた場合にも相対的にポジティブな評価がなされ、自分をよく表現していると捉えられていることが分かった。これらの結果からは、研究参加者は自分と関連する対象として人物とそれ以外とを異なる重みづけをもって捉えていること、撮影枚数では物が最多であるが自身との関連では人物を重視していると言える。重要度という視点を導入することで、回答者により近い視点から彼らの自己関連世界を理解できる可能性が示され、被写体の撮影枚数のみでは分からなかった新しい知見が得られたと言えよう。

人物写真に着目すると、最も撮影枚数が多いのは研究参加者を単独で撮った写真であったが、重要度上位の写真はそれ以外の写真と比べ他者を対象とした写真がより多く含まれていた。対象人物としては友人・恋人・親・きょうだい・

家族・祖父母等が含まれるが、特に友人や親の撮影枚数が多く、これらの対象が研究参加者の自己関連世界において重要な位置を占めることが示唆された。

また写真の表現様式（構図）に着目すると、自分が写真に写り込むことなく他者のみを写すか、自分と他者をともに写すかによって選択されやすい対象が異なっていた。つまり、他者のみを写した写真では親の写真が多く撮影され、自分と他者をともに写した写真では自分と写る相手に友人が多く選択されていた。被写体に自分を含むか否か（他者を含む自叙写真の構図）が、被写体となる対象によって変化することを示唆する結果である。

なお、重要上位の自叙写真の中にも物の写真は一定の割合を占めた。中でも日用品・音楽・服飾・書籍・動物は撮影枚数が多かった。場所の写真は人物や物を写した写真ほど撮影枚数は多くないものの、重要度の高い写真にも一定の枚数が含まれており、中でも自宅・自室を対象とするものが最多であった。研究参加者にとってのこれら物品や自宅・自室の重要さが示されたといえる。

3.4 人物写真に表現される内容

重要度上位の自叙写真の分析において、他者を含む人物写真では撮影対象（e.g. 友人、親）の多少や撮影されやすい構図（e.g. 自分を含むか否か）があることが示唆された。この結果を受けて、第3章第4節では、人物写真の対象や構図に着目して研究参加者が記述した表現内容（写真で表そうとしたこと）を調べ、対象人物—表現様式（構図）—表現内容の関係について検討する。これによって、他者を含む人物写真による表現様式とその写真に対する意味づけとの関連が明らかになることが期待される。

方法

自叙写真の撮影・研究参加者・実施期間・有効資料

自叙写真の撮影の手続きや研究参加者、実施期間、有効資料は第3章第1節と同様である。ここでは研究参加者自身が“最も自分を表す写真、これがないと自分を表すとは言えない”と判断して重要度1位をつけた156枚の中から、人物を被写体とした76枚を分析の対象とした。

結果と考察

3.4.1 自分を単独で写した自叙写真の表現内容

重要度 1 位の自叙写真の中で、自分（研究参加者）を単独で撮った写真は 21 枚であった。表現内容をもとに分類した結果を表 3-4-1 に示す。

表 3-4-1. 自分のみを写した写真の表現内容にもとづく分類

分類カテゴリー	被写体の記述例	表現内容の記述例	度数
①-a 自分の身体 (全身や半身)	私	私.	4
	自分	自分自身そのもの.	
①-b 自分の身体 (身体の一部)	自分の顔	自分を表すために大切なもの.	3
	自分の手	写真も撮れるし文字も書けるし、何でもできる. 足と同様、自分そのものを表現できると思った.	
①-c 自分の身体 (特徴的部分)	自分	髪型を撮ろうとした。チャームポイントとしてショートカット.	2
	後姿	自分の後姿の大きさ、なんて肩幅が広いんだろうって.	
②自然・素の自分	洗濯物を入れて いる自分	家の中で自分を撮りたかった。自然で家での自 分を表そうとした.	3
	自分(素)	寝起きで眠くて仕方のない自分、何にも飾って いない。何も考えていない。まさに無.	
	休みの日の自分	休日にスッピンで友人の家でくつろぐ私.	
③日常の自分	レジをしているところ	バイト先ではほとんどレジ打ちをしている.	3
	朝のメイク中	これがないと外にでられない.	
④非日常の自分	夏休み中の自分	耳の鼓膜の手術をするのに生まれて初めて髪 をバリカンで刈られた。これも自分.	2
	自分の浴衣姿	久しぶりに浴衣を着たので自分を表すのに最適だと思った.	
⑤過去を踏まえた 今の自分	クリーム餡蜜を食べる私	高校時代からの行きつけの餡蜜屋さん。いつも バナラアイススクリームの餡蜜を頼む。今でもよく いくくらいに私にとっては最高のお店.	4
	子ヤギに餌をあげる私	動物が大好きでこういう環境で育ちました.	
	私と色紙	私は高校の時に演劇部で人生が変わる 3 年間 を過ごした。今の私の土台になっている出来事 であった。この色紙は後輩からもらったもので大 切なものである.	

自分を単独で写すという構図の自叙写真では、表現内容に①から⑤の 5 種類がみられた。表 3-4-1 に示すとおり、表現内容で主となっているのは、①自分の身体、②飾らない・通常は他者に見せない・他者を意識しない私的な自分の姿や行動、③日常的に繰り返される行動、④非日常の自分の姿や行動、⑤過去を踏まえた今の自分、の 5 つであった。

3.4.2 被写体に他者を含む自叙写真の表現内容

他者のみを単独または複数で撮るという構図の自叙写真 32 枚(表 3-4-2)と、自分と他者とをともに撮るという構図の自叙写真 23 枚(表 3-4-3)について表現内容にもとづく分類を行った。

これらの自叙写真において被写体となった人物は、友人・恋人・肉親（親、きょうだい、祖母、家族等）であった。表 3-4-2 と表 3-4-3 の表現内容の記述例にも示したとおり、他者が自分にとってどのような存在か、自分と他者とがどのような関係にあるのか、他者に対してどのような感情を抱いているかが主たる表現内容であった。これら表現内容を反映する分類カテゴリーとして、①他者の存在の重要さ、②自分と他者との関係性、③他者に対する感情、④自分に関する記述、の 4 つを設定した。

表 3-4-2. 他者のみを写した写真の表現内容にもとづく分類

分類カテゴリー	対象	被写体の記述例	表現内容の記述例	度数
①他者の存在の重要さ	母親	母	この世でたった一人の母。常に愛し、助け、心配してくれる母の姿。	5
		母の後姿	表そうとしたものは、母親の存在の大きさ。母がいなければ私はいないし、私が自分自身について考えるときに欠かせない存在。	
		母親	母親があつてこそ今の自分が存在する。人生に影響を与え人。	
	父親	父と店内	私の生活の源となっている場所です。毎日の生活を支えてくれている感謝の心でいっぱい場所です。	1
	両親	両親	私が今ここにいること。	6
		私の両親	両親なくして私はいない、との思い。	
		父と母	私はこの 2 人のおかげでこの世に生まれきた。大切な両親。私の原点。	
		父と母	私の顔や性格のもととなる両親を表した。	
	家族	家族	私が生まれてきてから最も長く暮らしていたのが家族。私の生活態度はほとんど家族に影響されていると思うので。	4
		おばあちゃん	両親が共働きだったので、小さい頃からおばあちゃんっ子でした。私の中でとても大きな存在。	
恋人	彼氏	今の自分にとって一番の大切な人。	1	
友人	友人	友達をぬきに私の大学生活は語れません！皆とは本当に沢山の思い出があります。	1	
②自分と他者との関係性	母親	母	家族。友達みたいに仲良しの母と家族の一員の犬。	2
		父親	父と飼っている犬	
		私の父	父を撮ることによって私は娘だということを表した。	2
	家族	母と私の姉 2 人	一番ほっとするひと時を表したかった。	1
	恋人	彼氏	普段の自分。	2
		彼氏とその部屋	友達とも家族ともその他の人とも違った態度が出る唯一の場所。	
	友人	友達	大学での私の居場所。	1
③他者に対する感情	家族	弟	私は兄と弟がいる。小さい頃から一緒に育っているし、今、一緒に住んでいるから。家族が好きだし、大切にしたいので。	3
		妹	下の妹。友達みたいに何でも話せる。目元や雰囲気似ているといわれる。大好きな妹。	
	友人	友人 A	いつも一緒にいる A。A がおるから一人暮らしも楽しい。いつまでも友達でいたい人。	3
		友人	何気ないときも皆と一緒に居られる一瞬一瞬を大切にしようと思う。	

表 3-4-3. 自分と他者をともに写した写真の表現内容にもとづく分類

分類カテゴリー	対象	被写体の記述例	表現内容の記述例	度数	
① 他者の存在の重要性	父親	父と私	私の大切な人。父の大切な娘。	1	
	家族	バーベキューパーティ	自分を支えてくれる家族と親戚と。	1	
		恋人	彼氏と私	彼氏とは高校生の頃から付き合っていて、今でもとても良い関係が続いています。彼は私のことを誰よりも理解し、多忙な私を応援し励ましてくれる素晴らしい人です。	2
	彼氏と私	彼氏は私にとって、とても、とても大切な人だから撮りたいと思った。彼氏といると人間的にも成長できたところがあると思ったから。			
② 自分と他者との関係性	母親	自分と母	母との仲の良さ。	1	
	両親	ミッキーの部屋で母と父と私とミッキーと	私の大切な両親と私が一番笑顔になれる瞬間を表そうとした。	1	
		家族	私生活	お風呂を出た後、妹とパジャマでしゃべる習慣。妹と私は一番仲が良くて2人ともベッドでゴロゴロすることが好きなので表現したいと思いました。	2
	友人	妹と私	クラブの仲間	ジョイントコンサート後の打ち上げ。学年関係なく皆が一つになったと思う。	9
		バイト友達！ピザパーティ！	バイトの子とはとても仲良し。		
		二人	おかきを食べているところ。日本人。		
		友達と自分	20歳になった夜、友達が来てくれたのでケーキと一緒に撮って見た。		
		友人と私	休憩中の人と一緒に写真を撮った。みんな仲良しです。		
③ 他者に対する感情	家族と恋人	父と親戚、彼氏との集合写真	家族はもちろん両親は大好きなので、両親はたくさん愛情を注いで育ててくれたので、今の私は両親、祖母のおかげだから。	2	
	④ 自分に関する記述	家族	私と弟	弟がいて幸せである自分を表そうとした。一緒にいると私の居場所や私が生きる意味が分かるような気がするので無意識に私が誰であるかを理解しているような気がする。	1
友人		外国の博物館での友人と私	私は外国に行ったことで新たな自分を発見できた。例えば積極的さや行動など。外国で頑張った私。	3	
		友達とくーと私	今の私。		

通常、ある他者を重要な存在として認識していれば、その人物との関係を緊密なものとするであろうし、その人物に対しては様々な感情を抱くであろう。従って、ここでの分類カテゴリーは相互に関連していると考えられる。表現内容によっては複数の分類カテゴリーに跨るものもあるが、ここでは研究参加者が記述した表現内容（写真によって表そうとしたこと）の中で、どのような内容により力点を置いて記述しているかを重視して分類した。

表 3-4-2 に示した他者を単独あるいは複数で撮るという構図の自叙写真では、表現内容は“他者の存在の重要性（分類カテゴリー①）”の記述が多く、被写体

としては友人や恋人よりも肉親（親、家族、きょうだい、祖父母）が多く選択されていた（友人5枚、恋人3枚、肉親24枚）。一方、表3・4・3に示した自分と他者をともに撮るという構図の自叙写真では、表現内容は“自分と他者との関係性（分類カテゴリー②）”の記述が多く、被写体には友人が肉親や恋人よりも多く選択されていた（友人12枚、恋人2枚、家族と恋人2枚、肉親7枚）。

以上のように、他者を含む自叙写真についての結果は、被写体となる人物が研究参加者にどのように捉えられているかによって写真の構図が異なることを示唆するものである。他者が自分にとっていかなる意味を持つかに焦点を当てて表現する場合（e.g. 他者の存在の重要性を表現する場合）には、他者についての客体視が強まって自分（回答者）から切り離される形で対象化され、結果として他者のみを被写体とする写真が撮影されやすく、一方、“仲が良い”“経験を共有する”といった自分（撮影者）と他者との親密な関係を表現することに焦点がある場合（e.g. 自分と他者との関係性を表現する場合）には、他者とともに自分（回答者）が写真に写り込むという構図が選ばれると考えられる。

他者存在の重要さのカテゴリー（分類カテゴリー①）には親、特に母親が多く含まれ、自分と他者との関係性のカテゴリー（分類カテゴリー②）に友人が多く含まれていた。重要度1位を付与された人物写真の分類にもとづく結果という限定はあるものの、女子大学生の自己や自己と関連する世界における親、特に母親や友人の重要性が示されたといえる。

3.5 物写真と場所写真に表現される内容

自叙写真の被写体のうち、人物はこれまで多くの研究で取り上げられてきている。撮影された人物の人数の他にも、感情表出や接触の有無、研究参加者との世代差など、細かく分類カテゴリーが設定される場合もある（資料2参照）。これに対して、米国での先行研究においても物や場所の写真に関するカテゴリーは多くはないし、同じカテゴリー名であっても研究間で内容が異なっているものも散見され、利用しにくいものとなっている。日本では、安川（2008）が被写体となった物の意味を分類するために8つのカテゴリーを設定しているが、

現時点では十分な成果が得られていないと言う²⁵。人物に比べて物や場所、特に物は種類が多くその意味づけも多様であるため、分類カテゴリーが設定しにくい。しかしながら本研究を含め、日本での自叙写真の研究においては被写体として物が最も多く選択されることが示されている。また、先述のように自分を表す上で重要と判断された自叙写真にも、物や場所が被写体として相当数含まれていた。従って、自叙写真の撮影にあたって物や場所がどのように意味づけられ、自己に関連したものとして選択されるのかを検討してゆく必要がある。

物や場所の意味については、Csikszentmihalyi & Rochberg-Halton (1981 市川・川浦訳 2009) による家の中で最も大切にしている物や特別な場所についての研究や、Belk (1988) による extended self (人が自己の一部と見なすような外的対象物) についての研究があり、主に文化人類学やマーケティングの分野で研究が進められてきている。また、日本でも Belk の研究を踏まえ、物の意味や価値づけについての調査や研究が行われている (e.g. 博報堂生活総合研究所, 2003; 池内・藤原・土肥, 2000; 池内・藤原, 2004)。これらの研究を参照しつつ、本節では物と場所を被写体とした自叙写真のうち、重要度 1 位に含まれるものを取り上げて表現内容にもとづく分類を試みる。

方法

自叙写真の撮影・研究参加者・実施期間・有効資料

自叙写真の撮影等の手続きは第 3 章第 1 節で述べたとおりである。ここでは研究参加者自身が“最も自分を表す写真、これがないと自分を表すとは言えない”と判断して重要度 1 位をつけた 156 枚の中から、物を被写体とした 66 枚と場所を被写体とした 14 枚を分析の対象とした。

結果と考察

3.5.1 物を被写体とした自叙写真の表現内容

分類カテゴリーの設定にあたって、研究参加者の自叙写真の表現内容を通覧し、先行研究や TST の分類カテゴリーも参照しつつ、自叙写真に表現されやす

²⁵ 安川 (2008) による物の意味分類のカテゴリーは、“過去・記憶” “習慣・毎日” “活動・道具” “趣味・作品” “所属・関係” “恋愛・親密” “好き・嫌い” “その他” の 8 つである。

い内容や自己関連世界を理解する上で重要と考えられる分類の視点を探索した。

表 3-5-1. 物写真の表現内容にもとづく分類

分類カテゴリー			被写体	表現内容の記述例	度数
カテゴリー一名	①人と の関係	②個人 的価値 ③時間			
好み- 活動			パレーシューズ とトウシューズ	今、一番好きなこと。	
			私とパチンコ	趣味の一つであるパチンコを撮りました。	
好み- 対象	憧れの人		歌手 A 君の団扇 とペンライト	A 君の熱心なファンだということを表そうとした。	
			緑・紫・ピンクの T シャツ	緑・紫・ピンクが好きで、これらの色のものを身に つけると元気になれる	11
擬人化	(ぬいぐるみ)	自分	ドナルドくんたち	大好きなドナルドを撮った。ドナルド=私だから。	
	(犬)	家族	愛犬	私の良き理解者であり、家族。	
	(楽器)	自分	フルート	高校1年からはじめたフルートはとても柔らかい 音色でいつも癒される。暇な時はいつも吹いている。 フルートは私の一部である。	10
			留学時 3歳から	留学時の写真と ファイル 私の今までの人生の中で最高の思い出。 3歳から始め、お世話になったり苦しめられたりし たピアノとの思い出。	
思い出		宝物	柔道衣	なかなか表に引き出すことができなかった「本当 の自分」を引き出すきっかけになったもの。心から 笑うことのできる人生を与えてくれた大切な宝。	9
贈り物	憧れの人	宝物・ 心	ライブでもらった ピック	好きなメンバーにもらったギターのパック。「来てく れてありがとう」と言って手渡され、すごく嬉しかった。 私の宝物、私の心。	
	祖母・ 母	お守り 大事な日	祖母と母にもら ったペンダント	私の心のお守りなので、大事な日(テストなど)に 身につけます。	8
繋がり- 人	恋人		2台の携帯電話	私と彼の携帯、電話はもちろんメールもするの で、絶対携帯しなければならないもの。	
	きょうだい	頼り	小さい頃の写真	双子である。小さい頃はいつも一緒に遊んでお り、頼りになる存在である。	
繋がり- 所属	友人	慰め 励まし	愛 PC	チャット大好きな自分。相手は OL さん。慰めてく れたり励ましてくれる人、PC 依存な自分が怖い。	5
	(家族)		表札	B 家の一員であるということ。	
	(民族)		日の丸	私は日本人である。	3
性格			イノシシの人形	一度思ったら突き進み考え直すことを知らず何か に当たるまで気が付かない私。	
			花瓶とぬいぐる み	自分の性格をあらわす。しっかりしてそうだけど実 は天然ボケである。	5
理想の 体現	憧れの人	目標	歌手 C (雑誌)	私の目標。彼女のようにオーラのある女性にな り、彼女のように自分の華を大きく咲かせたい。	
		夢	社会福祉士にな るための教本達	社会福祉士になることが夢です。道は厳しいし辛 いことも多いですが、今は頑張るしかありません。	4
技能		人生の 一部・ 可能性	幼稚園 時から	幼稚園のときから習っている書道。私の人生の一 部。もう一つの道だと思っている。	
			自動車と免許証	自動車を運転できる人だということを表した。	3
实用			自転車	自分の行動範囲。今無くなると非常に困るもの。	
			紙パック	栄養源。	2
習慣		毎日	自分の学習机	自分の部屋に入ってすぐの所に配置されており、 廊下側からもよく見えるため自分なりにある程度 は片付けるように気遣っている。毎日使っている。	1

人物と同様、物も複数の分類カテゴリーに跨るものもあるが、ここでも研究参加者の記述の中で何に力点が置かれているかを重視して分類を行った。その際、①物がどのような人物との関わりで記述されているか、②その物に対する研究参加者の個人的な価値づけ、③時間についての表現、の3つの視点を設定した。この視点を含むカテゴリー分類結果を表3-5-1に示す。分類の結果、カテゴリーに含まれる自叙写真の枚数の多いものから5位までを見ると、“好み（活動・対象）”“擬人化”“思い出”“贈り物”“繋がり（人・所属）”“性格”となった。

“好み（活動・対象）”は枚数が最も多く、スポーツ等の好きな活動と歌手やスポーツ選手のファンであることや、服装等の好みといった好きな対象に言及しているものが含まれる。米国での先行研究で活動と称されているカテゴリーの内容と重なるものと考えられる。

“擬人化”は、Csikszentmihalyi & Rochberg-Halton (1981 市川・川浦訳2009)の分類カテゴリーを参考にしたもので、物が人間の性質を持っている場合に分類した。物が人の代替としての役割を果たすことが、例えば臨床実践や発達の見地から物の意味を捉える際に重要であると考え、分類カテゴリーとして設定した。ここにはぬいぐるみ、ペット、楽器といった物の他に、樹や小物によって自己のイメージを表現した記述が含まれた。

“思い出”と“贈り物”は、①人との関係、②物に対する個人的な価値づけ、③時間についての表現という観点を併せると、物から個人史の一端を捉えることが期待できる分類カテゴリーである。表3-5-1には記述の一部を掲載しているが、“思い出”は財産・支えといった価値づけがなされており、具体的な物品としてはアルバムや写真が多く含まれていた。“贈り物”には、宝物・お守り・唯一性・継承と命名し得るような個人的な価値づけに関する記述が見出され、具体的な物品としてアクセサリや美容器具、楽器等が含まれていた。

“繋がり（人・所属）”は、物が特定の人物や所属と関連づけて記されている場合で、携帯電話や写真、国旗や表札が含まれた。

“性格”は物によって自分の性格を表現した場合であり、物のもつ本来の性質あるいは一般に流通しているような意味づけを援用したり、行動の具体例を物で指し示すことで自分の性格を表現するものである。例えば、後述の図6-2-3

のような事例はその代表的なものである。

物によって表現される内容は、研究参加者の好みや趣味に関するものが最多であり、好み（活動・対象）カテゴリーは Ziller らのオリエンテーションの定義にも良く沿うものと思われる。次いで、擬人化は特定の物に対する研究参加者の愛着を知る手がかりとなるだろう。また、思い出や贈り物のカテゴリーに含まれる物は、個人固有のエピソードが喚起されやすい物と考えられる。繋がり（人・所属）のカテゴリーは、他者や集団との関係性を物によって表現したものと考えられる。

ここでの分類は重要度 1 位の自叙写真のみにもとづくものであり、探索的なものであるが、自叙写真を被写体のみならずその意味から考える試みである。また、自叙写真の対象（物）と意味を人との関係・個人的な価値・時間という面を含めて捉えることを試みた。Csikszentmihalyi & Rochberg-Halton (1981 市川・川浦訳 2009) による家の中にある大切な物の意味に関する研究では、物の意味を子・親・祖父母の世代で比較すると、例えば、実用や解放感カテゴリーに含まれる回答は若年世代で、記念や回想カテゴリーに含まれる回答は祖父母や親世代で回答比率が高いという結果が報告されている。ここでの分類カテゴリーについても、今後、さらにデータを追加することで洗練され、利用可能性が高まっていくものとする。

3.5.2 場所を被写体とした自叙写真の表現内容

続いて、場所を被写体とした自叙写真の意味内容について検討する。物と同様に、記録用紙に記された表現内容にもとづいて分類カテゴリーを設定した(表 3-5-2)。分類の結果、“居場所”や“解放感”に含まれる回答の度数が高かった。

居場所は生活の場であるとともに、心理的な居場所とも考えられる場所であり、主に自宅や自室が挙げられている。解放感とは山や庭といった緑の多い風景を撮影した自叙写真であった。これらは研究参加者に安心感や和む・癒される感覚を与える場所と思われる。場所写真については分類の対象となった重要度 1 位の自叙写真は 14 枚と少ないが、自分の居場所や心安らぐ場所が多く含まれることが示され、これらは場所が表現する意味内容の重要な側面と考えられる。

表 3-5-2. 場所写真の表現内容にもとづく分類

分類カテ	被写体	表現内容の記述例	度数
ゴリー	自分の家	私の安心できる場所.	
	実家	帰る場所. 私の全ての始まり. ルーツ?	
	自分の部屋	自分は寮に住んでいるということ.	
居場所	一人で住んでいるアパート	どのような所で生活をしているのかを写真にすれば生活の一部が見えるのではないかと思った.	4
	風景	現実逃避.	
解放感	Aヶ崎	田舎は最高. 心が和む. やっぱのびのび大らかな人間でいなきゃ.	
	実家の庭	一番馴染み深い風景. 生まれた時からずっと変わらない. この庭は一番, 開放的になれる場所.	3
好み-対象	空	空が好きの人だから.	
	スーパーのお菓子コーナー	私の大好きなお菓子. いつもここにきて買い込みます.	2
繋がり-所属	E市 YMCA 本館	自分が属している団体.	
	大学	自分がF大学の学生であること.	2
性格	海	ダイビングが好き. 大体においてふわふわと地に足が着かない様な性格である.	
	空	束縛されることが嫌いで, 自由が好きな自分を表そうとした.	2
理想の体現	竹やぶ(D 神社)	妹と二人でB山を観光した時に撮りました. C市で生まれ育ち, 共にD神社で夢の実現を祈った私達と同じ場所で生まれ, 空に向かって伸びてゆく竹の姿を重ねました.	1

3.6 第3章まとめ

第1節の被写体別に撮影枚数を見た結果からは、研究参加者の2割程度が人物や場所を全く写していなかった。一方、物を全く写さない者は5名(3.76%)と僅かであった。被写体の出現比率からみると、撮影した写真のうち場所の写真が半数以上を占める者は1割弱と少なく、人物が半数以上を占める者は2割程度、物が半数以上を占める者は6割程度いることが示された。このような物による自己表現の多さは、日本での大学生を対象とした先行研究の結果を踏襲するものであり、本研究参加者を含め日本の大学生の自叙写真の特徴と考えられる。表現の際に具体的な対象が必要となる自叙写真法という手法は、自己と物との関係を研究するため活用できると考えられるが、本研究や先行研究で示されたような多くの物で構成される自己関連世界を理解するためには、撮影枚数に加えて物への意味づけを考えてゆくことが必要となる。

人物写真を1枚以上撮影した105名について、人物の対象別に一人当たりの撮影枚数を調べた。この結果、自分(研究参加者)単独や他者単独の写真は自他をともに写した写真よりも撮影されやすいこと、自分単独の写真は7枚、他者単独および自他を被写体とした写真は5~6枚までの範囲に分布し、これら

を超えて撮影する者は稀であることが示された。また、対象となった人物の組み合わせをみると、自他（自分と他者）のみを写している者は5名（4.76%）と少ないが、それ以外の人物の組み合わせは、被写体としてほぼ一様に選択されていた。対象人物の詳細をみると、自分のみを撮影した者が最も多いが友人や親も被写体として多く選ばれていた。なお、先行研究と比べて本研究では肉親を写した自叙写真の比率が高かったが、これは研究参加者の性別、生活環境、実施手続きの違いによる影響を考える必要がある。

物写真を1枚以上撮影した128名について、下位カテゴリー別に一人当たりの撮影枚数を調べた。その結果、日用品・音楽・書籍・動物・服飾の撮影枚数が多かった。このうち、動物を除く4カテゴリーは女子大学生を対象とした先行研究でも同様に見出されていることから、これらの物品が選択されやすいことは青年・女性・大学生という対象者の特徴を示すものと考えられる。場所写真についても1枚以上撮影した103名を対象に、下位カテゴリー別の一人当たり撮影枚数を調べた。その結果、風景・建物・部屋の順で撮影枚数が多く、空や山などの自然の景観や自宅や校舎といった建物が対象となっていた。

第2節では分類に使用されたカテゴリー数について検討した。カテゴリー数は7あるいは8が多く、14から1までの範囲を示した。撮影枚数と使用カテゴリー数との間には有意な正相関が見られた。これより、本研究での手続きのように撮影枚数を制限しない場合には、撮影枚数の多い者は同じカテゴリーに含まれる対象を繰り返し撮影するよりは、異なるカテゴリーに含まれる対象を選んで撮影すると言える。

第3節では、研究参加者が重要と見なす自叙写真にはどのような被写体を選択されているのかを調べるため、研究参加者自身が“最も自分を表す写真、これがないと自分を表すとは言えない”とする写真から順に重要度を付与した結果について検討した。この結果、重要度の上位の自叙写真は下位の写真と比較して人物写真の占める割合が高く、特に重要度1位の写真に人物写真が多く含まれていた。また、重要度上位の人物写真の中では自分を単独で写した写真の撮影枚数が最多であるが、4位以下と比較すると重要度上位の人物写真には他者単独の写真が多く、特に親を被写体とした写真が多かった。人物、特に自分自身や親はその他の対象とは異なる重みづけをもって捉えられていると言える。

重要度 1 位の写真では人物を被写体とした写真が多いものの、2 位以降では人物よりもむしろ物の撮影枚数が多かった。物を被写体とした写真では、日用品・音楽・書籍・動物・服飾の撮影枚数が多く、これらは第 1 節での撮影枚数の多い被写体とも共通していることから、重要と評価された物は一人当たりの撮影枚数が多いことが示された。場所を被写体とした写真については、重要度上位の写真において撮影枚数が多かったのは順に建物・風景・部屋であり、特に自宅に関連する場所が多く含まれていたことから、研究参加者にとっての自宅の重要度の高さが示唆された。重要度を考慮することで回答者により近い視点から、彼らの自己関連世界を理解できる可能性が示された。

また第 3 節では、重要度の評定と自叙写真に対する研究参加者の評価との関係についても調べた。その結果、研究参加者自身が“最も自分を表す写真、これがないと自分を表すとは言えない”と判断して重要度上位に位置づけた写真は、重要度下位の写真と比較して被写体は想起しやすく、写真の出来ばえは良く、より自分を表現していると判断されていた。中でも自分を表現する程度の評定は重要度の判断とよく対応していた。これより重要度上位の自叙写真は研究参加者にとって自分との関連で被写体を想起しやすく、ポジティブな評価がなされ、しかも自分をよく表現していると捉えられていることが分かった。

第 4 節では、重要度 1 位に位置づけられた自叙写真のうち人物を被写体とした写真 76 枚を対象として、表現内容（写真によって表そうとしたこと）にもとづく分類を行った。自分を単独で写した写真、他者のみを単独あるいは複数で写した写真、自分と他者とをともに写した写真の 3 つに分け、人物の構図と表現内容との関係を調べた。自分を単独で撮影するという構図の自叙写真では、表現内容について 5 つの分類（e.g. 自分の身体、自然・素の自分など）が得られた。被写体に他者を含む人物写真は、他者のみを単独あるいは複数で撮った写真と自分と他者とをともに写した写真に分けて表現内容を分類した。この結果、他者のみを被写体とした自叙写真では親（特に母親）の写真が多く、その表現内容は対象となった人物が自分にとっていかに重要な存在であるかという内容の記述が多かった。一方、自分と他者とをともに写した写真では、友人が肉親よりも多く撮影されており、その表現内容は“仲良し”“皆が一つになれた”など他者との親密さや一体感について言及しているものが多かった。これより、

被写体となる人物が研究参加者にどのように意味づけられているかによって、写真の構図が異なる可能性が示された。

第 5 節では、自叙写真の被写体に多くの物が含まれるという結果を受けて、重要度 1 位の自叙写真のうち、物と場所に分類されたものを対象に、表現内容の記述をもとに物や場所の意味を探索した。分類を実施した結果、物写真については、①物と人との関係の記述・②物に対する個人的価値づけ・③時間についての表現、の 3 つの視点を含めて分類を行った。結果、“好み”“擬人化”“思い出”“贈り物”“繋がり”“性格”といったカテゴリーに分類される自叙写真が多く、研究参加者にとって重要な物はこれらの意味を表現していることが示唆された。場所写真については、対象となった自叙写真が 14 枚と少ないものの、場所が“居場所”や“解放感”といった意味を表現している可能性が示された。

以上、第 3 章において女子大学生が撮影した自叙写真に見られる一般的特徴について述べた。その際、従来からの被写体の分類に加えて重要度や自叙写真の表現内容という観点を導入することで、幾つかの新たな知見が得られ、自叙写真に表現された自己関連世界をもとに自己や他者を理解するための資料を提供できたと考える。

第4章 情緒的意味からみた自己関連世界

4.1 情緒的意味にもとづく自叙写真の分類

先述の人物写真等の分類で示したように、自叙写真の記録用紙の“写真で何を表そうとしたか”という問いに対する回答は、研究参加者自身の自叙写真への意味づけを探る手がかりとなるものである。表現内容の記述は、通常は自叙写真によって何を表現したかを説明するものであるが、“好き”“落ち着く”などの感情が併せて記載されることも多い。

自叙写真が表現する内容を我々は論理的・理性的に説明することもできれば、直感的・感情的に表現することもできる。第4章第1節では、自叙写真に対する研究参加者の情緒的意味づけに着目し、そこから研究参加者の自己関連世界について検討する。具体的には、研究参加者のセマンティック・ディファレンシャル法（以下SD法とする）による評定をもとに自叙写真を分類する。研究者の判断ではなく、研究参加者の判断にもとづいて自叙写真の情緒的意味を調べ、その結果から自己関連世界を捉える試みである。

方法

自叙写真の撮影・研究参加者・実施期間・有効資料

自叙写真の撮影の手続きは第3章第1節と同様である。研究参加者は女子大学生30名で、このうち“研究への取り組み態度”を問う質問に“非常に不真面目”と評定した3名を除いた27名（平均年齢20.11歳）の資料を有効とした²⁶。2001年7月～8月と2001年12月～1月に自叙写真の撮影が行われ、421枚の自叙写真が収集された。

自叙写真についてのインタビュー

自叙写真の撮影後2週間以内に研究参加者には筆者が個別にインタビューを行い、このインタビューの一環として各自が撮影した自叙写真をコンセプトとするSD法の評定を実施した。インタビューでは個々の自叙写真について連想を含めた自由な発話を求め、写真の重要度を確認し、続いてSD法による評定を行った。インタビューの開始にあたって、研究参加者には研究目的とインタ

²⁶ 27名の平均撮影枚数は15.59枚（SD=4.67, R=32-12）、撮影にかかった日数の平均は6.93日（SD=1.66, R=12-3）であった。

ビューイの権利やプライバシーの保護について説明した。また、インタビュー内容の録音と研究結果の公開についての承諾を得た上でインタビュー内容の録音を行った。インタビューでは椅子をL字に設置して圧迫感を与えないように工夫する等、リラックスできる状況設定を心がけた。

インタビューではまず、B6判の用紙に自叙写真を貼ったカードを提示し、研究参加者に撮影順序の記入を求めた。その後、“それではこれから「私をテーマにした小写真集」の個々の写真についてインタビューを始めます。この写真に関して思いつくこと、頭に浮かんできたことを自由に話してください。1枚につき、だいたい1分くらいを目安にしていますが、それより短くても長くても別に構いません”と教示して、自叙写真を1枚ずつランダムに提示しながら自叙写真についての自由な連想と発話を求めた。

研究参加者が全ての写真について語り終わった後、自叙写真を卓上に提示し、“プラス・マイナスの方向に関わらず、あなたが重要と感じられる順に写真を並べ替えてください”と教示して自叙写真の重要度を尋ね、研究者は順位をメモに記録した。その後、再度、写真をシャッフルして研究参加者のペースでSD法による自叙写真の評定を実施した。評定では、“それぞれの写真について、例にならって12対の語の当てはまる目盛に○をつけて下さい。あまり長く考えすぎず、直感的に思ったままを答えて下さい。記入もれのないように上から順に答えて下さい”と教示して、12の形容詞対による7段階での評定を求めた²⁷。

最後に、費用の清算と謝意を伝え、結果の報告と資料の返却方法について説明してインタビューを終了した。インタビュー時間の平均は38.44分(SD=12.97, R=90-18)であった。なお、SD法による写真の評定²⁸では、大山・田中・芳賀(1963)から形容詞12対(評価・活動・力量の情緒的意味をもつとされる語から各4語ずつ)を選び、語の配列を変えた5種類の評定用紙を作成し、使用した。

²⁷ 「どちらともいえない」を中心として「やや」「かなり」「非常に」の7段階評定。

²⁸ 使用した形容詞対は、大山・田中・芳賀(1963)による評価次元(美しい-みにくい、良い-悪い、快な-不快な、健康な-不健康な)、活動次元(動いている-止まっている、はやい-おそい、さわがしい-静かな、熱い-冷たい)、力量次元(深い-浅い、やわらかい-かたい、強い-弱い、軽い-重い)の12対であった。

結果と考察

4.1.1 SD法による自叙写真の評定

SD法による評定の記述統計量を表4-1-1に示した。評定平均値のうち、評定尺度の中性点4からの隔たりの大きい形容詞対は、「良い-悪い」の5.32、「快な-不快な」の5.32、「健康な-不健康な」の4.95であった。

表4-1-1. SD法による評定値の平均と標準偏差

項目	平均値	標準偏差
やわらかい-かたい	4.65	1.63
はやい-おそい	4.01	1.38
美しい-みにくい	4.67	1.37
強い-弱い	4.67	1.36
さわがしい-静かな	4.23	1.88
良い-悪い	5.32	1.39
軽い-重い	4.17	1.48
動いている-止まっている	4.43	1.94
快な-不快な	5.32	1.30
深い-浅い	4.79	1.49
熱い-冷たい	4.66	1.40
健康な-不健康な	4.95	1.33

注)平均値の得点が高いほど、形容詞対の左側に示した特徴が強いことを示す。

次に、今回の自叙写真に対する評価が、通常、SD法において想定される評価・活動・力量の3因子構造となることを確認し、続く分析ではこれら3因子に
もとづいて各自叙写真の分析を進めるため、Amosを用いて確証的因子分析を行った。評価・活動・力量の3つの潜在因子からそれぞれ

れ該当する4項目が影響を受け、3因子間に共分散を仮定するモデルを基本モデルとして分析を行ったところ、 χ^2 値は437.34 ($df=51$, $p<.01$)となり、特に潜在因子の力量因子から観測変数である「深い-浅い」「強い-弱い」「軽い-重い」「やわらかい-かたい」への標準化係数の推定値が.208~.343と低かった。また、適合度指標はGFI=.848、AGFI=.768、RMSEA=.134、AIC=491.342でデータのモデルへの適合度は十分なものではなかった。この結果を踏まえ、3因子それぞれについて信頼性係数を算出したところ、力量因子4項目での信頼性係数は $\alpha=.456$ で評価因子($\alpha=.774$)や活動因子($\alpha=.651$)に比べて値が低く、項目間相関は「深い-浅い」「強い-弱い」の間($r=.355$)、および「軽い-重い」「やわらかい-かたい」の間($r=.413$)を除いて有意な相関は見られなかった。

そこで、力量の4項目を「深い-浅い」「強い-弱い」の2項目、「軽い-重い」「やわらかい-かたい」の2項目に分けた4因子モデルで、再度、確証的因子分析を行った。前者2項目に影響を与える潜在因子を力量因子、後者2項

目に影響を与える潜在因子を柔軟因子と命名して、先の基本モデルと同様に評価・活動・力量・柔軟の4つの潜在因子から該当項目が影響を受け、4因子間に共分散を仮定したモデルで分析を行い、その後、修正指標を参考にしながら理論的に許容できる範囲内での最小限の修正を実施した。修正後の最終モデルを図4-1-1に示す。最終モデルは当初のモデルから「力量」因子と「柔軟」因子間の共分散のパスを削除し、「評価」因子から「活動」項目の「熱い-冷たい」にパスを加える修正を行っている。最終モデルでの χ^2 値は260.170 ($df=48$, $p<.01$)ではあるものの、適合度指標はGFI=.902、AGFI=.840、RMSEA=.103、AIC=320.170となり、よりデータに適合したモデルへと改善されたことから、以下ではこの4因子モデルに沿って分析を進めることとした。

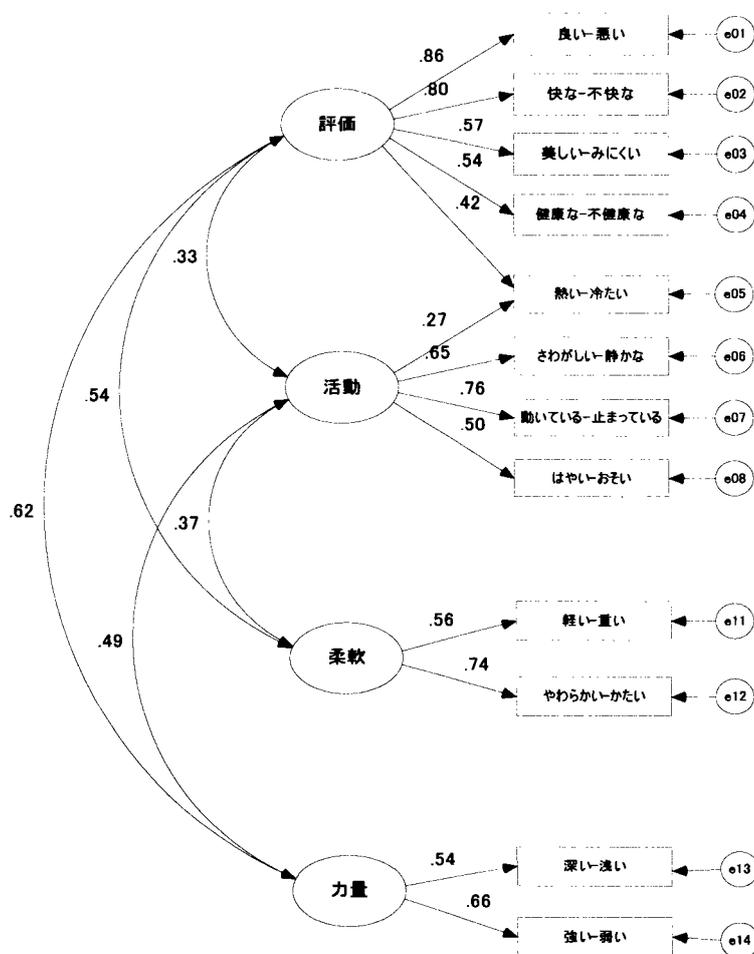


図 4-1-1. SD 法による自叙写真の評価の確証的因子分析による分析結果

4.1.2 情緒的意味にもとづく自叙写真の類型化

情緒的意味にもとづいて自叙写真を類型化するため、確証的因子分析で得られた4因子にもとづいて因子ごとに項目の評定値を合算して合計得点を算出した。その後、項目の合計得点を標準得点に変換した値を用いてWard法（平方ユークリッド距離）によるクラスター分析を行った。クラスターの連結状況を図4-1-2に示す。

クラスター間距離に着目すると、10.00以上では連結距離が大きくなっている。クラスター間距離が大きくなり過ぎるとクラスターの特徴を説明するための情報が少なくなるため、ここではクラスター間距離7.50を規準とした際に得られる5つのクラスターによって自叙写真を分類した。クラスター1～5に含まれる自叙写真の枚数は図4-1-2に示したように、それぞれ63枚、94枚、70枚、140枚、54枚となった。なお、クラスターの連結状況の詳細を資料6に、被写体と表現内容は資料7に掲載している。

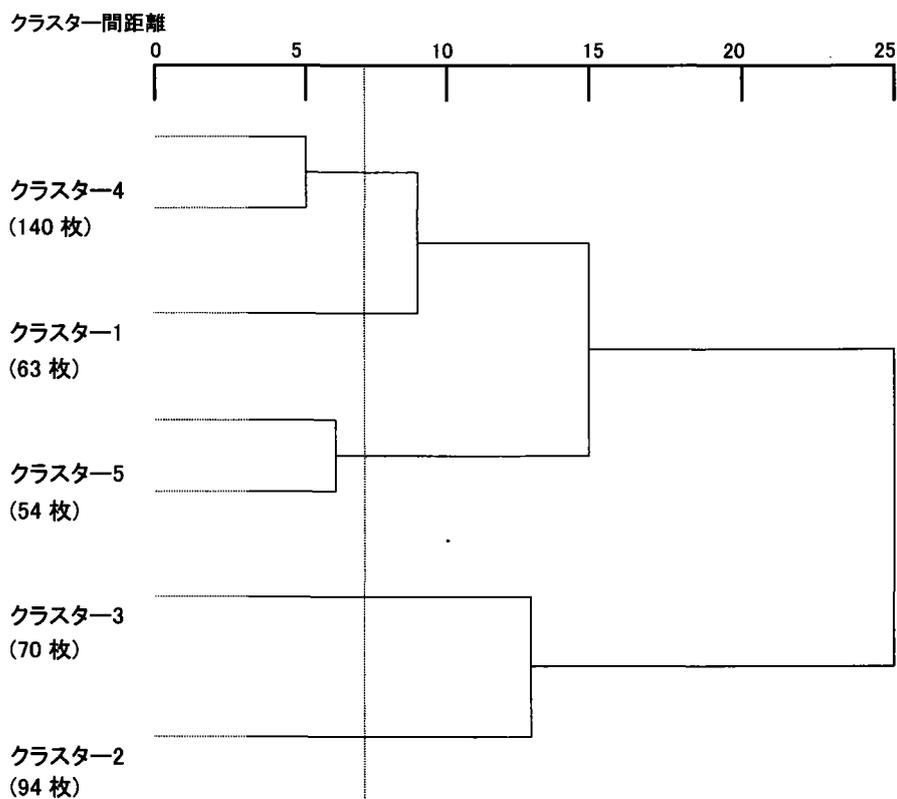


図4-1-2. クラスター分析結果(デンドログラム)

4.1.3 被写体からみた自叙写真の5類型の特徴

見出された5つのクラスターの特徴を読み取るため、4因子ごとの項目の評定合算値の標準得点についてクラスター別に平均値を求め、4因子ごとに一要因分散分析を行って比較した(図4-1-3, 表4-1-2)。この結果、4因子とも群(クラスター)の効果は有意であった(評価得点は $F_{(4, 416)}=70.95$, 活動得点は $F_{(4, 416)}=164.14$, 柔軟得点は $F_{(4, 416)}=172.81$, 力量得点は $F_{(4, 416)}=62.02$ 、すべて $p<.01$)。

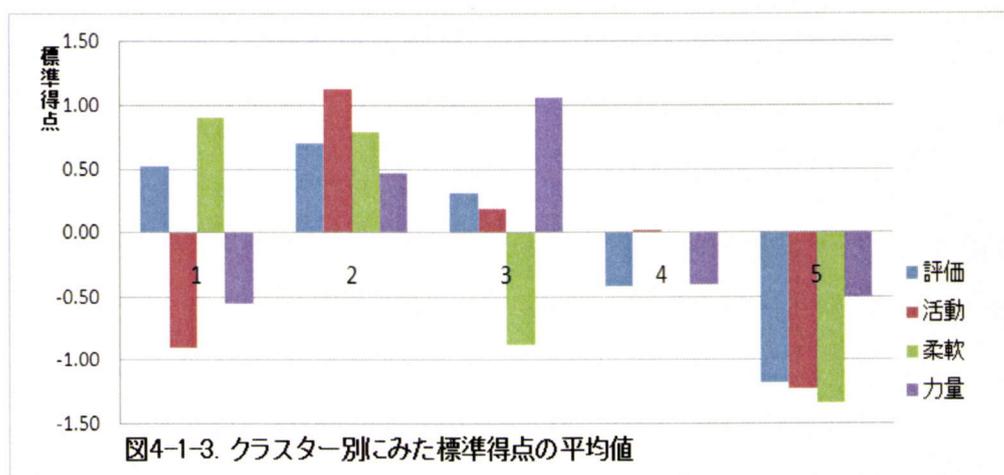


表 4-1-2. クラスター別にみた情緒的意味の標準得点の平均値と標準偏差

因子	クラスター					F値
	1 (63)	2 (94)	3 (70)	4 (140)	5 (54)	
評価	0.525 0.852	0.709 0.578	0.312 0.751	-0.414 0.854	-1.178 0.790	70.95**
活動	-0.901 0.657	1.139 0.506	0.190 0.805	0.020 0.556	-1.228 0.682	164.14**
柔軟	0.907 0.491	0.798 0.623	-0.879 0.708	0.011 0.583	-1.336 0.686	172.81**
力量	-0.552 0.956	0.473 0.860	1.066 0.540	-0.406 0.736	-0.509 0.892	62.02**

注 1) 上段は平均値、下段は標準偏差。**は $p<.01$ を表す。()内数字は枚数。

注 2) 多重比較の結果、評価はクラスターの 1-2, 1-3、活動はクラスターの 3-4、柔軟はクラスターの 1-2、力量はクラスターの 1-4, 1-5 の間では有意差はなく、それ以外のクラスター間では $p<.01$ で有意。

Tukey 法を用いた多重比較の結果、評価はクラスターの 1 と 2 および 1 と 3 の間で、活動はクラスターの 3 と 4 の間で、柔軟はクラスターの 1 と 2 の間で、

力量はクラスターの1と4および1と5の間では有意差はなく、それ以外のクラスター間では $p < .01$ で有意差が見られた。

また、各クラスターの特徴をより明らかにするため、クラスターを構成する自叙写真の被写体を調べ、人物・場所・物の3つのカテゴリーに分類して度数を比較した(表4-1-3)。4つのクラスターの被写体ごとの自叙写真の枚数を調べて χ^2 検定を行ったところ、枚数の偏りは有意であった($\chi^2(8)=40.69, p < .01$)。残差分析の結果、クラスター1で場所の枚数が多かった。また、クラスター2で人物の枚数が多く、場所や物の枚数が少なかった。クラスター3はクラスター2とは逆に人物の枚数が少なく、物の枚数が多かった。クラスター4とクラスター5については、被写体による枚数差は見られなかった。

表4-1-3. クラスター別にみた被写体の写真枚数と調整済み残差

被写体	クラスター					合計
	1	2	3	4	5	
人物	19 (-1.8)	59 (5.0)**	15 (-3.6)**	59 (0.4)	19 (-0.9)	171
場所	14 (2.4)*	6 (-2.1)*	7 (-0.8)	18 (0.0)	9 (0.9)	52
物	30 (0.2)	29 (-3.5)**	48 (4.0)**	63 (-0.5)	26 (0.3)	196
合計	63	94	70	140	54	421

注) 数字は度数、()内数字は調整済み残差。*は $p < .05$ 、**は $p < .01$ を表す。

以上で述べた4つの標準得点と被写体による分類結果に加え、研究協力者が各自叙写真について記載した表現内容(何を表そうとしたか)についても調べ、これらの結果をもとに各クラスターの特徴について検討した。以下ではクラスターごとに特徴をまとめ、図4-1-4~図4-1-8に事例(自叙写真・被写体・表現内容・インタビューでの研究参加者の発話)を示す。

4.1.4 自叙写真の5類型の特徴記述

(1) クラスター1: 安らぎを伴う気分転換

クラスター1は、評価・活動・柔軟・力量の4つの因子のうち、柔軟の得点は最も高く、力量の得点は最も低い。また、評価の得点はクラスター2に次いで高く、活動の得点はクラスター5に次いで低い。従って、情緒的意味からみると柔軟因子の“軽い”“柔らかい”といった意味と“浅い”“弱い”といった力量の低さ、評価因子の“良い”“快な”“健康な”等のポジティブな評価と“静か”“おそい”“止まっている”等の活動の低さを特徴とする自叙写真群である。

被写体からみると、場所カテゴリーに分類される写真が有意に多いが、そのほとんどが田園風景や公園等の自然を撮影した写真であった（場所カテゴリー 14 枚中 12 枚）。また、物カテゴリー（30 枚）の中では、ぬいぐるみを含むキャラクターグッズの写真が 10 枚と目立った。



<事例 1>Aヶ崎: 田舎は最高。心が和む。やっぱりのびのび大らかな人間でいなきゃ。

これは学校帰りに撮ったんですけど、Aヶ崎ですけど。こう、すごい自然が好きで、めっちゃ田舎が好きで、やっぱりこう、変に都会ずれせずに、いつまでも大らかな気持ちでいたい感じを表したつもりです。



<事例 2>友達とよく遊んだ噴水: 昔の遊び場。

これは小学生くらいの時に、この横にはまた大きな噴水とかがあるんですけど、その横のところで水が流れてて、そこに石が、子どもやったら飛び乗れそうな石がば一つ置いてあって、それでこう、いろいろ友達と遊んでた。で、結構、きれいな所なんで、静かやし。で、気に入っているんで撮りました。



<事例 3>スヌーピー: 私のめっちゃ好きなぬいぐるみ、スヌーピー。

これは友達とBに行った時に買ってきたぬいぐるみなんですけど、こう、スヌーピーがある時をきっかけにすごい自分の中で好きになって、それで、こう、つい買ってしまったんですけど。すごい好きやし、毎日一緒に寝てるから、これは撮っておかなあかんなと思って、ちょっと撮ってみました。

図 4-1-4. クラスタ1 の事例: 写真・被写体・表現内容、インタビューでの発話

表現様式からみると、場所の写真は絵葉書様であり、物品もフレームに収まるように撮影されている。人物写真はカメラを意識した着座姿勢や記念撮影様の写真と日常行為（e.g. 睡眠、間食、後片付け等）を自然な状態で写したもの

が混在しているが、笑い顔やピースサイン等の目立った感情表出がなされているものは19枚中2枚のみと少なかった。

表現内容の記述からは、写真に写された対象や行為によって心が和む、安心する、ぼーっとする、現実を忘れる、逃避する、お気に入り、懐かしいという表現に共通性がみられる。従って、この自叙写真群を“安らぎを伴う気分転換”と呼ぶこととする。

(2) クラスタ2：快や賦活を伴う対人関係や行為

クラスタ2は、4つの因子の得点が他のクラスタに比べて相対的に高い。特に、活動や評価の得点は5つのクラスタの中で最も高い値を示している。従って、情緒的意味からみると評価因子の“良い”“快な”“健康な”等の意味に加えて、活動因子の“動いている”“騒がしい”等の意味、これに加えて柔軟因子の“軽さ”“柔らかさ”や力量因子の“強さ”“深さ”といった特徴をもつ自叙写真群である。

被写体からみると、人物を被写体とした写真が有意に多く、場所や物を被写体とした写真が有意に少ないことが特徴的である。人物写真には整列したり姿勢を正したりして撮った写真はほとんどなく、カメラに向かってピースポーズをとっているもの、飛び上がったたり腕を広げたりするポーズをとっているもの、その他、料理する、走る等、被写体となった人物は様々に動きのある姿勢を示している。また、食べる・飲む行為を撮影した写真が多く、人物写真のほとんどが笑顔であり、全体として快の感情が表現されている。

表現内容の記述からも、喜び、幸せ、はしゃいでいる、美味しい、元気、充実、好き、可愛いなど快感情に関連する語が多くみられ、これらの言葉とともにクラブ活動、ゼミ、習い事、アルバイト、コンパ、ライブ、誕生日などの出来事が記述されている。従ってこの自叙写真群を“快や賦活を伴う対人関係や行為”と呼ぶこととする。



<事例4>マネージャーの姿:私は野球部のマネージャーをしているという所属を表した。毎日充実している。

これは私が普段、もう一つの顔といいますか、マネージャーをしているんですね。それは野球部のマネージャーなんですけど、その時、いつも皆と一緒に、こう一つのことをすることによって、何かこう楽しんでいるとか、一つのスポーツを通してみんなと楽しんでいるとか。いろんな人間関係も学べし、後輩との付き合いとか、先輩・後輩との付き合いとか。そういう社会についてじゃないけど、ちょっと学べる第一歩のところ、すごくここでは楽しませてもらっているとか。同じ、仲良く。



<事例5>趣味の空間(洋裁):暇があれば装苑という雑誌をみて気に入った服を作る。自分がふだん愛用しているミシン、ハサミ、定規などを置き、洋裁しているところを表したかった。

これはさっきの一つ前の写真の作品(洋服)の、あの、私が実際に洋裁をする場面の写真を撮ったんですね。その中に一つ作品、あったんですけど、それを作っている最中の写真を撮ったんです。高校時代にも、そういう洋裁の作る勉強もしてたんですけど、その時からこういう道具で、家でやる時とか宿題とか出た時とか、こういう風にやってたという。ここに写っている雑誌は私がすごく好きな雑誌で、この雑誌を見て自分の着たい服を考えて、で、ちょっとこれは誰も着てなさそうな服やなって思ったら、すぐ目ざとくそれを見て作りますね。この雑誌は私が唯一、ずっと買っている雑誌で、楽しみにしてるんです。



<事例6>ケーキ教室:きゃぴきゃぴ(ケーキを作っている自分)。

ケーキ教室に行ってきたんで、最近、ちょっと活動的なんです。いろんなところにいたり、してるんで。その内容の中にケーキ教室も入ってて、挑戦と思って。ケーキ教室をやっている〇っていうお店なんですけど、そこに行くと、ケーキ作りをしている私です。マダム達にまぎれてます。

図 4-1-5. クラスタ-2 の事例:写真・被写体・表現内容、インタビューでの発話

(3) クラスタ-3 : 深みや重みを伴う個人史

クラスタ-3 は、5 つのクラスタ-の中で力量の得点が最も高く、柔軟の得点が最も低い。また、評価と活動の得点は中程度であった。従って、“深い” “強い” といった力量と “重い” “固い” といった非柔軟の特徴をもつ自叙写真群である。



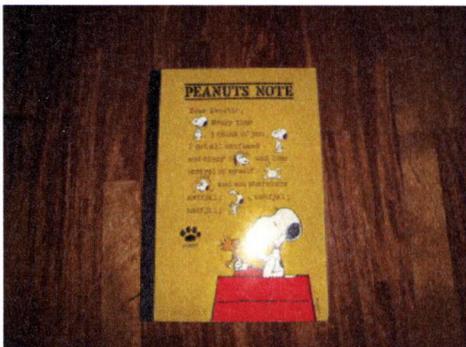
<事例 7> 高校時代: 本当は楽器を写すはずだったが、最近、高校に忘れてきたのでパンフレットなどで吹奏楽部に所属していたことを表した。クラブは私にとっては大きな成長の場であった。

私が高校の時に所属していたのは吹奏楽部だったんですけど、本当はね、楽器を写したかったんですけど。夏休みにコンサートがあってその時に出演者として出たんですけど、楽器を学校に忘れてきて撮れなかったんです。高校に入った時のこと、物だったら何で表されるかなと考えて、パンフレットがあるんですけど演奏会のパンフレット。それと私はクラリネットをやってたんですけど、クラリネットで使うリードっていうんですけど、これが家にあっただけで写してきました。で、高校時代っていうのは私にとって成長できた場なんです。だからすごく入って良かったし、もう、ここで得たものはすごく大きいんで、自分が大きく成長してくれたっていうか、ここが一つのポイントになっていると思って、これを撮ってみました。



<事例 8> 漫画「多重人格探偵サイコ」: 唯一持っている漫画。興味のあるもの。

これは家に唯一あるマンガで、大学2回生くらいの時に買ったんですけど、新聞に最初の手紙が面白そうだったんで買ったらずーっと買ってしまったような状態なんで。今、一番この漫画が好きなんで、これを写しました。



<事例 9> 特別なノート: 私しか知らないもの。ノート自体は普通の文具。中身が重要。

これは、中学の時からずっと大事にしているノートなんですけど。日記帳とか、日記をつけるのが好きだったんですけど、それよりもっと大事なこととか、保存版として残しておきたいな、と思ったことを全部ここに書いているんですよ。ちょっと日記に書き足りなかったこととかも、全部ここにパーッと書いて。嬉しかったこととかもあるんですけど、やっぱり嫌だったこととか辛かったりしたことの方がたくさん書いていると思うんですけど。その時は一生懸命書いているから、後から見たら、あー、こういうこともあったなあと思ったり。今もそう思うこととかもあって、うん、すごい大事なノートやな。もう終わってしまったんですけど。2冊目に行こうかなと思っているんですけど。そういう意味ですごく大事なノートです。

図 4-1-6. クラスタ3 の事例: 写真・被写体・表現内容、インタビューでの発話

枚数の多い物品を写した写真に着目すると、物品を日常での自然な状態のまま写したというより、むしろ写真のフレームに収まるように複数の物品を集め

たり並べたりするなど、ディスプレイした形で写されているものが多い。

表現内容の記述からは、現時点で興味や関心のある対象や行為に加えて、過去に興味や関心を持っていた、あるいは過去から現在にわたって興味や関心を持ち続けている対象や行為についての時間軸を含めた記述に共通性がみられる。具体的には、自分の趣味やクラブ活動等に関係する事物やそれにまつわる思い出や作品、気に入りの服・食物・道具・音楽・スポーツなどについての記述である。お気に入り、はまっている、好き、大切、宝物、特技、自慢などの記述が多くみられ、撮影者にとって愛着のある物品が提示されている。従ってこの自叙写真群を“深みや重みを伴う個人史”と呼ぶこととする。

(4) クラスタ4：中立的な自己叙述

クラスタ4は、活動・柔軟の得点はほぼ0の値を示し、評価と力量の得点もマイナスの値ながら0付近に位置している。従って、4つの因子からこのクラスタの特徴を述べると、評価と力量がやや低く、活動と柔軟については平均的な自叙写真群といえる。また、枚数の上ではこのクラスタに含まれる写真が140枚と最も多いが、被写体にもとづく分類では人物・場所・物のカテゴリーにおける写真枚数の偏りは見られない。

このクラスタに含まれる写真では、人物は日常の自然な表情や行為の瞬間を撮った写真とカメラに向かって記念撮影様にポーズや表情を作って撮った写真が混在しているが、手や足といった身体の一部を写した写真がこのクラスタにまとまっているのが目立つ。物や場所については、自然な状況というよりもディスプレイ様に写した写真が比較的多く見られた。

研究参加者が各自叙写真について記載した表現内容（何を表そうとしたか）からクラスタの特徴を読み取ると、写真に写された事物によって自分自身を規定し、属性や特徴を記述する内容に共通性が見られる。例えば、自分の全身を写すことによって今の自分を表す、父と私を写すことによって父親にとって大切な娘である自分と自分にとって大切な人である父を表す、目覚まし時計によって早起きであることを表す、大学によって大学生であることを表す、などである。好き、必要不可欠、必需品、生活の一部、などの言葉が見られるものの、全体としては感情的な表現は少なく、説明的な内容が多い。従って、この自叙写真群を“中立的な自己叙述”と呼ぶこととする。



<事例 10> 足: 足をよく使うということを表した。

足で、私の場合、中学からずーっと電車通学とか、あと歩きばかりなんですよ、学校行くのとかでも。で、すごく歩くのが好きっていうか。よくだから、たまに友達とDの街も歩いて回るんですよ。前はEからF駅まで歩いて帰ったんですよ。それくらい歩くの好きだし、あと、皆に「歩くの速い、速い」って言われるから、ああ、これも私の特徴の一部かな、みたいな感じで。それで撮ったんですけど。



<事例 11> 目覚まし時計: 早起きということを表そうとした。

時計は、私にとっては欠かせないですね。私、昔から、すごく早起きで、中高の時は5時起きとかしてたんですよ、毎日。で、出かける時も2時間か3時間くらい前に起きないとちゃんと出られなくて。だからこれがないと生きていけないっていうか、はい。絶対、目覚ましかけてます。だから夏休み中でも遅くても9時には絶対、鳴るように。それまでに勝手に起きたら良いんですけど、起きれなかった場合のことを思って、9時には絶対かけて寝るんです。



<事例 12> 脱ぎ捨てられたサンダル: 私って本当にめんどくさがり。雑。

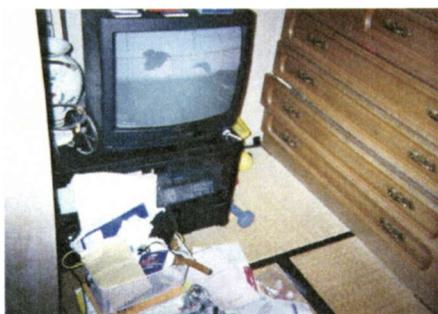
これはサンダルが散漫してるんですけど。私の家なんですけど、こんなことになってるから撮っておいたんですけど。私、すごい雑なんですよ、服とかもポイポイ脱ぎ捨てちゃう人なんで。で、たぶん帰ってきて「暑ーっ」とか言って、たぶんポイポイって脱いだんやと思うんですけど。私の性格が表れてるかなって。ガサツな面がすごい表れているな、と思って。それでサンダルを、脱ぎ捨てているところを撮りました。

図 4-1-7. クラスタ4 の事例: 写真・被写体・表現内容、インタビューでの発話

(5) クラスタ5: 低評価を伴う私的日常生活

クラスタ5は、含まれる写真が54枚と最も少ない。情緒的意味から見ると、評価・活動・柔軟の得点が5つのクラスタの中で最も低く、加えて、力量の得点もクラスタ1に次いで低い。従って、意味的には評価因子では“悪い”“不

快な”“不健康な”等、活動因子では“静かな”“止まっている”“おそい”等、柔軟因子では“重い”“固い”、力量因子では“浅い”“弱い”といった特徴を持ち、全体としてはネガティブな意味合いの強い自叙写真群である。なお、被写体による分類では、特に写真枚数に偏りは見られない。



やることのない時とか、絶対見てしまっていて、テレビとか。こう、見ないものと見るものに分けることができないんですよ。どうしてもダラダラダラダラみってしまうので、うん。これも自分かかって思っ
て撮りました。

<事例 13>テレビ：自分をダメにするもの。



これは服屋の袋を撮ったんですけど、デパートとか行ったら絶対ここに行ってしまうんで、買ってしまうんで。それで今、自分が気に入っているところってということで写しました。

<事例 14>服やのロゴ：(いつも買ってしまう服のメーカー)。自分の好み。



現在の私を表すもので、まだ道が見えてないっていうか。足で前に踏み出そうと思っているんですけど、何かこういう道半ばにいるっていう感じで。何か最近、精神的にあんまり、、、不安定なことが多いので、早く抜け出したいっていうことで。今の状態をこれで表して撮ってみました。

<事例 15>どこまでも続く道：私の現在。最近あまり自分らしさが出ていない。自分探しをしている自分を表した。

図 4-1-8. クラスター5 の事例：写真・被写体・表現内容、インタビューでの発話

物の写真はフレームに収める、あるいはディスプレイした形で写された写真と自分の部屋の一角や鞆の中をそのまま写すといったありのままの日常を写した写真が混在している。人物写真も同様に、カメラに向かって記念撮影様にポーズや表情を作って撮った写真と日常の自然な表情や行為の瞬間を撮った写真が混在している。

表現内容の記述からは、日常、私生活、普段、習慣、必需品、自分らしさ、落ち着くといった言葉が見られる。これらの言葉は、人の普段の状態、日常繰り返される行為、日常的に使用されている物品、居場所を表現するものである。しかし、そのような日常生活の中に現れてくる自分らしさは必ずしも常にポジティブな評価がなされるとは限らないようである。表現内容の記述の中には、“マジメな時はマジメに、でも最近は義務的に感じる”“小心者”“硬い自分、時間きっちり”“一人で乗車するのは超苦手”“いつも買ってしまう”“自分をダメにする”“眉毛を書かないと外に出られない”“彼は必須、でも勉強中の彼は嫌い”など、日常的で愛着があり不可欠で自分らしいと認めつつも、積極的にプラスの評価はし難い事物、事象について述べたものが散見される。従ってこの自叙写真群を“低評価を伴う私的的日常”と呼ぶこととする。

以上、クラスター分析によって得られた5つの自叙写真群について、各群の特徴を情緒的意味・被写体・表現内容・表現様式等から記述し、特徴を表現するような命名を行った。通常、写真から受ける印象や得られる情報は多岐にわたる。本章でのSD法を用いた自叙写真に対する判断は、写真の読み取りに関する探索的な試みではあるが、ここでの結果からは5つの自叙写真群間で異なった被写体・表現内容・表現様式が見られたことから、どのような自叙写真がどのような情緒的意味を包含しているのか、今後、自叙写真を読み解く際の手がかりとなると思われる。

4.1.5 自叙写真への評価と自叙写真の5類型との関係

5つのクラスターの特徴を他の指標との関係から検討するため、記録用紙に記載されている自叙写真に対する評価（被写体の想起しやすさ・写真の出来ばえ・写真があなたを表す程度）への回答を調べ、クラスターごとに平均値を算出し、クラスター間で平均値を比較するため一要因分散分析を行った(表4-1-4)。この結果、3つの質問全てで群（クラスター）の効果は有意であった（被写体

の想起しやすさは $F_{(4, 411)}=3.79$, 写真の出来ばえは $F_{(4, 413)}=2.99$, 写真があなたを表す程度は $F_{(4, 413)}=4.47$, 写真の出来ばえは $p<.05$, その他は $p<.01$).

表 4-1-4. クラスタ別みた自叙写真への評価

		クラスター					合計	F値 (多重比較結果)
		CL1	CL2	CL3	CL4	CL5		
想起しやすさ	度数	62	91	70	139	54	416	3.79**
	平均値	4.11	4.36	3.93	3.88	3.98	4.04	(2>3*, 2>4**)
	標準偏差	0.977	0.823	1.068	0.981	1.090	0.992	
出来ばえ	度数	62	93	70	139	54	418	2.99*
	平均値	3.68	3.66	3.17	3.22	3.24	3.38	(2>4+)
	標準偏差	1.212	1.306	1.340	1.313	1.273	1.309	
自分 表現程度	度数	62	93	70	139	54	418	4.47**
	平均値	4.11	4.43	4.33	4.04	3.93	4.17	(2>4**, 2>5**)
	標準偏差	0.960	0.758	0.756	0.943	0.988	0.899	

注) 記入漏れのあったデータは分析から除外した。+は $p<.10$, *は $p<.05$, **は $p<.01$ を表す。F値欄の()内は多重比較結果を示し、不等号はクラスター間の平均値の高低を表す。

表 4-1-5. 重要度の4群からみたクラスター別の写真枚数

クラスター		重要度				合計
		①1~3位	②4~6位	③7~9位	④10~12位	
CL1	度数	10	9	11	33	63
	期待度数	12.6	11.7	12.6	26.2	63.0
	調整済み残差	-0.9	-0.9	-0.5	1.9	
CL2	度数	29	24	21	20	94
	期待度数	18.8	17.4	18.8	39.1	94.0
	調整済み残差	3.0**	2.0	0.7	-4.5**	
CL3	度数	20	14	12	24	70
	期待度数	14.0	13.0	14.0	29.1	70.0
	調整済み残差	2.0*	0.3	-0.6	-1.4	
CL4	度数	18	22	30	70	140
	期待度数	27.9	25.9	27.9	58.2	140.0
	調整済み残差	-2.6**	-1.0	0.5	2.5*	
CL5	度数	7	9	10	28	54
	期待度数	10.8	10.0	10.8	22.4	54.0
	調整済み残差	-1.4	-0.4	-0.3	1.6	

注)*は $p<.05$, **は $p<.01$ を表す。有意差のあった数値を太字で示した。

多重比較の結果、クラスター3や4よりも2において被写体は想起しやすく、クラスター4や5よりも2において、写真はより自分を表していると評定されていた。さらに、クラスター4よりも2は写真の出来ばえが良いと判断される傾向にあった。

この他、インタビューで尋ねた自叙写真の重要度についても検討するため、

表 4-1-5 に示した順位による①から④の 4 群に含まれる撮影枚数をクラスター間で比較したところ、枚数の偏りは有意であった ($\chi^2(12)=34.16, p<.001$)。残差分析の結果、重要度上位 (①1 位~3 位) の写真の枚数はクラスター 2 と 3 が多く、クラスター 4 で少なかった。一方、重要度下位 (④10 位~12 位) の写真の枚数はクラスター 4 で多く、クラスター 2 で少なかった。

総じてこれら自叙写真の評価に関する質問については、クラスター 2 (快や賦活を伴う対人関係や行為) が他のクラスター、特にクラスター 4 (中立的な自己叙述) やクラスター 5 (低評価を伴う私的日常生活) に比べて得点が高かった。なお、重要度が高いと評価された写真はクラスター 2 (快や賦活を伴う対人関係や行為) とともにクラスター 3 (深みや重みを伴う個人史) にも多く含まれることも示された。

以上の結果は、先の述べた各クラスターの評価得点の高低とほぼ対応しているといえる。すなわち、評価得点の高いクラスター 2 (快や賦活を伴う対人関係や行為) は、以上に述べた 4 つの指標においても高い値を示しており、このクラスターに含まれる写真の被写体は想起しやすく、写真の出来ばえは良く、自分を良く表しており、重要度も高いと判断されたことが分かる。一方、評価得点の低いクラスター 4 (中立的な自己叙述) やクラスター 5 (低評価を伴う私的日常生活) に含まれる写真は概ね、被写体の想起の容易さ、写真の出来ばえ、自分を表現する程度において低い値を示している。この結果は、複数の質問を通しての研究参加者の自叙写真に対する判断の一貫性を示すものと考えられる。

4.2 自叙写真の 5 類型からみた研究参加者の特徴

ここまでは情緒的意味にもとづく自叙写真の類型について述べたが、5 つのクラスターに含まれる自叙写真は、それぞれどのような研究参加者が撮影したものなのであろうか。本章での研究参加者は自叙写真の撮影に加えて性格検査や自己意識尺度に回答していることから、以下では見出された 5 つのクラスターに含まれる自叙写真の多寡によって研究参加者を分類し、各群の研究参加者の性格特性や自己意識の在り方と自叙写真の情緒的意味にもとづく類型との関係について検討する。

具体的には、研究参加者ごとに 5 つのクラスター別の撮影枚数の比率を算出

し、これを角変換した値を用いて Ward 法（平方ユークリッド距離）によるクラスタ分析を行った。続いて、見出された研究参加者のクラスタごとに 5 因子性格検査と自己意識尺度の得点を算出し、比較した。

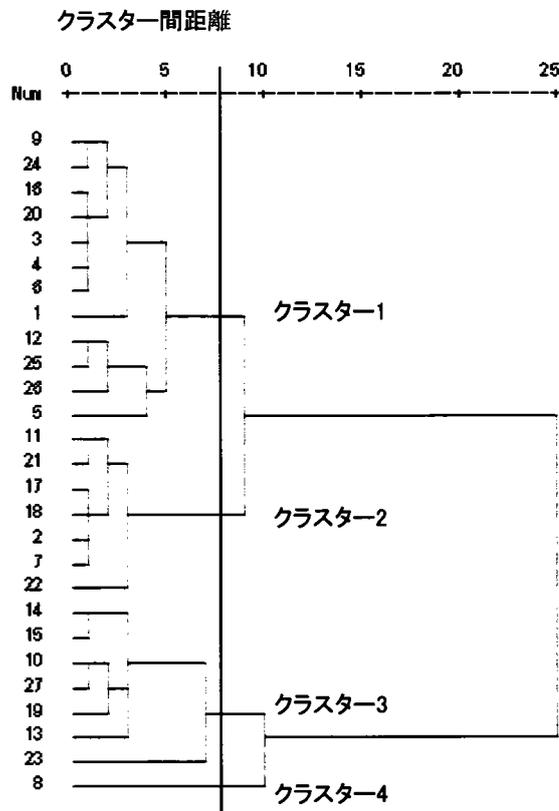


図 4-2-1. 研究参加者のクラスタ分析結果

研究参加者 27 名によるクラスタの連結状況を図 4-2-1 に示す。クラスタ間距離の 5.00 から 10.00 間に規準を設けた場合に得られる 4 つのクラスタによって研究参加者を分類した。ただし、クラスタ4は 1 名(研究参加者 No.8)のみであることから、性格検査と自己意識尺度の分析ではこの 1 名を除外した。残る 3 つのクラスタ（以下、それぞれクラスタ1に含まれる 12 名を①型、クラスタ2に含まれる 7 名を②型、クラスタ3に含まれる 7 名を③型とする）の特徴を、先の自叙写真の情緒的意味にもとづく分類で見い出された 5 つのクラスタ（1: 安らぎを伴う気分転換、2: 快や賦活を伴う対人関係や行為、3: 深みや重みを伴う個人史、4: 中立的な自己叙述、5: 低評価を伴う私的日

常)に含まれる自叙写真の枚数の比率から検討した(表4-2-1)。

この結果、①型は②型に比べてクラスター1(安らぎを伴う気分転換)に含まれる写真の比率が高かった($p<.01$)。さらに①型は、③型に比べてクラスター2(快や賦活を伴う対人関係や行為)とクラスター3(深みや重みを伴う個人史)に含まれる写真の比率が有意に高かった(それぞれ $p<.001$ 、 $p<.05$)。一方、クラスター4(中立的な自己叙述)では、①型および②型が③型に比べて、撮影枚数の比率が有意に低いことが示された(それぞれ $p<.001$ 、 $p<.01$)。クラスター5(低評価を伴う私的的日常)については、3つの型で差は見られなかった。

表4-2-1. 研究参加者3型からみたクラスター別の写真枚数の比率

クラスター番号と名称	①指向 広範型 N=12	②活動 ・属性型 N=7	③属性 叙述型 N=7	F値
	21.54	6.87	10.92	5.96**
1 安らぎを伴う気分転換	12.44(6.34)	3.94(2.98)	6.27(5.94)	①>②**, ①>③+
2 快や賦活を伴う対人関係や行為	27.98	29.82	6.58	10.17***
	16.25(8.91)	17.35(2.75)	3.77(2.77)	①>③***, ②>③**
3 深みや重みを伴う個人史	23.84	14.76	9.12	4.83*
	13.79(6.62)	8.49(5.16)	5.23(5.55)	①>③*
4 中立的な自己叙述	19.06	35.14	64.90	19.41***
	10.99(4.59)	20.57(5.28)	40.47(17.71)	①<③***, ②<③**
5 低評価を伴う私的的日常	8.68	15.64	13.95	1.86
	4.98(4.07)	9.00(4.49)	8.02(6.33)	

注) 上段は比率、下段は比率の角変換値と標準偏差。+は $p<.10$ 、**は $p<.01$ 、***は $p<.001$ を表す。F値欄の下段は多重比較結果を示し、不等号は研究参加者群間の平均値の高低を表す。

これより、複数のクラスター(クラスター1、2、3)での写真比率が他群より高い①型を指向性広範型、人物や活動場面を表現したクラスター2と自己属性を記述するクラスター4での写真比率が高い②型を活動・属性叙述型、自己属性を記述するクラスター4での写真比率が高い③型を自己属性叙述型と命名することにした。

表4-2-2には3つの型別に自己意識尺度の得点を示した。下位尺度ごとに3つの型の平均値を比較したところ、私的自己意識については①指向性広範型は③自己属性叙述型より得点が低い傾向にあった($F_{(2, 23)}=2.52$, $p<.10$)。逆に公的自己意識については、①指向性広範型が③自己属性叙述型よりも得点が高い傾向にあった($F_{(2, 24)}=3.05$, $p<.10$)。なお、5因子性格検査による性格特性の得点についても3つの型を比較したが、5つの超特性得点の全てにおいて有意

差は見られなかった²⁹。

表 4-2-2. 研究参加者 3 型別にみた自己意識尺度の得点

	①指向広範型 N=12	②活動・属性型 N=7	③属性叙述型 N=7	F 値
	23.25	24.86	27.57	2.52+
私的自己意識	4.181	3.848	3.994	①<③
	33.17	32.57	27.71	3.05+
公的自己意識	3.433	4.036	7.158	①>③
	20.92	20.14	20.00	0.84
社会的不安	5.885	5.080	4.243	

注) 上段は平均値、下段は標準偏差を表す。+は $p < .10$ を表す。

以上、自叙写真の情緒的意味にもとづくクラスターに含まれる写真の多寡で研究参加者を類型化し、各型において性格特性や自己意識の在り方に特徴がみられるかを検討した。クラスター分析の結果、研究参加者は 3 つの型に分類された。3 つの型のうち、①指向性広範型や②活動・属性叙述型は、③自己属性叙述型に比べてクラスター1（安らぎを伴う気分転換）、クラスター2（快や賦活を伴う対人関係や行為）、クラスター3（深みや重みを伴う個人史の側面）の写真の比率が有意に高かった。クラスター1 や 2 や 3 に含まれる自叙写真群は SD 法による評価の得点が高い。これら評価得点の高いクラスターに含まれる自叙写真を多く撮影した①指向性広範型や②活動・属性叙述型、特に①指向性広範型の研究参加者は、自己意識尺度においては公的自己意識の得点も高い傾向にあった。一方、③自己属性叙述型の研究参加者は①指向性広範型や②活動・属性叙述型と比べ、クラスター4（中立的な自己叙述）に含まれる自叙写真の比率が高い。加えて③自己属性叙述型の研究参加者においては、自己意識尺度の私的自己意識得点が他の 2 つの型の研究参加者と比べて高い傾向にあった。

自叙写真は撮影者にとっては自己表現の一手段であるが、自叙写真を“見る者”の立場を意識する場合には自己呈示の手段ともなり得る。他者から見られる自己の公的側面に注意を向けやすい公的自己意識の高い者は、自叙写真の撮影に際してもポジティブな自己の側面を呈示することに動機づけられやすいのかもしれない。一方で、自己の内面に注意を向けやすい私的自己意識の高い者

²⁹ 自叙写真集への評価を尋ねる 3 つの質問（資料 4 参照）の回答に関しても 3 類型を比較したが、いずれの評価についても群間で差は見られなかった。

は、自叙写真の撮影に際しても自己の性格や感情傾向などの内面を周囲の事物・事象を用いて表現することに動機づけられやすく、その結果として評価得点からみると中立的で叙述的な自叙写真を多く撮影するのかもしれない。

最後に、自叙写真には評価の高い写真のみが表現される訳ではないことに触れておく。図 4-1-3 をみると、SD 法による自叙写真の評定をクラスター分析して得られた 5 つのクラスターの中では、クラスター2（快や賦活を伴う対人関係や行為）等は評価得点が高いが、それ以外のクラスターにおいては評価得点がニュートラルなものや低いものもある。通常の写真撮影では、人は自分自身の良い面を写しがちであると思われるが、例えばクラスター5（低評価を伴う私的日常）に多く含まれるような、望ましくはないが日常的で公にしない自分らしさの表現等は“自分を写真で表現する”という自叙写真という手段を通して、あえて開示あるいは呈示される自己の側面と考えられる。自叙写真の撮影が、通常のスナップショットとは異なることを示すものであろう。

4.3 第4章まとめ

自叙写真に対する情緒的意味に着目し、研究参加者の判断にもとづき自叙写真を分類することを試みた。自叙写真をコンセプトとして 12 の形容詞対による SD 法の評定を実施し、この評定値をもとに確証的因子分析を行った。因子分析によって見出された 4 因子（評価・活動・柔軟・力量）ごとに項目の評定の合算値を求めてこれを用いてクラスター分析を行い、評価・活動・柔軟・力量の 4 つの得点の高低によって 5 つの自叙写真のグループを見出した。これら 5 群の自叙写真を情緒的意味においてまとまりを持つ自己関連世界と考え、命名を行った。クラスター1 は安らぎを伴う気分転換の側面、クラスター2 は快や賦活を伴う対人関係や行為の側面、クラスター3 は深みや重みを伴う個人史の側面、クラスター4 は中立的な自己叙述の側面、クラスター5 は低評価を伴う私的日常的側面、である。

これら 5 群は、被写体・表現様式・表現内容においてもそれぞれに特徴的であった。まず被写体に関しては、クラスター1（安らぎを伴う気分転換）では場所、クラスター2（快や賦活を伴う対人関係や行為）では人物、クラスター3（深みや重みを伴う個人史）では物を写した写真が多かった。次に表現様式で

は、対象をフレームに収まるようにディスプレイして写すか、自然の状態や行為の瞬間を写すといった違いが見られた。前者の様式はクラスター1（安らぎを伴う気分転換）やクラスター3（深みや重みを伴う個人史）に、後者の様式はクラスター3（快や賦活を伴う対人関係や行為）に多く見られた。また表現内容については、クラスター1（安らぎを伴う気分転換）では写真に写された対象や行為による脱日常、クラスター2（快や賦活を伴う対人関係や行為）では現在の人間関係、クラスター3（深みや重みを伴う個人史）では過去から現在に至る時間を共に歩んできた人生のコンパニオンともみなせる興味や関心の対象、クラスター4（中立的な自己叙述）では自分の属性を規定したり特徴づけたりする対象、クラスター5（低評価を伴う私的的日常）では日常的で公にされない行為・物品・場所が主として記述されていた。

本章の結果からは、自叙写真には情緒的意味—被写体—表現様式—表現内容に関して了解可能な結びつきやまとまりが存在することが示された。また、被写体や研究参加者が記録した表現内容に加え、写真を刺激としてその情緒的意味を調べたり、写真の写し方や被写体の配置をもとに自分や自分の周囲の環境の捉え方や自己表現の様式を把握したりするという自叙写真の活用法を示すことができた。

加えて、時間を異にして自叙写真に対する複数の評定を実施した結果からは、研究参加者の自叙写真に対する評価の一貫性が示された。SD法による評定は自叙写真の撮影から1～2週間後のインタビューで実施されたが、インタビューではSD法による評定に先立って写真の重要度についても尋ねている。この他にも、現像された自叙写真を記録用紙に添付する時点で自叙写真に対する評価（被写体の想起しやすさ・写真の出来ばえ・写真が自分を表現する程度）を求めた。結果、SD法での回答を因子分析して得られた評価の得点の高かったクラスター2（快や賦活を伴う対人関係や行為）は、評価の得点が相対的に低いクラスター4（中立的な自己叙述）やクラスター5（低評価を伴う私的的日常）よりも重要度や自叙写真への評価は高かった。加えて、重要度についてはクラスター2（快や賦活を伴う対人関係や行為）とともにクラスター3（深みや重みを伴う個人史）に重要度の高い写真が多く含まれることが示された。従って、SD法による評定結果の分析から得られた評価の得点の高低は、自叙写真の重

要度や自叙写真への評価の高低と概ね整合しており、研究参加者の自叙写真に対する評価の一貫性を示す結果となった。

さらに、情緒的意味による5つのクラスターに含まれる自叙写真の比率によって研究参加者を分類し、情緒的意味から研究参加者の特徴を検討した。クラスター分析の結果、研究参加者は3つの型に分類され、①指向性広範型、②活動・属性叙述型、③自己属性叙述型と命名された。SD法を用いた評定において評価の得点の高かったクラスター1（安らぎを伴う気分転換）、クラスター2（快や賦活を伴う対人関係や行為）、クラスター3（深みや重みを伴う個人史の側面）の写真は①指向広範型と②活動・自己叙述型に多く、評価の得点が平均的なクラスター4（中立的な自己叙述）は③自己属性叙述型が多かった。自己意識からみると、公的自己意識は①指向性広範型が③自己属性叙述型よりも高い傾向にあり、逆に私的自己意識は③自己属性叙述型が①指向性広範型よりも高かったことから、自己の公的側面に注意を向けやすい者はポジティブに評価されるような自叙写真を多く撮影し、私的自己意識の高い者は評価得点が平均的で撮影対象を記述・説明するような自叙写真を多く撮影する傾向にあると考えられる。

本章は研究参加者自身が自叙写真に対する情緒的意味づけをもとに自叙写真を分類することを新たに試みたが、ここで用いたSD法の尺度が自叙写真のもつ微妙な情緒的意味を完全に捉えていたかということに関して、今後、改善すべき点がある。分析結果が想定された評価・活動・力量の3因子に分化せず、因子分析結果も満足のものではない。これは多くの自叙写真を評定する研究参加者の負担を考慮して尺度の項目数を12に絞り込んだことや尺度に用いた項目が自叙写真の情緒的意味を捉えるためには十分なものではなかった可能性が原因として考えられる。しかしながら、“当事者の視点を生かす”自叙写真法においては、研究者による分類のみならず、本章での手続きのように研究参加者自身が自叙写真を分類することに意義が認められよう。今後は手続きのさらなる精錬が課題となる。

第Ⅲ部 個人要因と自己関連世界との関係

第5章 心理的特性と自叙写真との関係

5.1 パーソナリティ特性との関係

5.1.1 5因子性格特性と人物写真の撮影枚数との関係

自叙写真とパーソナリティ特性との関係については、Dollinger らのグループによる先行研究がある。これらの研究において注目されてきたのが人物を被写体とした自叙写真であり、人物写真は他者との関係性や社会的結合の指標と見なされてきた。Dollinger らは自叙写真集を個性 (individuality) の表現と見なして写真冊子の印象評定を行うことに加え、人物写真については Ziller らの研究を参考に微笑みやタッチの有無といった複数のカテゴリーを設定し、これらをまとめて対人関係カテゴリーとしたり (Dollinger & Clancy, 1993)、対人関係カテゴリーに含まれる写真の枚数をもとに関係性 (relatedness) ないしは社会的結合 (social connectedness) についての指標の設定を試みたりしている (Dollinger, et.al, 1996 資料2参照)。そして、これら指標の妥当性を検証するために性格特性との関係を検討し、自叙写真集に含まれる人物写真の多さと NEO-PI の外向性および調和性の高さとの関係を報告している。

パーソナリティ特性によって自叙写真の対象となる被写体の選択が異なるという先行研究の結果は、自己定義の個人差や個人が心理的ニッチと見なす環境の選択に影響する要因を知る上で興味深いものである。本研究においてもパーソナリティ特性と自叙写真との関係を検討するため、特性5因子モデルにもとづく5因子性格検査 (Five Factor Personality Questionnaire; 以下 FFPQ とする) で測定したパーソナリティ特性と人物を被写体とした自叙写真との関係について検討する。

辻 (1998) によると FFPQ では外向性の本質を“活動”と見なしており、外向性の活動水準の高さが対人的には他者への積極的働きかけやリーダーシップ、多くの人との賑やかな交わりを求める群居といった特徴に結びつくと考えられる。また、NEO-PI の調和性に対応する FFPQ の超特性は愛着性であり、その本質は“関係”にある。愛着性とは他者との一体感を求め、信頼・共感・協調といった他者に対するポジティブな感情・思考・行動によって特徴づけられる。以上のことから、人物写真の撮影枚数の多さは FFPQ の外向性および愛着性の高さとの関係が予測される。

方法

自叙写真の撮影・研究参加者・実施期間・有効資料

自叙写真の撮影にあたっての教示は第3章第1節と同様である。1998年から2006年の冬期あるいは夏期休暇をはさんだ36日～50日を撮影期間とし、その間の任意の1～2週間を選んで自叙写真を撮影するよう求めた³⁰。FFPQは自叙写真の説明を行う1週間から1か月前に授業中に集団で実施した。自叙写真の撮影とFFPQへの参加者は136名であったが、このうち自叙写真集とFFPQともに不備のなかった91名を有効資料とした（平均年齢20.12歳）。

5 因子性格検査 (FFPQ)

FFPQは150項目（6項目×5特性×5超特性）からなる性格検査で（各項目について自分にあてはまる程度を“全くちがう”から“全くそうだ”の5段階で評定する（FFPQ研究会, 1998））。各項目への回答を1～5で数値化し、超特性と特性それぞれの得点を算出した。FFPQの結果は自叙写真に関する資料の回収が完了した後に、研究参加者にフィードバックされた。

結果と考察

91名による自叙写真の撮影枚数は1255枚であった。これを被写体の3つの分類カテゴリーである人物・場所・物に分類した。表5-1-1にカテゴリー別の基本統計量を示した。カテゴリー別の被写体の出現比率の人物写真に着目すると、人物写真が撮影総数の5割以上を占める者は18名（19.78%）で、研究参加者の2割程度となった（図5-1-1）。表5-1-2にはFFPQの超特性得点の基本統計量、表5-1-3にはFFPQの超特性間の相関についての結果を示した。

表5-1-1. 被写体のカテゴリー別にみた基本統計量:FFPQ回答者

	人物	場所	物	合計
平均値	3.70	2.22	7.87	13.79
標準偏差	3.87	2.27	4.03	3.42
範囲	22-0	10-0	19-0	32-12
合計	337	202	716	1255

³⁰ ここでの研究参加者は自叙写真の撮影をレポート課題として実施した者と自主的に参加を申し出た者が含まれる。

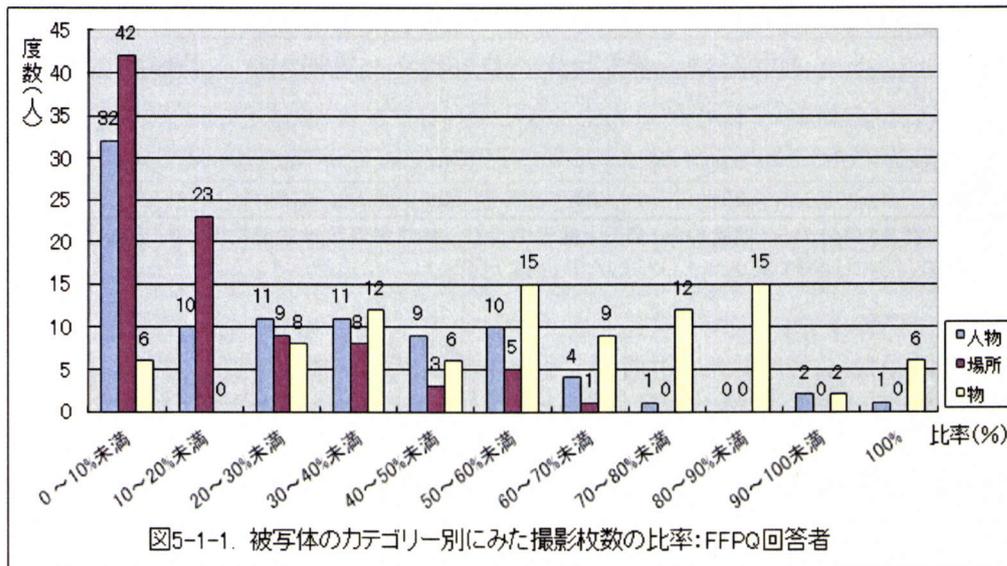


表 5-1-2. 5 因子性格検査(FFPQ)の超特性の基本統計量

	外向性 Ex	愛着性 A	統制性 C	情動性 Em	遊戯性 P
平均値	92.18	105.76	94.58	99.05	108.59
標準偏差	15.31	14.01	13.99	21.83	13.93
範囲	124-61	133-67	130-61	150-50	140-78

注)有効資料数は遊戯性 N=90、それ以外は N=91。

表 5-1-3. 5 因子性格検査(FFPQ)の超特性間の相関

	外向性 Ex	愛着性 A	統制性 C	情動性 Em	遊戯性 P
外向性 Ex	-	(91)	(91)	(91)	(90)
愛着性 A	0.13	-	(91)	(91)	(90)
統制性 C	-0.06	0.18+	-	(91)	(90)
情動性 Em	-0.39**	-0.44**	-0.19+	-	(90)
遊戯性 P	0.40**	-0.16	-0.29**	0.13	-

注)左下は相関係数、右上()内数字は人数。**は $p < .01$ 、+は $p < .10$ を示す。

FFPQの超特性得点と人物写真の撮影枚数との相関を求めたところ、表5-1-4に示す通り、外向性とは1%で有意な正相関($r=.287, p<.01$)、情動性とは負の有意傾向が見られた($r=-.193, p<.10$)。加えて、人物を対象別(自分のみ・他者のみ・自分と他者)にみた場合には、これら2つの超特性は自分を単独で写した自叙写真の撮影枚数とそれぞれ有意な相関を示した(外向性は $r=.328, p<.01$ 、情動性は $r=-.209, p<.05$)。なお、外向性と情動性以外の超特性と人物、および人物の対象別の撮影枚数との間には有意な相関は見られなかった。

表 5-1-4. 5 因子性格検査(FFPQ)の超特性と人物写真の撮影枚数との相関

	外向性 Ex	愛着性 A	統制性 C	情動性 Em	遊戯性 P
自分のみ	.33***	.05	-.02	-.21*	.04
他者のみ	.12	-.03	-.12	-.15	.04
自分と他者	.03	-.12	-.01	.00	.08
人物	.29**	-.04	-.06	-.19+	.08

注)「人物」は自分のみ・他者のみ・自分と他者の合計。有効資料数は遊戯性 N=90、それ以外は N=91。***は $p<.001$ 、**は $p<.01$ 、*は $p<.05$ 、+は $p<.10$ を示す。

表 5-1-3 に示したとおり FFPQ の超特性の外向性・情動性との間には有意な相関があることから、外向性と情動性それぞれの影響を除いて人物および人物対象別の撮影枚数との偏相関を求めた。その結果、情動性の影響を除いた場合でも、外向性と人物写真の撮影枚数との間には有意な正相関が示された（人物は $r=.230$, $p<.05$ 、自分のみは $r=.273$, $p<.01$ ）。一方、外向性の影響を除いた場合には、情動性との相関は有意ではなかった（人物は $r=-.087$, $n.s.$ 、自分のみは $r=-.091$, $n.s.$)³¹。これより、人物および自分自身を被写体とした自叙写真の撮影枚数に影響するのは外向性であり、外向性が高いほど人物写真の撮影枚数や自分を被写体とした写真の撮影枚数が多いと言える。

また、外向性の要素特性について人物写真の撮影枚数との関係を調べた（表 5-1-5）。結果、人物写真の撮影枚数は支配 ($p<.001$) と興奮追求 ($p<.01$) との間で有意な相関が示された。人物を対象別にみた場合には、自分単独の写真は活動 ($p<.05$)、支配 ($p<.001$)、興奮追求 ($p<.01$) との間、他者単独の写真は興奮追求 ($p<.01$) との間にそれぞれ有意な相関が見られた。

表 5-1-5. 外向性の要素特性と人物写真の撮影枚数との相関

	活動 Ex1	支配 Ex2	群居 Ex3	興奮追求 Ex4	注意獲得 Ex5
自分のみ	.22*	.35***	.18	.28**	.13
他者のみ	-.10	.14	.02	.27**	.10
自分と他者	.12	.07	.01	-.02	-.06
人物	.18	.32***	.13	.28**	.10

注)「人物」は自分のみ・他者のみ・自分と他者の合計。N=91。***は $p<.001$ 、**は $p<.01$ 、*は $p<.05$ 、+は $p<.10$ を示す。

³¹ 外向性と遊戯性の間にも有意な相関がみられるため、遊戯性の影響を除去して偏相関を求めたが、外向性と人物および自分単独の写真枚数との相関は有意であった。情動性も愛着性の影響を除去して偏相関を求めたが、人物および自分だけの写真枚数との相関は有意であった（すなわち、外向性の影響を除去した場合のみ、情動性との間に有意な相関が見られなくなった）。

以上の結果を見ると、対人的な能動性や支配性といった外向性の高い人では、彼らの自己関連世界により多くの人物を含み、自己定義に人物が関わりをもつことが示唆される。自分を被写体とした自叙写真については、外向性の要素特性である活動や支配性、興奮追求との関連が示された。これは、自分を撮影することが活発さや自己主張の表現であったり、刺激を得ることに結び付くということなのかもしれない。興奮追求は他者のみを写した写真の撮影枚数とも関連がみられた。他者に働きかけて写真を撮ることも刺激的で興奮を喚起させる行為なのかもしれない。このように外向性は人物写真との関連が示されたが、愛着性とは予測していたような関連はみられなかった。このことは以降、第3節で考察する。

5.1.2 5 因子性格特性と使用カテゴリー数との関係

人物写真の撮影枚数に加え、本節では自叙写真を分類するために使用したカテゴリー数についても検討する。パーソナリティ特性と使用カテゴリー数との関係を取り上げた先行研究はないが、使用カテゴリー数は撮影者が自分自身を表すためにどの程度多彩な事物を必要としたか、すなわちオリエンテーションの範囲が広いことを意味すると考えると、自己を多面的に捉えていることを示すとも考えられる。このような個人の特徴をパーソナリティ特性との関係から考察すると、新奇なものへの興味や接近、空想を楽しむこと、内的経験への気づきなどを特徴とし、その本質を“遊び”と見なすFFPQの遊戯性は自己の多面性への気づきや受容に最も関係の深いパーソナリティ特性と考えられる。従って、使用されるカテゴリー数の多さはFFPQの遊戯性の高さとの関係が仮定される。

使用カテゴリー数の算出には、被写体を分類する20カテゴリー（人物3・場所3・物14）を用い、1255枚の自叙写真を分類して研究参加者ごとに使用カテゴリー数を調べた。この結果、使用カテゴリー数の平均は7.54（SD=1.91）となった。パーソナリティ特性によって使用カテゴリー数が異なるか否かを検討するため、FFPQの超特性得点と使用カテゴリー数との相関を求めた。その結果、5つの超特性と使用カテゴリー数の間に有意な相関はみられなかった。また、それぞれの超特性について単独の影響をみるために偏相関を求めたが、いずれの超特性についても有意な値は示されなかった。

以上の結果をまとめると、パーソナリティ特性については低い相関ではあるものの、Dollinger らの先行研究と同様に外向性の高い者は人物写真の撮影枚数が多い（特に自分を対象とした写真の撮影枚数が多い）ことが示された。一方で、先行研究から予測されたような愛着性との関係は見られなかった。使用カテゴリー数については FFPQ の遊戯性との関連を予測したが、予測どおりの結果は得られなかった。

5.2 自己意識特性および社会的不安特性との関係

5.2.1 自己意識・社会的不安と人物写真の撮影枚数との関係

自叙写真と自己意識の関係について取り上げた先行研究は見当たらないが、Ziller & Rorer (1985) では、シャイネス調査の高得点者は低得点者に比べて人物写真が少ないことが報告されている。Ziller らは、人への偏向を示す非シャイ群に比べてシャイ群では人以外の対象へのオリエンテーションが多様であることを評価し、この多様さを保つためにシャイな人は個人的な境界（ないしはプライバシー）や自己統制を設けていると捉え、シャイな人はオリエンテーションの選択の階層 (hierarchy) がシャイでない人とは異なるのだと説明している。このようなオリエンテーションの在り方や人と環境との相互作用についての Ziller らの説明は、“当事者の視点からみる”ことでシャイな人について従来とは異なった見方ができること、そのような観点を提供する方法として自叙写真法を主張することへと繋がっている。

Ziller らの解釈以外に、人物写真の多寡は自己意識理論から検討することもできる。自叙写真の“あなたは誰ですか？”という問いは回答者の内省を促す問いである。この内省の過程で自身の内面（私的側面）に注意が焦点づけられ、自己の動機・情動・特性などの内的情報がもたらされると考えられる。さらに自叙写真を含め、写真を他者から撮影されたり他者を撮影したりする場面では自己をみる視点が外在化し、自己の公的側面への注意や関心も高まることが予想される。このような自叙写真のもつ特徴と撮影者の自己意識の個人差は、被写体の選択、特に人物を対象とした写真の撮影に影響する個人特性ではないかと考えられる。例えば、社会的不安の高い人は低い人よりも人物写真の撮影枚数が少ないことが予想される。ただし、社会的不安の程度は公的自己意識特性

の高低により異なるとされており、これに伴って撮影される人物写真枚数にも違いが生じると考えられる。本節では自己意識と社会的不安の個人差を取り上げ、被写体に人物を選択することとの関連について検討する。

方法

自叙写真の撮影・研究参加者・実施期間・有効資料

自叙写真の実施手続きは第3章第1節と同様である。撮影期間は22日～43日間であり、この期間中の任意の1～2週間を選んで撮影を開始・終了するよう求めた。自叙写真の撮影に参加した96名のうち、自叙写真と自己意識尺度ともに不備のなかった86名(平均年齢20.10歳)の資料を分析の対象とした。自己意識尺度は自叙写真への研究参加の呼びかけや説明会とは別日の講義の中で集団実施した。

自己意識尺度

Fenigstein, Scheier, & Buss (1975) の尺度を辻 (1993) が翻訳改訂した日本版自己意識尺度(以下SCSとする)を使用した。これは私的自己意識8項目、公的自己意識7項目、社会的不安6項目から成り、各項目が自分に当てはまるか否かを“全くそうだ”から“全くちがう”の5段階で評定する。回答は“全くそうだ”を5、“全くちがう”を1として私的自己意識・公的自己意識・社会的不安の各項目について得点化して加算し、研究参加者ごとに下位尺度別の合算値を算出した。なお逆転項目については数値を逆転処理して加算した。

結果と考察

86名の撮影した自叙写真1211枚を、被写体にもとづき人物・場所・物に分類した。カテゴリー別の基本統計量を表5-2-1に示した。図5-2-1のカテゴリー別の被写体の出現比率で人物写真に着目すると、研究参加者86名のうち人物写真が撮影総数の5割以上を占める者は21名(24.42%)であった。表5-2-2にはSCSの下位尺度得点の基本統計量を、表5-2-3にはSCSの下位尺度間の相関についての結果を示した。

表 5-2-1. 被写体のカテゴリー別にみた基本統計量:SCS 回答者

	人物	場所	物	合計
平均値	4.52	2.33	7.23	14.08
標準偏差	4.07	2.45	4.30	3.91
範囲	22-0	13-0	19-0	32-7
合計	389	200	622	1211

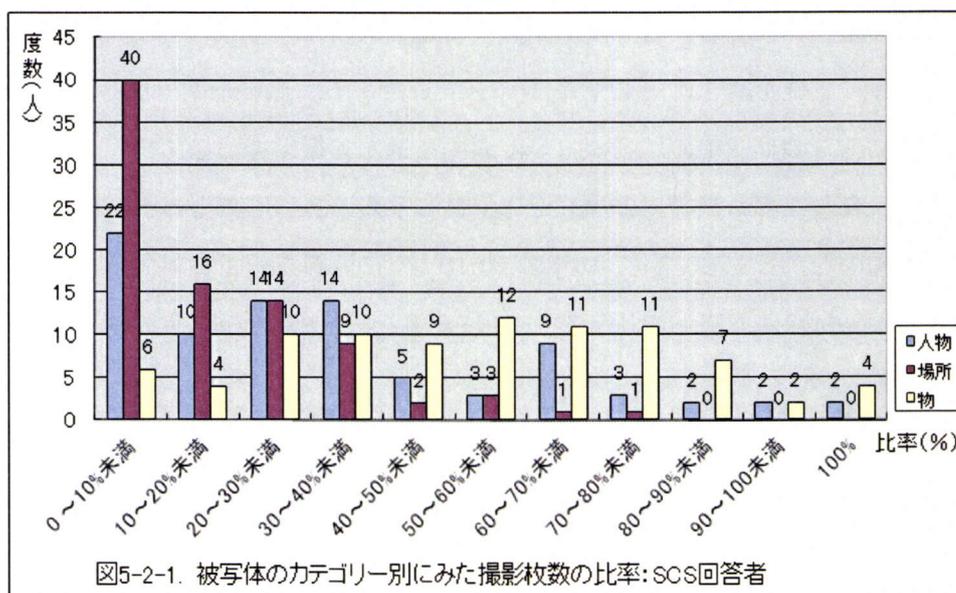


図5-2-1. 被写体のカテゴリー別にみた撮影枚数の比率:SCS回答者

表 5-2-2. 自己意識尺度(SCS)の基本統計量

	私的自己意識 Pr	公的自己意識 Pu	社会的不安 Anx
平均値	24.31	30.66	19.57
標準偏差	5.10	6.87	5.37
範囲	35-13	40-11	29-7

注)N=86。

表 5-2-3. 自己意識尺度(SCS)の下位尺度間の相関

	私的自己意識 Pr	公的自己意識 Pu	社会的不安 Anx
私的自己意識 Pr	-	(86)	(86)
公的自己意識 Pu	0.34***	-	(86)
社会的不安 Anx	0.22*	0.33***	-

注)左下は相関係数、右上()内数字は人数。***は $p < .001$ 、*は $p < .05$ を示す。

私的自己意識・公的自己意識・社会的不安という個人特性と、被写体に人物を選択することとの関係を見るため、SCSの下位尺度得点と人物写真の撮影枚数との相関を求めた(表5-2-4)。この結果、社会的不安の高い者は他者を撮影した自叙写真の枚数が少ない傾向がみられた($r = -.21, p < .10$)。私的自己意識

と公的自己意識については有意な値は示されなかった。

SCS の 3 つの下位尺度間に有意な相関があることから、それぞれの変数の単独の効果をみるために、残り 2 つの変数の影響を除いた上で人物写真および人物対象別の撮影枚数との偏相関を調べた。この結果、社会的不安特性において人物写真の撮影枚数が少ない傾向が示された ($r = -.20, p < .10$)。加えて、人物を対象別にみた場合には、社会的不安特性と自分のみ ($r = -.19, p < .10$)、他者のみ ($r = -.18, p < .10$) との間に有意な傾向が示された。私的自己意識と公的自己意識については、偏相関においても有意な値は示されなかった。

表 5-2-4. 自己意識尺度(SCS)の下位尺度と人物写真の撮影枚数との相関

	私的自己意識 Pr	公的自己意識 Pu	社会的不安 Anx
自分のみ	.09	.08	-.14
他者のみ	-.13	-.08	-.21+
自分と他者	-.09	.13	.04
人物	-.04	.10	-.16

注)「人物」は自分のみ・他者のみ・自分と他者の合計。N=86。数値は相関値。+は $p < .10$ を示す。

以上の結果に関して、社会的不安の高い者は人物写真、特に自分自身の写真を撮ることを回避する傾向があることが示された。公的自己意識特性と私的自己意識特性の影響を除いた場合に、社会的不安特性と人物、自分のみ、他者のみの写真枚数との間に有意傾向が示されたことは、人物写真の撮影枚数に公的自己意識特性と私的自己意識特性の直接的な影響がないことを示している。社会的不安の高い者においては他者の写真を撮る—他者から写真を撮られるという関係自体が希薄であったり、負担感を伴ったりする可能性が考えられる。ただし、ここでの結果は傾向差に留まった。これについては、第 3 章で考察する。

5.2.2 自己意識・社会的不安と使用カテゴリー数との関係

自己意識特性と使用カテゴリー数との関係を取り上げた先行研究はないが、Ziller & Rorer (1985) では、シャイネス調査の高得点者は低得点者に比べて自叙写真の分類に使用されるカテゴリー数が少ない(オリエンテーションの範囲が狭い)ことを報告している。ここでは社会的不安特性と使用カテゴリー数との関係について、Ziller らのシャイネスでの知見と一致するような結果が得られるか検討する。

先の FFPQ についての分析と同様、被写体を分類する 20 のカテゴリー（人物 3・場所 3・物 14）を用いて 1211 枚の自叙写真を分類し、研究参加者ごとに使用カテゴリー数を調べた。分類の結果、使用カテゴリー数の平均は 7.38（SD=2.06）となった。自己意識特性と使用カテゴリー数の関係を検討するため、SCS の 3 つの下位尺度の得点と使用カテゴリー数との相関を求めたが、有意な相関はみられなかった。また、人物写真の撮影枚数の分析と同様に下位尺度間で他変数の影響を除いて偏相関を求めたが、これら分析においても有意な値は示されなかった。

本節での結果をまとめると、社会的不安特性の高い者は人物写真の撮影枚数が少ない、特に自分や他者を対象とした写真の撮影枚数が少ない傾向にあることが示された。シャイネスと社会的不安を近縁の概念と考えると、Ziller らの研究での知見と一致した結果といえよう。ただし、その関係はごく弱いものであった。また使用カテゴリーについては、Ziller らの結果から予測されるような社会的不安特性との関連はみられなかった。これら結果については、以下で考察を行う。

5.3 先行研究との比較

5.3.1 人物写真の分析について

本研究の結果では、自叙写真の人物写真の撮影に関連する心理的特性として FFPQ の超特性の外向性、および外向性の要素特性である支配・興奮追求・活動が示された。また、社会的不安特性の高さが人物写真の撮影枚数の少なさに関係している可能性が示唆された。加えて、人物写真を対象別にみた場合には、外向性と自分自身を被写体とした自叙写真の多さ、社会的不安特性の高さと自分自身や他者を被写体とした写真の少なさが示された。加えて、パーソナリティ特性については FFPQ の要素特性によって人物写真の撮影枚数に関連するより詳細な情報が得られた。外向性や社会的不安特性についての結果は、概ね先行研究と一致するものである。その一方で、人物写真の撮影枚数と愛着性の関係は見られず、また使用カテゴリー数についてもパーソナリティ特性や自己意識特性との関係は見られなかった。

この理由については、本章で用いた人物写真の分類カテゴリーが愛着性の本質である“関係”をみるに十分なものではなかった可能性が考えられる。今後は先行研究での対人関係カテゴリー（e.g. 接触やタッチ、グループ、世代）を参考にしながら、人物写真をさらに細かく見ていくことによって愛着性との関連を検討していくことが必要となろう。

ただし、日本と米国では人物写真の撮影枚数そのものに違いが見られることは留意すべきである。例えば、Dollinger & Clancy (1993) の大学生を対象とした研究では 12 枚の自叙写真集に含まれる人物写真は平均 8.7 枚で、201 名のうち 98% が少なくとも 1 枚は人物写真を撮影したことが報告されている。そして“カメラは主として他者を写すために使われる”という Milgram の言葉を引いて、自叙写真法は社会的関係を把握するのに適する方法であると述べている。一方、日本の大学生を対象とした結果では人物写真の撮影枚数は少ない。例えば、本章第 1 節では 3.7 枚、第 2 節では 4.5 枚であり、人物写真が撮影枚数の 5 割を超える者は約 20% である。このような人物写真の撮影枚数の違いは、大学生ほど大きくはないものの日米の高齢者を対象とした研究でも示されている (Okura, et al., 1985-1986)。この他、日本での自叙写真にはポーズや整列などの演出が多いという報告もある (Sonoda, et al., 2000)。従って、米国での研究で採択されているような人物写真の分類カテゴリーの細分化が可能か、また細分化した際にそれらが有効か否かについては検討が必要である。同時に人物写真の撮影枚数という指標に加え、人物以外の被写体や表現されている意味、表現様式等の指標についても検討していく必要があるだろう。

自叙写真を含め、写真を他者から撮影されたり他者を撮影したりする場面では自己をみる視点が外在化し、自己の公的側面への注意や関心も高まると考えて、本章では社会的不安特性や自己意識特性を取り上げた。自己意識理論 (Buss, 1980) では、公的自己意識の高揚は社会的不安の発生に寄与すると言われている。社会的不安特性の高い者は、他者の注視などの公的自己を意識させるような刺激に僅かに晒されるだけで不快感情を抱きやすく、それゆえ彼らは自己の公的側面を意識したり公的側面に注意が焦点づけられたりするような場面や状況を回避し易いと言われている。これに従うと、社会的不安の高い者にとって、

自分が自叙写真の被写体となったり他者を撮影したりする場面を避ける可能性が高く、人物写真の撮影枚数が少なくなると予想される。一方、社会的不安が低く公的自己意識の高い者は公的自己意識の誘導因となる他者からの注目等に敏感で自己の公的側面に注意を向けやすく、かつそのような状況を不快と感じにくい人々と考えられる。Buss (1980) はこのような一群の人々の典型を自己顕示家としているが、このような人々にとって他者からの注目等はむしろ快いものであるため、彼らは公的自己意識の高まる状況を志向する可能性が高い。よって人物写真を最も多く撮影すると予想される。

本章では、社会的不安特性と人物写真の撮影枚数との間にごく弱い負の相関が示された。この理由を自叙写真の撮影という状況から考察する。公的自己意識が高まると我々は人から見られる自分を意識し、行動を変えたり着衣や表情を整えたりすることが多い。しかし、公的自己意識の高まりが常に社会的不安を喚起したり自己顕示を促進したりするとは限らない。不安や自己顕示が生じるのは、例えば観察者が評価的で自らが想像する“見られる自己”のイメージと自己イメージとのズレが大きい場合や、そのズレを簡単には修正できないと感じる場合などであろう。

これまでの結果から、自叙写真には普段は他者に見せない自分の姿 (e.g. 化粧をしていない素顔、寝起き、昼寝・食事・会話・入浴中等) や日常生活での人の自然な行為や姿が多く含まれ、これらの画像には“ありのまま”“素の”“日常生活”など説明が付与されることが分かっている。つまり、自叙写真で人物を撮影することには、時に他者に撮影されたり写真を見られたりすることを前提としつつも、自叙写真に映し出された“見られる自己”を自分が抱いている自己イメージ——“ありのまま”“素”“日常生活”——に近いものとして呈示するという方向づけがあると思われる。自叙写真の撮影がそのような私的自己の開示を求められている状況として研究参加者に受け止められた場合には、“見られる自己”と自己イメージとのズレは比較的小さく、ズレを修正する動機は高まりにくいと考えられる。しかも、写真では“見られる自己”をどのように呈示するかを自分自身である程度は操作できることから、たとえ自叙写真の撮影が評価場面と受け取られた場合であっても、社会的不安が高まりにくいような操作をしつつ自己表現ができると考えられる。

今後は、自叙写真を撮影するという状況が研究参加者にどのように認知されているのかを調べたり、そのような状況下で生じる動機について検討していく必要がある。このための方策として、例えば人物写真の撮影比率が高かった者と低かった者を典型として、人物写真を撮影した（撮影しなかった）理由をインタビューなどを通して明らかにしてゆくことや、評価の方向づけを強めた状況下で自叙写真の撮影を実施する等が考えられる。

5.3.2 使用カテゴリー数について

自叙写真の被写体の分類に使用されるカテゴリー数が多いことは自分自身を表すために多彩な事物を選択したことを示し、これが自己を多面的に捉えていることの指標になると考え、パーソナリティ特性の中でも特に遊戯性の高さとの関係を予測した。しかしながら仮説は支持されなかった。自叙写真の分類で使用するカテゴリーの数は、分類にあたってどのようなカテゴリーを設定したかによって異なってくる。ここでの分類カテゴリーは“写真に何が写っているか”に着目して設定されたものであり、撮影者が被写体にいかなる意味づけをしているかは考慮されていない。使用カテゴリー数は同じ対象を繰り返し撮影するといった回答者の特徴を捉えるという点で指標として有用である。しかし、自叙写真の被写体として選択される対象は撮影者によって様々に意味が付与されることを考えると、自己を多面的に捉えているか否かや遊戯性の本質である“遊び”との関連を調べるためには、自叙写真の被写体の分類に使用されるカテゴリーの数のみを指標とするのでは不十分かもしれない。

自叙写真集を個性の表現から5つのレベルに分類した Dollinger らは、“抽象的・創造性に富む・多次元的・自己内省的・美的感性に富む”というレベル5に評定された者が開放性（O）と神経症傾向（N）が高く、内向的（E-）であることを報告している（Dollinger, et al., 1996）。自己認知の多面性や遊戯性が自叙写真にいかん表現されるのかについては、被写体の分類に使用されたカテゴリー数だけでなく Dollinger らの研究等も参考にしつつ、自叙写真の表現内容や表現の様式等について検討してゆく必要があろう。

5.4 第5章まとめ

第1節では、5因子性格検査（FFPQ）で測定されたパーソナリティ特性と人物写真の撮影枚数について検討した。FFPQの超特性得点と人物写真の撮影枚数との相関を求めたところ、外向性の高さや人物写真の撮影枚数の多さ、特に自分を被写体とした写真が多いことが示された。また要素特性では、外向性の支配・興奮追求・活動との間に人物写真の撮影枚数との関連がみられた。

第2節では、自己意識尺度で測定された私的および公的自己意識特性と社会的不安特性を取り上げ、これらと人物写真の撮影枚数との関係を検討した。この結果、社会的不安特性との間にごく弱い相関がみられ、社会的不安特性の高い者は人物写真の撮影枚数（特に自分自身や他者単独の自叙写真）の撮影枚数が少ない傾向があることが示された。なお、自叙写真の分類に使用されたカテゴリ数についてもパーソナリティ特性や自己意識特性との関連を検討した。しかし、使用カテゴリ数はFFPQの超特性、自己意識特性のいずれとも有意な相関を示さなかった。

第3節では、以上で述べたパーソナリティ特性や自己意識特性と人物写真の撮影枚数の結果について考察した。まず、愛着性と人物写真の撮影枚数との間に予測されたような関連がみられなかったことから、愛着性の本質である“関係”を捉える指標の設定が課題として挙げられた。また、米国での先行研究と比較して日本の大学生を対象とした研究では人物写真の撮影枚数が少ないという結果を受けて、人物以外の被写体や意味を捉えるような分類カテゴリの設定も課題となることを述べた。使用カテゴリ数については、予測した遊戯性や社会的不安特性との関連が見られなかったことから、これら特性を捉える指標についても検討する必要がある。自己意識特性と社会的不安特性と人物写真の撮影枚数との関係については、社会的不安特性との間に弱い負の相関がみられた。この結果について、研究参加者の自叙写真の撮影状況についての認知や撮影にあたっての動機づけという観点から考察を行った。撮影状況の認知や動機づけを探る方策として、例えば人物写真の撮影枚数の多寡をもとに典型的な個人のインタビューを実施することや、評価的な状況で自叙写真の撮影を試みる等が考えられる。

第6章 20 答法による自己記述と自叙写真との関係

6.1. 自叙写真に表現される内容

自叙写真の“あなた（私）は誰ですか？”という問いへの回答は、同様の問いに言語で回答する TST あるいは WAY (Who are you? technique) での結果と比較することができる³²。先行研究の展望部分で紹介したとおり、自叙写真法と TST の回答の比較については、自叙写真を見て作成された TST と通常の手続きによる TST の回答を画像と言語による自己表現の違いとして自己呈示や自己高揚の観点から検討したものがあつた (Leuers・園田, 1988; Sonoda, et al., 2000; 園田, 2001)。本章では、自叙写真を TST の反応を得るための刺激として用いるのではなく、研究参加者の自叙写真や自叙写真について記録用紙に自由に記述した表現内容 (写真によって表そうとしたこと) を、TST の回答と比較する。これによって自叙写真法と TST による表現内容の異同を検討し、自叙写真法という手法によって得られる回答の特徴と自己研究の方法としての自叙写真法の有用性について考察する。

方法

自叙写真の撮影・研究参加者・実施期間・有効資料

向山 (2002c) の研究に参加した 33 名の女子大学生 (平均年齢 19.61 歳) が撮影した 396 枚の自叙写真のうち、不鮮明で分類不可能であつた 1 枚を除く 395 枚を分析の対象とした (資料 1 参照)。

表現内容にもとづく自叙写真の分類手順

自叙写真と研究参加者が記録用紙に記入した“写真によって表そうとしたこと”の 2 種の情報にもとづいて表現内容にもとづく分類を行つた。ここでの自叙写真の分類は高垣 (1974) による TST の反応の分類カテゴリーに準拠して行つたが (資料 5 参照)、これ以外にも TST や WAY を用いた研究でこれまでに提案されてきた分類カテゴリー (e.g. 菊地, 1970; 梶田, 1988) も参考にした。分類に際して主に高垣 (1974) を参照した理由は、カテゴリー名だけでなく具体的な数値や事例が詳細に報告されていること、特定的人格理論に依拠した分

³² WAY と TST は問いかける対象 (あなた、あるいは私) や問いの数 (3 問、あるいは 20 問) の違いはあるが、得られる回答内容は類似することが知られている。

類でないこと、下位カテゴリーが細かく設定されているためにカテゴリーの内容が具体的に理解しやすいこと、本研究と同様に女子大学生を対象とした調査であることによる。なお、本章での研究参加者は自叙写真集が完成した後に“12枚の写真が自分を表現している程度”をレポートにまとめて自己分析を行っている。この自由記述に記された内容は、自叙写真によって表現される内容を理解する資料になると考え、これら自由記述の内容についても検討した。

結果と考察

6.1.1 表現内容にもとづく自叙写真の分類

自叙写真の表現内容にもとづく分類結果を人物・場所・物のカテゴリーごとに示した(表 6-1-1～表 6-1-3)³³。分類された枚数の多い順から3位までのカテゴリーを見ると、まず人物カテゴリーに含まれる写真(94枚)では、第1位が日常生活習慣・生活上の事実(20枚, 21.28%)、第2位は好み・趣味(18枚, 19.15%)³⁴、第3位は友人関係(13枚, 13.83%)となった。

続いて、場所カテゴリーに含まれる写真(67枚)では、第1位が好み・趣味(16枚, 23.88%)、第2位が生活習慣・生活上の事実(15枚, 22.39%)、第3位は過去の事実・過去への態度(12枚, 17.91%)であった。

物カテゴリーに含まれる写真(234枚)では、第1位は好み・趣味(69枚, 29.49%)、第2位が生活習慣・生活上の事実(34枚, 14.53%)、第3位は気質・性格(33枚, 14.10%)となった。好み・趣味と生活習慣・生活上の事実は被写体に関わらず分類される写真が多いカテゴリーであるといえる。なお、以上の表現内容は全て非合意的反応(Non-Consensual Response)に属するものである。非合意的反応とは Kuhn & McPartland (1954) によると、記述内容のうちで個人のパーソナリティや能力・関心・願望などの主観的色彩の強い記述のことであり、高垣(1974)では自己の属性と称するカテゴリーに含まれる。

³³ 分類の適切さを確認するために総撮影枚数の10.13%にあたる40枚をランダムに抽出し、カテゴリー名・説明文・事例を示して心理学者2名に独立に分類を依頼した。この結果、2名の分類者間の判断の一致率は87.50%となった。

³⁴ 高垣(1974)では“関心・好み・趣味”を心的側面の中の1カテゴリーとしているが、ここでは公共性が強く目的的な叙述を心的側面の“興味・関心”に、私的で事物や活動への好悪にもとづく叙述や趣味に関する叙述は心的側面の“好み・趣味”として分離してカウントしている。

表 6-1-1. 人物写真の表現内容にもとづく分類と記述例

	分類カテゴリー	被写体の例	説明文の例 (一部は抜粋)	度数(%)
社会係留的 記述 (合意的 記述)	学校・学 生・学年	学食にいる私	学生としての私. 一応, 今メインの仕事み たいなもの.	3 (3.19)
		制服を着た私	A大学のB学科の3年生.	
	特定の集団 への所属	アルバイト先 での私	1年以上もバイトしている... 変な制服も 着こなせる...	10 (10.64)
		ペコちゃんと 私	私と言えばアルバイト→アルバイト先→ペ コちゃん	
	出生順位・ 家族構成	弟	弟と話している時, 弟から見て私は良い姉.	5 (5.32)
私の父母		私は父と母の子ども.		
自己の属性 (自己叙述 的記述)	身体的側 面: 容姿・ 体格	ロングヘア	私はずっとロングヘア... ロングのイメ ージがある...	5 (5.32)
		私	外見的に見た今の私. そのままで, と思う.	
	心的側面: 能力	パソコンと私	科学技術の発達で世界の人と話ができる.	2 (2.13)
		車と私	車を運転できる私. 運転を初めてから, 行 動に責任...	
	心的側面: 気質・性格	ぬいぐるみと 私	実はすごく寂しがりやで一人ぼっちは嫌 い. 泣き虫.	5 (5.32)
		私	初詣に行って... 神様にお祈りする都合の 良い自分.	
	心的側面: 興味・関心	一般の人	人間に興味がある. 写っている人は... に 見える.	2 (2.13)
		スキーと私	はまっているもの. スキー競技部に入っ ている...	
	心的側面: 好み・趣味	庭の椅子に座 る私	普段はあまり行かないが, 一番好きな場 所...	18 (19.15)
		私	音楽を聴いている自分. 音楽を聴かない日は ない...	
	心的側面: 願望・欲求	お母さん	理想. お母さんが好きだけど時には反抗し たくなる...	2 (2.13)
		お母さん	私の一番尊敬する人... お母さんのように になりたい.	
	心的側面: 主義・意見	着物姿の私	着物はすたれてきて... 残さなければなら ない伝統だ.	2 (2.13)
		茶道をする私	やっぱり日本の正月はこうでなくちゃ.	
	社会的対人 的側面: 家族関係	家族	自分にとって一番大切な人. いつもの自然 な家族...	4 (4.26)
私の兄		いろんなことを言える人... 私に影響を与 え続ける人.		
社会的対人 的側面: 友人関係	友達	入学以来, ずっと仲良し. 大親友のCちゃん.	13 (13.83)	
	大学の友人	私とはまた違った考えを持っている友達. 大 切...		
生活的側 面: 日常生 活習慣・生 活上の事実	私	TVを見ている. これが生活の7割をしめてい るかも.	20 (21.28)	
	私	家にいる時のくつろいだ自分を撮りたかった.		
全体的な自 己について の規定	(アナロジ ーを含む)	私の手	今の私, 過去の私, 将来の私を表そうとし た...	3 (3.19)
		鏡に映った私	私の心の中を一番うつすのではないかと.	
合計				94 (100.0)

注) 度数の上位 3 位までをゴシック体で示した。高垣(1974)の“関心・好み・趣味”を本研究では“興味・関心”と“好み・趣味”の2つのカテゴリーに分けた。

表 6-1-2. 場所写真の表現内容にもとづく分類と記述例

	分類カテゴリー	被写体の例	説明文の例 (一部は抜粋)	度数(%)
社会係留的 記述 (合意的 記述)	学校・学 生・学年	D 大学	今通っている学校と学生という自分の立場 を表した.	1 (1.49)
	特定の集団 への帰属	予備校	アルバイト先. ここではこんな私でも先生 と頼られる.	3 (4.48)
		ホームセンタ ー	週 2 回バイトに行っている... 一生懸命に 仕事をする.	
出生順位・ 家族構成	4本の歯ブラシ 立てのある自 宅の洗面所	4人兄弟ということ表現できると思って. 自分にとってすごく大きな要素...	1 (1.49)	
自己の属性 (自己叙述 的記述)	心的側面: 気質・性格	空地に捨てた 玩具	三日坊主の性格を例えて表した...	8 (11.94)
		お風呂	清潔好きを表した...	
	心的側面: 好み・趣味	大学図書館	よく空き時間を過ごす. スポーツより読書を好 む...	16 (23.88)
		リビング	自分が一番落ち着く場所. 日当たりが良 く...	
	心的側面: 願望・欲求	空	空のように自然な自分でいたい気持ち.	3 (4.48)
		畑	畑や木がたくさんあるのどかな所に住みた い...	
生活的側 面:生活習 慣・生活上 の事実	地元の駅	毎日ここから 75 分かけて大学へ.	15 (22.39)	
	私の家	毎日ここで生活している.		
時間的側 面:過去の 事実・過去 への態度	E 高校	私が 3 年間過ごした高校. 思い出が作られた 場所...	12 (17.91)	
	実家	自分が育った家を表現した...		
全体的な自 己について の規定	(アナロジ ーを含む)	山	いろいろなものを見ている時の私...	6 (8.96)
		F 海岸から見 た海	友達は広く浅くより狭く深くを好む...	
自己への感 情・評価・ 願望など	対自感情・ 評価	空と花	空を見ると悩みも小さく... 私は小さいと 感じる.	2 (2.99)
		夕日	夕日を見た時に毎日感じる... 生きる事 のはかなさ...	
合計				67 (100.0)

注)度数の上位 3 位までをゴシック体で示した。高垣(1974)の“関心・好み・趣味”を本研究では“興味・関心”と“好み・趣味”の 2 つのカテゴリーに分けた。

表 6-1-3. 物写真の表現内容にもとづく分類と記述例

	分類カテゴリー	被写体の例	説明文の例 (一部は抜粋)	度数(%)
社会係留的 記述 (合意的 記述)	姓名	ハンコ	中学・高校と使っていた. 名前を持った自分.	3 (1.28)
		ノートなどの 名前	G という名前を持つ人間で... 唯一の存在 である自分.	
	出生順位・ 家族構成	家族写真	娘としての私と妹としての私がいる.	1 (0.43)
	世代	祖父母に抱か れた母親の写 真	先祖から受け継いだ体, 思いを背負った 私... 先祖との繋がりや自分の存在理由... 命を繋ぐ存在としての私.	1 (0.43)
	民族・人 種・国籍	パスポート	外国に行くとき自分が日本人であることを強 く意識する.	1 (0.43)
	特定の集団 への所属	制服と学生証 預金通帳	大学の学生であることを表した... クラブで会計をしている.	7 (2.99)
準合意的 記述	生物,動物, 地球人など	地球儀	私が宇宙に浮かぶ地球で生まれた生物であ ること...	1 (0.43)
自己の属性 (自己叙述 的記述)	身体的側 面:健康・ 体質	ストーブ	寒がりです毎日前に座って... これなしに生 きていけない	2 (0.85)
		ストーブ	私はちょーちょー寒がりなのでこれがない と死にそう...	
	心的側面: 気質・性格	石鹸	綺麗好き.	33 (14.10)
		自転車	面倒くさがりの自分	
	心的側面: 興味・関心	ペットボトル	リサイクルに関心... 地球環境のため一番 興味を持ってる	8 (3.42)
		手話の本	以前から興味があった手話を習っている.	
	心的側面: 好み・趣味	MD コンポ	愛用している. 音楽が好きで毎日必ず聞いている.	69 (29.49)
		花	自然が好きなのを表した.	
	心的側面: 願望・欲求	バレエ公演の 広告	小学校の時から憧れであり, 夢. 夢を持 っている自分.	14 (5.98)
		ロンドンのも の	アイルランドのビール等, 今一番訪れたい国. .	
	心的側面: 主義・意 見・その他	ズボンとジ ーンズ	スカートを 1 枚も持っておらず, いつもズ ボンをはいている.	8 (3.42)
		手帳	手帳は綺麗に書く. 普通より大きめの手帳. . .	
	社会的対人 的側面: 家族関係	ペットの犬	私が小学 5 年から育てている... 大切な家 族.	8 (3.42)
		母との写真	私にとって最大の存在のお母さんとの写真.	
	社会的対人 的側面: 友人関係	友達との写真	手帳に入れている友達と写っている写 真... とても大切な存在...	1 (0.43)
生活的側 面:生活習 慣・生活上 の事実	プリクラ	出かけた時よく撮るプリクラ... 手帳はプリ クラだらけ.	34 (14.53)	
	TV	いつもTVばかり見ている. TVはまさに私の生 活の一部.		
	時間的側 面:過去の 事実・過去 への態度	アルバム		言うまでもなく自分の歴史がぎっしり詰ま ったアルバム.
時間的側 面:過去の 事実・過去 への態度	SMAP の CD	中・高時代はまっていた... 私の青春時代 の一部でもある.	18 (7.69)	
	日記帳	この日記帳は... 私の心の中を表している.		
全体的な自 己について の規定	(アナロジ ーを含む)	一輪の水仙	孤独を感じた時の私. 頑張ってる咲いてい る涙を流し...	25 (10.68)
		合計		234 (100.0)

注) 度数の上位 3 位までをゴシック体で示した。高垣(1974)の“関心・好み・趣味”を本研究では“興味・関心”と“好み・趣味”の 2 つのカテゴリーに分けた。

6.1.2 20 答法と自叙写真法の表現内容の比較

表 6-1-4 には総数 395 枚について、分類された枚数の多いカテゴリーから順に 5 位までを示した。また自叙写真法と TST の回答結果を比較するために、高垣 (1974) による TST の結果も同様に 5 位までを掲載した。表 6-1-4 より、両者で共通するのは“気質・性格”と“関心・好み・趣味”の 2 つのカテゴリーであるが、TST では気質・性格に分類された反応が最多であるのに対し、自叙写真法では関心・好み・趣味への分類が最多となっている。

この他、TST では“対人態度”“對自己感情・評価”“学校・学生・学年”のカテゴリーが上位に挙がっているが、自叙写真では“日常生活習慣・生活上の事実”“全体的な自己についての規定”“過去の事実・過去への態度”となっており、TST と自叙写真法では表現されやすい内容の違いが見られる。なお、高垣 (1974) のカテゴリーの中で TST では比較的回答数が多いにもかかわらず本章の自叙写真の分類で使用されなかったカテゴリーは、合意的記述 (Consensual Response) に属する“人間”“性”“年齢・生年月日”であった。

表 6-1-4. 20 答法および自叙写真法において回答数の多かったカテゴリー

順位	20 答法		自叙写真法	
	カテゴリー名	度数 (%)	カテゴリー名	度数 (%)
1	気質・性格	415 (20.75)	関心・好み・趣味	103 (26.08)
2	対人態度	160 (8.00)	日常生活習慣・生活上の事実	69 (17.47)
3	関心・好み・趣味	159 (7.95)	気質・性格	46 (11.65)
4	對自己感情・評価	105 (5.25)	全体的な自己についての規定	34 (8.60)
5	学校・学生・学年	91 (4.55)	過去の事実・過去への態度	30 (7.59)

注) 20 答法のデータは高垣(1974)による。20 答法での総回答数は 2000、自叙写真での総回答数は 395。自叙写真法の「関心・好み・趣味」は、表 6-1-1～表 6-1-3 の「興味・関心」と「好み・趣味」の 2 つのカテゴリーへの回答数の合計を示した。

6.1.3 研究参加者の自由記述からみた表現内容

研究参加者が“12 枚の写真が自分を表現している程度”をまとめ、結果について自己分析した記述内容から、自叙写真で“撮影したもの”と“写真によって表現されたもの”に関する部分をまとめて表 6-1-5 に示した。撮影したものに関する記述を見ると、“身のまわりのもの”“身近なもの”“ありのまま”“生活”“自分に関係する”“好き”“関心”“かけがえのない”などの言葉が並んでいることが分かる。

表 6-1-5. “撮影したもの”“表現されたもの”についての自由記述の内容

No.	撮影したもの	表現されたもの
1	自分の身の回りの人や物を撮った.	自分. (どの写真を見ても自分が思い浮かぶ. 私が私なりにいっぱい表現されている).
2	私が育ってきた環境や影響を受けた出来事に関係あるもの. 私を表す上でかけがえないもの.	
3		自分の視点から見た内面的な自分(好奇心や思っていること). 他人から見る自分(几帳面, 明るい)はほとんど表されていない.
4		どの写真を見ても幼い性格に結びついている.
5	自分に関係あるものを撮っていけば表現できると思った.	
6	私の好きなもの, 好きなことを写せば一番よくわかる.	
7	ありのままの自分. 休みの時の自分の生活を中心に撮った.	
8		過去の私に対するイメージ. 19歳の時期の環境や思い出. 性格.
10		写真を見れば大まかな私の性格がわかる.
12	身近なもの.	
13		写真は自分の心の内をとともよく表している.
15		12枚の写真を通してまず表したかったのは“幼さ”である. 外見・幼さ・夢. 私自身を表す. このうち何が欠けても自分ではない.
17		目を通して写される被写体は私そのもの. 一番気になる自分しか現れてこなかったので, 自分自身に対する偏ったイメージ・興味の集中が示された.
18	私を取り囲んでいるもの.	性格.
21		自分の内面のあり方を最も大切にし, 重視しているということ.
22	クラブ・バイト・趣味という3パターンと母.	
24	私の好きなこと, 物, 風景.	食う・寝る・遊ぶの3大欲求が基本. ありのままの自分.
26	私の生活そのものを写した.	性質.
27	自分の性質にあてはまるものを撮った. 自分の周りにあるものや持っているものでその人がどういう人なのかわかる.	
28		性格.
30		住んでいるところや学生という表面的なこと. 内面的な性格を表すのは難しかった.
31	一日の生活. 特別でない日の朝から夜まで時間とともにありのままの自分を撮る. 普段何気なく見ている周りのものや人.	
32		性格.
33	身の回りのものや集めているもの. 関心を持っているもの.	好きなものの傾向. 今の私.

注) “撮影したもの”“表現されたもの”を記入していた研究参加者のデータのみを掲載.

これより、研究参加者は普段生活している環境の中から自分自身に関係しており、かつ関心や好意を持つ自分を表す上で重要な対象を被写体として選んでいると言える。また、表現されたものについての記述からは、研究参加者の多くが自叙写真は研究参加者自身の内面（e.g. 性格・性質・傾向・イメージ・心の中など）を表現していると捉えていることが分かる。

本章の結果をまとめると、表 6-1-4 に示したように自叙写真によって表現される内容は“関心・好み・趣味”“日常生活習慣・生活上の事実”“気質・性格”という 3 つのカテゴリーへの分類が総撮影枚数の 5 割を超えた（218 枚、55.20%）。従って、研究参加者にとって好ましく興味や関心を持っている対象、日常生活の中で繰り返される行動や具体的な事実、気質や性格に関係する対象が自分を表現するものとして選択されたことが分かる。さらに人物・場所・物という被写体のカテゴリー別に表現内容を見た場合には、人物カテゴリーでは友人関係、場所カテゴリーでは過去の事実・過去への態度、物カテゴリーでは気質・性格に分類される写真も多かった（表 6-1-1～表 6-1-3）。すなわち、被写体の違いに関わらず自叙写真で表現されやすいのは研究参加者の好み・趣味あるいは日常生活習慣・生活上の事実といった自己の側面であるが、これら以外にも人物は友人関係といった社会的対人的側面を、場所は過去といった時間的側面を、物は気質や性格といった心的側面を表現する対象として選択されやすいことが分かる。また、自由記述の結果からはこれら自叙写真の表現は、性格・傾向・イメージ・心の中といった言葉で代表されるような研究参加者自身の内面を示すものとして捉えられていることが分かった。

TST と自叙写真法では表現されやすい内容に違いが見られた。TST では気質・性格や対人態度が表現されやすいのに対し、自叙写真法では関心・好み・趣味や日常生活習慣・生活上の事実といった内容が表現されやすいと言える。これらを表現の抽象度から考えると、気質・性格や対人態度は比較的抽象度の高い心的側面であり、関心・好み・趣味や日常生活習慣・生活上の事実は具体的な行動的側面と考えられることから、TST では抽象度の高い自己叙述が出現しやすく、自叙写真には具体的な自己叙述が出現しやすいといえる。これは、表 6-1-5 に掲載されている研究参加者 No.30 の“表面的なことは表せたが内面的な性格を表すのは難しかった”という記述からも示唆される。

6.2 自叙写真の表現の特徴

なぜ TST と自叙写真法では表現されやすい内容が異なってくるのだろうか。以下では、自叙写真の表現の特徴について具体例を挙げながら検討する。また TST と自叙写真法の回答事例を比較することによって、TST と自叙写真法の違い、自叙写真によって何が分かるのか、さらに自叙写真法が自己研究の方法としてどのように有用かについて考察する。

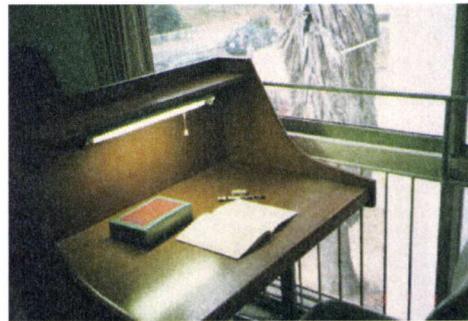
6.2.1 自叙写真の表現の具体例

場所の写真で日常生活習慣・生活上の事実を表現した例

図 6-2-1 は、場所を写した自叙写真が日常生活習慣・生活上の事実を表現する例である。このように自叙写真は個人の生活環境についての現実の情報を伝えるものであるが、同時に個人と特定の場所との情緒的な絆を示すものでもある。日常生活で繰り返し出会う風景や場所や建物は、次第に知覚者にとって心理的に近いものとなる。自叙写真は、日常生活の中では習慣化されてほとんど意識されることのない個人と周囲の環境との間に形成された情緒的絆を表現するという特徴がある。



<事例 1>A 駅:ここから B 分かけて大学へ。田舎娘の私。



<事例 2>私の仮眠場所:私は授業の空き時間によく図書館に行く。と言っても、日のよくあたる場所で昼寝をすることが多いのだが...。寝るにしても本を読むにしてもよく集中できる。落ち着く場所である。

図 6-2-1. 場所が日常生活習慣や生活上の事実を表す自叙写真の例

場所の写真で過去という時間的側面を表現した例

図 6-2-2 は特定の場所が個人の過去を表現している自叙写真の例である。当人以外には何ら特別な意味を持たない場所が個人にとって重要な意味を持ち、

固有のエピソードや感情を伴って表現されていることが分かる。このように自叙写真には、個人の極めて私的なエピソードや感情が表現され、了解可能な形で見る者に伝わるといった特徴がある。



＜事例3＞近くの自動販売機：幼稚園から高校まで一緒にの幼なじみがいる。中学校からの帰り道の途中のこの場所で、クラブ帰りで寒くて暗い日も疲れてしんどい日も3人でずっとおしゃべりした思い出を表したかった。一人の子が角を曲がって帰る分かれ道の思い出の場所。今よりもっと汚い場所。あの頃は誰が言い出したわけでもないが、ここに立ち止まり長話をしたのを思い出した。

図 6-2-2. 場所が過去を表す自叙写真の例



＜事例4＞C球場：できるだけ多くの緑が残っている部分を探して撮った。毎年1回は行って、小さい頃、野球の好きな父親によく連れて行ってもらったことを思い出しながら撮った。野球を見に行き、様々な出会いや感動を表そうとした。よく行っていたのに、球場だけを撮ったことがない。驚いた。賑やかな時期が球場らしいが、寂しそうな球場もまた好き。

物の写真で気質・性格などの心的側面を表現した例

図 6-2-3 は、身近にある具体的な物を通じて自身のパーソナリティを表現した自叙写真の例である。



＜事例5＞引出しの中：ぐちゃぐちゃになっているのを表した。たまに片付けるがすぐぐちゃぐちゃになってしまう。男っぽい雑な性格。



＜事例6＞入れ物：レストランから貰ってきた砂糖や割り箸をためている入れ物。ただで貰えそうなものは自分では買わない。そういうちゃっかりしている私を表した。とても役立って経済的にも助かっていると思う。自分のためになるものは置いておくしっかりしているところもある。

図 6-2-3. 物がパーソナリティを表す自叙写真の例

写真には被写体となる具体的な事物が必要であるため、自叙写真を用いてパーソナリティのような実体のないものを表現する場合、パーソナリティ概念と結びついた典型的行動を写すか、もしくは類推や象徴といった表現を採らざるを得ない。このような事例では、自叙写真には具体的な行動レベルで個人のパーソナリティについての認知が表現される。同時に、その人の独自の自己関連世界を表現するものになる。

また、図 6-2-4 は植物という具体的な物を通じて自分、特に自分の感情や自己イメージを類推あるいは象徴的に表現した例である。このように、言語では表現しにくいような自己についての私的なイメージが、身近な対象を通じて自叙写真に表現されることがある。



<事例 7>一輪の水仙:孤独を感じた時の私。がんばって咲いているが涙を流しそうだ。



<事例 8>枯れたつた:苛立ちを感じたりストレスがたまっている私。

図 6-2-4. 物が自己イメージを表わす自叙写真例

以上のような事例からは、我々が周囲の環境に存在している事物と関わる中で生じてくる感情、エピソード、イメージに関連する対象が自叙写真に写し出されていることが分かる。このように自叙写真に感情、エピソード、イメージが表現される理由として、写真という表現手段の具体性・現実性を挙げることができるだろう。この景色が美しいとかこの食べ物が美味しいと感ずること、この人がかけがえのない人であるという思いは、実在する対象との関係において体験され、記憶されてゆく。自叙写真はそれら具体的な対象を写すことを通じて、その対象にまつわる感情、エピソード、イメージを表現し、その人固有の意味ある世界を構成する手段となると考えられる。環境内の無数の事物の中から自分に関係するとして選ばれた自叙写真の対象は、個人の実際の生活世界

の情報を伝えるとともに、その個人にとって意味ある世界を伝えるものとなるのである。

WAY や TST はこれまで自己研究における個性記述的アプローチとされてきたが、この方法ではしばしば「私は〇〇です」という自分に関する抽象度の高い概念化された叙述が出現する (cf. 松原, 1999)。個人についてより具体的で詳細な事柄が記述される場合もあるが、WAY や TST にこのような抽象度の高い概念化された叙述が多く含まれる場合には、回答からその人に関連する具体的なエピソードやエピソードにまつわる感情を読み取ることは難しくなる。

このようなことから、WAY や TST では個人を概念的に把握することはできても、現象学的理解や人生に対する物語的な理解は難しいという指摘がなされることもある (辻, 1993)。つまり、個人を現象学的・共感的に理解するには、抽象的で概念化された記述ではなく、例えば小説家が登場人物の特徴をエピソードの累積によって描写したり、臨床家がクライアントの体験を具体的なエピソードから理解したりするように、体験が情動を伴った具体的エピソードとして伝達されることが不可欠であるという。本章第 2 節で示した 8 つの自叙写真の事例は、自叙写真法によって質問紙法よりもさらに多くの“その人らしさを伝える情動を伴った具体的エピソード”が表出される可能性を示すものであり、ここに自己研究の方法としての自叙写真法の有用性があると考えられる。

6.2.2 20 答法と自叙写真法の回答事例

撮影者の視点からその人の自己関連世界を捉えるという自叙写真法の目的に最もよく沿った分析とは、個人の自叙写真を事例として見てゆくことであろう。本研究への参加者のうち、26 名がほぼ同時期に自叙写真の撮影と TST への回答を行った。この 26 名の中から、自叙写真集についての個別のインタビューに参加した A の協力を得て、TST と自叙写真法の回答を比較する。2 つの方法で得られた回答を事例として示し、対照させることによって自叙写真法で得られる回答の特徴やこの方法の有用性をより具体的に示すことを試みる。

表 6-2-1 には A の TST の回答を、表 6-2-2 には自叙写真の被写体と表現内容を示し、併せて TST の分類カテゴリー (高垣, 1974) にもとづいて分類した結果を記載した。また、図 6-2-5 として A の自叙写真集を掲載した。A は TST の叙述を 20 個、自叙写真は 25 枚を撮影している。これらをカテゴリー分類し

た結果、TSTでは“気質・性格”が最多であり（9個、45%）、次いで“関心・好み・趣味”（5個、25%）となった。自叙写真では“関心・好み・趣味”が最多であり（8枚、32%）、次いで“日常生活習慣・生活上の事実”“家族関係”となった（それぞれ5枚、20%）。なお、TSTでは最多であった“気質・性格”に分類される自叙写真はなかった。逆に自叙写真では“過去の事実・過去への態度”は4枚みられるが、TSTではこのカテゴリーに含まれる叙述はなかった。これより、両方法によって得られる表現内容が異なることがAの事例においても確認された。

表 6-2-1. A の 20 答法における叙述と分類結果

No	分類カテゴリー	叙述
1	心的 気質・性格	ガンコです。
2	心的 気質・性格	いいかげんなどころがあります。
3	心的 気質・性格	なかなか素直などころがあります。
4	心的 気質・性格	実は根暗です。
5	心的 気質・性格	お天気屋です。
6	心的 願望・欲求	ゆっくり休みたいです。
7	心的 願望・欲求	家でゴロゴロしたいです。
8	心的 願望・欲求	先生になりたいです。
9	心的 関心・好み・趣味	バレーが好きです。
10	心的 気質・性格	さぼりグセがあります。
11	心的 気質・性格	やる時にはやります。
12	心的 気質・性格	情に弱いところがあります。
13	心的 気質・性格	さみしがり屋です。
14	生活 日常生活習慣・生活上の事実	よく食べます。
15	心的 関心・好み・趣味	甘い物が好きです。
16	心的 関心・好み・趣味	映画を観るのが好きです。
17	心的 関心・好み・趣味	最近、女の人の歌が好きです。
18	社会 家族関係	妹と仲良しです。
19	身体 健康・体質	お酒を飲みたいのに、すぐに酔っぱらいます。
20	心的 関心・好み・趣味	バイクに乗るのが嫌いです。寒いから。

注) 分類カテゴリー欄の「心的」は心的側面、「生活」は生活的側面、「社会」は社会対人的側面「身体」は身体的側面の略。No.は記述順。

ここまで述べてきたように、TSTと自叙写真法はともに自己についての問いであることから、同一の分類カテゴリー（ここではTSTの分類カテゴリー）を用いて回答を分類することができる。しかし、個々の自叙写真や自叙写真集についての記述をみると、TSTの分類カテゴリーから得られる以上の情報が自叙写真やその記述に含まれていることに気づく。

表 6-2-2. A の自叙写真の被写体と表現内容および分類結果

No	分類カテゴリー	被写体	表現内容
1	生活 日常生活習慣・ 生活上の事実	私の宝物のプー	4年間毎晩一緒に寝ているプー。大分色あせている。
2	生活 日常生活習慣・ 生活上の事実	たこやき	2年間続けているバイト。
3	心的 才能・能力	私の作品(LEGO)	私のセンス。
4	心的 対人態度	ピアノの先生と書いた約束「さきしよ」	話すのが大好き。いつもレッスンよりしゃべってしまう。
5	心的 関心・好み・趣味	ネコグッズ。ねこにゃん	猫が好き。でも本物は怖い。
6	時間 過去の事実・過去への態度	中学時の部活写真	部活を頑張っていたとき。頑張っている自分が好きだった頃。
7	心的 関心・好み・趣味	世界史の本	世界史が好き。
8	心的 関心・好み・趣味	本の裏の落書き	友達と落書きするのが好き。
9	心的 願望・欲求	集中ケアセット	髪はツヤが命。サラサラヘアを目指す私。
10	心的 関心・好み・趣味	りぼん	近所に住む小さい友人から借りて未だに読んでいる本。この年で読んでいる人はなさそう。
11	心的 関心・好み・趣味	嫌いなもの	嫌いやし、自分は吸わないのに何故か持っているなど。
12	時間 過去の事実・過去への態度	セクシーパンサーセット	部活の先輩から誕生日にもらった。私やったら使いそうと思ってくれたのに違いない。
13	時間 過去の事実・過去への態度	高校の部活引退の時の色紙とお菓子のおまけのBちゃん	高校ではBちゃんと呼ばれていた。それで調子に乗って大量に集めたBグッズ。これはほんの一部。
14	心的 関心・好み・趣味	女子バレーの応援セット	女子バレーが好き。Cさんを見て部活を始めた。
15	心的 才能・能力	私の作品	特技。
16	心的 関心・好み・趣味	ゲームソフト	私の一人遊び。
17	生活 日常生活習慣・ 生活上の事実	筆筒の中身	未だに夏物と冬物を入れ替えていない。私のずぼらさ。
18	心的 関心・好み・趣味	ビューティ&ビーストのプレート	ディズニー大好き。
19	生活 日常生活習慣・ 生活上の事実	毎日の友	ほとんど離さない体の一部と化しているものたち。
20	社会 家族関係	母と夜中におやつ	おやつ好き。夜中でも食べる。母とは似たもの同士。
21	社会 家族関係	母と映画に行った記念	突然に思いついて2人でレイトショーを見に行った映画。似たもの同士。
22	社会 家族関係	妹とゲーム	妹と遊ぶのが大好き。
23	社会 家族関係	妹とゲーム	大笑い。
24	社会 家族関係	妹と私とおそろいパジャマ	妹と仲よし。パジャマはお揃いでしかも上だけ交換してある。2人ともアホなことが好き。
25	生活 日常生活習慣・ 生活上の事実	私の汚い度最高の部屋	掃除しない私。

注)分類カテゴリー欄の「生活」は生活的側面、「心的」は心的側面、「時間」は時間的側面、「身体」は身体的側面の略。No.は撮影順。



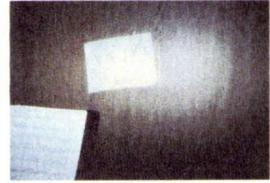
1. 宝物のプー(1位)



2. たこやき(12位)



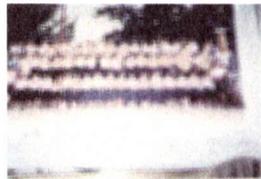
3. 作品(レゴ)(20位)



4. ピアノの先生と書いた約束「さきよ」(21位)



5. ネコグッズ(7位)



6. 中学時代の部活の写真(14位)



7. 世界史の本(15位)



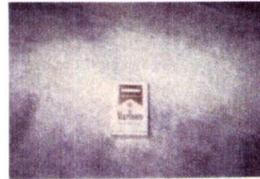
8. 本の裏の落書き(15位)



9. 集中ケアセット(13位)



10. りぼん(24位)



11. 嫌いなもの(17位)



12. セクシーパンサーセット(22位)



13. 高校の部活引退時の色紙とお菓子のおまけのBちゃん(18位)



14. 女子バレーの応援セット(19位)



15. 私の作品(3位)



16. ゲームソフト(23位)



17. 筆筒の中味(25位)



18. ビューティ&ビーストのプレート(8位)



19. 毎日の友(2位)



20. 母と夜中におやつ(9位)

図 6-2-5. A の自叙写真集



21. 母と映画に行った記念
(9位)



22. 妹とゲーム(4位)



23. 妹とゲーム(4位)



24. 妹と私のお揃いのパジャマ(4位)



25. 汚い度最高の部屋(11位)

図 6-2-5. A の自叙写真集(続き)

例えば、ともに家族関係に分類されている TST の回答の“妹と仲良しです”と、自叙写真での“妹とゲーム (22 枚目・23 枚目)”“妹と私とお揃いのパジャマ (24 枚目)”を対照させてみる。まず自叙写真をみると、妹とは二人並んで座って“ゲームをして”“大笑い”し、カメラに向かって二人で飛び上がってふざけることのできる関係であることが分かる。“妹と仲良し”ということが具体的な行為を通じて伝えられる。このような具体的な表現は、実体のあるものを通じて表現する写真を用いることでより容易になるだろう。

さらに、表情、動作といった非言語的表出や物の空間配置についての情報が得られることは自叙写真法の利点である。非言語的表出や空間利用は意図せず示されることも多く、個人の環境への関わり方について様々なことを伝える。非言語的表出や空間配置は言葉で説明すると冗長になりがちであり、時に言葉で表現することが難しい場合もあるため、質問紙では表現しにくく捉えにくいものと言える。この他、個人の理解に自叙写真が有用と思われるのは、写真を見る者に様々な感情やエピソードを喚起することである。例えば A の妹とゲームやお揃いのパジャマの自叙写真は、見る者に自分自身のきょうだい関係についてのエピソードを想起させ、きょうだいへの感情を喚起するだろう。第 1 章で述べたように、写真呈示の効果は写真という素材の持つ特徴の一つであるが、このような特徴ゆえに自叙写真を通じて回答者に対する共感的理解が促進され

ると考える。

次に自叙写真の表現内容の記述をみると、概ねいつ（いつから）・誰が（あるいは何が）・どこで・何を・なぜ・どのようにしたか、といった情報のいずれかが含まれていることが分かる。具体的な対象に関してこれらの情報を含めて語る時、そこには個人固有のエピソードが表現される（e.g. 妹とは“お揃いのパジャマ”を“上だけを交換して着る”という“アホなこと”を好んでする仲）。従って、自叙写真に表現される内容は TST から得られる表現よりも、より具体的にエピソード的なものとなるだろう。

逆に、抽象的・概念的表現については TST は自叙写真法よりも表現が容易であろう。例えば A の TST に多く見られる気質・性格（e.g. ガンコ、素直、いいかげん、根暗等）を自叙写真で表現したり伝達したりする際には、実体のないパーソナリティを具体的な対象で表現する工夫が必要になる。抽象的な概念を表現する際に、個人独特のイメージの表出が見られるという利点はあるものの、言葉のもつ微妙な意味までを写真で表現するのは困難かもしれない。

ところで、TST は性別や前半に合意反応（客観的事実）が、後半に非合意反応（主観的判断）が出現しやすいと言われており、Kuhn らは一連の叙述の中でこの 2 つの反応が切り替わる点をローカス・スコアと呼んで、これを回答者の社会的係留の程度を把握する指標とした。TST ではこのような反応の出現順序やその意味など、分析の観点がこれまでに幾つか提案されてきている。自叙写真法についても撮影順序やその意味について検討するなど、今後は分析の観点を様々に探索していく必要があるだろう。

最後に、自叙写真集についての個別インタビューの記録から“世界史の本”と“ビューティ&ビーストのプレート”を写した自叙写真についての A の語りを掲載する（図 6-2-6）。自叙写真の表現内容の記述内容からも具体的なエピソードを知ることができるが、写真を素材としてインタビューを行うことでさらに詳細な個人固有のエピソードを引き出すことができる。以下の A のインタビュー事例では、自叙写真をもとに想起された個人史とも呼ぶべき固有のエピソードが感情を込めて語られており、自叙写真が豊かな語りを引き出す素材となることを示すものである。



7. 世界史の本：世界史が好き。

これは私の、こっちの奥に写っている方の教科書が高校の時の世界史の教科書で、高校の時にね、中学校の時から世界史は結構好きやったんやけど、何か高校で良い先生がいて、もう、その先生のせいでよけいに世界史が好きになってしまっ。進路を迷ったくらい好きやっ。大学に入った時に高校の教科書とかは全部押入れの奥とかに入れたんやけど、これも奥の方に入れたんやけど、もう取れへんくらい奥の方に入れたんやけど、どうしてもやっぱり大学入ってから世界史やりたいなあとと思って、ファイルとかプリントとかは手元にあったから、それは取っという。でもどうしても教科書が欲しくて、これはもう無いとあかんと思って、知り合いの教科書屋さん譲ってもらって。ちょっとちょこちょこ読むみたいな、読んで思い出してどんなんやっつけ、ってプリント探して、もう、世界史が好きなんです。それでこの間、100円ショップでこの「ウラから覗く世界史」あって、もう即買い、みたいな。あつ世界史、世界史みたいな感じで。もうこんな私持ってたから、友達にえーって言われたけど。「何読んでるの」って言われたけど。でも私は好きで、すごく好き。



18. ビューティ&ビーストのプレート：ディズニーが好き。

これは、ディズニーの美女と野獣のプレートみたいなやつなんですけど。もう、ディズニー大好きで。ディズニーのミッキーとかそういうのが好きなんじゃなくて、ディズニー映画が大好きで。幼稚園の時とかピーターパンとかアリスとか観てて、めっちゃ好きやったけど、ディズニーということ知らなくて。でもね、Dオくらいの時に美女と野獣を初めて観て、すごい、この映画と思って。めっちゃ好きになって。で、よくよく考えたらアリスとかピーターパンとか小さい頃、めっちゃ好きやった映画がディズニーやったことを知って。もう、ディズニー映画最高、と思って。で、これが私のディズニー生活の幕開け。Eオの時に1回だけディズニーランドに行ったことがあって、もうすごく楽しくて。美女と野獣のものがどうしても欲しくて、なんか可愛いガラスのやつとこれを買ったけど、ガラスのやつが宅配便で送る途中で割れて。で、宅配便の人がごめんなさいってもう一回買ってきてくれたんやけど、それも割れて。もう無理なんや、無理なんやーと思って。もう、これだけが私のディズニーランド行った宝物みたいな。美女と野獣のものを買ったんやけど、これだけが残ってくれた。超大事で部屋のドアに飾ってあって、いつでも家を出る前に絶対に見れるみたいな。もう、本当に素晴らしい、素晴らしい。

図 6-2-6. A の自叙写真についてのインタビューでの発話例

6.3 第6章まとめ

第1節では、TSTの先行研究で用いられた分類カテゴリーを参考に395枚の自叙写真を表現内容にもとづいて分類した。この結果、自叙写真によって主に表現されるのは“関心・好み・趣味”“日常生活習慣・生活上の事実”“気質・性格”であった。表現内容を人物・場所・物という被写体のカテゴリー別に見た場合、“好み・趣味”“日常生活習慣・生活上の事実”の2つのカテゴリーの他に、人物カテゴリーでは友人関係、場所カテゴリーでは過去の事実・過去への態度、物カテゴリーでは気質・性格に分類された写真が多かった。

自叙写真に対する研究参加者の自己分析の記述から、被写体の多くは普段生

活している環境の中で自身が好み、愛着や関心を持つ対象であり、“好き”“大切”“関心”“興味”“愛”“尊敬”などの言葉で表現されるような感情や価値を含んでいること、自叙写真はこれらの対象をありのまま表現しており、さらに自叙写真に写された事物は研究参加者には自己の内面（e.g. 性格・性質・傾向・イメージ・心の中）を表すものとして捉えられていることが分かった。

TSTと自叙写真法の表現内容の比較では、TSTでは“気質・性格”に分類された反応が最多であるのに対し、自叙写真法では“関心・好み・趣味”への分類が最多であった。これより2つの方法から得られる表現内容に違いがあることが示唆された。

第2節では、研究参加者の自叙写真の中から事例を挙げて自叙写真による表現の特徴についてまとめた。また、同一人物に実施した自叙写真法とTSTを事例的に取り上げ、2つの方法について表現の特徴を比較した。TSTでは比較的抽象度の高い表現が得られやすいことを述べた上で、自叙写真にみられる表現の具体性や現実性、非言語的表現、見る者に感情やエピソードを想起させることを特徴として挙げた。また自叙写真をもとにした表現内容の記述やインタビューにより、個人の感情や固有のエピソードがより詳細に捉えられることを示し、共感的理解が促進される可能性を示した。以上の結果と考察を通じて自叙写真法の有用性を示し、従来の方法を補完する手段となり得ることを主張した。

第IV部 自叙写真法の適用の実際

第7章 自叙写真法の臨床現場への適用

7.1 自叙写真法の実施事例

カウンセリング等の臨床場面でクライアントが示す様々な表現は、その時点でのクライアントの状態を示すものとして、あるいは治療効果を確認するものとして注目され、その後の治療に活用される。様々な表現の中で写真という手段や素材がクライアントの自己表現の一つと見なされ、臨床現場で注目されてきたことは第1章で述べた。自叙写真については Comb & Ziller (1977) によるカウンセリングを受けた経験のある者と未経験者の比較や Ziller & Lewis (1981) による非行少年群と非行歴のない少年群との比較についての報告がある。これらは問題を抱えた人や支援を必要とする人が、自己を含む世界をどのように理解し経験しているかを自叙写真によって捉えようとする試みであり、自叙写真の臨床心理学的な視点からの活用例と言えるだろう。

以下では、本章の共同研究者である守山野洲少年センター（あすくる守山野洲）臨床心理士の小野好美氏の協力を得て、相談施設での継続来談中のクライアントに研究参加を求めた結果を報告する。本章での第1の目的は、自叙写真とインタビュー（被写体・表現内容・撮影された自叙写真が自分を表現している理由等についてのインタビュー）結果をもとに、クライアントの自己関連世界の特徴を記述してゆくことである。第2の目的は、クライアントは4名と少数であるが、自叙写真法の実施事例の報告を通じてこの方法の臨床現場での活用について検討することである。なお、Ziller らの研究では被写体の違いに着目した報告がなされているが、臨床実践を考える上では自叙写真の撮影という活動への取り組みや教示への態度もクライアント理解の一助になると考える。そこで、本研究では撮影活動に対するクライアントの感想等についても調べ、自叙写真という手法がクライアントにどのように受け止められたかについても報告する。また、自叙写真の撮影期間・撮影枚数・使用カテゴリー数については女子大学生の結果と比較しながらクライアントの自叙写真の特徴を検討する。

方法

研究参加者・実施期間・手続きの概要

研究参加者は相談施設で継続してカウンセリングを受けている 20 代前半の

男女4名（男性2名、女性2名）である。自叙写真の撮影依頼時点で平均約50回の来談があり、状態が安定して自叙写真の撮影が侵襲的でないと担当カウンセラーが判断したクライアントに研究への参加を依頼した。研究を始めるにあたり、本人および施設には研究目的やプライバシーの保護等について説明し、書面による同意を得た上で研究を実施した³⁵。

自叙写真の撮影依頼は約2か月間になされた。クライアントには研究への参加について同意が得られた時点で表7-1-1に示した説明文と27枚撮りのインスタント・カメラを手渡し、撮影終了後にはインスタント・カメラを返却するよう依頼した。

表 7-1-1. 自叙写真撮影についての手順と留意点の教示:臨床場面

「自分自身をテーマにした小写真集をつくる」

人は自分自身についていろいろなイメージを持っているものですが、あなたは自分自身のことをどのように思っていますか。写真で“あなたは誰であるか”を表してください。“あなたが誰であるか”“あなた自身が見るあなた”を表すものであれば、何を撮ってもかまいません。撮り終えると、自分自身をテーマにした小さな写真集ができあがることになるはずですが。撮影して下さった写真をもとに、いろいろなことを一緒に考えていけたらと思います。

「写真の撮り方と留意点」

- ①「あなたが誰であるか」を表すことだけを考えて写してください。写真は上手に撮る必要はありません。技術や写真の出来ばえのことは考えずに気楽に撮ってください。
- ②自分で撮ることができない場合は人に撮って貰っても構いません。
- ③撮影に失敗したと思ったら、撮りなおしても構いません。
- ④必ず12枚は撮って下さい。それ以上は何枚撮っても構いません。足りない場合は、フィルム(あるいはインスタント・カメラ)を購入しても構いません。
- ⑤一旦、撮り始めたら、そのフィルムは別の目的には使わないようにしてください。フィルムが余っても、構いません。
- ⑥本日以降、いつから撮り始めても構いませんが、最初の1枚を撮ってから2週間くらいをめどに撮り終えるように考えてみてください(期間延長も可能)。
- ⑦現像はこちらでしますので、撮影が終わったらカメラをそのまま持参してください(続いて研究者の連絡先の記載)。

撮影後、現像した自叙写真をもとに撮影や自叙写真に関する半構造化面接が実施された。半構造化面接の終了後、自叙写真はクライアントと担当カウンセラーとの共同作業によって台紙に貼付され、簡易製本した形で『自分自身をテーマにした小写真集』としてクライアントに返却された。なお、相談施設への事前説明と研究実施の許諾を得ること、同意書へのサイン等を含めクライアントへの説明と同意を得ること、クライアントへの撮影手順や留意点の教示、イ

³⁵ 本研究は、実施前に京都ノートルダム女子大学の倫理委員会に諮り、実施について同委員会の承認を得た上で実施した。

インスタント・カメラ等の撮影に必要な物品の授受、半構造化面接は担当カウンセラーにより実施された。

自叙写真の撮影と撮影後の半構造化面接

自叙写真の撮影と半構造化面接は、カウンセリングの支障とならないように通常のカウンセリング過程に組み込んで実施された。教示は表 7-1-1 に示したとおりであるが、ここでの手続きではクライアントの負担に配慮して研究参加者が単独で行う作業は自叙写真の撮影のみとした。すなわち、通常の手続きでは研究参加者は自叙写真の撮影ごとに被写体や表現内容等を記録用紙に記入し、撮影終了後に別紙の質問票に回答する（資料 4 参照）。しかし、これら記録用紙や質問票での問いは撮影後の半構造化面接での質問項目に含めて尋ねることにした。また、記録用紙に写真を添付して写真集を作成する過程は、半構造化面接の終了後にクライアントとカウンセラーが共同で作業したことは先述のとおりである。また、撮影枚数と撮影期間に関しては撮影枚数は通常の手続きと同様に“最低撮影枚数は 12 枚で上限なし”としたが、撮影期間については 2 週間をめどに期間延長も認めた。

半構造化面接での質問は、(a)自叙写真を提示する前の質問、(b)各写真を提示しながらの質問、(c)全写真を提示しての質問、(d)活動全体を振り返る質問、の大きく 4 つの部分からなる（資料 8 参照）。まず、(a)自叙写真を提示する前の質問では、撮影中の気分・撮影の面白さの程度・最低 12 枚を撮ることが容易であったか否か・27 枚で自分が表現できたか否かを尋ねた。これらは通常の手続きでは撮影後に記入する質問票に記載されている質問項目である。(b)各写真を提示しながらの質問では、自叙写真を 1 枚ずつ提示しながら被写体（何を撮ったか）、表現内容（何を表そうとしたか）等を尋ねた。これらは通常の手続きでは撮影者が写真 1 枚を撮影するたびに記録用紙に記入する項目である。(c)全写真を提示しての質問では、撮影された全ての自叙写真を机上に並べ、写真集への好悪・重要度の順位・重要度 1 位の写真がなぜ自分を表す上で重要なのかを問うた。これらも通常の手続きでは撮影後に記入する質問票に記載されている質問項目である。(d)活動全体を振り返る質問では、写真の提示はせず、撮影

を通じて思ったことや感じたことを尋ねた³⁶。

以上の質問はクライアントの状態に合わせて適宜、数回の面接の中で実施された。インタビューである担当カウンセラーには資料8に示したような振り返りシートや記録用紙を手渡し、これに沿って面接を進めるように依頼した。また、面接中は研究参加者の回答に応じて質問順序などを調整することや、楽しみながら撮影活動の振り返りができる雰囲気づくりを依頼事項に含めた。

クライアントの概要

今回のような少数の事例から、疾病や障害の何がどのように自叙写真に反映されるのかを検証することはできない。むしろ疾病や障害を抱えながら生きる個人が自己や自己を含む世界をどのように捉えているか、という観点から4名のクライアントの自叙写真集とインタビュー記録を検討したいと考える。ただし、このような観点からクライアントへの理解を試みる際にも、クライアントの疾病や障害と自叙写真集の特徴とを対応させて考えてみる必要はあるだろう。以下に4名のクライアントの概要を示す³⁷。

A(20代前半 男性 アルバイト)：統合失調症。高校時に集中困難等を理由に欠席がちになり、やがて気力減退を訴えて退学。一時期、衝動的な器物破損や肉親への暴力行為があった。退学後、加療・休息期間を経て高校夜間部に入学。昼間勤務をしながら高校に通っていたが、部で暴力事件を起こし再び高校を退学。就業面では突然に退職・復職・転職したり、学業面では高校を再受験したりする等、短絡的かつ楽観的な見通しにもとづいて衝動的に行動し、のち後悔することが多い。

B(20代前半 女性 学生)：解離性障害。高校在学中、知人の加療を機に心身の衰弱と極端な成績の低下が生じた。その後は、試験等の出来事の度に情緒的・行動的に不安定になり、突然にビルの屋上から飛び降りようとする、主治医や家族に攻撃的になる等の行動化が生じる。卒業後は焦燥感から複数のアルバイトに就くが長続きせず、日常的に周囲を振り回す行動が続いたが、次第にアルバイト継続が可能になり、進学した。

C(20代前半 男性 無職)：知的障害と引きこもり。出生時から家庭の養育・保護機能が弱かった。小学校低学年で不登校となり、以降、学校教育を受けずに育つ。青年期になっても近隣に出かける程度で自宅に引きこもった状態であったことから、周囲が就業支援を開始した。

D(20代前半 女性 フリーター)：強迫性障害。幼い頃から自分の行動と考えとの間に違和感があった。高校在学時に辛くなり、自ら強迫性障害の疑いを持つ。強迫行動、強迫観念、打消しの繰り返しで集中困難と作業効率の低下が生じ、日常生活に支障を来すこともあった。卒業後は治療を優先して進学せず、アルバイトと医療機関での治療を開始した。学生時代には演劇部に所属し、最近、中断していた演劇活動を再開した。

³⁶ 撮影や面接についての自由な発言に加えて、“自分について考えた程度”“自分を表現する程度”“昔のことを考えた程度”“将来のことを考えた程度”“自分の周囲にある物について考えた程度”“自分の周囲の人々について考えた程度”を0～100のスケールで回答を求めた。

³⁷ プライバシーの保護のため、ここでの記載内容には部分的な変更を加えている。

結果と考察

7.1.1 撮影日数と撮影枚数からみた特徴

まず、4名の研究参加者の撮影期間、撮影枚数、使用カテゴリー数を表7-1-2にまとめた。表には第3章第1節で示した133名の女子大学生による撮影日数、撮影枚数、使用カテゴリー数の平均値も掲載している。研究参加者4名の結果と女子大学生133名の結果とを比較すると、まず撮影日数では女子大学生が平均撮影日数8.34日に対し、Aは21日、Bは72日、Cは14日、Dは120日となっている。いずれも女子大学生の平均値を上回る日数であるが、クライアントの撮影日数が長くなった理由として、通常のカウンセリング過程に自叙写真の撮影を組み込んだため来談の間隔によって撮影日数が影響を受けた可能性や、教示で“2週間をめどとするが期間延長は可能”としたことで撮影日数が長期化した可能性がある。ただし4名の中で極端に撮影日数の長いBとDについては、撮影が長引いた理由をそれぞれの自叙写真集を紹介する部分で述べる。

続いて平均撮影枚数と使用カテゴリー数について述べる。女子大学生の平均撮影枚数は14.36枚に対し、クライアントの撮影枚数はAが17枚、Bが4枚、Cが11枚、Dが8枚であり、Aを除いてクライアントの撮影枚数は女子大学生の平均を下回った。また、使用カテゴリー数は女子大学生の平均が7.65であるに対し、クライアントの使用カテゴリー数は4名とも7以下である。先の女子大学生の結果と比較すると、いずれのクライアントも撮影枚数に対して使用カテゴリー数が少なかった。この結果は、クライアントが同じカテゴリーに含まれる対象を繰り返し撮影したことを示すものである。

表 7-1-2. 研究参加者の撮影日数、撮影枚数、使用カテゴリー数

研究参加者	撮影日数	撮影枚数	使用カテゴリー数
A	21	17	7
B	72	4	2
C	14	11	3
D	120	8	4
女子大学生平均	8.34	14.36	7.65

注) 女子大学生平均欄の数値は N=133 のデータにもとづく(第3章参照)。

7.1.2 被写体の選択からみた特徴

4名は被写体にどのような対象を選択したのであろうか。表7-1-3には被写体を分類するための3つの上位カテゴリー（人物・場所・物）別の撮影枚数を示した。なお、表7-1-3では女子大学生のデータも併せて掲載している。

表7-1-3より、クライアントは4名とも人物は撮影していない。またAとBは全てが物を写した写真であった。第3章第1節で述べたように、女子大学生133名のうち人物や場所を全く撮影していない者は2割程度いたが、このうち被写体が全て物であった者は7名（5.26%）のみであった。人物を全く写さない者、特に物しか写さない者は女子大学生データの中では比較的少数であり、クライアント4名全員が人物を撮影していないことや、このうち2名が物の写真のみで自叙写真集を構成したことは、被写体の選択に見られるクライアントの特徴と言えよう。

表7-1-3. 被写体のカテゴリー別にみたクライアントの撮影枚数

研究参加者	人物	場所	物
A	0	0	17
B	0	0	3
C	0	4	7
D	0	6	2
女子大学生平均	3.97	2.56	7.82

注)女子大学生平均欄の数値は第3章1節のN=133のデータにもとづく。

表7-1-4には20の分類カテゴリー（人物3・場所3・物14）別の撮影枚数と被写体の詳細を示した。分類カテゴリーのうち撮影枚数の多いものを挙げるとAでは書籍と動物（それぞれ4枚）、Bでは食物（3枚）、Cでは書籍（6枚）、Dでは風景（6枚）となっている。女子大学生の結果では、物写真撮影者128名中で書籍を4枚以上写した者は5名（3.9%）、6枚以上写した者は1名（0.8%）であり、動物を4枚以上写した者は5名（3.9%）、食物を3枚以上写した者は3名（2.3%）であった。また、場所写真については撮影者103名中で風景を6枚以上写した者は2名（1.9%）であった。つまり女子大学生では書籍・動物・食物・風景のいずれの分類カテゴリーについても同一カテゴリーに含まれる対象を繰り返し撮影した者は少数であったのに対し、撮影枚数に対して使用カテゴリー数が少ない、すなわち同じカテゴリーに含まれる写真を繰り返し撮るこ

とは、この4名のクライアントの自叙写真にみられる一つの特徴といえる。

表 7-1-4. 場所写真と物写真の下位カテゴリー別にみたクライアントの撮影枚数

下位 カテゴリー	クライアント			
	A	B	C	D
場所				
部屋	0	0	0	0
建物	0	0	0	0
風景	0	0	(山 3, 道 1)4	(雨 4, 空 2)6
物				
日用品	(テレビ 1, パソコン 1)2	0	(将棋 1)1	0
音楽	0	0	0	0
運動	(野球グローブ 1)1	0	0	0
服飾	0	0	0	0
証明や記録	(アルバム 1)1	0	0	0
写真	0	0	0	0
置物	0	0	0	0
ぬいぐるみ	0	0	0	(うさぎ 1)1
書籍	(聖書 1, 地図 3)4	0	(漫画 6)6	0
リーフレット	0	0	0	0
動物	4	0	0	0
植物	0	0	0	0
食物	(サプリメント 1, スパゲティ)2	(アイスクリーム 3)3	0	(玉ねぎ 1)1
その他の物	(額 2)2	(化粧品のロゴ 1)1	0	

注) 数字は撮影枚数。

7.1.3 被写体・表現内容・表現理由・撮影への取り組み

クライアントの自叙写真を撮影順に掲載するとともに、担当カウンセラーによる半構造化面接の記録から“被写体（何を撮ったか）”“表現内容（何を表そうとしたか）”“写真が自分を表現する理由（なぜその写真が自分を表すのか）”の部分に要約抜粋して表に示す³⁸。また撮影時の気分・撮影活動への興味・撮影の過程で自己や周囲について考えた程度等、自叙写真の撮影という活動への取り組みや態度も表にまとめた。これらの結果を総合して、自叙写真集に表現されたクライアントの自己関連世界の特徴について考察する。

(1) クライアント A の自叙写真について

A は 17 枚（撮影失敗を入れると 19 枚）を撮影しており、面接での発話が多かったためか、記録も多い。この 17 枚を表現内容から見ると、宗教や信仰について語っているものが 7 枚を占め、うち 4 枚は聖書（書籍）を写したもので

³⁸ プライバシーの保護のため、自叙写真は絵画風に加工して示した。

あった。特に重要順位の1位から3位には宗教や信仰を直接表現した写真が選ばれた。表7-1-5からは、宗教や信仰を直接表現した写真は心の支え、イエスへの賛美、救済、御言葉、憧れ、希望等が表現内容となっていることが分かる。

宗教を直接表現しない対象、例えばテレビや犬や野球のグローブ等についても表現内容では宗教や信仰との関連づけが見られる。女子大学生133名の結果では、自らの信仰について明言している者は4名と少数であったが、この4名においても自叙写真集中に宗教や信仰を直接表現した写真や撮影対象を宗教や信仰に関連づけた記述が多数含まれるような例はなく、宗教や信仰を軸とした自己や世界の捉え方はAの特徴と言えるだろう。

動物(飼い犬)を被写体とした写真も4枚と多い。これらについては飼い犬への愛情や愛着が述べられるとともに、対象となった犬と自分の性格との間に類似点を見出している。また、犬EとFの写真の表現内容にある“恥ずかしい。友達と写真を撮りたいが犬と友達になっているから”や、野球のグローブ、テレビ、アルバム、スパゲティ等の写真の表現内容からも、Aにとって人との関わりは長く抱えてきた悩みであることが分かる。17枚の写真中で野球のグローブはAと他者との結びつきを具体化した物なのかもしれない。Aの対人関係における悩みは、自叙写真集に人物写真がないことと関係しているだろう。

この他の特徴として、野球のグローブ、テレビ、パソコンの写真については“考え過ぎる”“見過ぎる”“インターネットをし過ぎる”ことを律する生活態度が記されており、何かに没頭することで巻き込まれ自分を失ってしまうのではないかという恐れが表現されているように思われる。全体的には理想、聖なるものとして宗教や信仰関連の事物について重要性が語られる一方で、体を鍛える・テレビを見る・インターネットをする等、日常生活や個人の楽しみは希求しながらもそれらを楽しむことに対して克己的、批判的であると言えよう。



1. 犬EとF



2. テレビ



3. 犬G



4. 新約聖書

図7-1-1. クライアントAの自叙写真集

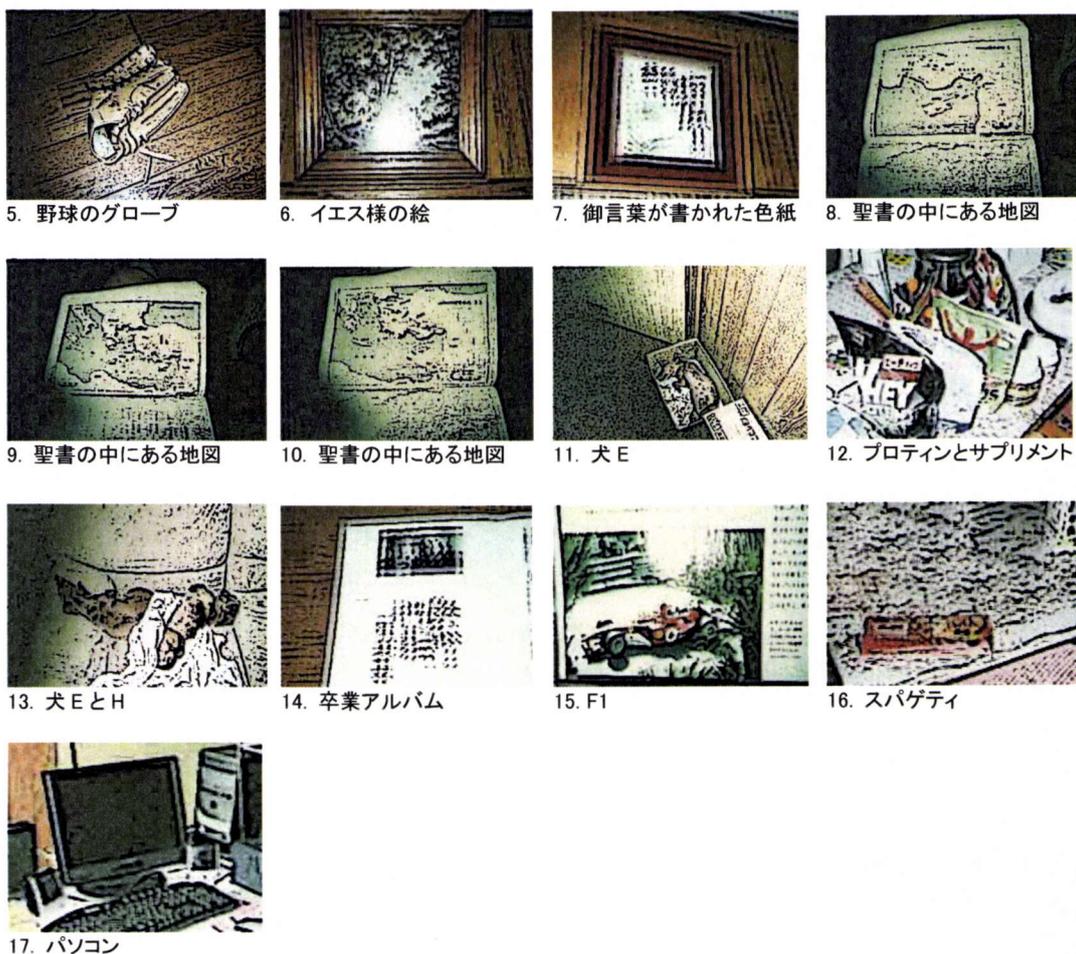


図 7-1-1. クライアント A の自叙写真集(続き)

表 7-1-5. クライアント A の自叙写真の被写体・表現内容・自分を表現する理由の概要

1. 犬 E と F (10 位)

愛着が湧く。かわいい。神様は命の重みを伝えるために動物を造ったのではないか。友達と写真を撮りたいが、犬と友達になっているから恥ずかしい。

2. テレビ (16 位)

本当はテレビの無い生活をしてみたい。テレビを見ている時にしゃべると「黙って」と言われる。それが辛い。テレビは反キリスト的なものが多い。昔、勉強しなかった時期があり、テレビを見ることは馬鹿だと言われるものだと思う。自分のコンプレックスを表した。テレビは流行りを表す。時代が変わるのを見たいのと、見たくないという思いがある。流行りに左右されたくない。テレビがあることでイエス様を見失うのではないか。

3. 犬 G (9 位)

大切にしたい。かわいい。自分と性格が良く似ていて、行き当たりばったりで何も考えずに行動する。だから愛着が湧く。よくなっている。とにかくバカだが憎めない、愉快的な犬。E から影響を受けている部分もある。誰とでも仲良くなりたいができない。E は誰にでもなつすが、面倒を見てもらえない。

4. 新約聖書 (2 位)

御言葉が自分の弱い部分を支えてくれる。生涯離れない正しい教えの書物。イエスを賛美したい気持ち。イエスがいるから幸せ。勇気づけ、戒めてくれる。これを見た瞬間に言葉は神だと思った。聖書は神様でもある。自分の弱点は立法的になるところ。こうしなければならないとか、それを打ち破ったのがイエス。これがないと自分はもたない。腹が立つ時、悔しい時、寂しくなった時、これがすべて。

表 7-1-5. クライアント A の自叙写真の被写体・表現内容・自分を表現する理由の概要(続き)

5. 野球のグローブ (5 位)

高校中退してすぐ買ったグローブ。病気になった時これを持って通院し、これを見るしかなかった。必需品。今でも使っている。とにかく大事で心安らぐもの。野球はうまくないけれど大好き。勇気づけてくれたもの。このグローブも野球をしたいという気持ちも、イエス様が与えてくれた。でも考えすぎると病気になるので「あっ、神様だ」くらいで良いと思う。学校でも人となじめなかったが、こんな僕でも一緒に遊びたいとグローブは主張してくれる。病気と共に歩んできたが、あの時は本当に辛くするものがなかった。これからは何年たっても使っていきたい。グローブは僕の人生。

6. イエス様の絵 (3 位)

イエス様と弟子たちの絵。救って欲しい自分。イエスはこんな僕でも信じているということを表したかった。

7. 御言葉が書かれた色紙 (1 位)

自分ももっと愛をもって接したら祝福がくるのではないかと思った。このような分かりやすい御言葉が好き。苦しんでいるうちに御言葉にたどりついた。

8~10. 聖書の中にある地図 (13~15 位)

聖書の地図。ギリシャ、イスラエルなど弟子たちが旅した所。自分探しの旅に出たい。こういう所を旅してみたい。昔、地図を見て想像するのが楽しかった。イスラエルに行ってキリストの発信地を肌で感じてみたい。

11. 犬 E (12 位)

F はいつも単独行動。抱こうとすると怒るし、他の犬と離れている。そこが自分の性格と似ている。僕も中学や高校のときはぐれていたので。

12. プロテインとサプリメント (6 位)

これを撮ることによって、恥ずかしいけど鍛えているぞ、みたいな事を表したかった。小さい頃は筋肉がなかった。中学から鍛え始め、高校でキャッチボールが出来るようになった。まだ成長できることを表したかった。行動力がないのが自分の葛藤でもある。野球仲間ができ、野球のために必要だから体力をつけないと。

13. 犬 E と H (11 位)

寝ているところが面白い。こんな面白いところも自分にはあるかも。自分も犬みたいな面がある。犬は喜ぶと尻尾を振って徘徊する。自分も楽しいと歩き回る。

14. 卒業アルバム (7 位)

この学校には思い入れがある。今までで一番楽しかったのは小学校。友達もたくさんいたし一緒に遊んだ。恋しくなって撮った。アルバムに載っている言葉が自分にとってはカンフル剤。エネルギーになる。

15. F1 の写真 (8 位)

自分の趣味を撮った。F1 のファンなので。

16. スパゲティ (4 位)

スパゲティが好き。食事は生活の一部。恥ずかしいけどイタリアに憧れる。日本でもイタリアの生活をしたい。スパゲティは家族みたい。1 本 1 本が束になっていて 10 本抜けたら少なくなる。家族も一人抜けても成り立たない。色々な種類のパスタがあり、作り方も違う。人間と同じだなと思った。

17. パソコン (17 位)

インターネットで野球選手の個人成績を見る。楽しみの一つ、生活の一部。それほど大事なわけではない。少しだけ世の中を知りたい。時々政治のことも見たりする。あまりパソコンに縛られても怖い。

注)表中、ボールドは撮影順と被写体。()内数字はクライアントが自分を表す上で重要と判断した順。

表 7-1-6 に示した撮影への取り組みや態度については、(a)写真を提示する前の質問によると“無関心を装いたいが”“どちらかというと”“これが撮りたいというものがなかったの”と述べて撮影活動には一定の距離を置きつつも、“自分をアピールできて楽しかった”“面白かった”“自分を表すことができた”と肯定的な態度が報告されている。

また(d)活動全体を振り返る質問でも、内省しながら活動に真摯に取り組んだことが記録されている。そしてここでもまた、人に“合わせ過ぎる”ことで自分を失う恐れについて言及がある(周囲の人について考えた程度の記述部分)。病を抱えながら生きるAにとって、他者を含め何かの対象や活動に深く関与することと自分らしさを保つことを両立させる難しさが自叙写真を通した語りの中で繰り返し表れているように思われる。

表 7-1-6. クライアント A の撮影への取り組みや態度の概要

a) 写真を提示する前の質問	
撮影時の気分	無関心を装いたいが、自分の興味があるものを撮りたかった。自分をアピールできるので楽しかった。楽しいと言えるほど楽しいというわけではないが。
撮影の面白さ	どちらかというと面白かった。
撮影枚数について	これが撮りたいというものがなかったので、結構大変だった。何を撮るのか考えるのが難しかった。間違っても変なものを撮るのもいけないだろうし。自由には撮れたが、始める前はあまり興味がなかった。やっていくうちに、いろんなものが撮れるな、こういうものを撮ればいいんだと思った。27枚で自分が表現できたかは人が評価することだと思う。自分としては表わすことができた。
c) 全写真を提示しての質問	
写真全体の感じ	一言で言うと方向性が定まっていない。これという写真がない様に思う。好きな度合いは 50。めちゃくちゃ好きなわけではない。まあまあ。
重要 1 位の写真が自分を表す理由	生涯残る御言葉を見つけたらいいと言われた。この言葉がぴったり当てはまった。この御言葉は自分にはなかったことだと思う。愛が足りない人生だった。聖書でも隣人を愛しなさいという言葉があるように、家族をもっと愛さないといけないと思う。やはりイエス様を第 1 位に 1 位、2 位、3 位とした。その次に自分の好きなことを考えた。
d) 活動全体を振り返る質問	
自分について考えた程度	100。普段考えないので多少は考えるが、ノローゼになるまで考えないので普通だと思う。最近になって考えたほうが良いと思う。
自分の表現程度	70。自分を表すという意味が神様が僕を作ってくれたので 1 位、2 位、3 位となった。後は自分の好きなものを撮ったが、うまく表せたか分からない。でも大体は表せた。
昔を考えた程度	80。15歳の時のことを考えた。テレビもF1も数年前のもの。友達とのふれあいが無い青春だった。少し寂しかった。でもここで話していると自分の事も言えたりする。
将来を考えた程度	100。このまま、こういう写真のままでは駄目だと思った。テレビの見すぎは恥ずかしい。今は仕事が終われば直ぐテレビ。もっと友達を作る行動に移さねばならない。
周囲の物を考えた程度	50。あまり意識していなかったので考えるのに苦労した。
周囲の人を考えた程度	100。父について考えた。家族の見方が変わった。自分中心から人を受け入れることが出来るようになった。今までそれがなかったから友達もできなかったのかな。100 だけど、あまり人に合わせると自分がなくなってしまうから怖くもある。
全体的感想	少し大人になったかな。自分を客観的に見られるようになった。大きなことだと思う。

最後に(c)全写真を呈示しての質問において、A自身は写真全体を“方向性が定まっていない”と評価したが、一連の写真には以上で述べたような幾つかの

特徴を見出すことができる。A自身が自叙写真全体を俯瞰した際、そこに一貫したテーマや物語を見つけられていないとするならば、今後、これらの自叙写真を自叙写真集として見るように促す試みは、自身の人生のテーマや物語の発見のために役立つかもしれない。

(2) クライアントBの自叙写真について

Bは撮影に72日間を要したが撮影枚数は4枚と少ない。担当カウンセラーによると、“撮影する”と言いながら日延べを繰り返し、最終的に12枚を撮影できなかったとのことである。これは自叙写真の撮影に対してBの関与が低かったということではなく、撮影にあたってBの“決められなさ”が目立ったと言う。撮影された4枚中3枚はアイスクリーム（食物）を写したもので、3枚とも同じアングルで複製に見えるほど良く似ている。

写真の表現内容等についての記録は少ない。このような量の少なさがBの自叙写真による表現の特徴である。表現内容をみると“可愛い”“美味しそう”“良いなと思った”“あっ、アイスクリームみたいな感じ”“漠然と好き”等、感覚的な記述が目立つ。そして“好きなものを撮っただけで自分を表すものではない”と述べ、興味を惹かれ好ましいと感じる対象と自分とを関連づけるような自己認知がなされていないことが分かる。

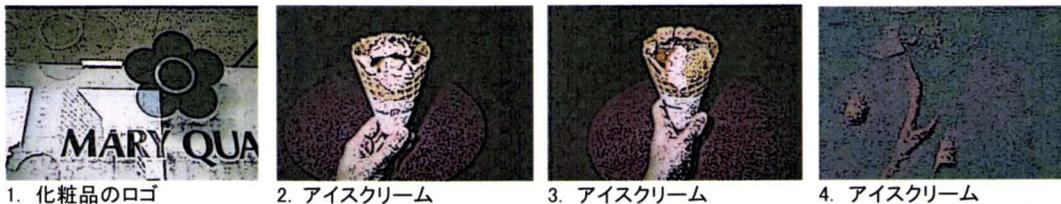


図 7-1-2. クライアントBの自叙写真集

表 7-1-7. クライアントBの自叙写真の被写体・表現内容・自分を表現する理由の概要

1. 化粧品のロゴ (2位)

自分が可愛いと思ったもの。自分が良いなと思ったもの、撮ってみようと思ったものを表した。好きなものを撮っただけで自分を表すものではない。洋裁でロゴを使おうと思ったから撮っただけ。

2~4. アイスクリーム (1位, 3~4位)

店で売りだっただけのものを買って可愛かったから写真におさめた。美味しそうな食べ物。「あっ、アイスクリーム」みたいな感じ。漠然と甘い物が好きだし、パフェやアイスクリームは可愛いイメージがあるから撮った。自分の中のものを表しているかと言えば違う。食物が好きなので食物に目が行く心理もある。

注) 表中、ボールドは撮影順と被写体。()内数字はクライアントが自分を表す上で重要と判断した順。

表 7-1-8. クライアント B の撮影への取り組みや態度の概要

a) 写真を提示する前の質問	
撮影時の気分	穏やかで色々なことに興味を持っている感じ。「可愛い」と言って(思っ)ている時はいい気分だった。「可愛い」と言うことが自分に返ってきて良い効果を及ぼすらしい。
撮影の面白さ	退屈ではなかった。どちらかという面白い気持ち。綺麗に撮れているか、ピンボケしていないかと色々考えながら撮った。
撮影枚数について	自分を表現するものと言われれば分からなくなる。発想がない。不完全。もう少し表現できる場所もあったように思う。4枚ではそう思う。
c) 全写真を提示しての質問	
写真全体の感じ	まだまだ表現力不足。単純すぎる、1枚で伝えられる写真がない。枚数が少ない。
重要 1 位の写真が自分を表す理由	消去法で消していったらこれになった。他の写真はピンぼけていたりダメだから。これしかいい写真がなかった。順位も特になく、写真の出来ばえによって選んだ。
d) 活動全体を振り返る質問	
自分について考えた程度	40。撮っているときは楽しかった。でも半分の 50 には満たない。足りなかったのは撮ろうと思う気持ち。探そうと思えば色々あったと思うが、そこまでなれなかった。
自分の表現程度	50。撮りたいものが撮れた。季節感があるもの、建物、景色が撮れたらよかった。
昔を考えた程度	0。全く考えていない。
将来を考えた程度	0。全く考えていない。
周囲の物を考えた程度	10。化粧品のロゴは洋裁で使えると思っただけ。
周囲の人を考えた程度	50。アイスクリームを撮った時、お母さんと楽しくしゃべりながら撮った。一番お母さんのことを考えた。
全体的感想	もう少し色々なものを撮りたかった。角度などを変えて取れたらよかったと思う。

表 7-1-8 に示した撮影への取り組みや態度では(a)写真を提示する前の質問にあるように、“いろいろなことに興味を持ち” “可愛いと言って (思っ) いる時が良い気分” であり、“面白く” また “綺麗にピンボケがないように撮る” ことに気を遣いながら撮影した。そして(c)全写真を提示しての質問にあるように、撮影後は表現力のなさや写真の単純さ、撮影枚数の少なさを批判的に振り返り、重要度 1 位の写真を出来ばえの良さによって決めた。

すなわち、B においては注意の焦点が自己以外の対象にあって、注意の方向も外向きである。これは(d)活動全体を振り返る質問においても示されており、内省した上で自分を表現する対象を環境の中から見つけるという作業よりも、対象への好悪に作業の焦点があったことが記録されている。自分を表現する対象を周囲の環境から見つけ出すためには、その対象と自分との関連づけが必要となるが、この関連づけについての自覚が乏しいことに B の世界の捉え方の特徴があると言えよう。

B は自叙写真について、“好きなものを撮っただけで自分を表すものではない” “自分の中のものを表しているかと言えば違う” と述べており、また(a)写

真を提示する前の質問では、“自分を表現するものと言われれば分からなくなる”とも述べている。撮影期間の延長の経緯（e.g. Bの決められなさ）についての情報を併せると、自叙写真の撮影を通じてBのアイデンティティの脆弱さが露呈されているとも見ることができる。

今回の撮影は撮影枚数4枚、対象がアイスクリームと化粧品のロゴの2つのみであったが、Bが自叙写真を通じて示した“食物が好きだ”や“表現力が不足している”等の内省をきっかけとして、まずは幾つかの好きな対象や興味のある対象をB自身が環境の中から具体的に見つけていくことへと活動を発展させることができるかもしれない。そして環境の中から見出した対象と、“それらが好きな自分”“それらに興味を惹かれている自分”とを関連づけて考えていく作業がBの自己理解に役立つのではないだろうか。そしてこのような自分探しの作業においては、具体的な事物を通して自己を振り返る自叙写真法という手法を活用できるかもしれない。

(3) クライアントCの自叙写真について

Cの撮影枚数は11枚であるが、うち漫画（書籍）を並べて撮った写真が6枚、山と道（風景）の写真が4枚と同一カテゴリーに含まれる対象を繰り返し撮影しているため、使用カテゴリー数は3と少ない。このように自分を表現するために周囲の環境から選択した対象、すなわちオリエンテーションが限定的であることはCの自叙写真の一つの特徴である。

表現内容をみると、被写体として選ばれたのは“欲しい”“好き”“面白い”“興味を持った”物品であり、“眺めが良い”風景であった。またそれらの物品や風景が自分を表現していると考えられる理由は“やっている（行っている）”“持っている”“読んでいる”“いつも通っている”等、今まさに自分が関与している事実が挙げられており、重要順位からみても現在の行為が過去に行った行為よりも自分を表現する上で重視されていることが分かる。このように“好き”“興味のある”対象や日頃の習慣的行為によって自分を表現することはCの自叙写真のもう一つの特徴である。



図 7-1-3. クライアント C の自叙写真集

表 7-1-9. クライアント C の自叙写真の被写体・表現内容・自分を表現する理由の概要

<p>1. 将棋 (1位) 前から将棋は知っていたけどできなかった。ルールを教えてもらってできるようになった。ただ撮っただけ。欲しいとは思わない。自分を表す理由は、やっているから。まだやりだして日が浅いから 50。</p>
<p>2. Iの漫画 (4位) 好きで読んでいる漫画。物語が好き。海賊が冒険をする、世界一の海賊になるため。自分を表す理由は、興味があって読んでいるから。飽きがくるから 50。</p>
<p>3と6. Jの漫画 (2~3位) 面白い。はまっている漫画。ミステリーとホラー。残酷なところが好き。おもしろいところもある。なんか表現しにくい。自分を表す理由は、持っているから。今、興味があるしテレビで見ているから 100。</p>
<p>4. Kの漫画 (5位) 主人公が格闘技を学んで、どんどん強くなって行く話。見ていたら興味を持っただけ。もう読み終わって新刊が出るのを待つしかない。強くなりたい。格闘技がやりたい。自分を表す理由は、読んだから。これを参考にして運動したら少し痩せたから 50。</p>
<p>5. Lの漫画 (6位) 推理、刑事もの。どういうところが好きかまだ良く分からない。始まったところだから。面白かっただけ。自分を表す理由は、持っているから。まだ内容が分かっていない、途中だから 20。</p>
<p>7. Mの漫画 (7位) 読み終わって最近では読んでいない。好きというか面白かった。集めるのに苦労した。撮りたかっただけ。自分を表す理由は、持っているから。興味がなくなりかけているから 20。</p>
<p>8~9. N山 (10~11位) 前は毎週土日になると登っていた。眺めがいい。ただ撮りたかった。自分を全然表していない。撮りたかったから撮っただけ。今は飽きてやる気がなくなり、登る気がしないから 20。</p>
<p>10~11. いつも通っている道 (8~9位) いつも通っている道。ただ撮りたかった。自分を表す理由は、いつも通っているから。風景は自分と関係ないけど道は自分と関係あるから 10。</p>

注) 表中、ボールドは撮影順と被写体。()内数字はクライアントが自分を表す上で重要と判断した順。

なお、TSTと自叙写真の表現内容を比較した第6章第1節でも述べたように、女子大学生が自叙写真によって表現した内容のうち、最も反応数が多かったのも関心・好み・趣味であり、続いて日常生活習慣・生活上の事実であった。これはCの自叙写真の表現内容とも重なる結果である。ただし関心・好み・趣味あるいは日常生活習慣というものの重要性や自分を表現する程度についての判断は、過去—現在—未来という時間の流れの中でなされることが多い。女子大学生の自叙写真では過去—現在—未来を含む表現内容が多く見られたのに対し、Cの場合には時間軸の中でも特に“今、ここで”の関心や活動に焦点があるように思われる。今現在がどうであるかを重視するのが、Cの自分や世界の見方の特徴と言えるのではないだろうか。

表 7-1-10. クライアントCの撮影への取り組みや態度の概要

a) 写真を提示する前の質問	
撮影時の気分	撮る瞬間が面白かった。
撮影の面白さ	撮ったら止まらなかった。何でも撮ろうと思ったけど面倒くさいので止めた。
撮影枚数について	分からない。
c) 全写真を提示しての質問	
写真全体の感じ	この写真を見て60くらい好き。半分失敗しているから。
重要1位の写真が自分を表す理由	好きなのは一番うまく撮れたから。自分を表すのは今やっている、好き、面白いから。
d) 活動全体を振り返る質問	
自分について考えた程度	30。大して考えてないから。どんなこと考えたか、忘れた。
自分の表現程度	30。自分のことを少ししか表せなかった。表したかったのは分からない。足りなかったのはやる気。撮るのは夢中になれ、普通に撮るだけならやる気になれた。自分を表すものを撮って来いって言ったのがよく分からなかった。
昔を考えた程度	0。全く考えてない。今を生きてればそれでいい。先のことなんて誰にも分らない。
将来を考えた程度	40。あまり自覚がないから。
全体的な感想	撮っているときは微妙に面白かった。撮るものを探すのが面倒くさかった。自分を表すものと決まっているのが分かり辛かった。自由に自然のものを撮りたかった。
周囲の人を考えた程度	20。特に考えてない。いると自覚してない。毎日会っているから自覚していない。急にいなくなったとき自覚する。お父さんお母さんのことを考えた。いろいろうるさいな、でもない寂しいな。後は妹のこと。いるとしか考えてない。他には友達。昔のこと、遊んでいたことを思い出した。友達の家に行って友達を撮ろうと思ったけど、きつくないし、面倒くさいからやめた。
周囲の物を考えた程度	いつの間にか驚くくらい本が増えていた。あとは何で家の庭には樹が一本植わっているのだろうか考えた。樹も撮ろうと思ったけど雨の日ばかりで撮れなかった。

表 7-1-10 に示した撮影への取り組みや態度については(a)写真を提示する前の質問にあるように、“撮る瞬間が面白かった” “撮ったら止まらなかった”

“何でも撮ろうと思った”と、写真を撮るという活動自体が楽しみであったことが記録されている。また(c)全写真を提示しての質問あるいは(d)活動全体を振り返る質問にもあるように、内省したり自分を表現する対象を環境の中から見つけたりする作業はCにとって分かりにくく面倒なことであり、撮るという活動そのものに関心が向けられていたようである。Cの自叙写真を通して表現された自己認知の在り方は、素朴で自らの要求に忠実であるが一方で単純で淡泊である。(d)の活動全体を振り返る質問の中で、Cは“撮るのは夢中になれた”“普通に撮るだけならやる気になれた”と述べたと記録されている。

このような記録から自叙写真の活用を考えると、通常の手続きからは外れるものではあるが、まずはCが自由に写真を撮ることを通じて、表現する素材と表現手段を少しずつ豊富化してゆくことができるかもしれない。

(4)クライアントDの自叙写真について

Dは8枚の自叙写真のうち、風景を6枚(雨4枚、空2枚)撮影している。雨や空はフラッシュの有無を試しながら撮影を行ったとのことであり、特に雨の写真はアングルを変えたり、傘を置いたり、水溜まりを写したりして、どうすれば良い感じに撮れるかを模索したと言う。撮影には120日間を要したが、撮影に入る前にインスタント・カメラを落とし、カメラが壊れたのではないかという思いから撮影を開始できなかった期間があったこと、これに加えて撮影開始後も1枚目に雨を撮ろうとして雨天を待ったために撮影期間が長引いたとのことであった。面接では各写真の表現内容等について発話が多かったためか、記録は豊富である。自叙写真の表現や撮影過程にDが“凝る”理由は、彼女の芸術への志向、自叙写真への関心、病、自己愛、その他様々に考えられる。理由は確定できないまでも、写真の表現や撮影過程に見られるこだわりはDの自叙写真の特徴の一つと考えられる。

表現内容を見ると、玉ねぎ、雨、ぬいぐるみといった対象に親近感・愛着・共感を抱き、対象と自分を関連づけ、対象の持つ“剥いても中身がない”“変わる”等といった性質と“仮面を被っている”“周りを泣かせる”“気分屋”等の自己認知との間に共通点を見出していることが分かる。Dが自分を表現するのに用いた語は対人関係を記述する語であり、一般的にはネガティブな価値を持つ語である。対人関係を軸に自分や世界を捉え、対人関係における自身のネガテ

イブな側面に着目しているところに D の自叙写真における表現の特徴がある。

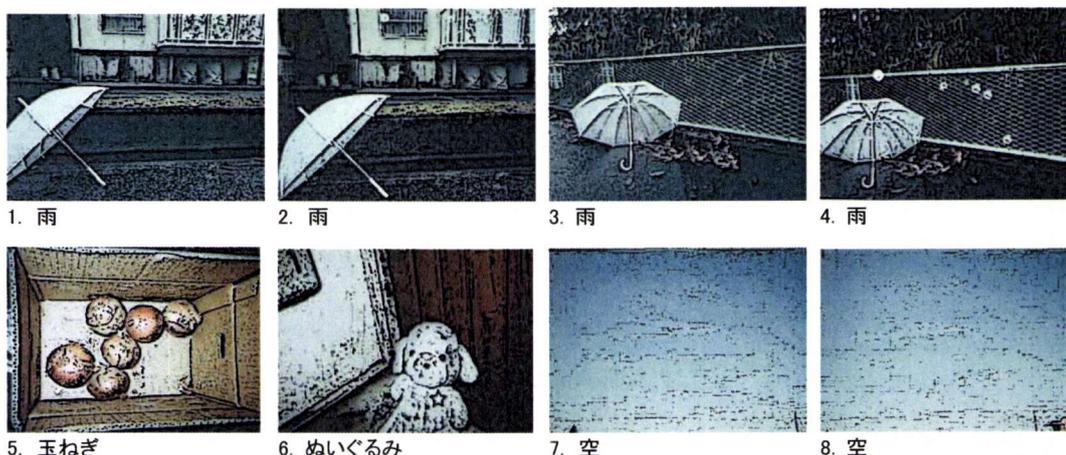


図 7-1-4. クライアント D の自叙写真集

表 7-1-11. クライアント D の自叙写真の被写体・表現内容・自分を表現する理由の概要

1～4. 雨 (1～2枚目がフラッシュ有、3～4枚目がフラッシュ無で撮影) (4～7位)
 自分と似たものを思い浮かべると一番は雨だった。似ている上に縁もある。誕生日が雨の季節。あだ名も雨と関連していて愛着を感じる。皆にうとうしがられるところが似ているし、寂しさや同情するところがあり、そこが通じる。雨は皆から嫌われる。でもそういうところに愛着を感じるし、孤独や寂しさに共感し、親近感が湧く。雨や梅雨は面倒くさいけど好き。雨の後の虹は最高。涙の後には笑顔。見つけたら皆笑顔になるし、飽きないし、心穏やかになる。自分を表すというより、親近感や愛着で選んだ。

5. 玉ねぎ (1位)
 よく玉ねぎは剥いても剥いても中身がないといわれるので撮った。仮面をかぶっているのが自分と似ている。玉ねぎは生で食べると辛いが、熱して煮込んだら甘くなる。自分だけに限らないが、他人に優しく温かい言葉をかけてもらおうと自分も優しい気持ちになれるので、そういうところがポエムのいいと思った。調理人を泣かすのは周りを泣かせる自分に似ている。気分屋のところ。凹んだ5分後にはもう復帰したりする。迷惑をかけてばかりなので。玉ねぎはどの料理でも使われる、どこにも突っ込みたくなるのが似ている。メインにならないところが似ているかも。よく言えば引き立て役、悪く言えば突っ込みすぎ。どこにでも登場するといった面では誰とでも仲良くできると思う。誰とでも仲良くしたい。苦手な人はいるけど嫌いな人はいない。

6. 一番付き合いの長いぬいぐるみ (8位)
 3歳か4歳の時に買ってもらった。突発的に撮った写真。自分が人形と似ていると思った。顔を変えないところが似ている。ぬいぐるみは表面的には笑顔じゃなくても子どものために作られているので良い顔。おもちゃ自身は卑しい心はないが、表は笑顔でも裏はどう思っているかわからない。ぬいぐるみは表面的には良く作られているが、裏では無理をしているのかもしれない。良い意味でいつも笑顔、悪い意味では作り笑顔。それが自分と似ている。撮らないといけないと思った。良い意味にしる悪い意味にしる、いつも笑顔。裏はどう思っているのかわからないが。

7～8. 空 (7枚目はフラッシュ有、8枚目はフラッシュ無で撮影) (2～3位)
 自分と似ているか似ていないかわからないが、空は色を変えたり、天気を変えたり、気分屋なところがある。色が変わるところ。天気が変わるところ。自然界は神秘的。そういうところに魅力を感じる。いろいろな一面を持っている。天気を感情にたとえることは世間では多い。空はいろいろな感情を持っていると思う。空は色々なものになれる。雲は色々な形になれる。順応性がある。演劇をやっているものにとっては憧れる。色々なものになってすごい。自由に動けてうらやましい。晴れか雨の天気が好き。雪も好き。雷は当たると痛いけど、大きな静電気を起こすと思うとすごい。星もすごい。朝と夜とでは全く顔も違うし。雨が降れば人を困らせる。虹が出たら人を喜ばせる。周りを振り回すところが自分と似ている。

注) 表中、ボールドは撮影順と被写体。()内数字はクライアントが自分を表す上で重要と判断した順。

表 7-1-12 に示した撮影への取り組みや態度によると(a)写真を提示する前の質問では、“うきうき、わくわくしながら撮った”“悩まなかった”“面白かった”という記述があり、(d)活動全体を振り返る質問では“改めて考えたり気づいたりした”“自分を見つめ直す良い機会”であったという(全体的感想の部分)。

表 7-1-12. クライアント D の撮影への取り組みや態度の概要

a) 写真を提示する前の質問	
撮影時の気分	楽しかった。シャッターをきる前「何を撮ろう」と考えたが、大概是「これを撮ろう」と思い撮った。カメラを持って悩むことはなかった。うきうき、わくわくしながらできた。
撮影の面白さ	面白かった。周りのもので自分と似たものを探したり、ポエム的なものが絡まってのものだったので面白かった。詩想ができたので面白かった。
撮影枚数について	12 枚を忘れて自由にしていた。突き詰めたら 12 枚よりも多くなっていたので、時間が足りなかったと思う。自分の場合は考えれば無限にあると思うが、27 枚が足りないわけではない。制限がないと止まらないので、多すぎず少なすぎず良いと思う。
c) 全写真を提示しての質問	
写真全体の感じ	撮り方は下手だが、被写体がそれをフォローしている。下手なりに良い。大好きでも大嫌いでもなく 80%。掘り下げていけばどんどん撮りたいものは出てくると思う。
重要 1 位の写真が自分を表す理由	例えた分が悪い面、直したい部分。「こういう悪い子ですよ」と人に言うため。「いい子ぶっているだけです」と伝えることが重要だと思った。悪い面を伝えることが重要なのは、仮面を剥がすという良い意味で人に伝えることが大切だと思う。人に伝えることで、薄いかもしれないが 1 枚でも仮面を剥がせるのではないか。後々、考えると悪い面だけでなく、良い面でも自分と共通しているんじゃないかと思う。他の写真と比べても、一番自分と似ていると思うので選んだ。楽しかった。写真って面白いな、と思った。下手なりに味が出ていると思う。表面を見ただけで奥までわかる写真が撮れたら、表現者になれたら、と思う。人の心は奥まで読めないの。
d) 活動全体を振り返る質問	
自分について考えた程度	50。撮ったものは突発的だったり、前から撮ろうと思っていたものもあった。今回のことで周りのものと自分とをリンクして考えることができた。自分のことをいろいろ思った。しかし、それは大きな自分の中の一部でしかない。考えたともいえるし、考えてないともいえる。完璧はないので、突き詰めていけばどこまでもいけると思う。
自分の表現程度	30。本当に一部分だと思う。まだ発掘できていない部分がある。今回撮ったものはどれも自分の似通った部分。
昔を考えた程度	80。玉ねぎと自分の類似は高校時代に思っていたこと。傘の写真から森に話移って、そこから子ども時代へと話がまた行った。古い付き合いの人形も撮ったので、昔とリンクした部分は多い。
将来を考えた程度	10。あまりない。過去を考えた部分が多い。憧れの気持ちはあるが、憧れという部分しか未来には繋がっていない様に思う。自分は過去のことが多い。もっと未来に目を向けないと駄目だ。
周囲の物を考えた程度	10。これを撮りたいと思って撮ったものが多い。今回はどちらかと言うと、自分が前から撮りたいと思っているものを撮った。周りのものをじっくりとは見ていない。
周囲の人を考えた程度	0。全然考えてない。自分のことと撮りたかったものとのリンクばかり考えていた。
全体的感想	以前から思っていたことを改めて考えたり、気づいたり、詩想表現できた。いい機会だった。いい加減なのでちゃんとしたものではできなかったが、素敵な企画だと思った。忘れた頃にまたやってみたい。自分を見つめ直す良い機会だった。

従って、撮影にあたっては自分について考え、活動に積極的に関与し、楽しんだ様子がうかがえる。また(c)全写真を提示しての質問では“下手なりに良い”“悪い面でも人に伝えることが大切”とあり、(d)活動全体を振り返る質問では“掘り下げていけばどんどん出てくる”“自分の一部でしかない”“発掘できていない部分がある”“表現者になりたい”という記録が見られる。これらの口述記録や自叙写真の表現内容からは、玉ねぎのように仮面を被り、人形のように表面的に良い顔をしているが、周囲からは雨のようにうっとうしがられている自分、そのような自分をいつか空のように自由に開放したいと願うDにとって、自叙写真は自己探索と自己表現の良い機会となったようである。

表現したことが他者へと伝わるには、自分と他者との間に理解のための共通の基盤が必要になろう。今回のDの一連の自叙写真は、対象への関心の在り方が自分自身との繋がりにのみ焦点づけられているため、表現されたものの伝達については限定的であるように思われる。実際、Dの撮影した自叙写真は詳しい説明がなければ、面接で語られたような多くの事柄が含意されていることを想像することは難しい。(d)の活動全体を振り返る質問に示されているように、今回の自叙写真の撮影においては、Dは周囲の物や周囲の人について考えることはほとんどなかったようである。自分の内面を他者に伝えることは誰にとっても難しい作業であるが、外界にも注意を向けつつ自叙写真による自己探求と自己表現を重ねていくことは、Dにとって自分自身を他者に伝えていく一過程となるかもしれない。

以上、本章の第1の目的に沿って相談機関に来談中の4名のクライアントの協力を得て、クライアントの自叙写真集にみられる特徴を事例的に示し、その特徴から彼らの自己関連世界や自己認知の特徴を記述することを試みた。自叙写真は個人が自己を含む世界をどのように理解し、経験しているのかを知る目的で創案されたものである。もし自叙写真を心理検査のような査定のための手段として用いるとすれば、臨床群においてはそれぞれの疾病や障害の特徴から予測される遂行の違いが、結果として自叙写真に反映される必要がある。そのためには各疾病や障害について自叙写真との関係を予測する理論や仮説が必要であり、かつ理論や仮説を検証するための多数のデータの蓄積が必要となる。本章では、クライアントの自叙写真の特徴を記述するために女子大学生の結果

を参照してはいるが、現時点では自叙写真を臨床現場での査定ツールとして用いるための理論や仮説が整っている訳ではないし、十分な資料の蓄積もない。ここでは4名のクライアントの自叙写真に見られる特徴が何に由来するものかという問いを視野に入れつつ、まずは各人の自叙写真に見られる特徴を丁寧に記述することを試みた。

4名のクライアントが抱える問題は様々に異なるが、自叙写真集に表現された被写体、テーマ、表現内容等が限定的であることが特徴的であると思われた。すなわち、自叙写真を撮影する際に自己と関わる対象を選択する際の選択の幅、周囲の環境との関わり方、関与の程度、生活パターンや習慣、社会的な関係性やその意味づけ等からみて、Zillerらの言うオリエンテーションや心理的ニッチの在り方が限定的であることが自叙写真集に表れていると思われる。このように自己に関わる世界が限定的であることの理由は、それぞれのクライアントによって異なると思われる。この限定性ということ各人の抱える問題や症状と関連付けて考えてみると、自叙写真に見られる限定性はAの巻き込まれることを避けて外部刺激を制限することによって、あるいはBの決められなさ、Cの関心や興味の狭さ、Dの自己への囚われによって生じてきたものかもしれない。以上のような自叙写真とクライアントの問題や症状との関連についての考察は、現時点では試論の域を超えるものではない。しかしながら、環境との関わり方にクライアントの抱える問題や症状が反映され、それが自叙写真で捉えられるとするならば、自叙写真法をクライアントの問題や症状の理解に役立ててゆくことができるだろう。

本章の第2の目的は、自叙写真の臨床現場への適用の可能性について検討することであった。ここでの成果の一つは、女子大学生での実施結果と同様、それぞれのクライアントが自叙写真の撮影活動に興味を持ち、真摯に取り組み、一定のポジティブな評価を示したことである。研究に参加した4名のクライアントは自叙写真の撮影依頼時点で比較的長期間の継続来談があり、状態が安定していて自叙写真の撮影が侵襲的でないと担当カウンセラーが判断した者であった。従って、臨床現場での自叙写真法の適用については現段階では限定的ではあるものの、導入にあたっては一定の動機づけやポジティブな感情を伴うことが期待できる結果であると考えられる。

さらに本章での成果として、第三者である筆者が自叙写真とインタビューの記録をもとに、ここまで示したようなクライアントについての記述ができたこと、すなわち自叙写真についてのインタビューから撮影者についての豊富な情報が得られることを指摘しておきたい。自叙写真のインタビューからどの程度の情報が得られるかは、この活動への参加者自身の取り組み態度、例えば動機づけや内省力と関係があろう。また、臨床現場では特に実施者である担当カウンセラーとクライアントとの信頼関係が基礎となることは明らかである。事例研究について藤縄（1976）は、症例を記載するにあたっては症例を読む者と症例を記載した者とがその症例について“経験を共にする”ことができなくてはならないとし、生きた人間像を表現することの必要性和困難について述べている。自叙写真と自叙写真についての語りという一つの切り口からクライアントの自己や世界との関わり方を記述することは、膨大な記録と無数にある事例記述のための視点の中から、“取捨選択”ないしは“図柄と背景をはっきりさせる（藤縄, 1976 p.7）”ための一手段となるかもしれない。

ところで、自叙写真における表現は撮影者の自己と世界との関わり方との一義的な対応関係を示すものではない。例えば本章での撮影枚数と使用カテゴリー数との関係から見ると、4名のクライアントの自叙写真には同じカテゴリーに含まれる対象を繰り返し撮影する傾向が見られた。同じ繰り返しという現象に対しても、表現内容からみると幾つかの異なる理由があることが推察される。同じ対象が繰り返し撮影される理由として考えられるのは、第1には撮影対象に対する愛着や愛情であり、第2は対象への興味であり、第3はオリエンテーションの狭さであり、第4はこだわりであろう。このように例えば同じカテゴリーに含まれる対象を繰り返し撮影するという行為を取り上げても、背景には複数の理由が考えられることから、自叙写真法を実施する際には同時に撮影者による写真の説明を傾聴し、自叙写真と語りの両方を併用しながらその意味を理解していくべきであろう。少数への適用とはいえ、本章での結果は、臨床現場に自叙写真法を導入することで撮影活動を通じて環境と関係を持つことを促す、内省を深める、自己表現を援助する、そして一連の写真の振り返りの中でそれらを物語やテーマに沿って統合する機会を与える、といった面でクライアントを援助することができる可能性を示すものと思われる。

7.2 第7章まとめ

相談機関に継続来談中の4名のクライアントに自叙写真の撮影を依頼し、その結果を報告した。被写体・撮影期間・撮影枚数・使用カテゴリー数について、女子大学生の結果と比較しながらクライアントの自叙写真にみられる特徴について検討した。被写体については人物を写した写真のないことが挙げられた。撮影期間は女子大学生を対象とした調査に比べて長期間を要したが、これは自叙写真の撮影がカウンセリングの一環として実施されたことや期間の延長を認めたという手続き上の違いに加え、撮影に時間がかかるクライアント独自の理由について報告がなされた。撮影枚数と使用カテゴリーについては、いずれのクライアントについても撮影枚数に対して使用カテゴリー数が少なく、これは同じカテゴリーに含まれる対象を繰り返し撮るといった特徴によるものであった。

加えて、各人の自叙写真集を事例的に検討して、それぞれの特徴を詳細に記述し、各事例への自叙写真法の治療面での活用を例示した。最後に、自叙写真集に示されたクライアント群の特徴が限定性にあることを指摘し、この限定性という特徴をそれぞれの問題や症状との関連づけて考察した。

自叙写真法の臨床現場への適用可能性については、撮影時の気分・撮影活動への興味・撮影の過程で自己や周囲について考えた程度等、自叙写真の撮影という活動への取り組みや態度から、自叙写真法がクライアントにどのように受け止められたのかを検討した。その結果、それぞれのクライアントが自叙写真の撮影に一定の興味を持ち、真摯に取り組み、ポジティブな評価を示したことが報告された。さらに撮影後の半構造化面接での記録から、クライアントの自叙写真集にみられる特徴を記述できたことから、自叙写真集が豊富な資料を提供する素材として利用できることを述べた。これらの結果から、自叙写真法の臨床現場への適用可能性が主張された。

第8章 自叙写真法の再実施

8.1 5か月後の再実施結果

前章の臨床現場での適用例にも示されているように、個人を理解するために撮影された自叙写真を一連のもの、すなわち自叙写真集として検討することは重要である。本研究では、研究参加者に自叙写真の撮影を依頼する際、“自分自身をテーマとした写真集をつくる”という活動全体を包括する目標を提示した上で、“写真であなたは誰であることを表してください”と教示している。この教示は開かれた（open-ended）質問であり、回答者にとって回答の自由度が高いため、自分のどのような側面を自叙写真に表現するのか、どの対象をどう撮影するか等について多様な回答が得られることになる。その一方で、一連の自叙写真にはその人独自の世界が意味あるまとまりとして出現することが期待される。自叙写真法が自己研究の中での“自叙伝的かつ自己物語的な方法（autobiographical and self narrative method）”の一つと見なされるのも（Dollinger, et al., 1996）、自叙写真集に何らかのテーマや物語を見出すことができるからであろう。

本章では、女子大学生の自叙写真を冊子として見た場合、そこにテーマやまとまりが見られるか、見られるとすればそれはどのようなものを調べる。ここでは5か月の間隔をおいて2度撮影を行った研究参加者の自叙写真集を事例的に検討し、個々の自叙写真集のみならず2冊の自叙写真集から得られる豊富な資料をもとに、時間を経ても繰り返し出現する対象や異なる対象の出現、2冊の自叙写真を通じて一貫したテーマや個人に特徴的な表現が見出されるかを調べる。なお、自叙写真の表現内容の分類にあたっては第3章で新たに提案した人物・物・場所の表現内容を分類するカテゴリーの適用を試み、これらカテゴリーが本章の事例にも使用できるかについても検討を行う。

方法

自叙写真の撮影・研究参加者・実施期間・有効資料

一定期間において同一集団に2度、自叙写真の撮影について説明を行い、研究参加者を募集した。教示は第3章第1節と同様である。ただし、2回目の教示では自叙写真そのものや撮影の手順・留意点等の詳細な説明は改めて行わず、

配布された教示文に従って自叙写真の撮影や質問票に回答するよう伝えた。研究への参加希望者には教示文、インスタント・カメラ、記録用紙、質問票、諸費用精算票を封筒に入れて手渡した。なお、再参加者には表 8-1-1 に示した教示文と再参加の理由を尋ねる用紙を追加で配布した。

1 回目の説明は 7 月、2 回目の説明は 5 ヶ月後の 12 月に行った（研究参加者はそれぞれ 28 名と 12 名）。2 回とも撮影期間は長期休暇を含む 40 日とし、この間の任意の 1 週間を選んで撮影するよう伝えた。2 度の自叙写真の撮影に参加し、資料が有効であった者は 11 名であった（平均年齢 21.18 歳）。

表 8-1-1. 研究に再度参加する者への追加の教示

別紙の説明文をよく読んで、手順に従って「自分自身をテーマにした写真集」を完成させてください。また質問票にもお答えください。この実験への参加が 2 度目になる方は、1 回目の実験がどうであったかということは全く気にしないで結構です。いま現在の自分自身を表すことだけを考えて撮影や質問票への回答を行ってください。また 2 度目の撮影に参加した理由を同封の用紙に記入してください。

結果と考察

8.1.1 再参加者の参加理由

11 名について再参加の理由をまとめると、“前回の参加が楽しかった”が 6 名、“写真の分析や画像による自己表現が面白かった”が 2 名、“自分の変化を見てみたい、変化があるか知りたい”が 2 名、“自己発見や自分探しへの期待や興味”が 2 名、“前回の撮影後に他の撮りたいものに気づいた”が 2 名、そして“自分を見直すことができる時期だから”“自分を知ってもらおう”“前回で学ぶことがあった”が各 1 名となっていた（複数回答）。

これらの記述から、再参加者の多くにとって自叙写真に関する一連の作業は面白く、自己探求・自己発見・自己表現への関心や興味を持って 2 度の自叙写真の撮影に参加したことが分かる。

8.1.2 撮影日数・撮影枚数・被写体の比較

11 名の撮影枚数と撮影日数を表 8-1-2 に、人物・場所・物の被写体の 3 つのカテゴリーにもとづく分類結果を表 8-1-3 に示した。1 回目と 2 回目の撮影日数と撮影枚数について相関を求めたところ、撮影枚数では有意な正相関がみられ ($r=.670$, $p<.05$)、撮影枚数については個人で一貫した傾向がみられること

が分かった。一方、撮影日数では値は有意ではなかった ($r=.066, n.s.$)。撮影日数に関して有意な相関が見られなかったのは、1週間以内に撮影するというという教示が制約となって個人差が生じにくかったものと考えられる。実際、10名のうち1回目では7名、2回目では5名が撮影に7日を要したと報告しており、多くの者が7日を基準として撮影を行ったことが推測される。

表 8-1-2. 再参加者の撮影枚数と撮影日数の基本統計量

		1回目	2回目
撮影枚数	合計	185	186
	平均値	16.82	16.91
	標準偏差	4.05	4.46
	レンジ	22-8	26-10
	中央値	18.00	17.00
撮影日数	平均値	6.09	6.73
	標準偏差	1.45	2.37
	レンジ	7-2	11-1
	中央値	6.00	7.00

注)N=11。

表 8-1-3. 被写体による分類:再参加者

	1回目	2回目
人物	42(22.75)	42(22.58)
場所	59(29.34)	31(16.67)
物	84(47.90)	113(60.75)
合計	185(100.00)	186(100.00)

注)N=11。数字は撮影枚数、()内数字は%。

再参加者についてさらに詳しく知るため、撮影日数、撮影枚数、研究への取組み態度、写真集への評価について、第3章の研究参加者（本節での再参加者と重複しない123名）の資料と再参加者の1回目の撮影時の資料を比較した。その結果、再参加者群の方が撮影日数が短く、撮影枚数が多かった（撮影日数 $M=8.5, SD=5.13$ と $M=6.09, SD=1.44, t_{40}=3.82, p<.001$; 撮影枚数 $M=14.21, SD=3.78$ と $M=16.36, SD=4.05, t_{132}=2.18, p<.05$ ）。また、再参加者群において写真はより出来ばえが良いと評価され（ $M=3.30, SD=1.12$ と $M=4.00, SD=0.78, t_{131}=2.03, p<.05$ ）、研究への参加がより面白いと判断される傾向があった（ $M=4.41, SD=0.76$ と $M=4.73, SD=0.47, t_{15}=2.00, p<.10$ ）³⁹。

以上の結果のうち、再参加者群で撮影日数が短かったことについては、1週間以内に撮影するというこの群が受けた教示の影響が考えられる（比較対象とした123名については、その多くが2週間以内に撮影するよう教示された）。他方、撮影枚数、研究への取組み態度、写真集への評価の結果からは、再参加者群は自叙写真撮影への関与が高く、出来上がった自叙写真集についてよりポ

³⁹ 2群の分散が異なる場合は Welch の検定を行った。

ジティブに評価したことが分かる。すなわち、再参加者群は1回目の自叙写真集の作成時から自叙写真の撮影や写真冊子への関心や評価が高く、これが2回の撮影に参加した理由の一つと推測される。

なお、本節での研究参加者のうち1回目のみに参加した者と再参加者との間でも、撮影日数、撮影枚数、研究への取組み態度、写真集への評価を比較したところ、いずれの値も再参加者群で高いものの、その差異は統計的に有意となる程大きなものではなかった⁴⁰。

8.2 2冊の自叙写真集の表現内容やテーマからみた参加者の類型化

研究参加者ごとに被写体や表現内容、および質問票の自由記述欄に記された“自叙写真集についての感想や考え”（以下、写真集への感想とする）を調べ、2冊の自叙写真集にどのような関連や変化が見られるのかを調べた。その結果、2冊の自叙写真集が表現している内容やテーマによって11名をグループ分けできる可能性が示され、(1)2度とも類似の対象で自分を表現、(2)過去から現在という時間の流れに沿って自分を表現、(3)異なる場所や状況での自分を表現、の3つのグループに研究参加者を分類した。ここでの分類は量的変数に依るものではなく、個々の自叙写真集および記録用紙や質問票に記載された研究参加者の叙述をもとに探索的に行ったものである。以下、11名の自由記述・被写体・表現内容を3つのグループごとに掲載する。

また、各グループから1名の研究参加者の協力を得て2冊の自叙写真集を事例として示し⁴¹、被写体・表現内容・重要順位・撮影順序といった複数の観点から検討を行う。その際、第3章第4節（表3-4-1～表3-4-3）と第5節（表3-5-1～表3-5-2）で提案した表現内容の分類カテゴリーを用い、自叙写真に表

⁴⁰ これら2群は、ともに自叙写真の取組み態度や研究参加の面白さの評定値が高かったことから（取組み態度 $M=4.11$ と $M=4.27$ 、参加の面白さ $M=4.59$ と $M=4.73$ 。5段階評定で評定値が高いほど真面目に取り組み、参加が面白かったことを示す）、2回目の撮影に参加しなかった者の不参加理由が不満や拒否にあったとは考えにくく、外的な要因（e.g. 教示が再参加を強く要請するものでなかったこと、年末の繁忙期の撮影となったこと等）によるものと推測される。むしろ、再参加者群が自叙写真集の作成に強い関心を持っていたと見るべきであろう。

⁴¹ 自叙写真と併せて、撮影順序・被写体・表現内容・重要順位を図に掲載した。以下、図中では2度の撮影で同じ被写体を選択されている自叙写真に丸を付けた。各写真の下部に撮影順序、被写体、表現内容の要約、自分を表す上での重要度の順位を示し、図の右下には表現内容にもとづく分類結果を掲載した。

現された意味について記述することを試みる。

(1) 2冊とも類似の対象で自分を表現

2冊の自叙写真集に共通の被写体が多く、自由記述の内容からも同じテーマで自叙写真集が作成されたと推測される研究参加者は3名であった。このグループから、Aの2冊の自叙写真集を事例として図8-2-1と図8-2-2に示す。

被写体からみるとAは2冊とも自室や自宅にある身の回りの物品を被写体としており、人物は撮影していない。2冊の自叙写真集には、自宅の見なれた情景や日用品を中心としてAの自己に関連した世界が表現されている。被写体では日用品・食物・その他（e.g. 掛け軸、お守り、額）に含まれるものが多く、表現内容では1冊目では好み（e.g. 料理が好き）や習慣（e.g. おやつを食べる習慣）が主であるが、2冊目では性格（e.g. ルーズな性格）を表現する内容が最も多くなり、これに習慣（e.g. 新聞を取るのが役目）の表現が加わる。

すなわち、Aは自宅で繰り返し目にするものや生活習慣と関連した物品を、自分の好みや性格を表現するものとして撮影したといえる。この他、表現内容から人との関係についての記述を拾うと、贈り物（e.g. 父がお寺を巡って完成させた）のように父・母・きょうだいについての言及が主で、家族以外の対人関係を示唆するものは2冊目の携帯電話（No.20）のみとなっている。表8-2-1に示した自由記述にも、自宅やこれら身近な物品の撮影を通じて家族との関係や自分の性格を再認識したことが記されている。表現された内容から時間についての記述をみると、1冊目では“毎日”や“よく～する”という表現が目立つが、2冊目では過去に言及したものもみられる（e.g. 高校入学時）。

2冊の自叙写真集には、重要度の高い学習机を含め自室や自宅というAの居場所が表現されている。学習机から自習室の机（1冊目）、玄関から窓にかかったブラインド（2冊目）という撮影順序や、自由記述での私空間についての記述もAの居場所の表現とみることができる。なお、2冊を比較すると、撮影場所の範囲は自室から自宅になり、表現内容では習慣や好みから性格についての表現が増えたり、過去から現在に至る時間表現がみられる等、自己関連世界の広がりや深化ともとれる変化がみられる。



1. 自分の学習机:自分なりに片付ける。毎日使っている。(1位)



2. X日に食べたおやつ:毎日おやつを食べる。健康に注意し、脂質を抑えたものを食べる。(17位)



3. スキンケア用品:毎日同じものを使う。〇年以上同じものを使っている。美白中心。(15位)



4. 掛け軸(未完成):お寺巡りが趣味の父との共同作品。(2位)



5. 時計:多機能、パソコン好きの私のお気に入り。(8位)



6. きょうだいの昼食:3人きょうだい。母の留守にはよくきょうだいの食事を作る。(9位)



7. おやつ:毎日おやつを食べる習慣。机の隣の手の届くところに食べ物を置いている。(3位)



8. X+1日のおやつ:最も美味しいと思う食べ物。(14位)



9. 小銭:財布に小銭が溜まるのが嫌い。帰宅後、小銭を入れるのが日課。(15位)



10. 自分で買った料理本:料理が好き。暇な時に読む。(13位)



11. お守り:外国で作った。何でも信じる。厄除け。(4位)



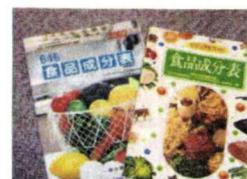
12. 洗濯物:母が洗濯をたんでくれる。単管にしまうのが面倒で床に置く。面倒くさがり。(18位)



13. ウォークマン:音楽好き。通学で聞く。(12位)



14. 白衣:授業で使用。食品成分に非常に興味。(11位)



15. 食品成分表:食品成分に非常に興味がある。毎日食べたものを食品成分表で調べる。(5位)



16. 旅行鞆:旅行好き。良く出かけるので鞆は出したまま。(6位)



17. 額:父がお寺を巡って完成させたもの。私のために作ってくれたもの。親子の仲の良さ。(7位)



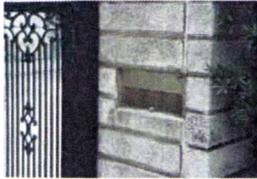
18. 振り子時計:母から貰った。毎日見ている。追いつめられて急ぐことが多く、2分早めに設定。(10位)



19. 自習室の机:良く使う。地下で個別に区切られている。一人で何かすることが好き。(19位)

物	好み-活動	4
	好み-対象	4
	習慣	6
	性格	2
	贈り物	2
	繋がり-人	1

図 8-2-1. A の 1 冊目の自叙写真集



1. 郵便受け:新聞をとるのが役目。習慣とはいえ、面倒に感じる。(1位)



2. 自宅玄関:十余年間、毎日見ている扉。その時の気分分で開閉の仕方が変わる。(3位)



3. 花の咲く木:高校入学時に植えた。大切に世話している。(21位)



4. 通路:十数年間、何回も見ている光景。(23位)



5. (きょうだいの)車:良く使用する。きょうだい所有の車を当たり前のように乗る内弁慶な性格。(25位)



6. 自転車:めったに乗ることのない自転車。好きな色にはこだわる。型にこだわる性格。(24位)



7. 生け花:母と共通の趣味。母に一目置いている。(19位)



8. 額:幼い頃はモナリザの目線が怖くて見上げることができなかった。数十年経った今も同じ絵が掛けられており怖くもない。何にでも慣れる性格。(26位)



9. スリッパ:家族の中で私だけが種類が異なる。単純に目立ちたい性格。(16位)



10. 階段:階段にはカーペットが敷いてあり、よく滑る。子どもの頃は異常に段数が多いと感じていた。悪印象を持っている。(5位)



11. 壁にあいた穴:壁にあいた穴を隠すクリップが今はインテリアの一つになっている。インテリアには無頓着な性格。(22位)



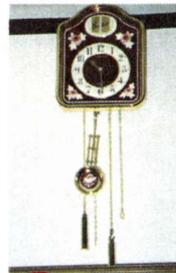
12. 学習機の上置き本棚:去年の教科書は上の棚へ積み上げ触らない。使用中の教科書は取り出しやすい所に置いてある。(2位)



13. 手提げバック:この会社は家族も好きで服も持っている。このバッグは高校の時からずっと通学カバンとして使用している。(4位)



14. 置時計:同時刻に撮影したが、時間が違う。ルースな性格。(8位)



15. 掛け時計:時間にゆとりを持って行動できない。時間が迫らないとやる気が起きない。(7位)



16. 電子時計:普段から良く持ち歩いている。分からない事はすぐに調べる好奇心旺盛な性格。(10位)

図 8-2-2. A の 2 冊目の自叙写真集



17. 普段使用しているもの：数年間も同じものを使用し続ける。一度良いと思えばそればかり使う性格。(13位)



18. 額：父が七福神の寺で朱印を貰ったもの。額を大切にすることで父への感謝を表す。(14位)



19. 掛け軸：父の趣味はお寺巡り。私も同行する。私の趣味ではない軸を部屋に掛けられても父には何も言えない。(18位)



20. 携帯電話：現代っ子で常にだれかつながっているという安心感がなければ落ち着かない。(12位)



21. 凝っているもの：凝り性で飽き性。現在、凝っているもの。(11位)



22. 草履と雪駄。草履はハレ(成人式)、雪駄はケ(アルバイト)。巫女のアルバイトをして雪駄を履く。(9位)



23. マリモ：〇年前に家族旅行で買って帰ったマリモ。ほったらかしで飽き性な性格。(20位)



24. 電気座布団とヒーター：寒がり。(17位)



25. 着物：成人式の着物は父母の意見も考え、私の好みも踏まえて購入。両親への依存が強い。(15位)



26. 窓にかかったブラインド：隣家と離れているがブラインドをあげることはためらいがある。内向的。(6位)

物	性格	12
	習慣	4
	繋がり-人	3
	思い出	2
	好み-活動	1
	好み-対象	1
	贈り物	1
	実用	1
	その他	1

図 8-2-2. A の 2 冊目の自叙写真集(続き)

表 8-2-1. A の自叙写真集についての自由記述

自由記述(一回目)	食物の写真が多く、自分が日常的に食べることを楽しんでいるのを知った。大学での食品成分などの勉強が、毎日食べているオヤツに反映している。学習机や収納していない衣類や旅行カバンの写真から、自分の怠惰な性格を再認識した。写真に撮ったもの以外にも不整頓なものがたくさんあり、両親や家族に対する甘えがこれを引き起こしている。自分の部屋の壁に 父の趣味 である掛け軸や額がかけられおり、自分の空間を父と共有することを認めていることが表れている。これは私自身が家族を自分の領域まで受け入れることのできる性格であるとも言え、また受け入れることのできる良い家族に囲まれた良い環境で日常を過ごしていることを表している。
自由記述(二回目)	重要順位には他に並べ替えることができないほど自分を表す重要度がある。 幼い頃から見続けているものは 、そのものを見ただけで自分をイメージしていると感じる。習慣や慣れから自分に対するイメージを変化させていることを発見した。 習慣 には私を表現するものがあり、その習慣が変化すると私を表現していたものも変化する。自分とは全く異なった 父の趣味 を素直に受け入れていることも自覚できた。普段は深く考えなかったが、玄関の扉のように十数年間にわたり何回も見ている光景が実は私が日常生活を安心して過ごす大きな要素であると分かった。

Aと同じ、2度とも類似の対象で自分を表現したグループに含まれるBとCの結果を表8-2-2と表8-2-3に示す⁴²。まず、Bは2冊の自叙写真集とも自分を表現するものとして自分の顔(表情)を主たる被写体とした(表8-2-2)。全ての自叙写真に人物が写っており、特に友人とともに旅行やサッカーやスキー等の活動をしている時の自分の表情(e.g. 楽しい、嬉しい、素の表情)を撮影したことが多い。

自由記述や表現内容の欄を見ると、Bにとって自分を表現するものとは“楽しい”“嬉しい”“素の”自分の表情であり、その表情は友人との交流場面で生じると捉えられているようである。Bの2冊の自叙写真集には、“友人と交流する自分”“友人と交流すること”を中心としてBの自己に関連する世界が表現されている。なお、1回目の自叙写真集に示された外国旅行(ホームステイ)や2回目の自叙写真集に示された外国の友人との交流を写した写真からは、Bにとってこの外国旅行が世界を拡充させる経験であったことが推察される。

表8-2-2. Bの自叙写真集についての自由記述・被写体・表現内容

自由記述	写真集を作る作業をして改めて自分について考えることができた。普段、自分とは何だろうとじっくりと考えることがないのでとても面白く、写真集を通して自分を見つめ直すことができた。 楽しい時の自分の表情 は写真に写さないと見ることはできない。その時々 の自分の顔の表情 を見ることができた。自分がその時感じたことはその時しか味わえないが、写真に残っているとその時の気持ちがもう一度味わえる。写真集作りは初めての貴重な経験になった。	
被写体・表現内容	外国旅行先での友人と自分1 友人と自分(ライブ会場など)2 バイト先での仲間と自分1 ホームステイ先の友人と自分2 外国サッカーチームの建造物2	外国旅行で新たな自分を発見した。頑張った。友人といるときの自分の顔。学校とは別の場所での自分。外国での私。外国語が話せるようになったこと。サッカーが好きであること。外国にいる自分。
自由記述	嬉しい時や素の自分ってどういう顔をしているのか 、鏡か写真でしか見ることはできないけれど、この機会に自分自身を再確認することの大切さを知った。日頃、物事に対する考えや行動はあまり意識していなかったり気づいていなかったりするので、写真を撮る事は非常に大きなことだと思った。形として自分という存在を表現できて素晴らしいことだと思った。	
被写体・表現内容	友人と自分(顔写真や行動場面)4 自分(顔写真や行動場面)3 妹とホームステイ中の子ども2 友人(スキー仲間)1	友達といるときの自分。スキーの楽しさ、やる気、満足。一人にいる時の自分。鐘つきやスキー中の自分。家族の中の自分。団らん。楽しさ。撮影者は自分。同じ時間を共有している自分。

注)上段は1回目(8枚)、下段は2回目(10枚)。

⁴² 以下、表中の数字は撮影枚数。重要順位の高い写真から順に被写体と表現内容を示した。

Cは2度の撮影とも自分を表現するののとして趣味、好きな物や身近な肉親を撮影した(表8-2-3)。Cによって作成された2冊の自叙写真集に共通するのは、両親や親族との交流、趣味の音楽に関連する物品を写した写真である。撮影場所は自宅内部と自宅周辺であり、これらの写真については“好き”“安らぎ”“大切”等の感情が併せて記されている。

これらの自叙写真集にはCの自己に関連した世界が、居場所としての自宅、自宅内での活動、両親や親族といった肉親との交流を中心として表現されている。また、介護を受ける祖母の写真やアルバムの福祉研修旅行の写真がCの将来の目標である福祉職と関連づけて記述されており、Cの自己に関連した世界の中に職業面での将来展望が組み込まれていることが分かる。

表8-2-3. Cの自叙写真集についての自由記述・被写体・表現内容

自由記述	お家大好き私にとって 自宅の中に数知れないほどの「私自身を表すもの」があった。 私を表すものとして忘れてはならないのは、両親や祖母・叔母をはじめとする 身近な人との関わり である。そして私が 趣味としているもの、好きなもの は私という存在を表す典型的なものだと感じた。	
被写体・表現内容	両親2 自宅や自宅付近の風景3 おば1 祖母1 楽器とCD3 自宅内部2 絵画1 昔の部活(音楽関係)の活動風景1	両親なくして自分はいない。父を停留所で見送る習慣。 生活空間。毎日目にする風景。好き。 身近な相談相手。 介護を受ける祖母。自分の将来(福祉職)の原点。 趣味。大切なもの。エネルギーをもらうもの。毎日過ごす場所。お気に入り。安らぎの場所。 趣味。好きなもの。 懐かしさ。
自由記述	私が 常に目にしているもの、身に着けているもの が多く、 人や物に支えられて今の私自身がここに存在しているのだ と思った。撮影したものには 趣味のものが多く、私自身が好きなものや趣味にしているものがこんなに多かったのだ 、と写真に撮って形になった様々なものを見てそう感じた。	
被写体・表現内容	両親と親戚(叔父叔母、従妹)3 楽器3 日常の携帯品(手帳など)3 ぬいぐるみ1 アルバム1 ティータイムの風景1 自宅内部1 部屋から見える風景2	パーティでの集合写真。 趣味。母から貰ったバイオリンは宝物の一つ。持ち歩くもの。 大好き。自分の喜び悲しみを見守ってくれる。 友達等の写真。福祉の勉強の礎となった研修の風景。 お茶の時間。大好き。 自分の居場所の一つ。 クリスマスの風景。

注)上段は1回目(14枚)、下段は2回目(15枚)。

(2) 過去から現在という時間の流れに沿って自分を表現

過去から現在という時間の流れに沿って自分を表現したグループには5名が含まれたが、その中からDの自叙写真集を図8-2-3と図8-2-4に示す。このグループに含まれる研究参加者の自叙写真集では、2度の撮影の中で過去・現在・未来という時間の経過が示されており、2冊の自叙写真集にわたって各人の生活の歴史が表現されている。



1. 香水:マイコレクション。中学から集めている。気分によって使い分ける。毎日つけている。(6位)



2. 新体操:部活で〇年間していた。今、教えている。(4位)



3. スポーツジム:楽しみ。趣味。週〇回通っている。(2位)



4. M 小学校:6年間通った。(15位)



5. N 中学校:毎日休みの日も部活を頑張った。(14位)



6. O 大学:現在通っている。(13位)



7. P 高校:勉強に部活にと頑張った。毎朝、校門に先生がずらっと並んでいた。(12位)



8. Q 幼稚園:すごく楽しかった思い出。毎日ここを走り回っていた。(11位)



9. R 産婦人科:私が生まれた所。夕方に生まれた。(7位)



10. ソフトボール:部活では手にまめを作り、水膨れが割れ、真っ黒になって頑張った。4番ショートで活躍。(8位)



11. 身長が書かれている戸:私の成長が残されている戸。(3位)



12. パレエの衣装とシューズ:〇年間習っていた。臭いシューズも残している。(9位)



13. 貯金箱:〇年前から彼氏と貯めている。だんだん重くなってきた。(5位)



14. 運転席からの眺め:運転が好き。毎日ドライブしている。(10位)



15. スーパーのお菓子コーナー:大好きなお菓子。いつもここで買い込む。(1位)

場所	思い出	8
物	好み-活動	3
	好み-対象	2
	繋がり-人	1
場所	繋がり-所属	1

図8-2-3. Dの1冊目の自叙写真集



1. スノーボードセット:今はまっています。(1位)



2. 香水:中学から集めている。毎日つけている。(10位)



3. 思い出の写真:楽しい思い出。友人からのメッセージ。大切。(4位)



4. 貯金箱:ずっと彼氏と貯めている。(11位)



5. 学祭の思い出:大学祭で手に入れたもの。(12位)



6. ベット横のスペース:寝る前に聞いたり、観たり。(16位)



7. パンフレット:今年はいっぱいスノーボードに行くぞ。(3位)



8. パソコン:家族一人に1台。毎日のレポートにいろいろなパソコンを使う。(7位)



9. スニーカー:以前はヒールを履いていたけど、最近はずっとスニーカー。(6位)



10. 車:買い物やドライブに行く。(14位)



11. Sスーパー:時々ここで買い出し。(13位)



12. 雑誌と私:モデルをしている。(5位)



13. パイト先:○年半バイトしている。(9位)



14. パイト先:母が教えていた塾と同系列の塾で教えている。(8位)



15. Q大学:今通っている大学。新校舎。(15位)



16. 成人式に行く前:楽しみにしていた成人式を迎えた。(2位)



17. 成人式を終えて:成人としてしっかりしないとけない。(17位)

物	習慣	4
場所	繋がり-所属	3
物	好み-活動	2
	好み-対象	2
	思い出	2
人物	自分	2
物	繋がり-人	1
	理想の体現	1

図 8-2-4. D の 2 冊目の自叙写真集

表 8-2-4. D の自叙写真集についての自由記述

自由記述(一回目)	生まれてから今までを振り返ることができた。写真集を見て履歴書のように思ったと思う。赤ちゃんから今のように健康に大きく育ったことに感謝した。写真を見てその時々のことを思い出し、たくさんの経験をしてきたことを改めて知った。これまでの経験が今の生活に活かされ、たくさんの趣味を持てたのは良いことだと思った。これからは今まで以上にたくさん経験し、自分を表すものが数え切れず溢れるくらいの濃い人生を送りたい。家族や友達を大切に、自分をもっと成長していかなければならないと思った。
自由記述(二回目)	今のシーズンはスノーボードや成人式、レポートなどで頭がいっぱいだ。レポートばかりでパソコンは手放せず忙しかったのだが、たくさんのイベントごとがあり、とても楽しい毎日を過ごしていると思った。自分の生活の中で、私の大切なものや楽しいことなど、たくさん今の私を表すものがある。学校生活もアルバイトも趣味も充実した生活ができていると思う。

D は 1 冊目の自叙写真集に現在の活動を表す写真に加えて産院や卒業した小学校・中学校・高等学校、現在通っている大学までを含めた。この他、過去に行っていた活動や過去から現在にわたって継続している活動に関わる物品も多く撮影している。この 1 冊目の自叙写真集を D は“履歴書のように”と表現した。

2 冊目は 1 冊目と同様に思い出の品等が含まれてはいるものの、それらは比較的最近の出来事や現在も続けている行為に関係した物品であり、全体としては現在の生活を表現した場所や物品を中心に撮影がなされている。

被写体では 1 冊目は建物 (e.g. 小学校、幼稚園等) が 7 枚と多いが、2 冊目では自分の写真を含め 10 のカテゴリーに渡って様々な対象を撮影している。表現内容では 1 冊目は思い出 (e.g. すごく楽しかった幼稚園の思い出) が主であるが、2 冊目では好み (e.g. 今はまっている)、習慣 (e.g. 車で買い物やドライブに行く) や繋がり一所属 (e.g. 今通っている大学) といった表現内容が含まれている。なお、D の自叙写真集には人物写真は少ないが、繋がり一所属を示す自叙写真からは、他者との交流や関係性を推察することができる。

1 冊目と 2 冊目を比較すると、1 冊目は過去と現在が中心で被写体も思い出の建物が主であるのに対し、2 冊目では被写体や表現内容が多様となり、過去と現在のみならず将来を示す自叙写真も含まれている (e.g. 成人式を終えて)。これより、過去を踏まえた現在の行動範囲や興味の広がりや将来への指向が、D の自己関連世界として表現されているといえる。ずっと集めている香水からスーパーのお菓子コーナー (1 冊目)、今はまっているスノーボードから成人式の和装小物 (2 冊目) という撮影順序や、自由記述での自分の成長や生活の充

実についての記述も、Dの時間軸に沿った表現とみることもできよう。

表 8-2-5. Eの自叙写真集についての自由記述・被写体・表現内容

自由記述	この写真集をあえて自分が忘れてしまいたいことに目を向け これまでの自分を振り返ることに使う ことにした。もう一度自分のことを見つめ直したいと思った。それが結果的に私を表す写真集になるのではないか。嫌なことばかりでなく、これまで自分がしてきたことをもう一度きちんと振り返ろうと思った。これまで何をしてきたかを見て今後の自分を見直す機会を作ろうとも考えた。この写真集を作ってみて精神的に辛いこともあったが、 自分を振り返ることは出来た 。	
被写体・表現内容	書籍 7 アルバムや写真 3 母親 1 友人 1 両親と親戚の写真 1 川 1 以前の住居（アパート） 1 昔の職場 2 B公園や周辺の建物 4	目標が描かれている。自分を支える言葉。欠かせない。 卒業した大学。再出発の場所。今の自分の支え。 自分のルーツ（自分をつくり育てた人）。自分を表す。 自分を支えてくれる友人。大切。 自分のルーツ。理解者。支えてくれる人。 自分に欠けているもの。目標。大きさ、穏やかさ。 初めての一人暮らしの場所。昔の生活が詰まっている。 今の自分を作った場所。再出発のきっかけの場所。 昔の職場近く。歳月の流れと変化。思い出。
自由記述	出来上がってみて少し重い気がする。手紙とお守りや神社に関する内容が多いので自分は少し偏っている面があるのではないか。この写真集は「これがないと私が誰であるか言えない」という面では 現在の私を良く表している とは思うが、この写真集が全てかというところは思えない。ただこの写真集は 現在の自分を振り返って 冷静に分析できるきっかけを与えてくれたと思う。	
被写体・表現内容	友人からの手紙や葉書 4 卒業証書 1 証明書（氏名と生年月日） 1 お守り 2 アルバム 1 手紙 1 書類 1 書籍 2 おみくじ 1	自分の支え。自分の不安と安心。 再出発の原点。今の自分の始まり。 名前や生年月日は自分を表す。名前は自分を作る。 自分の弱さ。自分に勝ちたい。自分の迷い。 自分を支えてくれる人たち。 書類に対する返事、自分の未来。 自分の目標を表す書類。 今の学び。迷い。再出発して今勉強中の自分は通過点。 大吉のおみくじ。こうなるよう努力したい気持ち。

注)上段は1回目(21枚)、下段は2回目(14枚)。

なお、趣味や楽しみとしてのジム通いや現在も続けている新体操、過去に行った運動を示す用具類、現在凝っているスノーボード等の自叙写真の重要度は相対的に高く、Dの自己に関連した世界においてスポーツが一定の位置づけや重要性をもっていることが分かる。加えて、屋外で撮影された写真の多さやア

アルバイトやドライブに関連した自叙写真から、Dの活動性の高さが推測される。

続いて、Dと同グループに含まれる4名(E~H)の結果を表8-2-5~表8-2-8に示す。Eは過去の自分と現在の自分を振り返るために自叙写真の研究に参加したことを自由記述の中で述べている(表8-2-5)。Eは一旦大学を卒業した後、社会人生活を経て再び学生となった者であった。2度の自叙写真の撮影を通じて、過去・現在についての振り返りと整理が行われ、その作業を踏まえて未来への模索がなされたようである。

1回目の撮影時点で、Eにはこれまで回避してきたと推察される嫌なことや辛かったことを含めて過去を振り返り、目標を表明する準備ができており、自叙写真の撮影はこの振り返りや目標提示の作業に活用された。Eの2冊目の自叙写真集にはお守りやおみくじ等の写真と共に将来への不安・迷い・期待の感情が記されており、このような不確かさゆえか自身のアイデンティティを確認するような対象(e.g. 氏名と生年月日)も被写体として選択されている。Eの自叙写真集には自分を支えるもの(e.g. 書籍や親族、友人)が多く含まれており、将来を模索しているEの自己に関連した世界の不安定さや不確かさが表現されているようである。

次に、Fは自叙写真集の中に生まれてから現在までの思い出の場所や物、季節行事に関わる事柄を多数含めた(表8-2-6)。Fの1冊目の自叙写真の撮影対象には、Fが“安心できる場所”とした自宅や自宅近くの思い出の場所が多く撮影されている。これらの場所はFの生活範囲であり、同時にFの生育の道程を表す場所でもある。2冊目の自叙写真集では、現在通っている大学やアルバイト先等、現在の生活を表す物品と生活範囲が撮影の対象となっており、2冊の自叙写真集によって過去から現在への時間の流れが表現されている。

また、2冊目には年末年始の行事を写した写真を多く含めている。Fの生れ育ったのは古い街である。行事の伝統を受け継ぐことが重視されているのであろうか、2冊の自叙写真集からは、Fの自己に関連する世界は生まれ育った古い街や行事と結びついていることが推察される。自由記述欄の“歳を重ねるごとに少しずつ生活範囲が広がっている”“学校の生活は幼稚園から大学までどのように変化しているのか”という記載からは、Fは自叙写真の撮影を通じて時間経過に伴う自分自身の変化に改めて注意を向けたことが分かる。このよう

な自身の変化に対する気づきや関心を、毎年行われる行事という変わらないもの、繰り返されるものへのFの“思い入れ”と対比させて自叙写真集の中で表現しているようにも見える。

表 8-2-6. Fの自叙写真集についての自由記述・被写体・表現内容

自由記述	<p>小写真集を見ると、自分自身が生まれてから現在までの思い出が詰まった場所や物を写している。今まで生きてきた間には様々な場所で様々な人々と出会い、共に遊び学んでいると改めて思った。現在も私が様々な人々に支えられ、反対に私自身も誰かの支えになっていることを小写真集を見て思った。また、私が通っていた幼稚園や学校は家から近く、私自身が生きてきた生活範囲は意外と狭いことに気づいた。しかし年齢を重ねるごとに生活範囲も少しずつ広がっている。</p>	
被写体・表現内容	<p>自宅 1 自転車 1 織機 1 パソコン 1 自宅近くの建物、川、公園など 9 植物 1 町の風景 3</p>	<p>安心できる場所。 行動範囲を広げてくれる乗り物。 毎日耳にする音。 アルバイトして初めて自分で買った高価なもの。 昔の遊び場所。初アルバイト場所。祈りの場所など。 3代目になる長寿の植物。 自分が生まれた町。除夜の鐘の音を聞く場所。</p>
自由記述	<p>写真集を作成して感じたことは2つある。1つ目は季節的な行事が含まれていること。1年の中で一番季節が感じられるのは年末年始で、多くが年末年始の行事に関する写真だった。改めて年末年始の行事を振り返ると、毎年行っている行動を見ることができた。2つ目は学校についての写真が撮れたこと。前は小学校・中学・高校の写真しか撮ることができなかったのに、今回は大学や幼稚園の写真が撮れた。私自身の学校的生活は幼稚園から大学になるまでどのように変化しているのか良いきっかけになった。写真集を改めてみて、私の行事に対する思い入れの強さを感じた。普段何気なく年末年始の行事を過ごしてきたことを改めて感じた。</p>	
被写体・表現内容	<p>大学のロッカー 1 日常の携帯品（携帯電話など） 3 幼稚園 1 正月行事 6 年末アルバイト場所と必需品 2 祖母の家と畑 2 大学構内 1 菓子 1 チケット 1 桜の花 1</p>	<p>大学の中での私物置場。 自分の予定。通信機器と交流。必要物。 初めて親と別れた場所。 正月を感じさせるもの。 年末の仕事。 第二の家。 大学になってからの自分。 好物。 成人式の祝い。 初発見、驚き。</p>

注) 上段は1回目(17枚)、下段は2回目(19枚)。

Gは1冊目の自叙写真集に産院から卒業した学校を含めた(表 8-2-7)。加えて母子手帳や子ども時代の思い出にまつわる場所も写している。これに対して2冊目は、現在の自分の興味や好きなものを中心に撮影しており、2冊を合わせるとGの過去から現在までが表現されているといえる。

表 8-2-7. G の自叙写真集についての自由記述・被写体・表現内容

自由記述	<p>幼い頃から家族やたくさんの人との出会いによって優しさや生きていく上でのルール、強さなどをもらった。休日は祖母の店でお手伝いをして働くことの大切さを教わった。そのおかげか働くのを嫌だと感じなくなった。たくさん辛いことがあったけど、そんな時は親子でバカなことを言ってストレスや悩みも解消した。この写真集では今までの思い出がたくさん詰まった私自身の思い出もった写真集が出来上がった。大切なものは何かと考えた時に、自然にこれというアイデアが出てきた。一枚一枚の写真から自分の思いがたくさん出てくる。将来は子どもに関する仕事に就きたいのでアルバイトは子どもに関連する仕事を楽しくやっている。自分の好きなことを目指して成長したい。</p>	
被写体・表現内容	<p>表札 1 祖母の店と祖母 2</p> <p>母子手帳 1 自分と父 1 飼い犬 1 バイク 1 産婦人科医院 1 卒業した学校 4</p> <p>バイト先 1 自分 1 地元の花火大会 1 塾 1 ひまわり 1 ジム 1</p>	<p>家族。団結。なくてはならない存在。 働く楽しさを知った場所。優しさと強さを教えてくれた人。思い出。 生まれてから今までの写真入り。自分の歴史。父との交流の様子。 家族の一員。ストレス解消してくれる。仲よし。行動手段。思い出。 自分のスタート地点。出生時の思い出。 保育園から高校まで。成長した場所、思い出の場所。 長く続けている。学びの場所。 母と一緒に料理すること。母との交流。 名物行事。田舎。たくさんの人が集まる。感動。 先生との思い出。社会についても学んだ場所。 母がもってきた。元気のもと。 趣味。大好き。</p>
自由記述	<p>今回の写真集は私という人間を身近にあるものから知ってもらおうと思い、今の私の興味のあることや好きなものを写した。私自身が身近なものの写真を見て自分の性格やどんな人物なのかを見直すことができた。写真集を作ることで私という人物がどんな者がよく分かるのではないかと思う。この写真集作りはとても楽しくやらせてもらった。</p>	
被写体・表現内容	<p>祖父母の写真 1 自分（成人式） 1</p> <p>靴 1</p> <p>パソコン 1 玩具やぬいぐるみ 2</p> <p>食物（チョコ、ジュースなど） 3 日常使う物（携帯電話など） 4</p> <p>体重計 1 資格の本 1 テレビ欄 1</p>	<p>亡き祖父母。記憶は無いが何かあるとお願いをする。 着物姿、大切に育ててもらった。母の着物を着た。 つつかけるので形がゆがむ。自分の性格の表現。 今一番興味のあること。 大好き。たくさん集めた。たくさんあると落ち着く。 大好物。今はまっている。味にはうるさいほう。 常に持っている。自分らしさ表現。ずっと使っている。 気にしていること。 頑張っている。リビングで勉強する癖。 幼い頃からの習慣。TVは見ないがテレビ欄が好き。</p>

注) 上段は 1 回目(18 枚)、下段は 2 回目(16 枚)。

この他、G の自叙写真集では家族との緊密な関係を示す表現が多く見られ、G の自己に関連した世界において家族が重要な位置を占めていることが推察さ

れる。このような自叙写真集を G は“思い出こもった写真集”と記した。また、2冊の自叙写真集には子どもに関わる仕事に就きたいという G の将来の目標に関連する写真（e.g. バイト先の写真、資格の本の写真）も含まれており、G の自己に関連する世界に将来展望が含まれていることが分かる。

続いて H の自叙写真集をみると、2回の撮影の中で被写体として繰り返し選択されている対象があることに気づく。それは自宅にあるぬいぐるみ等の思い出の品と山や雲など身近な自然や動物である（表 8-2-8）。自由記述でも撮影対象は自室の小物類や風景であったことが記されている。2冊の自叙写真集にはぬいぐるみ等の小物類や自然の風景といった心和む情景・場所を中心として H の自己に関連した世界が表現されている。

表 8-2-8. H の自叙写真集についての自由記述・被写体・表現内容

述 自由記	自分が落ち着ける場所は自宅だと感じた。伸び伸びと撮影ができ、アイデアもすぐに浮かぶ。完成した写真集を見てかなりこだわりながら撮っていたと改めて分かった。 自然の背景と多くのぬいぐるみを撮っている。	
被写体・表現内容	時計 1 CD1 友達の手紙 1 ぬいぐるみ、置物 7 百貨店の大食堂 2 アヒル 1 自分と母親 1 地元の池 1 部屋の窓から見た夕日、雲、山 3 日常使っている物（携帯電話など） 4	小学校時に祖母に買ってもらった。お気に入り。 初めて買った CD。 相手の心がこもっているもの。 数が多い。可愛い、気持良い、思い出、大切。 幼い頃の親との思い出。懐かしい場所。 何となくいつも見てしまう。可愛い。 木陰で過ごす二人。自然との一体感。 地元独特の雰囲気。 自然の美しさ、偉大さ、部屋から見える素晴らしさ。 毎日使う、愛用品。
記 自由	撮るたびに 自然の背景を撮影すること、また自分の部屋の小物類を撮る事 、写真を撮るといふことにとっても意識していると思った。何を撮るかも常に定まっていると思った。	
被写体・表現内容	自分 5 食物 1 日常使っている物（手帳） 1 ぬいぐるみ 3 神馬 1 地元の湖や公園 5 自分と両親 4 自分と友人 2	成人式の振袖姿。20歳を迎え大人へと成長した自分。 5時間かけて作った栗きんとん。 愛用品。 幼い頃に買ってもらった思い出。お気に入り。和み。 毎年参拝に行く習慣。 夕日が沈んでゆく様子。美しさ。 振袖姿。成長した自分と年とった親。楽しい雰囲気。 振袖姿。成長した自分。

注) 上段は 1 回目 (22 枚)、下段は 2 回目 (22 枚)。

ただし、2冊目の自叙写真集にはHの成人式の振り袖姿の写真が11枚も含まれており、これが1冊目とは大きく異なっている。Hは自由記述欄では成人式について特に記述していないが、成人式に関連した写真の表現内容として、“大人へと成長した自分”“成長した自分と年とった親”等の記載がみられる。振り袖姿の自分の写真を多く含む2冊目の自叙写真集には、心和ませる物品や風景等を中心としたHの自己に関連する世界に、成人式を迎えた“大人としての自分”が挿入されているように見える。Hが自叙写真集の作成にあたって時間という要因を意識したか否かは不明であるが、2冊の自叙写真を併せてみると、そこに過去－現在－未来という時間の流れを見ることができる。

(3) 異なる場所や状況での自分を表現

異なる場所や状況での自分を表現したグループには、3名が分類された。この中からIの自叙写真集を事例として示す(図8-2-5と図8-2-6)。このグループに含まれる自叙写真集を見ると、下宿と実家との二重生活や長期休暇のような特定期間にアルバイト等の活動に専従するといった学生時代に特有の生活様態があることに気づく。ここでの自叙写真集には、時間経過よりも、むしろ環境や状況の違いによる変化が表現されている。

Iは下宿先での学生としての生活と実家での生活を2冊の自叙写真集として表現した。田舎の実家と都会のL市のそれぞれの良さを、自分の生活と関連させながら表現している。被写体からみると1冊目では動物や植物、2冊目では人物(自分と他者)や風景カテゴリーに含まれる写真が多い。表現内容としては1冊目は好み(e.g. 動物が好き)、居場所(e.g. 私はこういう所で育った)が主であり、2冊目には居場所のシンボルとなるような風景(e.g. ルミナリエ)や自分と他者との関係性の表現(e.g. 友人との忘年会)が多く含まれている。Iは2冊の自叙写真集の中に、2つの場所を代表するような対象やその場所での人(動物)との交流を自分と関連する世界として表現したといえる。

1冊目と2冊目を比較すると、草木から光るコシヒカリ(1冊目)、青く輝くクリスマスツリーから雪が降り積もる木(2冊目)という撮影順序や、表8-2-3に示した自由記述からも、Iの自己関連世界として心地よい・楽しい2つの場所とそこでの生活が感情を伴って表現されていることが分かる。



1. 草木: 私はこういう所で育ちました。(5位)



2. 光合成をする草木: こういう環境にいと息がすーっとするし、好き。こういう環境で育ちました。(16位)



3. ヤギの親子: 私は動物が大好きで、動物に囲まれて育った。これからも囲まれていたい。ヤギの親子きやわしいー!(6位)



4. 餌をねだる母ヤギ: 「餌くれー」と母ヤギが寄ってきた。(15位)



5. 餌をねだる子ヤギ: 「餌ちょーだい」と子ヤギ君(雄)。きやわしいー。(3位)



6. 餌をとり合うヤギの親子: 子ヤギより餌の方が大事な母ヤギのT。(11位)



7. きゅうりを食べるヤギの親子: 母ヤギはきゅうりをムシヤムシヤ。子ヤギはきゅうりのとり合い。(13位)



8. 餌をとり合うヤギの親子: 子ヤギが母ヤギを支えに「餌よこせー」と。(7位)



9. 母ヤギに餌をあげる私: 餌をあげるのはすごく楽しい。(18位)



10. 子ヤギに餌をあげる私: ラビットフードが大好きなヤギです。(12位)



11. 子ヤギに餌をあげる私: ヤギはきゅうりでも何でも食べます。(1位)



12. 田んぼ: 私の育ったところは一面、田んぼです。(19位)



13. いとこ U: 私の宝物。(17位)



14. いとこ V: 私の宝物。(4位)



15. いとこ U と V: 私の宝物。(14位)



16. 花: 私は花が大好き。(9位)



17. 栗の木: 栗がすごく美味しくて大好き。青い実が一杯ついていた。茶色になる秋が楽しみ。(8位)



18. 実るスイカ: 私の育ったところは実りがいっぱい。(10位)



19. 光るコシヒカリ: 一面の田が黄金色に実っている。私は一面田んぼの中で育った。(2位)

物、場所	好み-対象	8
	居場所	5
人物	自分	3
	他者	3

図 8-2-5. 1の1冊目の自叙写真集



1. クリスマスツリー: 海の近くでブルーに美しく輝くクリスマスツリー。(12位)



2. ルミナリエ: ずっと見たくてやっと見れた。(4位)



3. ルミナリエ: 光り輝くトンネル。(2位)



4. ルミナリエ: 大きかったルミナリエ。(9位)



5. ルミナリエ: 大きかったルミナリエ。(7位)



6. 異人館のソファに座る私: 時代変化風景。(17位)



7. ゆたぼん: いつも使っているゆたぼん。(14位)



8. 雪だるま: 雪がいっぱい。私が作った雪だるま。(13位)



9. 雪がかかる木: 緑に映える雪。(15位)



10. 友人: 雪の降る中の友人。(16位)



11. 忘年会: 忘年会で盛り上がっている風景。(11位)



12. 忘年会: 忘年会で盛り上がっている風景。料理にびっくり。(6位)



13. 忘年会: 忘年会で盛り上がっている風景。(10位)



14. 忘年会: 忘年会で盛り上がっている風景。3人で飲んでいる。(5位)



15. 忘年会: 忘年会で盛り上がっている風景。(3位)



16. 雪が降り積もる道路: 雪がいっぱい。(8位)



17. 雪が降り積もる木: 雪でデコレーションされた木。雪がいっぱい。(1位)

図 8-2-6. 1の2冊目の自叙写真集

物, 場所	居場所	8
人物	他者	4
	自分と他者	2
	自分	1
物	好み-活動	1
	習慣	1

表 8-2-9. I の自叙写真集についての自由記述

(一回目) 自由記述	写真を撮った時期は実家にいた。遠く実家を離れ、L市に住んでいるが、 実家で写真を撮ったおかげで自分が育った環境が撮れた 。写真を見て分かるが実家はとても田舎。将来、実家に帰りたいとは決して思わないが、たまの田舎も良いのかも。でもやっぱりL市に来てよかったと思う。
(二回目) 自由記述	L市での私と地元での私、 両方の自分を表す ことが出来て良かった。どれも良い写真で順位をつけるのに迷った。L市で撮った写真と地元で撮った写真、それぞれ土地の良さが出た写真が撮れた。

Iと同じ、異なる場所や状況での自分を表現したグループに含まれる2名(JとK)の結果を、表 8-2-10 と表 8-2-11 に示す。まず、Jは寮生活と実家での生活を2回の撮影の中で表現した(表 8-2-10)。自叙写真集には寮と実家での生活様態とそれぞれの場所についてのJの感情が表明されている。

表 8-2-10. J の自叙写真集についての自由記述・被写体・表現内容

自由記述	昔から人と接することが大好きなので、写真を見ても人が写っているものが多い。また室内でじっとしてられるタイプではないので、屋外での撮影が多い。美味しいものを食べながら友人と語り合うことが普通の生活の一部となっているので、そのような場面も多い。人物以外では自然の風景を撮影しているが、これは人混みが苦手な山など緑に囲まれたのんびりしたところが好きだから、これも自分を表す写真。この写真を見る限りでは、やっぱり友達とわいわいやっていることが落ち着く楽しみなのだと感じる。 全て現在の生活における写真である。	
被写体・表現内容	行きつけ店での親友や先輩との交流 7 実家や実家の飼い犬 2 サークル(テニス)の活動と仲間 1 実家の山や花 3	親友。美味しさ。友人との語らいの楽しさ。幸せ。 実家の良さ。家族を癒す存在である犬。 友人と活動の楽しさ。 自然の豊かさ、美しさ。心が落ち着く。好き。
自由記述	今回はお正月を挟んでいたこともあり、実家に帰っていたので 実家で撮ったものが多い 。前回は 人物や食べ物 がほとんどだったにも関わらず、今回は 景色や静物 が多い。A市にいたときは毎日動き回って充実した日々を送っているけれど、家に帰ると心身ともに安定したゆとりある時間を過ごすため、前回に比べ、落ち着いた写真が多いのだと思う。	
被写体・表現内容	実家 2 実家の飼い犬 1 クラブ活動(茶道) 3 大学構内の樹 2 大学近くの馴染みの場所 1 集めているポストカード 1 帰省のお土産 1 実家での出来事 1	雪化粧の庭、美しさ。 家族の一員で癒す存在の飼い犬。可愛らしさ。 初釜の様子。茶道が最近の楽しみ。感激、楽しさ。 雪化粧した樹、美しさ、感激。 寮生活での馴染みの場所。目印。 小学校から集めているもの。大好き。 帰省でいつも買うお土産。 年末大掃除中に部屋にきた雀。

(注)上段は1回目(13枚)、下段は2回目(12枚)。

寮生活をおくる場所での自叙写真には、クラブやサークルの友人との交流の様子を通じて賑やかで楽しい学生生活が表現され、実家のある場所での自叙写真には自然の風景や実家を通じてゆとりや安定感が表現されている。2つの場所での異なる自分の様子や生活が、2冊の自叙写真集の中に矛盾なく組み込まれ、Jの自己に関連した世界が構成されている。

続いてKの自叙写真集についてみると、日常生活の中で見なれている風景や習慣に関わる自叙写真によってまとめられていることが分かる。ただし1回目はアルバイト先に関連する写真が10枚と多く、自由記述でも1回目の撮影時期はアルバイトが生活の中心であったことが記されている(表8-2-11)。1冊目の自叙写真集は、アルバイトを中心としてKの自己に関連する世界が表現されているといえる。

表 8-2-11. Kの自叙写真集についての自由記述・被写体・表現内容

自由記述	多くの写真がバイト先関係だと感じた。夏休み中はほとんどの日をバイト先で過ごしたが、自分なりにいろいろな写真を写せてよかった。普段カメラを持ち歩かない私がこの一週間どこに行くのもカメラを持ち歩き、何を撮ろうか考えるのがとても楽しかった。また写真集を作ってみたい。	
被写体・表現内容	自分1 バイトの友人との交流8 いとこ2 地元の駅1 愛車1 友人1 祖母宅の犬1 地元の山2 バイト先2	久しぶりの浴衣姿。自分を表すのに最適。バーベキューやバイトの休憩中。自分になついている。 いつも利用している。通学に欠かせない。出かける時いつも利用する車。 教室で撮影。仲の良い友達。 自分になついている犬。 自宅や祖母宅から見える。見慣れ、地元を代表する。 アルバイト先にある器具の説明。
述自由記	今回は自分の部屋にあり、関係が深いものがたくさんあったと思った。1週間という決められた日程の中で、自分を表すものがたくさん撮れてよかった。自分の周りには必要なものが色々たくさんあるのだと改めて思った。	
被写体・表現内容	自分と友人1 日常の携帯品(携帯電話など)2 手帳1 いとこと祖母宅の犬3 パズル2 日常使っている物(パソコンなど)8 地元のバス停1	成人式の時に撮影。 良く使う、毎日使う、常に持ち歩く、生活必需品。 使いやすい。数年分の自分の歴史がいっぱい。 仲が良い。自分になついている。 中学時代と今の作品。 良く使う、毎日使う、常に持ち歩く、生活必需品。 バスを使う時にいつも乗る場所。

注)上段は1回目(19枚)、下段は2回目(18枚)。

この K の例をみると、研究参加者が例えばアルバイトのような特定の活動に強くコミットメントしている時期には、自己に関連する世界を表現するものとして当該の活動や活動に関連した対象が被写体として選択されやすいことが分かる。

2 回目には、自室内にある日常生活に必要な物品の写真が 8 枚撮影された。1 回目と比較すると、2 回目には日常生活の中で使用する物品の写真が多く撮影されている。ただし、2 回の撮影において共通して撮影されている対象も幾つか見い出された (e.g. 携帯電話)。このことから、ある時期に特定の活動にコミットメントすることでその活動に関連する自叙写真が多く撮影されることはあっても、被写体として繰り返し選択される対象があることが分かる。このグループに含まれる自叙写真集については、2 冊の自叙写真集を対照させた際に 1 冊目と 2 冊目で異なっている部分と共通する部分を取り上げ、それぞれを当人がどのように捉えて自己に関連する世界として統合しているのかを検討することもできるだろう。

ここまで、(1)2 度とも類似の対象で自分を表現、(2)過去から現在という時間の流れに沿って自分を表現、(3)異なる場所や状況での自分を表現、の 3 つのグループに研究参加者を分類し、グループごとに被写体・表現内容・自由記述を参照しながら、各人の自叙写真集にみられる表現の特徴を記述してきた。本章の結果から、個々の自叙写真集にはテーマや意味的なまとまりが見られること、繰り返し自叙写真集を作成することによって時間経過や場面状況に伴う変化が自叙写真に表現されることが示唆された。

さらに、3 つのグループの研究参加者のうち 1 名の自叙写真集について、被写体・表現内容・重要順位・撮影順序といった複数の観点から検討を行い、個々の自己関連世界の特徴について詳細な記述を試みた。3 名の研究参加者の自叙写真集には、被写体の選択・表現内容・重要順位・撮影順序のような写真集の構成に関して個々人の特徴が見られた。例えば、A の自叙写真集を被写体からみると人物写真はなく物による表現が特徴的であるが、物の表現する意味をみると父母やきょうだいの繋がりや歴史、個人にとっての価値が表現されていた。また、表現内容については 1 冊目では被写体によって好みや習慣を表現し、これらを 2 冊目では自身の性格の解釈へと展開させている。重要順位が高

い被写体は自室や自宅であり、撮影順序をみても最初や最後に場所が撮影されている。写真集全体としてみると A の居場所の表現となっている。選択された被写体やその配置のされ方からは、見る者には暖かさや安定した印象を与える自叙写真集である。以上のように個人の自己関連世界を詳細に見ていくことで、個性記述的な研究に自叙写真集を活用できると思われるが、これに加えて自叙写真集に見られる特徴とパーソナリティ等の心理特性との関係について、個人レベルで検討していくことが今後の課題となろう。

表現内容の分類に際しては、本研究で提案した分類カテゴリーを用いて自叙写真に表現されている意味を捉えることを試みた。本研究で提案した分類カテゴリーは探索的なものではあるが、提案した分類カテゴリーを使って自叙写真が分類できたことから、これら分類カテゴリーの利用可能性が示された。特に、物や場所の分類に際して人との関係・個人的価値・時間という視点を持つことで、個々人がどういった対象を誰との関係からどのように価値づけているのか、自身を時間軸と関係づけて捉えているかを検討できることが示された。例えば、先の A の事例では物の表現する意味を新たな分類カテゴリーを適用することによって、家族との繋がり (e.g. 母から貰った振り子時計、父が朱印を貰ってきた額)、歴史 (e.g. 十余年間毎日みている玄関)、個人にとっての価値 (e.g. 自分なりに片付けて毎日使っている机) が理解され、環境への A の関わり方が明らかになってくる。被写体の意味を分類するカテゴリーをさらに精練して適用してゆくことで、個々人の自己関連世界をより理解しやすくなるを考える。

最後に、自叙写真に表現されるライフイベントおよび人物写真の有無について触れておく。本章の対象者である 11 名は Ziller (1990) が例示したような離婚・結婚・刑務所からの釈放といったライフイベントを経験したわけではない。しかし 11 名中 5 名 (研究参加者 A、D、F、G、H) が 2 回目の撮影期間中に 20 歳を迎えた。そしてこの 5 名全員が 2 冊目の自叙写真集の中に成人式に関連する写真を含めていることは興味深い。研究参加者は 40 日の撮影期間のうちの任意の 1 週間に撮影するように教示されていることから、これら 5 名は成人式を含む期間を特に選んで自叙写真を撮影したことになる。成人式の形骸化が話題になる昨今ではあるが、20 歳という年齢にある青年にとって成人式は現在でも大人としての自分を意識させるライフイベントであり、このような

ライフイベントは自叙写真に表現されやすいということなのかもしれない。

加えて、本章に掲載した3名の自叙写真集の事例は人物写真の有無を考える上で参考になる。Aは全く人物を撮影していない。Dは1冊目は人物写真がないが、2冊目では2枚（ただし顔半分と後ろ姿）を写している。Iは1冊目と2冊目に自分・他者・自他の写真を含めた。先行研究では人物写真は人との関係性や社会的結合の指標と考えられており、本研究ではFFPQの外向性の高い者では人物写真（特に自分を対象とした写真）の撮影枚数が多かった。また、社会的不安特性の高い者において人物写真（特に自分や他者を対象とした写真）の撮影枚数が少ない傾向が見られた。

ここでの事例をみると、人物を写さない（自分を写さない、自分の顔を写さない）ということの背景には、パーソナリティ特性以外にも幾つかの要因が関与しているように思われる。例えば、写真を写す＝写されるという人間関係が希薄である可能性の他に、物への興味や関心の強さや自叙写真の撮影に関連して生じる幾つかの動機（e.g.自己認知欲求・自己開示欲求、自己呈示欲求）についても考える必要がある。また、何を自叙写真集のテーマとするかは被写体の選択に影響するであろう（e.g. 性格など抽象度の高い自己の側面は物による表現が容易）。人物を写さない、あるいは物で自叙写真集を構成することの意味やその理由についての検討は、今後も引き続いての課題としたい。

8.3 第8章まとめ

本章では、研究参加者が5か月の間隔をおいて作成した2冊の自叙写真集について事例的に検討した。まず、2冊の自叙写真の撮影に必要とされた日数と撮影枚数との相関係数を求めたところ、撮影枚数については有意な正の相関が得られたことから、撮影枚数については個人で一貫した傾向が見られることが分かった。

続いて、個々の自叙写真集にテーマやまとまりが見られるか、1回目と2回目の自叙写真集を併せて一貫したテーマやまとまりが見られるかについて検討を行った。研究参加者の自叙写真の被写体・表現内容・自叙写真集に対する感想をもとに自叙写真集を分類したところ、5か月を経て作成された2冊の自叙写真集が一連のものを見出すことができるようなテーマやまとまりを見出すこ

とができた。見出されたテーマやまとまりに沿って研究参加者を3つのグループに分類した。3グループとは、(1)2度とも類似の対象で自分を表現、(2)過去から現在という時間の流れに沿って自分を表現、(3)異なる場所や状況での自分を表現、であった。

さらに、各グループから1名の研究参加者の自叙写真集を事例として示し、被写体・表現内容・重要度・撮影順序といった複数の観点から、各人の自叙写真集に表現された自己関連世界の特徴について詳細な記述を試みた。なお、表現内容の分類の際には本研究で提案した分類カテゴリーを使用し、これら分類カテゴリーの利用可能性についても検討した。

一連の自叙写真を冊子としてみることで、それぞれの研究参加者に特徴的な被写体・表現内容・重要度の順位・自叙写真の構成等が分かること、自叙写真集を一定の時間をおいて複数回作成することによって変化した部分としなかった部分についての情報が得られること等、自叙写真集を用いた個性記述的研究や縦断研究についての示唆が得られた。また、本研究で提案された表現内容の分類カテゴリーは、個々人の自己関連世界の特徴を把握するために使用できる可能性が示された。

第9章 自叙写真集・自叙写真法に対する研究参加者の評価

9.1 研究への参加の面白さと自叙写真への取り組み

自叙写真を撮影するという活動を通じて研究参加者はどのような意見や感想を持つのだろうか。これまでの研究では、自叙写真法という手法についての評価や意見については報告されていない。自叙写真法に対する研究参加者の意見や評価をもとに、研究参加者にとっての利益という点から自叙写真法の有用性について検討する。

方法

自叙写真の撮影・研究参加者・実施期間・有効資料

自叙写真の撮影についての教示は第3章第1節と同様である。研究参加者は女子大学生59名で、自叙写真の研究に自主的に参加を申し出た者である。撮影実施期間は、2001年7月から2002年8月までの間の夏季あるいは冬季休暇を含む40日間であった。研究参加者にはこの間の任意の1週間を選んで撮影を開始・終了するよう伝えた。

結果と考察

9.1.1 研究への参加と取り組み

研究参加者59名について本研究への参加の面白さの評定を調べた。この結果、研究参加を“やや面白い”“非常に面白い”としたのは55名(93.22%)で、残り4名(6.78%)は“どちらともいえない”という回答であった(表9-1-1)。

表9-1-1. 研究への参加の面白さ

	非常に面白くない	やや面白くない	どちらとも言えない	やや面白い	非常に面白い	合計
度数(人)	0	0	4	25	30	59
%	0.00	0.00	6.78	42.37	50.85	100.00

注)“研究に参加してどのように感じましたか”という問いに対する回答。

また、自叙写真への取り組み態度に関する回答についても調べた(表9-1-2)。59名の研究参加者のうち、この問いに“非常に不真面目”“やや不真面目”と回答したのは5名(8.47%)であった。以上の研究参加への面白さと自叙写真

への取り組み態度についての回答から、ほとんどの研究参加者にとって自叙写真の撮影は興味を喚起するものであり、撮影には真摯な態度で取り組んだことがわかる。なお、“非常に不真面目”“やや不真面目”と回答した5名は課題への取り組みが不十分とみなして以下の分析からは除外し、54名を有効資料とした（平均年齢は19.98歳）。

表 9-1-2. 自叙写真への取り組み態度

	非常に 不真面目	やや 不真面目	どちらとも 言えない	やや まじめ	非常に まじめ	合計
度数(人)	3	2	13	17	24	59
%	5.08	3.39	22.03	28.81	40.68	100.00

注)“あなたの研究への取り組み態度はどうでしたか”という問いに対する回答。

9.1.2 自叙写真および自叙写真集への評価

研究参加者によって自分自身を表す上での重要度が高かった写真から順に上位12枚（総数630枚）を選び、記録用紙の6～8の問い（被写体の想起の容易さ・写真の出来ばえ・写真があなたは誰かを表す程度）への回答を調べた（表9-1-3～表9-1-5）。

写真の出来ばえについて、“やや満足”“非常に満足”と評定された写真は61.34%（387枚）であり、満足度については評価の低い写真も4割程度あることが示された。一方、被写体の想起のしやすさや写真が自分を表現する程度については、“想起しやすい”“自分を表す”とした回答が8割程度となった（それぞれ496枚, 78.73%、521枚, 82.56%）⁴³。従って、出来ばえの満足度の低い自叙写真も一定量は含まれるものの、写真の対象となった事物・事象は研究参加者にとって想起しやすく、自分を表現するものであったことが分かる。

表 9-1-3. 写真の出来ばえに対する満足度

	非常に 不満足	やや 不満足	どちらとも 言えない	やや満足	非常に 満足	合計
度数(枚)	38	97	109	207	180	631
%	6.02	15.37	17.27	32.81	28.53	100.00

注)“写真の出来ばえ”に対する回答。重要順位の未記入1名を除くN=53。

⁴³ 撮影対象の想起のしやすさでは“やや簡単”“非常に簡単”、写真があなたが誰かを表す程度では“やや表す”“非常に表す”という回答の合計。

表 9-1-4. 撮影対象の想起しやすさ

	非常に 困難	やや困難	どちらとも 言えない	やや簡単	非常に 簡単	合計
度数(枚)	7	59	68	219	277	630
%	1.11	9.37	10.79	34.76	43.97	100.00

注)“撮るものは簡単に思い浮かんだか”という問いに対する回答。重要順位の未記入1名を除く
N=53。

表 9-1-5. 写真が“あなたが誰か”を表す程度

	非常に 表さない	やや 表さない	どちらとも 言えない	やや表す	非常に表す	合計
度数(枚)	9	17	84	247	274	631
%	1.43	2.69	13.31	39.14	43.42	100.00

注)“写真があなたが誰であるかを表す程度”に対する回答。重要順位の未記入1名を除くN=53。

続いて、自叙写真集の出来ばえ・写真集が自分を表す程度・写真集への好悪についての結果を表 9-1-6～表 9-1-8 に示す。写真集の出来ばえに“やや満足”“非常に満足”とした者は 25 名 (46.30%)、写真集が自分を表す程度について“やや表す”“非常に表す”とした者は 44 名 (81.48%)、写真集への好悪について“やや好き”“非常に好き”とした者は 36 名 (66.67%) であった。

表 9-1-6. 自叙写真集の出来ばえについての満足度

	非常に 不満足	やや 不満足	どちらとも 言えない	やや満足	非常に 満足	合計
度数(人)	2	11	16	20	5	54
%	3.7	20.37	29.63	37.04	9.26	100.00

注)“出来上がった小写真集の出来ばえについてどう思いますか”という問いに対する回答。

表 9-1-7. 自叙写真集が“あなたが誰か”を表す程度

	非常に 表さない	やや 表さない	どちらとも 言えない	やや表す	非常に表す	合計
度数(人)	1	1	8	36	8	54
%	1.85	1.85	14.81	66.67	14.81	100.00

注)“小写真集は「あなたが誰であるか」をどの程度表していますか”という問いに対する回答。

表 9-1-8. 自叙写真集への好悪

	非常に嫌い	やや嫌い	どちらとも 言えない	やや好き	非常に好き	合計
度数(人)	1	5	12	22	14	54
%	1.85	9.26	22.22	40.74	25.93	100.00

注)“出来上がった小写真集についてどのように感じますか”という問いに対する回答。

従って、出来ばえに対する評価はやや低いものの、自叙写真集が自分を表すとした者は約 8 割、好意的に評価した者は 6 割を超えていることが分かる。

9.2 自叙写真集に対する研究参加者の感想

表 9-2-1 の自由記述“自叙写真集をみて感じたこと、気づいたこと”の回答をみると、まず自分自身をテーマとすることについての難しさについて 13 名が言及している。その理由として、“今自分探しをしている最中 (No.2)” “自分のイメージを形にする難しさ (No.4)” “考えれば考えるほどと分からなくなる (No.16)” “普段深く考えていない (No.32)” など、自己探索中の混乱、自己の捉えにくさ、イメージを具現化することや自分自身を意識することの難しさ、などの理由が挙げられている。その一方で、“自分を見つめ直す良い機会になった (No.39)” “客観的に自分を見つめることができた (No.56)” など、自叙写真が自己客観視や内省を深めたという意見があり、この方法が自分を見つめ直したり自己内省を促進したりする手段となり得ることが分かる。

この中で特に“写真に撮ることを意識していると... 何気なくしている行動が分かる (No.11)” “意外と頭で考えていたのがそのまま顔 (表情) に表れていない (No.13)” “普段から見ているものを写真にしてみるとまた見方が変わる (No.50)” “写真ができてからもっといっぱい思いつくことが見つかった (No.55)” “自分を表すものが意外とあることに気づいた (No.58)” など、自分自身や周囲の事物・事象への新たな気づきがあったという記述、自叙写真によって自己についての記憶が喚起されるという記述は興味深い。自叙写真法は通常、我々が意識することのない自己の側面に注意を向けるための一手段となることを示唆するものと言えよう。

また、“自分を表すものを見つけてゆくのが楽しかった (No.5)” “出来上がった写真を見ると面白い (No.29)” “何を撮ろうか考えるのが楽しかった (No.50)” など、自己探索や自己発見に伴う興味や喜びに言及している者は 17 名であり、研究参加者の多くは楽しさや興味を喚起する体験であったことが分かる。この他、“めったに行かない場所に行くことができた (No.53)” “懐かしい場所に行って昔の自分が思い出された (No.54)” “夜の人通りのなくなった... 良い経験ができた (No.49)” など、自叙写真の撮影が過去の自分との繋

がりを確認する作業となることに加えて、新奇な体験や非日常的な体験と結びつくことも示された。自叙写真法の遊戯的な側面が示されたといえよう。

表 9-2-1. 自叙写真集を見て感じたこと、気づいたことの自由記述

No.	記述内容
1	私には遠い関わり（私を表すとは言い難い）ものまで撮ったような気がします、友人達も協力してくれてとても楽しく自分を少し知れたような気がします。
2	現在自分探しをしているところであまり自分と言うものを写し出すことが難しかった。この3回生というのは4回生になって就職活動をする時より自分を見つけ表していくときだと思うので、ちょうど良い時期に小写真集を作れたと思う。自分を見つめなおすこれが大きな今の私に必要な時間だと思う。
4	なかなか撮ろうと思うと何を撮るべきか浮かんでこなかった。結構自分のイメージに形を与えようと言うのは難しかった。
5	自分を表すものを探して撮ると言うことが楽しかった。
6	もっと撮ればよかったと思うものがたくさん期間後に思いついて悔しい思いをした。思い出したりするのも楽しかった。
7	カメラを25枚使い切れなかったのが残念です。一人では何を撮ったら良いのか分からず、自分ばかり撮るのも面白くない。もっといろいろ撮りたかったです。これを撮ろうと思っても撮り損ねたり、頼むのがちょっと恥ずかしかったり、最終日にかためて撮りました。難しい一言ですが、でも苦でもなくそれなりの写真集だと思います。
8	写真が巧く撮れなくて内容をしっかり写すことができなかった。問題理解に時間がかかってしまった。
9	きちんと慎重に撮ったつもりなのにどれも完璧に撮れている写真は一枚もなく、あまりの自分の写真を撮る才能のなさががっかりしました。ショックでした。自分を表すものは何だろうとテーマがとても難しかったです。何を撮れば良いのかとても困りました。でも私の好きなものを中心に撮ろうと決めてからは楽でした！
10	撮影期間が本当に短くてちょっと苦しかったです。
11	写真を撮ることを意識していると、自分が日頃何気なくしている行動がわかってくる。1つ挙げるとケーキをこんなに食べているとは思ってなくてびっくりでした。
12	もう少し撮影期間が長ければもっと枚数が撮れたと思います。
13	意外と頭で考えていたのがそのまま顔(表情)には表れていないのだなと思い、唯一表れていたのが好きな物を食べたりしている時の幸せ(満足)そうな顔でした。
15	夜の写りが悪かった。どれを撮ろうかと思案する時が楽しかった。
16	考えれば考えるほど何を撮るのか分からなくなっていく。非常に難しい。自分は誰か。結局出した結論は自分の好きな物や大切なもの、人を撮ろう、あるいは自分が常に関わっているものや場所を撮ろうと思った。周囲の環境から受ける影響は限りなく大きい。とにかくとても難しく、でもあと味の良い体験となった。
18	ピントがあっていない写真が多い。けれども写真からはどちらかと言うと、自分の好きなものが良く写っていると思う。
20	結構楽しくできました。1週間じゃなくて1ヶ月くらいあればなお良かったと思います。もう少し人を撮りたかったです。
21	もう少し期間が長ければもっといろんな自分が撮れたかも...って思います。
24	自分自身をテーマにすることは難しいことだと思いました。
25	出来上がった写真を見てるとなかなか面白かった。もっとまじめに取り組めばよかった。
29	もっと時間があってもっといっぱい写真を撮れたらもっと自分をよく表せるものが出てきたと思う。でも出来上がったものを見ると意外に面白い。
31	自分が誰であるかを表すために何をとろうかと考えるのはとても楽しかったです。
32	今まで自分自身を表すものについて深く考えたことがなかったので、頭をすごく悩ませました。実際、自分を表すものが撮れていない気がします。
33	私発見が難しいということ。しかも少ない枚数で表現するのが大変。かといって、増やしてしまうと写真が撮れない。

表 9-2-1. 自叙写真集を見て感じたこと、気づいたことの自由記述(続き)

- 34 何も考えずに撮っていたので、もう少し計画的に撮影した方が自分自身を表現できたのでは、と反省しています。
- 35 難しかった。
- 36 私をよく知っている人間がこの写真集を見れば分かるが、他の人が見れば一体何が自分らしさなのか分からない。けれどそれが自分らしさだということが分かった。自分が見て私だと分かればそれは自分らしさを十分に表していること。
- 37 「自分自身」という課題内容が難しかったように思います。写真を撮るとするのは非常に楽しかったです、また違う内容でやってみたいと思いました。
- 38 実際に自分らしさをテーマに撮ることはとても難しかったです。特に最後の犬の写真は自分らしさを表現できなくて、見直すと少し恥ずかしいです。
- 39 これまで自分を表すものは何かということなど考えたことがなく、自分自身を見つめ直すすごくいい機会となった。この期間中、自分がどのように生活してきたか、またはしているかをしっかり考えれて良かった。
- 40 思うようにいなくて難しかったです。
- 42 すべて記入してみてその1枚1枚を撮ったとき、書き込んだ時は自分のことを表すだろうと思っていましたが、いざ番号をつける時になって何だか違いが出てきました。やっぱり自分のことは自分が一番分かっていないのかもしれない。
- 43 とても楽しんで取り組ませていただきました。もし別の季節・時期に同じテーマで写真を撮るとすれば何を写すだろうかと（撮影終了後には）考えてしまいました。
- 46 残り12枚だったので12枚撮ったと勘違いしてカメラを出してしまい、11枚しか撮れていないことに気づきました。最低枚数も撮れていないので不満と反省が残りました。
- 47 非常に楽しかったです。
-
- 48 自分が築き上げた空間を写真などを通して他の人に紹介するという事は私にとって少し恥ずかしい気がしました。また、この恥ずかしい気持ちを持った自分を見て、私が内気（小心者）な人間であることを発見することができた。家の中以外でも、自分を表しているものがたくさんあることを知って、人間が生きていくためにはいろいろな場所や集団に所属する必要があることを学びました。一人で生きることが困難であることが分かった。
- 49 研究に参加していて楽しいなと思った。夜の人通りのいなくなったところを探して写真を撮ったり、いい経験ができた。
- 50 毎日、「今日は何撮ろうかな」と考えながら撮るのが楽しかった。普段から見ている物を写真にしてみるとまた見方が変わるということに気づいた。
- 51 自分を表すものを見つけてゆくの面白かった。
- 53 撮影期間が過ぎ、小写真集を見直すともっと撮っておけばよかったことなど、少し後悔がありました、でもめったに行かない場所に行くこともでき、良かったです。たくさんのことを思い出すことができました。
- 54 なつかしい場所に行ったりして昔の自分が思い出されました。自分自身のことなんてあまり考えたりしないので、これでたくさんかんがえられました。
- 55 写真が出来てから自分をもっとあらわされる写真ということを考えてみるともっといっぱい思いつくことが見つかった。
- 56 客観的に自分を見つめることができました。
- 57 自分自身を表すものが何かということ考えたことがなかったので、良い機会だったと思う。
- 58 自分を表すものって難しいと思っていたけど、意外とあることに気づいた。自分の好きな物ばかり撮ってしまい悔しい。
- 59 楽しくできました！がデジカメの時には失敗したらいつもは消すけどインスタントだったし失敗したものが残ったのがちょっともったいない感じだし、撮って直ぐに見れないのがいやでした。あと、もっと自分を写したかったです。

注)N=59のうち、記述のあった研究参加者のみ掲載。

以上をまとめると、自叙写真の撮影を主とする本研究への参加は、多くの参加者にとって面白く、真摯に取り組むことのできる活動であったことが示され

た。自叙写真の評価については、写真の出来ばえに満足した者は6割程度であったが、8割の者が被写体は想起しやすく、写真は自分を表わしていると捉えていた。一方、自叙写真集の評価については、写真集の出来ばえについて満足度の高い者は5割弱であったが、約8割の者は写真集が自分を表していると捉えており、約6割の者が写真集を“好き”とポジティブに評価していることが示された。

これらの結果を表9・2・1に示した研究参加者の自由記述（自叙写真集をみての感想・気づいたこと）と合わせて考察すると、記述の中には撮影期間の短さや技術面での制約により、期待したとおりの撮影ができなかったことや撮影を失敗したことを悔やむものがあることから、写真撮影の期間や技術に関する事柄が、自叙写真や自叙写真集への満足度の評価を低めている可能性がある⁴⁴。今後、自叙写真の撮影を行う際には適当な撮影期間をとり、撮影結果がその場で確認できるデジタル・カメラの導入についても考えてゆく必要があろう。

満足度の評価とは異なり、自叙写真や自叙写真集が自分を表現している程度についての評価は、“自分を表現している”と評価する者が多かった。自叙写真集についての感想の中にも、自分をテーマにすることの難しさとともに撮影を通じての自己発見や自己内省の深まりを指摘する意見があった。自叙写真法という手法が撮影者の自己に関連する世界を知る手段として有効であることを示すと同時に、撮影者にとって自分自身を知るための有用な手段となる可能性が示された。

また、自叙写真集に対する好悪の評定では好意的な評価が6割を超えていた。写真集への評価をそのまま研究参加者の自己評価の反映と見なすことはできないが、自叙写真集として表現された研究参加者の自己に関連する世界は、全般的には比較的ポジティブな評価がなされていると考えられる。しかしながら、残り4割の評価は好意的ではなかったことから、自叙写真集にはポジティブな側面だけが表現される訳ではない。これは第4章の自叙写真の情緒的意味の分析において評価の低い写真群も見出されたこととも符合する結果である。

自叙写真集についての感想を述べた中には、自分自身だけでなく周囲の事

⁴⁴ 通常の撮影期間は2週間であるが、ここでの研究参加者の撮影期間は1週間であったことから、撮影期間の短さへの言及が多かったものと考えられる。

物・事象への新たな気づきがあったという記述や、自叙写真によって自己についての記憶が喚起されたという記述が見られ、自叙写真の撮影や撮影された写真を見ることが、通常、我々が意識することのない自己の側面に注意を向けるための一手段となることを示唆するものであり、自叙写真が自己客観視を促進する手段として有用であることを示すものと思われる。

さらに、自叙写真を撮影することが過去の自分との繋がりを確認する作業となる場合があることや、自叙写真が創作意欲や想像力を刺激する課題であり、撮影に伴う新奇な体験や非日常的な体験を通して撮影者の好奇心や想像力を喚起する場合があることも示された。このような課題のもつ遊戯的性質が研究参加者に及ぼす効果は、第7章で述べた臨床現場での自叙写真の適用という面からも注目すべき特徴であると思われる。

9.3 第9章まとめ

59名の研究参加者を対象に自叙写真法についての評価を調べた。まず、自叙写真を撮影するという本研究への参加については、参加を“やや面白い”“非常に面白い”とした者が90%を超えた。取り組み態度が不十分な者もごく少数であった。従って、ほとんどの研究参加者にとって自叙写真の撮影が参加者の興味を喚起し、真摯に取り組める活動であったといえる。

自叙写真や自叙写真集についての評価をみると、出来ばえについての満足度は“やや満足”“非常に満足”とした者が46%と低かったが、これは本章の手続きでは撮影期間が1週間と短かったことから、時間的な制約により期待どおりの撮影ができなかった場合があったことが、写真の出来ばえの評価に影響を及ぼした可能性が考えられる。写真が自分を表現する程度については、約8割の研究参加者は自叙写真や自叙写真集は自分を表すものと捉えており、6割の研究参加者は撮影した写真を好意的に評価していた。

研究参加者の感想（自由記述）をもとに自叙写真や自叙写真集への評価を調べたところ、この活動を通じて自身や周囲への新たな気づきや記憶の喚起があったという記述や、新奇な体験や非日常的な体験を楽しんだという記述があったことから、この方法が自己探索や自己発見、自己表現の手段となることが示され、研究参加者の利益という面からの有用性が示唆された。

第V部 総括

第 10 章 本研究のまとめと今後の課題

10.1 本研究のまとめ

近年、カメラは日常的に使用され、写真はコミュニケーションや自己表現の手段としての役割を増している。また、撮影等の行為の持つ主体性・能動性や写真が持つ個人的資料としての価値は臨床現場等で認められるところである。このような現状に比して、写真に関する心理学的な研究は少ない。本研究では写真で自分を表現する自叙写真法に着目し、これを自己理解や他者理解のために利用することを主張した。また、日本における自叙写真法の研究成果の蓄積が必要であることを述べた。

本論文の第 I 部では、先行研究を展望し、本研究の課題と目的をまとめた。第 1 章では、自己研究の中で写真を用いた研究を展望し、その使用目的を情報源・撮影活動における効果・呈示による効果の 3 点にあることを示して、写真という素材の特徴を整理した。その上で、写真を用いた研究方法として本研究が着目する自叙写真法の特長をまとめた。自叙写真法では、撮影者自らが生活環境内から自分を表現する対象を選んで写すことで、自己に関する多様な情報が当事者の視点から捉えられるという利点がある。また、写真の持つ具体性や現実性、イメージ表現の容易さ、言語による制約の受けにくさという特徴ゆえに、自叙写真が撮影者についての情報を生き生きと具体的に伝え、豊かな読解と語りを引き出す素材となろうことが期待された。加えて、撮影活動やフィードバックから撮影者にとっての利益も大きいことが予測された。

自叙写真法を用いた先行研究として、米国を中心に自叙写真のカテゴリー分類、自叙写真集（冊子）の自己叙述の豊かさについての印象評定、事例的アプローチが行われている。日本での研究は少ないが、自叙写真のカテゴリー分類に加えて、自叙写真に見られる自己呈示に着目した研究がある。これらの研究では特定の属性を持つ研究参加者に見られる自叙写真の特徴や、性格特性や対人傾向と自叙写真との関係等について一定の成果が見られるものの、自己理解・他者理解のために有用となる資料の呈示と分析が十分でないことが課題と思われた。

第 2 章では、以上の課題と本研究の目的をまとめた。本研究では、従来からの分析に新たな分析の観点を加えることによって、また多人数から得られた資

料の分析とともに自叙写真法の利点である“当事者の視点を生かす”分析として事例の検討を通じて、自己理解や他者理解に有用となるような基礎的資料を提示することを第1の目的とした。また、従来の方法との比較から、自叙写真法によってどのような資料が新たに得られるのかを実際に示すことで、自己研究の方法としての自叙写真法の有用性を考察することを第2の目的とした。

第II部は、自叙写真の被写体について分析した結果を報告した。第3章第1節では Ziller らの先行研究を参考に、被写体を人物・場所・物の3つの上位カテゴリと21の下位カテゴリに分類した。結果、これまでの日本の大学生を対象とした研究と同様に人物や場所よりも物を被写体とした写真が多く、人物写真では自分（研究参加者）を単独で写した写真が最多であるが、他者を含む写真では友人が多く撮影されていることが確認された。一方、先行研究と比較して本研究では被写体に親が選択される割合が高かった。物写真では日用品・音楽・服飾・書籍が、場所写真では風景が被写体として多く選択されていたことは先行研究と同様であったことから、これらは女子大学生の自己関連世界を構成する代表的な対象と考えられる。被写体の分析を通じて、研究参加者が自分をどのような対象と関連づけて記述するのか、その特徴や基礎資料が示された。

第2節では、被写体の分類に使用されるカテゴリ数を取り上げた。平均は7~8程度、撮影枚数の平均は約14枚で、両者の間に有意な正相関がみられ、撮影枚数が増えると分類に必要なカテゴリ数も増えるといえる。

第3節では、以上のような被写体の分類に新たに“自分を表現する上での重要度”という観点を導入した。その結果、重要度上位の自叙写真群には人物写真が多く含まれることが分かり、個人の自己関連世界を理解する上で被写体に加えて個々の自叙写真における自己を表現する上での重要度を考慮すべきことが示された。

続く第4節と第5節では、研究参加者の自叙写真に対する意味づけに焦点を当て、重要度上位の自叙写真を表現内容（何を表すかの記述）にもとづいて対象人物ごとに分類した。結果、自分を単独で写した自叙写真では5つの表現内容（自分の身体・私的な姿や行動・日常的行動・非日常の行動・過去を踏まえた現在の自分）が見出された。他者を単独で写した自叙写真では3つ（他者存

在の重要性・他者との関係性・他者に対する感情)、他者と自分をともに写した自叙写真ではこれら3つに自分に関する記述を加えた4つの分類カテゴリーが見出された。このうち、他者を単独で写したものでは他者存在の重要性カテゴリーに含まれる枚数が多く、ここでの対象は肉親が多く選択されていた。一方、自他をともに写した自叙写真では他者との関係性カテゴリーに含まれる枚数が多く、ここでは友人が対象として多く選択されていた。これより、被写体となる人物と構図(自分単独・他者単独・自分と他者)によって表現内容が異なることが示された。

続いて物写真や場所写真の表現内容について分類カテゴリーの設定を試みた。結果、物写真では“好み”“擬人化”“思い出”“贈り物”“繋がり”“性格”といった分類カテゴリー、場所写真では“居場所”“解放感”といったカテゴリーに分類される自叙写真が多かった。表現内容について見出されたカテゴリーは、データを追加することでさらに洗練させていく必要がある。

第4章では、自叙写真に対する研究参加者自身の意味づけを調べる試みとして、各人が自叙写真に対して抱く情緒的意味について検討した。研究参加者がSD法により自叙写真を評定し、この結果をもとにクラスター分析を行って5つの類型を見出した。結果の分析にあたっては、各群に含まれる自叙写真の事例と研究参加者のインタビューでの発言を挙げて5つの類型の特徴を明示するとともに、被写体・表現内容・表現様式(構図)・自叙写真への評価といった点から群間の相違を調べた。その結果、例えば評価・活動・柔軟・力量の得点の高い自叙写真群は人物写真が他群に比べて有意に多く(物や場所の写真は有意に少なく)、表現内容では快感情についての言及が多く、様々な活動や動きある姿勢が写され、被写体は想起しやすく・写真の出来ばえは良く・写真が自分を表現する程度も高いと判断される等、各群には特徴的で了解可能なまとまりが見られた。自叙写真の情緒的意味から、研究参加者の自己関連世界の特徴を探索できる可能性を示すものと思われる。

さらに、ここで得られた自叙写真の5つの類型をもとに本研究参加者の特徴を調べることを試みた。研究参加者ごとに5つの類型に含まれる自叙写真の枚数を調べ、これをもとに研究参加者をクラスター分析により類型化した。この結果、評価得点の高い自叙写真を多く写した研究参加者において公的自己意識

が高い傾向が見られ、評価得点が平均的であった自叙写真を多く写した研究参加者で私的自己意識が高い傾向がみられた。

第Ⅲ部は、第Ⅱ部で得られた自己関連世界を個人差という観点から検討した。第5章では、人物写真の出現比率や使用カテゴリー数の個人差をパーソナリティ特性や自己意識・社会的不安との関連から検討した。FFPQで測定されたパーソナリティ特性との関連では、外向性の高い者は低い者に比べて人物写真、特に自分を被写体とした写真の撮影枚数が多かった。また要素特性では、外向性の支配・興奮追求・活動の高い者は人物（特に自分のみ）の写真枚数が多かった。自己意識特性と社会的不安特性の関連については、社会的不安特性との間にごく弱い相関がみられ、社会的不安特性の高い者は人物写真の撮影枚数（特に自分のみや他者のみの自叙写真）の撮影枚数が少ない傾向が示された。なお、自叙写真の分類に使用されたカテゴリー数についてはパーソナリティ特性および自己意識特性との関連を検討したが、使用カテゴリー数はFFPQの超特性、自己意識特性のいずれとも有意な相関を示さなかった。

Dollingerらの研究では、外向性以外に調和性の高さや人物写真の撮影枚数の多さが報告されている。また、Zillerらの研究ではシャイネスの高さや人物写真の撮影枚数の少なさが報告されていることから、ここでの結果は、先行研究の結果と一部異なるものであった。先行研究と異なる結果を得たことについて、文化差の他に自叙写真の撮影という状況が研究参加者にどのように認知されていたかという点について考察を行った。そして、自叙写真を撮影するという課題の持つ意味（e.g. 他者からの評価を意識させる課題として受け取られているか否か）やその際に生じる様々な動機を考慮すべきことや、人物写真の撮影枚数のみならず、他の被写体や被写体に付与されている意味、表現様式等についても検討すべきことが課題として挙げられた。また、愛着性の本質である“関係”を捉える指標や人物以外の被写体の意味を捉える分類カテゴリーの精緻化も今後の課題となろう。

続いて、本研究の第2の目的に関連して、従来の方法と自叙写真法とを比較してその相違を示し、自叙写真法の有用性について検討することを試みた。第6章ではTSTと自叙写真の表現内容の比較を行った。TSTの分類カテゴリーを用いて自叙写真の表現内容を分類したところ、被写体に関わらず研究参加者の

好み・趣味、日常生活習慣・生活上の事実への分類が多かった。なお、被写体別では、人物は友人関係などの社会的対人的側面を、場所は過去などの時間的側面を、物は気質や性格などの心的側面を表現する対象として選択されていた。研究参加者の自由記述から、自叙写真には自身の内面（e.g. 性格、イメージ）が表現されていると考えられていることが分かった。

TST と自叙写真法の回答を比較すると、両方法では表現されやすい内容に違いが見られた。TST では気質・性格や対人態度が表現されやすいのに対し、自叙写真法では関心・好み・趣味や日常生活習慣・生活上の事実といった内容が表現されやすかった。この結果について、TST では比較的抽象度の高い自己叙述が出現しやすく、自叙写真には具体的な自己叙述が出現しやすいことを考察した。これを具体例によって確認するため、自叙写真の実例や同一の研究参加者から得られた TST と自叙写真法の回答を事例として挙げた。事例の検討を通じて、自叙写真による表現は具体的・現実的であり、それゆえ被写体についてのエピソードや感情が喚起されやすいことが考察された。

第IV部は、第II部と第III部の結果を踏まえて、事例を中心に自叙写真の実施の実際について報告し、この方法の有用な利用について考察した。第7章の臨床現場での適用の部分では、4名のクライアントの自叙写真集と半構造化面接での結果にもとづき、彼らの自己関連世界の特徴を記述した。女子大学生のデータとの比較や個々のクライアントについての記録、クライアント自身の自叙写真法への評価の記述等から、自叙写真の臨床現場での適用可能性を提示した。

第8章では、2度の自叙写真の撮影を行った者について、自叙写真集（冊子）からまとめやテーマを見出すことを試みた。11名（22冊）の自叙写真集から表現内容について3つの類型（2度ともほぼ同じ対象で自分を表現、過去から現在という時間の流れに沿って自分を表現、異なる場所や状況での自分を表現）が見出され、自叙写真を冊子として見ることや繰り返し撮影を実施することで、個々人の自叙写真集にみられるまとめやテーマ、変化の有無などによって個人の自己関連世界をより理解しやすくなることが主張された。また、ここでは3つの類型から事例を挙げ、被写体・表現内容・重要度・撮影順序といった複数の観点から、それぞれの自叙写真集について検討した。なお、表現内容については第3章の第4節と第5節で新たに提案した分類カテゴリーを用い、

自叙写真に表現された意味を捉えることを試みた。表現内容のカテゴリーに自叙写真を分類することで、個人の2冊の自叙写真集にみられる変化を捉え、自叙写真への意味づけから事例を記述できたことから、創案された分類カテゴリーの利用可能性が示唆された。

第9章は研究参加者による自叙写真法に対する評価を扱った。自叙写真や自叙写真集への評価や感想から、この方法が多くの研究参加者にとって面白く真摯に取り組めるものであり、自己探索、自己発見、自己表現の手段となることが分かり、研究参加者にとっても利益となることが示唆された。

本研究では、これまでの研究が特定の研究参加者の自叙写真に見られる一般的特徴の記述に留まっていたのに対し、個人の自己関連世界により肉薄する資料の呈示と分析を目指した。当事者の視点から自分に関連する世界を捉えるという自叙写真の特長を従来よりも活かすことができたと考える。また、このような資料の呈示と分析を通じて、従来の方法を補完する研究方法としての自叙写真の有用性の一端を示すことができたと考える。以上の結果を総括すると、新たな分類カテゴリーや分析を用いて研究参加者の自叙写真や自叙写真法についての基礎的資料を提供し、自己理解や他者理解のための方法として自叙写真法の有用性を示すという本論文での目的は一応、達成されたと考える。

自己研究において、法則定立的なアプローチと個性記述的なアプローチを併用することの重要性は常々指摘される場所である。これまであまり注目されてこなかった写真という素材に着目し自叙写真法を用いることで、個々人の自己関連世界を把握できる可能性を示したところに本研究の意義があると考えられる。

10.2 今後の課題

本研究では、女子大学生を研究参加者とした結果を中心に報告している。その意味でここでの研究結果を一般化することには限界がある。多様な研究参加者を対象に自叙写真法を実施し、さらに多くのデータを蓄積していくことが今後の課題となる。多くのデータを横断的に収集することとともに、個人を事例として縦断的に見ていくことも欠かせないだろう。

この他、自己と“物”とを関係づけることによって自己を捉えたり表現したりする自己認知の在り方についての検討がある。自叙写真に表れた多くの物が

示す意味については、本論文の第3章や第6章の表現内容にもとづく分類や第4章の情緒的意味についての検討、さらに第7章や第8章の事例を通じて理解できた部分がある。しかし、分類カテゴリーは未だ探索的なものであり、自叙写真が研究参加者の様々な動機に支えられて撮影がなされること、対象として選択される物やその意味づけは研究参加者の属性によって異ると予想されること等から、物の意味づけや自己との関わりについて、今後さらに検討してゆく必要がある。そして、このような作業を通じて自叙写真を体系的に理解するためのコーディング（ないしはカテゴリー）システムを構築してゆくことが今後の課題となる。

実施手続きについても工夫が必要であろう。本研究では Ziller らの方法に準じて自叙写真の撮影を依頼し、撮影枚数や撮影期間に関しても適当な手続き確認した上で実施した（資料3参照）。しかし、自己表現や自己認知における個人の動機づけを含めて自己関連世界を検討するためには、撮影枚数や教示等の実施手続きを目的に合わせて改訂することも必要である。例えば、撮影枚数を最低12枚とせよと好きなだけ撮影してもらい、評価的色彩を強めた教示を行う、自分のポートレートを必ず1枚は撮るように求めるなどが考えられる。このような手続きの改訂によって、撮影枚数と使用カテゴリー数との関連をさらに明確化する、自分を被写体とした写真の出現の程度を比較する、自己を防衛しつつ表現する（あるいは自己顕示的に表現する）といった表現様式の違いを検討するなど、本論文での結果をさらに展開させていくことができるのではないだろうか。

さらに“自分を写真で表現する”ことを拡張して、“自分の対人関係を表現する”“自分のこれまでの歴史を表現する”などの教示を行えばどうだろうか。このような教示によって自己関連世界の中でもあるテーマに特化した世界についての知見を得たり、そこでの個人差を見ていくことができるのではないだろうか。この他、“撮りたいもの”を尋ねて実際に“撮ったもの”と比較してみるのはどうだろうか。写真という手段を用いる限り、撮影したい対象の不在等の理由で撮影したくても撮影できない場合がある。“撮りたいもの”についてシュミレーションを行うことにより、理想と現実のズレや欲求の阻害された事態を捉えることができるかもしれない。このような手続きは、特に臨床現場で自叙

写真を利用してゆく上で役立つ情報を提供するものとなるのではないだろうか。

撮影した自叙写真、あるいは自叙写真集をどのように扱うかも今後の課題である。すなわち、自叙写真に対する研究参加者自身の意味づけから、表現された世界を理解するための方法の考案である。第4章で示した研究参加者自身に自叙写真を評定してもらう方法もあるが、より個性記述的なアプローチが求められる。本論文では詳述できなかったが、撮影した写真（時間をおいて撮影された2冊の自叙写真集）を机の上に広げて研究参加者自身が再構成し、その構成された写真をもとに時間経過を含めて表現された世界について語ってもらう、という研究を既に開始している（図10-2-1）。このような方法を用いて結果を蓄積することで、研究参加者ひとり一人の自己関連世界により迫ることができるのではないかと考えている。

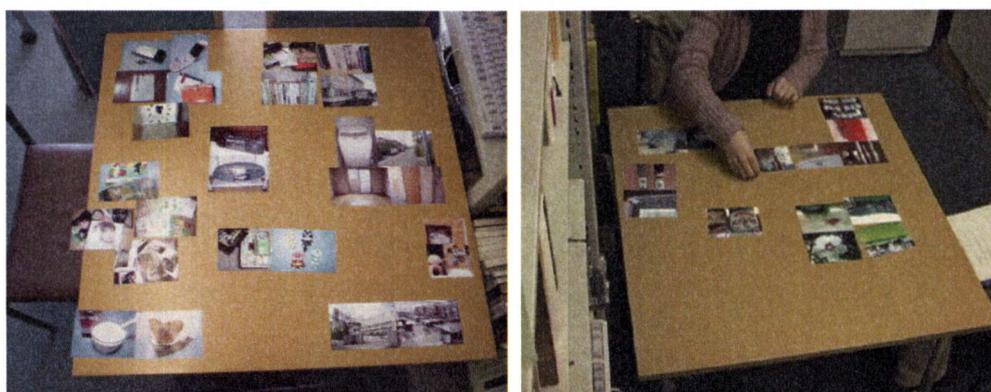


図10-2-1. 研究参加者による自叙写真集の再構成の様子

この他、自叙写真集にみられる、まとめりやテーマを知ることの重要性は本研究の第7章の臨床事例や第8章の再実施結果からも明らかであるが、自叙写真集を物語として見た場合、まとめりやテーマの有無に加えて、撮影順序（特に最初と最後に撮影されたもの）や他者をどの程度意識して写したかという撮影の際の視点取得について検討することも重要であろう。撮影順序については、本研究において自分を表現する上での重要度との間に有意な正相関がみられている（ $r_s = .266, p < .01$ ）。今後、さらに事例を積み重ねることでこれら課題に添えていきたいと考える。

手続きの面では、カメラ付き携帯電話やデジタル・カメラを導入したデー

タ収集も課題かもしれない。ただし、その場で写真が見られないことや枚数が制限されているという一見制約に思えるインスタント・カメラの特徴が、例えば第7章の臨床現場での適用部分で示したクライアントDのような事例では、むしろ枠として働き安心をもたらす場合があることを心にとめておくべきであろう。しかしカメラ付き携帯電話やデジタル・カメラのもつデータの蓄積・参照・保存の容易さといった利便性や、通信機能を活用することによる即時かつ同期的な視覚情報の共有の可能性によって、自叙写真を用いた他者の視点の共有や拡張がさらに明確になる可能性もある。自己や自己を含む世界の捉え方や関係性の在り方がこのようなデジタル機器の導入により、どのように異なっていくのかは今後に残された課題であると言えよう。

引用文献

- Aronson, D. W., & Graziano, A. M. (1976). Improving elderly clients' attitudes through photography. *The Gerontologist*, *16*, 363-367.
- Akeret, R. U. (1973). *Photoanalysis*. New York: Wyden.
- Allport, G. W. (1942). *The use of personal documents in psychological science*. New York: Social Science Research Council. (オールポート, G.W. 大場安則(訳) (1970). 心理科学における個人的記録の利用法 培風館)
- Amerikaner, M., Schauble, P., & Ziller, R. (1980). Images: The use of photographs in personal counseling. *The Personnel and Guidance Journal*, *59*, 68-73.
- Bacon-Prue, A., Blount, R., Hosey, C., & Drabman, R. S. (1980). The public posting of photographs as a reinforcer for bedmaking in an institutional setting. *Behavioral Therapy*, *11*, 417-420.
- Belk, R. W. (1988). Possessions and the extended self. *Journal of Consumer Research*, *15*, 139-168.
- Bugental, J. F. T., & Zelen, S. L. (1950). Investigations into the 'self-concept' I: The W-A-Y technique. *Journal of Personality*, *18*, 483-498.
- Burgess, M., Enzle, M. E., & Morry, M. (2000). The social psychological power of photography: Can the image-freezing machine make something of nothing? *European Journal of Social Psychology*, *30*, 613-630.
- Buss, A. H. (1980). *Self-consciousness and social anxiety*. San Francisco: Freeman & Company.
- Clancy, S. M., & Dollinger, S. J. (1993). Photographic depictions of the self: Gender and age differences in social connectedness. *Sex Roles*, *29*, 477-495.

- Combs, J. M., & Ziller, R. C. (1977). Photographic self-concept of counselees. *Journal of Counseling Psychology*, *24*, 452-455.
- Csikszentmihalyi, M., & Rochberg-Halton, E. (1981). *The meaning of things: Domestic symbols and the self*. Cambridge: Cambridge University Press. (チクセントミハイ, M. & ロックバーグ=ハルトン, E. 市川孝一・川浦康至(訳) (2009). モノの意味—大切な物の心理学— 誠信書房)
- Dollinger, S. J. (1996). Autophotographic identities of young adults: With special reference to alcohol, athletics, achievement, religion, and work. *Journal of Personality Assessment*, *67*, 384-398.
- Dollinger, S. J. (2002). Physical attractiveness, social connectedness, and individuality: An autophotographic study. *The Journal of Social Psychology*, *142*, 25-32.
- Dollinger, S. J., & Clancy, S. M. (1993). Identity, self, and personality: II. Glimpses through the autophotographic eye. *Journal of Personality and Social Psychology*, *64*, 1064-1071.
- Dollinger, S. J., Cook, C. A., & Robinson, N. M. (1999). Correlates of autophotographic individuality: Therapy experience and loneliness. *Journal of Social and Clinical Psychology*, *18*, 325-340.
- Dollinger, S. J., & Clancy Dollinger, S. M. (1997). Individuality and identity exploration: An autophotographic study. *Journal of Research in Personality*, *31*, 337-354.
- Dollinger, S. J., & Clancy Dollinger, S. M. (2003). Individuality in young and middle adulthood: An autophotographic study. *Journal of Adult Development*, *10*, 227-236.
- Dollinger, S. J., Rhodes, K. A., & Corcoran, K. J. (1993). Photographically portrayed identities, alcohol expectancies, and excessive drinking. *Journal of Personality Assessment*, *60*, 522-531.

- Dollinger, S. J., Preston, L. A., O'Brien, S. P., & DiLalla, D. L. (1996). Individuality and relatedness of the self: An autophotographic study. *Journal of Personality and Social Psychology*, *71*, 1268-1278.
- Dollinger, S. J., Robinson, N. M., & Ross, V. J. (1999). Photographic individuality, breadth of perspective, and creativity. *Journal of Personality*, *67*, 623-644.
- Fenigstein, A., Scheier, M. F., & Buss, A. H. (1975). Public and private self-consciousness: Assessment and theory. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, *43*, 522-527.
- FFPQ 研究会 (編) (1998). 改訂 FFPQ (5 因子性格検査) マニュアル 北大路書房.
- Fryrear, J. L., Nuell, L. R., & Ridley, S. D. (1974). Photographic self-concept enhancement of male juvenile delinquents. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, *42*, 915.
- 博報堂生活総合研究所 (2003). モノの意味辞典 博報堂.
- Hall, C. S., & Van DeCastle, R. V. (1966). *The content analysis of dreams*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- 藤縄 昭 (1976). 「事例研究」随感 京都大学教育学部心理教育相談室紀要 臨床心理事例研究, *3*, 6-8.
- Hunsberger, P. (1984). Uses of instant-print photography in psychotherapy. *Professional Psychology: Research and Practice*, *15*, 884-890.
- 池内裕美・藤原武弘・土肥伊都子 (2000). 拡張自己の非自発的喪失：大震災による大切な所有物の喪失調査結果より 社会心理学研究, *16*, 27-38.
- 池内裕美・藤原武弘 (2004). 拡張自己の構造— 西・米・中における普遍性の検討— 関西大学社会学部紀要, *35*, 39-59.
- Jourard, S. M. (1964). *The transparent self*. New York: Van Nostrand.
- Kaslow, F. W., & Friedman, J. (1977). Utilization of family photos and movies in family therapy. *Journal of Marriage and Family Counseling*, *3*, 19-25.

- 梶田叡一 (1988). 自己意識の心理学 第2版 東京大学出版会.
- 神田橋條治 (1995). 追補 精神科診断面接のコツ 岩崎学術出版社.
- Keim, J. A. (1971). *La photographie et l'homme: Sociologie et psychologie de la photographie*. Tournai: Casterman. (ケイム, J.A. 宇浪 彰(訳)
(1983). 写真と人間—社会学=心理学的考察— ありな書房)
- Kelly, G. A. (1955). *The Psychology of personal constructs*. New York: Norton.
- 菊地登紀子 (1970). 青年期における自己観 (I) —私立女子校生における発達の様相 岩手大学教育学部研究年報, 30 巻第 4 部教育心理, 57-76.
- Klein, Z. (1984). Sitting postures in males and females. *Semiotica*, 48, 119-131.
- 小森康永 (1997). 初めての「写真」 日本描画テスト・描画療法学会 (編) 臨床描画研究XII 金剛出版 pp.107-116.
- Kuhn, M. H., & McPartland, T. S. (1954). An empirical investigation of self-attitudes. *American Sociological Review*, 19, 68-76.
- Leuers, T.・園田直子 (1998). 心像的自己に関する比較文化的研究 (1) 日本心理学会第 62 回大会発表論文集, 90.
- Milgram, S. (1976). The image-freezing machine. *Society: Social Science and Modern Society*, 14, 7-12.
- Mills, J. (1984). Self-posed behaviors of females and males in photographs. *Sex Roles*, 10, 633-637.
- Miller, M. F. (1962). Responses of psychiatric patients to their photographed images. *Diseases of the Nervous System*, 23, 296-298.
- Monteiro, J. M. C., & Dollinger, S. J. (1998). An autophotographic study of poverty, collective orientation, and identity among street children. *The Journal of Social Psychology*, 138, 403-406.
- 松原達哉 (1999). 自分発見「20 の私」 東京図書.
- 松下恵美子・石川元 (1997). 家族写真・アルバムの臨床応用—マニュアル化に向けて— 日本描画テスト・描画療法学会 (編) 臨床描画研究XII 金剛出版 pp.79-92.

- 向山泰代 (2001). 自己記述写真法による自己概念の研究 日本心理学会第 65 回大会発表論文集, 950.
- 向山泰代 (2002a). 自叙写真法による自己概念の研究 京都ノートルダム女子大学研究紀要, 32, 87-93.
- 向山泰代 (2002b). 自己概念研究における自叙写真法の意義 甲南女子大学学生相談室年報, 2, 33-41.
- 向山泰代 (2002c). 写真に表現された自己の諸側面—被写体と内容にもとづく自叙写真の分類— 京都ノートルダム女子大学生涯発達心理学科研究誌「プシュケー」, 1, 81-94.
- 向山泰代 (2003). 自叙写真を用いた自己イメージ把握の方法—自叙写真法の実施手続きに関する調査報告— 日本応用心理学会第 70 回大会, 111.
- 向山泰代 (2004a). 自叙写真を用いた自己イメージ把握の方法—自叙写真法の実施手続きに関する検討— 京都ノートルダム女子大学生涯発達心理学科研究誌「プシュケー」, 3, 11-24.
- 向山泰代 (2004b). 自叙写真による自己概念研究 応用心理学研究, 30, 10-23.
- 向山泰代 (2009). 自叙写真の被写体と重要度評定との関係 京都ノートルダム女子大学研究紀要, 39, 49-60.
- 長島貞夫・藤原喜悦・原野広太郎・斎藤耕二・堀 洋道 (1966). 自我と適応の関係についての研究(1)—Self-Differential 作製の試み— 東京教育大学教育学部紀要, 12, 85-106.
- 長島貞夫・藤原喜悦・原野広太郎・斎藤耕二・堀 洋道 (1967). 自我と適応の関係についての研究(2)—Self-Differential の作製— 東京教育大学教育学部紀要, 13, 59-83.
- 中村彰吾・小林昌毅・高橋邦夫・萩原良巳 (2001). 写真投影法による都市域河川の水辺デザイン情報抽出 ランドスケープ研究, 64, 821-824.
- 中里 均・坂野洋子・磯部 潮・榎並恭子・日比かおり・青木滋昌・米澤良江・藤本 昇・岡本亘弘・祖父江光子 (1988). 分裂病者による写真撮影の治療的可能性 芸術療法, 19, 49-55.

- 日本描画テスト・描画療法学会（編）（1997）. 臨床描画研究XII シンポジウム臨床におけるマンガ的表現／特集臨床における写真の利用 金剛出版.
- 野田正彰（1988）. 漂白される子供たち—その眼に映った都市へ— 情報センター出版局.
- Noji, A. (1999). Quality of life for changing health: Perimenopause among Japanese in Japan and the USA. In T. Aso, T. Yanaihara, & S. Fujimoto (Eds.), *The proceedings of the 9th International Menopause Society World Congress on the Menopause*. New York: The Parthenon Publishing Group, pp.127-132.
- 野村 訓（編著）（2004）. レンズの向こうに自分が見える 岩波書店.
- Okura, Y., Ziller, R. C., & Osawa, H. (1985-1986). The psychological niche of older Japanese and Americans through auto-photography: Aging and the search for peace. *International Journal of Aging and Human Development*, **22**, 247-259.
- 大山 正・田中靖政・芳賀 純（1963）. 日米学生における色彩感情と色彩象徴 心理学研究, **34**, 1-13.
- Rogers, C. R. (1951). *Client centered therapy*. Boston: Houghton Mifflin.
- 志村実生（1997）. 治療過程における写真の役割 日本描画テスト・描画療法学会（編） 臨床描画研究XII 金剛出版 pp.93-106.
- Sonoda, N., Leuers, T., & Shapiro, L. J. (2000). Reconsidering “achievement” and “process” orientation: A cross-cultural comparison of visual and linguistic media of future self-representations. *Bulletin of Faculty of Literature, Kurume University, Department of Human sciences*, **16**, 13-33.
- 園田直子（2001）. 自己撮影法による行動サンプリングの比較文化的研究 平成 11・12 年度文部省科学研究費補助金（基盤研究(C)(2) 課題番号 11610152 研究代表者 園田直子）研究成果報告.
- Sontag, S. (1977). *On Photography*. New York: Farrar, Straus and Giroux.
（ソントグ, S. 近藤耕人(訳)（1979）. 写真論 晶文社）

- Spire, R. H. (1973). Photographic self-image confrontation. *American Journal of Nursing*, 73, 1207-1210.
- 高垣忠一郎 (1974). TST にあらわれた反応の心理的負荷について 京都大学教育学部紀要, 20, 207-227.
- 寺田治史・白石大介 (2000). 学級カウンセリングにおける写真対話法の開発, 日本教育心理学会第 42 回総会論文集, 517.
- 辻 平治郎 (1993). 自己意識と他者意識 北大路書房.
- 辻 平治郎 (編) (1998). 5 因子性格検査の理論と実際 北大路書房.
- 都筑 学 (2005). 写真投影法による青少年の内面把握の試み 教育学論集, 中央大学教育学研究会, 47, 223-249.
- 植村勝彦 (1996). 高齢期の夫婦のパートナーシップに関する社会心理学的研究—「写真投影法」による分析— 財団法人日本火災福祉財団 平成 6 年度ジェロントロジー研究報告, 2, 179-186.
- 上山 輝・土肥博至 (1996). 写真投影法を用いた景観評価の基礎的構造に関する研究 都市計画別冊, 都市計画論文集, 31, 595-600.
- Weiser, J. (1999). *PhotoTherapy techniques: Exploring the secrets of personal snapshots and family albums*. 2nd ed. Vancouver: Phototherapy Centre Press.
- Worth, S., & Adair, J. (1972). *Through Navajo eyes*. Bloomington, IN: Indiana University Press.
- 山中康裕 (1976). 写真映像をメッセージとした思春期心身症の精神療法過程 芸術療法, 7, 31-42.
- 安川 一 (2005). 身体の視覚的編制—視覚体験と社会的世界の再帰的編制をめぐるミクロ社会学的研究— 2003 年度～2004 年度科学研究費補助金 (基盤研究(C)(2) 課題番号 15530321 研究代表者 安川 一) 研究成果報告書.
- 安川 一 (2008). 身体—自己像の視覚社会学的研究—視覚体験と社会的世界の再帰的編制をめぐる— 2005 年～2007 年度科学研究費補助金 (基盤研究(C) 課題番号 17530360 研究代表者 安川 一) 研究成果報告書.

- Ziller, R. C. (1990). *Photographing the self: Methods for observing personal orientations*. Newbury Park: CA. Sage.
- Ziller, R. C., & Lewis, D. (1981). Orientations: Self, social, and environmental percepts thorough auto-photography. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 7, 338-343.
- Ziller, R. C., & Rorer, B. A. (1985). Shyness-environment interaction: A view from the shy side through auto-photography. *Journal of Personality*, 53, 626-639.
- Zwick, D. S. (1978). Photography as a tool toward increased awareness of the aging self. *Art Psychotherapy*, 5, 135-141.

謝 辞

この博士論文に至る研究を進めることができたのは、これまでに多くの先生方からのご支援とご指導があったからです。甲南女子大学の辻平治郎先生には、博士前期課程時代から一貫して柔軟で新しい発想の大切さや研究に真摯に取り組む姿勢をご教授いただきました。本論文の進行過程においても、今後の展開を含めて幾つかの具体的なアイデアを示して下さいました。博士論文の執筆完成までに時間を要した力不足をお詫びするとともに、長きにわたって研究者としての歩みを支えて下さったことに深く感謝を申し上げます。後藤容子先生と清水徇先生には、博士論文執筆にあたって草稿段階から数多くの有益なコメントをいただきました。遅々として進まぬ執筆過程での暖かい励ましと丁寧なご指導に厚く御礼を申し上げます。また、藤縄昭先生には博士後期課程時代にご指導を賜り、博士論文執筆の過程では折々に励ましの言葉をいただきました。京都ノートルダム女子大学の住田幸次郎先生には学部時代に心理学の基礎からご指導を賜るとともに、一学徒として謙虚に学ぶことの大切さをご教授いただきました。改めて諸先生方のこれまでのご指導、ご鞭撻に深く感謝を申し上げます。

博士論文の作成にあたっては、多くの学部生や大学院生に協力をいただきました。特に本研究に参加し、自叙写真を含めた資料の提供や公開をご承諾下さった研究参加者の方々に深く御礼を申し上げます。論文の執筆の過程で、研究に参加して下さいました方々の自叙写真に映し出された世界を共有することができ、自分自身が豊かになったと感じます。自叙写真法の持つ可能性を実感するとともに、このような研究テーマに出会えたことを研究者として幸甚に思います。

資 料

- 資料 1 被写体の分類カテゴリーの設定
- 資料 2 主要な先行研究で使用された自叙写真の分類カテゴリーと内容
- 資料 3 自叙写真の実施方法の吟味
- 資料 4 自叙写真集の記録用紙と質問票
- 資料 5 高垣（1974）による 20 答法の分類カテゴリーとその内容
- 資料 6 自叙写真のクラスター分析結果の詳細
- 資料 7 自叙写真のクラスター別の被写体と表現内容
- 資料 8 半構造化面接における振り返りシート

資料 1. 被写体の分類カテゴリーの設定¹

方法

自叙写真の撮影

研究参加者は小集団で自叙写真についての説明を受けた。自叙写真の撮影は“自分自身をテーマにした小写真集をつくる”という表題のレポートの一環であり、学期末に提出する課題として説明がなされた。課題の内容は、(a)12枚撮りのカラー・フィルムを使って“あなたは誰であるか”を写真で表現する、(b)現像した写真を撮影順に B5 紙に貼って冊子にする、(c)12枚の写真が自分を表現している程度をレポートにまとめて結果を自己分析することである。教示と留意点は付表 1-1 のとおりで、教示は先行研究で多く用いられてきた Ziller & Lewis (1981) および Dollinger & Clancy (1993) を参考に作成した。

付表 1-1. 自叙写真撮影と写真集作成についての手順と留意点の教示

「テーマ:自分自身をテーマにした小写真集をつくる」

人は自分自身についていろいろなイメージを持っているものですが、あなたは自分自身のことをどのように思っていますか。写真で“あなたは誰であるか”を表してください。“あなたが誰であるか”を表すものであれば、何を撮ってもかまいません。撮り終わると、自分自身をテーマにした小さな写真集ができあがることになるはずです。

「レポート作成の手続き・注意」

- ①“あなたが誰であるか”を表すことだけを考えて写してください。写真は上手に撮る必要はありません。技術のことは考えずに気楽に撮ってください。
 - ②自分で撮ることができない場合は人に写して貰っても構いません。
 - ③“あなたが誰であるか”を分かりやすくするために、1枚の写真を撮り終わるごとに何を撮って何を表そうとしたのかを用紙 1 に書きとめて下さい。また、その時に感想等も付け加えて下さい。
 - ④写真は 1 週間以内に撮って下さい。
 - ⑤自分自身を 12 枚中に表現することが課題です。必ず 12 枚撮りカラー・フィルムを用いて下さい。
 - ⑥写真は現像し、1 枚目から順に用紙 2 に貼り付け、冊子の形にしてください。
 - ⑦冊子になった 12 枚の写真を見て、それらがどのくらい“あなたが誰であるか”を表しているかを B5 のレポート用紙にまとめ、自己分析をしてください。
 - ⑧思ったとおりの写真が撮れていなくても撮り直したりせず、そのまま使用してください。
-

説明会では上記の説明文・記録用紙 1 (被写体と表現内容の記録用)・記録用紙 2 (写真添付用) を配布した。課題を終了したら写真冊子、記録用紙 1 と 2、まとめのレポート、ネガフィルムを一括して封筒に入れ、指定期限内に提出するよう伝えた。なお、提出物は研究資料とするため返却はされないこと、プライバシーの保護のため研究結果の分析・公開にあたっては個人が特定されることのないよう留意する旨を伝えた。

研究参加者と実施期間

研究参加者は女子大学生 1~3 回生で課題を提出した 54 名のうち、提出資料

¹ 向山 (2002c) を要約して掲載。

に不備のあった者を除いた 33 名を有効資料とした (平均年齢 19.61 歳)。33 名から得られた計 396 枚の自叙写真を分析の対象とした²。1998 年 12 月に自叙写真の説明会を実施し、冬期休暇をはさんで約 30 日から 40 日後の授業で回収した。

被写体にもとづく自叙写真の分類手順

分類にあたって自叙写真をカード化した。自叙写真の貼付された用紙のうら面に、撮影時に記入された被写体 (何を撮ったか) と表現内容 (写真によって表そうとしたこと) を転記した。その後、自叙写真を見て “写真に何が写っているか” を判断し分類を行った。人物が写っている場合には人物を優先して分類し、カテゴリーを独立に扱うことを分類の基本とした³。

撮影者自身が記録用紙に記入した被写体についての記述は、写真のみから得られる情報とは異なる場合が考えられるため、まずは自叙写真に “何が写っているか” を判断の材料として分類を行った。分類カテゴリーの設定や命名には Okura, et al. (1985-1986)、Ziller & Rorer (1985)、Dollinger & Clancy (1993)、Dollinger, et al. (1996) を参考にしたが、先行研究とは異なる新たな分類カテゴリーが見出されることも考慮しつつ作業を進めた。

分類作業は、まずカードを卓上に並べて特定のカテゴリーが想定できるものから順次取り上げてカテゴリーを作り、カテゴリーごとにカードを積み重ねてゆく方法で筆者が単独で分類作業を行った。本研究での分類手続きは、1 枚のカードには 1 つの主題 (写真) とし、予め分類カテゴリーを定めずにカードの情報から同類、上下の関係を見たという点で KJ 法と共通する点がある。

結果

被写体の分類カテゴリーと分類結果

撮影対象が不鮮明で分類不可能であった 1 枚を除く 395 枚の写真の分類を行った結果、被写体は “人物” “場所” “物” の 3 つの上位カテゴリーに分類できた。また、人物カテゴリーには 3、場所カテゴリーには 4、物カテゴリーには 14 の下位カテゴリーを設定することができた (付表 1-2)。なお、3 枚以上の写真が分類された場合に 1 つのカテゴリーを設定した。

人物カテゴリーでは、単独の人物を撮影した “ひとり” が 69 枚 (人物写真の 73.40%) と最も多く、中でも研究参加者自身を単独で撮影した写真が人物撮影枚数の 6 割以上を占めた (60 枚, 人物写真の 63.83%)。なお、研究参加者自身が単独で写っている写真は、他の下位カテゴリーと比較しても最も撮影

² 有効資料となった 33 名のうち、撮影期間が未記入であった 1 名を除いて撮影に要した日数を算出したところ、平均 4.94 日 (Mo=7.00, R=8-1, SD=2.18) となった。

³ 従って、ここでの分類は、先行研究で行われた分類と異なる場合がある。例えば、撮影者が自室のベッドに座って同性と談笑している写真は Dollinger & Clancy (1993) や Clancy & Dollinger (1993) では、“人物” “自分と他者” “微笑んでいる人物” “生活場所” “ベッド (社交)” という複数のカテゴリーに含まれることになる (資料 2 参照)。しかし、ここでは人物カテゴリーにのみ分類される。ただし、人物カテゴリーとして分類された写真を、誰が・誰と・どこで・何をしているのか・表情はどうか等の観点からさらに分類を行えば、先行研究で示されたカテゴリーと類似の分類カテゴリーを得ることは可能である。

枚数が多い。人物を複数撮影している“ふたり”“3人以上”の下位カテゴリでも、研究参加者自身を含めて撮った写真が他者のみの写真よりも多かった(自身を含めた撮影は、それぞれ12枚中11枚、13枚中8枚)。

場所カテゴリでは“風景”が最多で(37枚、場所撮影枚数の55.22%)、“部屋”と“建物”の写真は同数であった(15枚、場所撮影枚数の22.39%)。

物カテゴリでは“日用品”が最多で54枚(物撮影枚数の23.08%)、次いで“服飾”25枚(物撮影枚数の10.68%)、“証明や記録”23枚(物撮影枚数の9.83%)となった。

付表 1-2. 被写体にもとづく自叙写真の分類

カテゴリ		下位カテゴリごとの度数(%) ⁴⁾	上位カテゴリごとの度数(%) ⁵⁾
上位	下位		
人物	ひとり(自分のみ/他者のみ) ¹⁾	69 (73.40)	94 (23.74)
	ふたり(自分と他者/他者のみ) ²⁾	12 (12.77)	
	3人以上(自分と他者/他者のみ) ³⁾	13 (13.83)	
場所	部屋	15 (22.39)	67 (16.92)
	建物	15 (22.39)	
	風景	29 (43.28)	
	風景(背景に人物)	8 (11.94)	
物	日用品	54 (23.08)	234 (59.09)
	音楽	16 (6.84)	
	運動	8 (3.42)	
	服飾	25 (10.68)	
	証明や記録	23 (9.83)	
	写真	9 (3.45)	
	置物	11 (4.70)	
	ぬいぐるみ	3 (1.28)	
	書籍	16 (6.84)	
	リーフレット	9 (3.85)	
	動物	14 (5.98)	
	植物	16 (6.84)	
	食物	11 (4.70)	
	その他の物	19 (8.12)	
その他	不明		1 (0.25)

注 1)うち、研究参加者の単独写真の総数は60枚(人物カテゴリの63.83%)。

注 2)うち、研究参加者と他者が2人の写真の総数は11枚(人物カテゴリの11.70%)。

注 3)うち、研究参加者と他者が3人以上の写真の総数は8枚(人物カテゴリの8.51%)。

注 4)上位カテゴリごとの枚数を分母とする比率を()内に示す。

注 5)総撮影枚数396を分母とする比率を()内に示す。

本研究で設定された分類カテゴリが適切か否かを確認するため、総数の約1割(10.10%)にあたる40枚をランダムに選出し、分類カテゴリ名と内容

を示して“各写真がどのカテゴリーに含まれるか”の判断を心理学研究者2名に求めた。2名が独立に判断を行った結果、判断の一致率は92.5%となった。

被写体の詳細および先行研究との比較

先行研究の分類カテゴリーとここでの分類カテゴリーを比較し、両者に共通して見られる被写体を検討するため、研究参加者自身の記述を参考にして被写体の詳細を調べた（付表1-3～1-5）。先行研究との比較は資料2に挙げた分類カテゴリーを参考にした。

人物カテゴリーの詳細（付表1-3）と資料2の比較を行った。結果、カテゴリー名や分類の観点は異なっているが、人物を被写体とした写真は先行研究と今回の結果との間に共通する点が多い。

付表1-3. “人物”カテゴリーの詳細

下位カテゴリー	対象	度数
ひとり	自分のみ(全身, 半身, 身体の一部, 鏡映像)	69
	他者のみ(友人, 親, 兄弟姉妹)	
ふたり	自分を含む(友人, 兄弟姉妹)	12
	他者のみ(親)	
3人以上	自分を含む(友人, 親戚, 親, 兄弟姉妹)	13
	他者のみ(友人, 親, 兄弟姉妹, 大人, 子ども)	

注) “3人以上・他者のみ”欄中の“大人”“子ども”は、撮影者にとって見知らぬ人物を写している。

場所カテゴリーについては付表1-4と資料2とを比較した。先行研究でのカテゴリー名や被写体の呼称は様々ではあるが、撮影対象になった場所は山水のような風景、自宅の内部(室内)や外部(建物)、自宅以外では校舎のような建造物の内部や外部であり、ここでの結果と共通している。

付表1-4. “場所”カテゴリーの詳細

下位カテゴリー	対象	度数
部屋	自宅(自分の部屋, リビング, 風呂, 洗面所), 図書館内, 部室, 予備校, フィットネスルーム	15
建物	自宅(門, 玄関を含む), 商店, ホームセンター, 風呂屋, 駅, 球場, 像やモニュメント, 校舎(高校・大学・大学図書館)	15
風景	自宅の庭, 道路, 空(夜空を含む), 街角, 旅行のパンフレット置き場, 田, 畑, 山, 海, 空き地, 山脈と田園, 街(夜景を含む), 夕日, 公園, 駅の構内	37

注) 風景が主で、背景に人物が写っている写真8枚は“風景”に含めた。

物カテゴリーについては付表1-5と資料2とを比較した。本研究と共通するカテゴリー名や被写体の呼称を先行研究から拾うと、動物やペット・書籍・植物・スポーツや運動用具・アルコールその他の薬品・食物・ステレオ・テレビ・車や自転車などの乗り物・楽器・ベッドなどの家具があり、これらは被写体として選択されやすい物品と考えられる。先行研究では物に関するカテゴリーは

少なく、付表 1-5 と資料 2 を比べると物を被写体とした写真では先行研究と今回の結果では共通点よりも差異が目立つ。

付表 1-5. “物”カテゴリーの詳細

下位カテゴリー	対象	度数
日用品	自転車, 自動車, 机(机の上や引き出しの中の写真も含む), 時計, テレビ, ベッド, ストープ, 布団, ガスコンロ, 調理用具, 筆記用具(ノート, レポート用紙, 筆箱), 手帳, 電卓, 財布, 体重計, 電話, 携帯電話, パソコン, ワークプロ, バッグ(バッグの中身の写真を含む), 石鹸, 新聞, マグカップ, ガラスコップ	54
音楽	楽器(ピアノ, トランペット), オーディオプレイヤー(ラジカセ, MD コンポ, CD プレイヤー, CD ラジカセ), ビデオ, 音楽映像ソフト(ビデオテープ, カセットテープ, CD), コンサート・チケット	16
運動	テニスラケット, スニーカー, スキーウェア, 部活ユニフォーム, スキー板, タップシューズ, エクササイズ機具	8
服飾	洋服, 化粧品, 香水, 装飾品(髪留・指輪・ネックレス・ブレスレット), パジャマ, 靴	25
証明や記録	母子手帳, 文集(幼稚園・小学校・中学校・高校), 制服(大学・アルバイト), 表彰状, 採用通知, 氏名を示すもの(氏名欄, 名札, 印鑑, 紙に書いた名前), 通帳, パスポート, 免許書, 日記帳, 手紙, 卒業証書, 資格認定書	23
写真	自分の写真, 母親の写真, 祖父母の写真, 自分と母親との写真, 自分と祖母との写真, 家族写真, 友人の写真, プリクラ	9
置物	人形, 指人形, 玩具, 地球儀	11
ぬいぐるみ	ぬいぐるみ	3
書籍	単行本, 漫画, 雑誌, 教科書, 辞書, 詩集, 問題集	16
リーフレット	葉書, ポスター, パンフレット	9
動物	犬, 猫, 魚, 鳥	14
植物	花, 樹木, 低木, 根, 草	16
食物	食物(プリン, クッキー, 卵, サラダ), 飲物(紅茶, 酒, 水), 薬	11
その他の物	紙袋, 箱, リサイクル品, ペットボトル, 作品(絵・書道・パズル), ゲーム機, テレビゲーム, 資料(外国・旅行), キャラクターグッズ, 一円玉, 色紙, 折り紙, ディスプレイ, 壁	19

まとめ

分類カテゴリーとして“人物”“場所”“物”の3つの上位カテゴリーが見出された。これら3つのカテゴリーは先行研究でも見出されており、自叙写真を被写体にもとづいて分類する場合の基本的カテゴリーと考えてよい。

下位分類によって 21 の下位カテゴリーを見出した。下位分類カテゴリーや被写体を先行研究と比較すると、人物カテゴリーと場所カテゴリーについては先行研究との類似点が多かった。物カテゴリーについては、先行研究との重複するカテゴリーや被写体は少なかった。この理由として、人物や場所に比べて

物は被写体としては選択の幅が広く、文化・年齢等の特徴を反映することが考えられる。

人物カテゴリーでは、被写体として最も多く選ばれたのは研究参加者自身であった。中でも研究参加者が単独で写っている写真は最多であり、自分自身は選ばれやすい対象といえる。場所カテゴリーでは風景カテゴリーの写真枚数が最も多く、場所を写した写真の約5割を占め、空・山水・街が対象となっていた。部屋や建物カテゴリーでは、自宅を対象とした写真が多かった。自叙写真に写された場所は、研究参加者にとって心理的に身近な場所で、自宅はその代表と考えられた。自宅のような撮影者の生活空間や建物を写した写真は先行研究にもあり、被写体として選ばれやすい対象である。物カテゴリーの中では日用品カテゴリーの枚数が最も多かった。物の多くは撮影者の所有物であり、撮影者にとって心理的に身近な物品が選択されたと思われる。中でも先行研究とも共通する動物やペット・書籍・植物・スポーツや運動用具・アルコールその他の薬品・食物・ステレオ・テレビ・車や自転車などの乗り物・楽器・ベッドなどの家具は選択されやすい被写体と考えられる。

撮影総数に占める各カテゴリーの比率をみると、物が最も多く総数の約6割を占めており、次いで人物、場所となった。研究参加者にとって、物との関係によって自分を表現したり定義づけたりすることは比較的容易であったと考えられる。見出された分類カテゴリーは分類者間で判断の一致率が高く、女子大学生の自叙写真の記述・分類において有用なものと思われる。

資料 2. 主要な先行研究で使用された自叙写真の分類カテゴリーと内容

研究(出版年)と目的	カテゴリー名	内容 (論文中で説明のあったもののみを掲載)	備考
Combs & Ziller(1977) カウンセリング経験の有無で比較.	家族		
	自分		
	他者		
	過去	過去からの写真.	
	自分と他者		
	活動	スポーツ・楽器・チェス・パーティ・裁縫・描画・料理・サイクリング・園芸.	
	動物		
	書籍		
Ziller & Lewis(1981), Study1 2カテゴリーの妥当性検討.	書籍		学業達成指向指標
	植物	鉢植え植物・樹木・低木・花・景色・美術作品.	美的指向の指標
Ziller & Lewis(1981), Study2 Study1での2カテゴリーを非行少年に適用.	書籍		学業達成指向の指標
	美的	鉢植えの植物・樹木・低木・花・景色・美術作品.	美的指向の指標
	人物	少なくとも1人の人物が含まれている.	社会的指向の指標
	学校	少なくとも1枚の校舎の写真が含まれる.	
	自宅	少なくとも1枚の自宅の写真が含まれる.	
	家族	少なくとも1枚の家族の写真が含まれる.	
	快の雰囲気	少なくとも1人の人物が微笑んでいる.	
Ziller & Rorer(1985), Study1 シャイな人の指向.	人物	少なくとも1人の人物が含まれている.	
Ziller & Rorer(1985), Study2 シャイな人の指向.	グループ	3人以上の人物.	
	男女2人組	自分が異性と共に写っているか異性のみ.	
	自分	自分を含む写真.	
	他者	上記のカテゴリー以外で人物を含む.	
	接触	少なくとも2人がお互いに触れ合っている.	
	人物	人物が含まれている.	
	快の雰囲気	少なくとも1人の人物が微笑んでいる.	
	活動	何かをしている人(例:芝生刈りや園芸用品のようなその活動を象徴する道具).	
	スポーツ	スポーツ活動やその道具.	
	学校	書籍, 校舎, 学業に焦点のあるもの.	
	薬品	アルコールその他の薬品.	
	宗教	教会・聖書・宗教的シンボル.	
	屋内	屋外に対するものとしての室内の撮影.	
	美的	芸術作品・樹木・湖・池・花.	

	動物		自己を記述するものとして	
	食物			
	車			
	ステレオ			
	テレビ			
	orientation の範囲	1名の写真をコードするために用いたカテゴリー数.		
Okura, Ziller, & Osawa (1985-1986) 日米の高齢者の比較.	自分	自分を含む写真.		
	他者	自分以外の人物.		
	同性	同性の人.		
	子ども	子どもが含まれている.		
	年上の人物	自分以外の年配の人物が含まれている.		
	年下の人物	年下の人物が含まれている.		
	異性	異性の年配の人物.		
	4人以上の人物	4人以上の人物.		
	内部	自宅の内部.		
	外部	自宅の外部.		
	自宅と周囲	自宅あるいは周囲.		
	サービス施設	食品店・病院・薬局・ガソリンスタンド.		
	活動	何かしている人あるいは活動の象徴.		
	美的指向	植物・樹木・空・風景・絵画・彫刻・磁器.		
	宗教的指向	少なくとも一つの宗教的象徴(例: 教会・十字架・祭壇・宗教的人物の像・宗教書).		
	ペット	動物・鳥・魚		
	乗り物	車・自転車・バイク.		
	庭	庭.		
	楽器	楽器.		
	テレビ	テレビ.		
	住宅	自分の家あるいは庭.		
書籍	少なくとも1冊の書籍.			
家具	家具に焦点のあるもの.			
	orientation の範囲	1名の写真をコードするために用いたカテゴリー数.		
Dollinger & Clancy(1993) 性格特性との関係.	人物	1)の合計.	人物	
	自分のみ ¹⁾		1)は相互に独立	
	自分と他者 ¹⁾			
	他者のみ ¹⁾			
	背景の人物			
	グループ			
	Clancy & Dollinger(1993) 性差の検討.	微笑んでいる人物		
		触れ合っている人物		
		子ども		
		両親か祖父母	研究参加者より上の世代.	
		屋外		場所
	生活場所	寮あるいは自宅の内部.		
	生活場所以外の室内			

	達成	出現頻度の少ない3カテゴリー(勉強する自分・卒業証書・卒業式の情景)で構成.	所有物・興味・活動
	アルコール		
	動物あるいはペット		
	釣り		
	運動競技		
	エクササイズ		
	ベッド(活動)	ベッドで眠っている.	
	ベッド(社交)	ベッドに座って友達と談笑している.	
	テレビ		
	愛校心	例:衣服に印された校章.	
	水泳(水着)	水着姿で水に入っていない写真.	
	水泳(活動)	水に入っている写真.	
	自動車		
	バイク		
	自転車		
	結婚		
	宗教		
Dollinger, Rhodes, & Corcoran(1993) アルコールに関係したアイデンティティ(飲酒経験や多量摂取)	アルコール	店やパーティでビール缶を持っている・飲酒競技会への参加・パーティ用の冷えたビール・背景に写ったアルコール関係のサイン(例:室内に貼ったビールの広告ポスター)・冷蔵庫の中のカクテルなど.	
Dollinger, Preston, O'Brien, & DiLalla(1996) 個性と他者との関係性の検討. Dollinger(2002) 身体的魅力と社会的結合および個性の検討.	自分と他者		対人コード Dollinger(2002)では「自分と他者」「他者のみ」を区別せず。「人物なし(例:風景や置物)」を追加.最初の5つのコードを社会的結合コードと称す.
	触れ合っている人物		
	微笑んでいる自分		
	微笑んでいる他者		
	グループ	4名かそれ以上.	
	子ども	研究参加者より一世代は下の人物.	
	大人	研究参加者より一世代か二世代は上の人物.	
	背景の人物		
	重要な他者	ボーイ(ガール)フレンド・配偶者.	
	自分のみ		
	他者のみ		
Dollinger(1996) アルコール・運動・達成・宗教・仕事についての検討.	アルコール	アルコール飲料・表示・広告.	
	運動	運動競技・エクササイズ, これらの関係物.	
	達成者としての自己	勉強姿・卒業証書・卒業・校門のサイン.	
	宗教	聖書・燭台・教会・クロス首飾り.	
	仕事	常勤やバイトとしての仕事姿.	
安川(2005) 自叙的写真法による視覚世界と視覚体験の検討.	自宅・自室	屋外から自宅を写したものはここに分類.	撮影場所
	その他の屋内		
	屋外		

	生活	特に何をしたわけでもない繰り返されている日常の一コマ.	撮影シーン
	大学	生活のうち大学キャンパスでの一コマ.	
	その他	何かが起きたと名付けることができる一コマ.	
	人		被写体
	モノ		
	生物		(カテゴリーは相互に独立でない)
	場・場所	シーン全体が被写体で一定程度閉じている場合(室内全景・建物など).	
	環境	シーン全体が被写体だが、開いている場合(空・風景など).	
	自分だけ		人配置
	自分と他者		
	自分と集団	4人以上の集団の中に自分がいる.	
	他者だけ		
	他者集団	他者4人以上.	
	微笑み	笑顔の有無.	関係性
	タッチ	身体接触の有無. 身体接触のある近接.	
	近接	身体近接の有無. 身体接触のない近接.	
	家族	登場人物における家族構成員の有無.	
安川(2008) 自叙的イメージ法による日常生活体験の探求.	自宅・自室	屋外・屋外を含む.	撮影場所
	その他の屋内		
	屋外		
	その他		
	生活	特に何をしたわけでもない繰り返されている日常の一コマ.	撮影シーン
	大学	生活のうち大学キャンパスでの一コマ、課外活動以外.	存在(常時的・持続的な存在や事柄)、活動(常時的活動の一コマ)、飲食、鏡映(自分の姿を鏡に映して撮影したイメージ)、出来事・イベント(たまたま起きた非日常の行事・出来事)でも分類.
	大学(課外)	生活のうち大学キャンパスでの一コマ、課外活動.	
	社会(仕事の)	日常・大学以外のシーンで特に何事かと名付けることができるものうち、アルバイト等の仕事のなもの.	
	社会(遊びの)	日常・大学以外のシーンで特に何事かと名付けることができるものうち、交友関係やサークルなどの遊びのなもの.	
	人		被写体
	モノ		
	生物		
	場・場所		
	その他		
	自分だけ		一人／一緒状態
	自分と他者		
	自分と集団		
	他者だけ		
	他者集団		
友人		被写体との関係性	

	家族		自分だけを除く人写真を分類
	恋人		
	その他		
	微笑み	被写体の微笑み.	繋がりサイン
	近接	被写体間の身体的近接.	
	タッチ	被写体間の身体的接触.	
	ピースサイン		
Sonoda, Leuers, & Shapiro(2000) 視覚と言語媒体に示された自己の呈示に見られる達成と過程指向の文化比較.	演出	人やモノが演出されているか否か. 人:カメラの方を向く、列に並ぶ、ポーズをとる、表情を作るなど. モノ:いつもの場所から移動して並べるなど.	
	過程	進行中の事柄か否か. 動きや時間の流れが止まっているか、何かが起りかけている、など.	
	人		
園田(2001) 自己写真撮影法と日常行動サンプリングを用いた時間展望、目標の検討.	性的しぐさ		ネガティブな写真
	性的本		
	性的親密さを隠さない		
	裸	太股、上半身	
	怪我		
	行儀が悪い	足を上にあげて、尻をむけて	
	だらしない	寝そべっている、だらだら	
	ふざけた	ポーズ	
	変な表情		
	大口を開ける		
	嫌な表情		
	無頓着な表情	撮られることに無頓着な表情	
	厚化粧		
	散らかっている	ベットの乱れ、洗濯物干し	
	古びている		
	汚れている		
	押入れの中が見える	たんすの中が見える	
	下着		
	壊れたもの		
	変な扮装		
	食堂以外で食事		
	悲観的メッセージ		
	麻薬	アルコール、たばこ	
	食べている最中		
	トイレ		

注) 米国での研究で使用されたカテゴリーは網羅的でも相互に独立でもない。Ziller らは Kuhn & McPartland の WAY や Hall & Van De Castle の夢分析を参考に、Dollinger らは Ziller の先行研究を参考にカテゴリーの設定を行っている。

資料 3. 自叙写真の実施方法の吟味¹

方法

自叙写真の撮影・研究参加者・実施期間

自叙写真の撮影は、本文第 3 章第 1 節（表 3-1-1）と同様、最低 12 枚で以降は自分が必要と思うだけ撮影する手続きで実施した。研究への参加を希望した女子大学生 59 名が、2001 年 7 月から 2002 年 8 月までの夏季あるいは冬季休暇を含む 40 日間の撮影期間に任意の 1 週間を選んで撮影した。

記録用紙と質問票（資料 4 参照）

記録用紙は上部半分に写真添付欄を設けた。下部には撮影直後に記入する 1～5 の項目（撮影年月日・撮影順序・撮影場所・何を撮ったか・何を表そうとしたか）と、写真を貼付した後で記入する 6～8 の問い（被写体の想起の容易さ・写真の出来栄え・写真が“あなたが誰であるか”を表す程度）を配置した。

質問票は A4 紙 2 枚から成り、大きく 4 つの内容に分かれる。すなわち、(a) 写真を重要度に従って順位づける作業の教示、(b) 自叙写真の撮影に関する 6 つの質問（取り組み態度・課題の面白さ・撮影期間についての意見・最低枚数についての意見・撮影技術を学んだ経験の有無・気づいたことや感想）、(c) 写真集に関する 3 つの質問（写真集への満足度・写真集が自分を表す程度・写真集への好き嫌い）、(d) 写真集への感想や研究について気づいたことや感想を書く自由記述欄である。

うち、ここで取り上げる撮影枚数と撮影期間の質問は、(b) 自叙写真の撮影に関する質問に含まれており、撮影期間と最低枚数についての意見は、問いに対して 5 つの選択肢から 1 つを選んで回答する。その上で、撮影期間を 1 週間以内、撮影枚数を最低 12 枚とした本研究での手続きに対して“ちょうどよい”と評定した者以外には、付加質問として希望の撮影日数と撮影枚数、なぜその日数や枚数が望ましいのか理由を尋ねた。

結果

研究への参加の面白さと自叙写真への取り組み態度

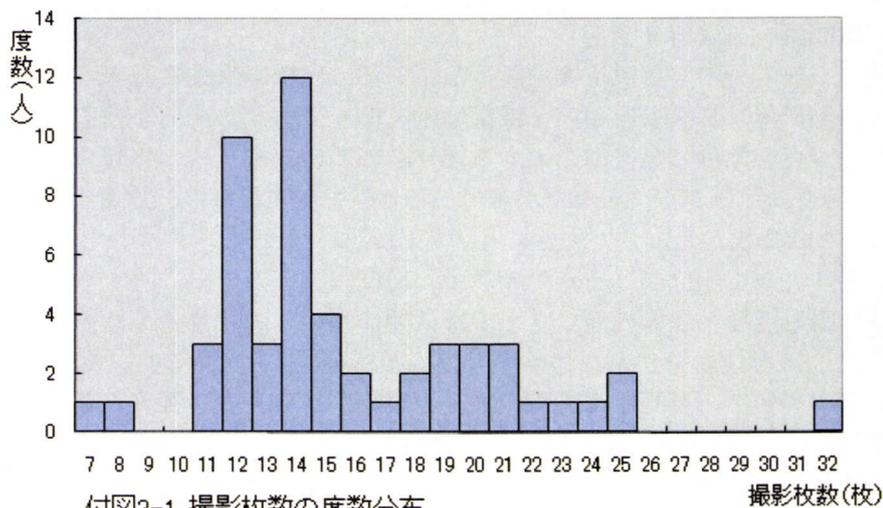
本研究への参加の面白さについての回答を調べた。研究参加を“やや面白い”“非常に面白い”としたのは 55 名で、残り 4 名は“どちらともいえない”という回答であった。自叙写真への取り組みについては、59 名のうち“非常に不真面目”“やや不真面目”と回答したのは 5 名であった。以下ではこの 5 名を除く 54 名を有効資料とした（平均年齢 19.98 歳）。

撮影枚数と撮影期間についての意見

先行研究で多く採択されてきた 12 枚という枚数が適当か否かを調べるため、本節では撮影枚数の下限を 12 枚についての研究参加者の意見を求めた。この結果、12 枚を“ちょうどよい”とした者は 39 名（73.58%）であり、この枚数を“やや少ない”と“非常に少ない”とした者も、逆に“やや多い”“非常に多い”とした者も共に 7 名（13.21%）となった（付表 3-1）。

¹ 向山（2003, 2004a）から実施手続きについて検討した部分を要約して掲載。

撮影枚数について“ちょうどよい”という選択肢を選ばなかった者の撮影枚数の変更を希望する理由についてまとめた。撮影枚数を増やす方向の意見として、“自分を表すにはもっと枚数が必要”“考えているうちに撮りたいものが次々と浮かんでくるから”“12枚だと考え込んでしまう”などが見られた。12枚以外で適当と考える枚数については、具体的な枚数として15枚～50枚の数字が挙げられた。一方、撮影枚数を減らす方向の意見として、“12枚撮るのが難しかった”“5枚くらいで限界を感じた”などがあり、具体的な枚数として4枚～8枚の数字が挙げられた。



付表 3-1. 最低 12 枚という撮影枚数についてどう思うか

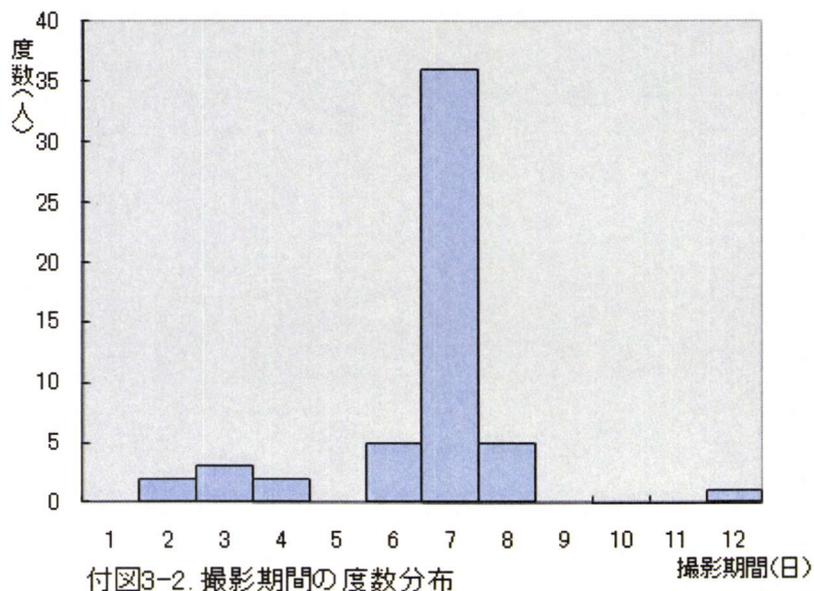
	非常に 少ない	やや 少ない	ちょうど よい	やや 多い	非常に 多い	無回答	合計
度数(人)	1	6	39	7	0	1	54
%	1.85	11.11	72.22	12.96	0.00	1.85	99.99

注)“最低 12 枚という撮影枚数についてどう思いますか”という問いに対する回答。

撮影期間の平均は 6.57 日 (SD=1.62) で、12 日～2 日の範囲となった (付図 4-2)。1 週間という撮影期間を“ちょうどよい”とした者は 17 名 (31.48%) であったのに対し、1 週間を“短い”とした者 (“非常に短い” “やや短い” の合計) が 34 名 (62.96%) となり、“ちょうどよい”と評価した者を大きく上回った (付表 3-2)。

撮影期間について“ちょうどよい”という選択肢を選ばなかった者においては、希望する撮影期間として 14 日間を挙げた者が最も多かったが、値は 10 日～90 日まで分布していた。期間延長を希望する理由として、“1 週間では撮れるものが少ない” “身近にあるものに絞られてしまう” “撮りたい人との予定に合わないことがある” “撮りたい場面に出くわせない時がある” “準備や必要なもの探したいものがある” “良い被写体がなかなか見つからない” といった撮影期間が短いために行動や対象が制限されてしまうことへの指摘があった。そ

の他には、“撮るものが明確に定められる期間が必要” “もう少しじっくり考えたい” “余裕が欲しい” “焦って自分のことを考えることができなかった” “思いつかない” という熟考する期間が必要という意見があった。一方、期間短縮を希望する方向の意見には、“長すぎるとその日によって気分が変わる” “忘れてしまいそうになる” があり、希望期間として1日～4日が挙げられていた。



付表 3-2. 1週間という撮影期間についてどう思うか

	非常に短い	やや短い	ちょうどよい	やや長い	非常に長い	合計
度数(人)	12	22	17	2	1	54
%	22.22	40.74	31.48	3.70	1.85	99.99

注) “1週間の撮影期間についてどう思いますか” という問いに対する回答。

まとめ

本研究への参加は多くの参加者にとって面白く、真摯に取り組むことのできる活動であった。撮影枚数には個人差が見られるものの、今回、最低枚数として提示した12枚は自己を表現するのにほぼ妥当な枚数であることが示された。撮影期間については1週間という撮影期間を“ちょうどよい”とした者17名(31.48%)に対し、“短い”とした者が34名(62.96%)を占めた。撮影期間が短いと、撮影のための行動や撮影対象が制限されてしまったり、熟考できなかったりするという意見があったことから、1週間よりも長い撮影期間を設定する必要がある。今回の結果では14日を妥当な撮影期間とする意見が多かったことから、自叙写真法の実施にあたっては14日という撮影期間を参考にするのが良いと思われる。

資料 4. 自叙写真集の記録用紙 (B5 用紙で作成)

表紙

<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block; margin-bottom: 20px;"> 自分自身をテーマにした小写真集 </div> <div style="text-align: right;"> 学籍番号 _____ 氏名 _____ </div>
--

記録用紙 (撮影枚数分を準備する)

写真貼付欄	重要順位
-------	------

1. 撮影年月日 年 月 日	2. 撮影順序 枚目	3. 撮影場所
4. 何を撮ったか		9. 備考
5. 何を表そうとしたか		
6. 撮るものは簡単に思い浮かんだか (写真を貼ってから当てはまるものを○で囲む) 非常に困難 ・ やや困難 ・ どちらとも言えない ・ やや簡単 ・ 非常に簡単		
7. 写真の出来ばえ (写真を貼ってから当てはまるものを○で囲む) 非常に不満足 ・ やや不満足 ・ どちらとも言えない ・ やや満足 ・ 非常に満足		
8. 写真が「あなたが誰であるか」を表す程度 (写真を貼ってから当てはまるものを○で囲む) 非常に表さない ・ やや表さない ・ どちらとも言えない ・ やや表す ・ 非常に表す		

(↓ この枠内には何も記入しない)

--	--	--	--	--

資料 4. 質問票 (A4 の 2 枚綴りを圧縮して表示)

研究についての質問票

※小写真集が出来上がってから以下の質問に答えて下さい。最初に太枠の中の事柄について記入して下さい。

記入年月日	年	月	日	No.	Re
学籍番号	氏名			年齢 歳	撮影期間 年 月 日～月 日 合計 () 日間

I. 写真集を見て、“あなたが自分自身を表す上で重要（これがないと私が誰であるか言えない）”と思う写真から順に 1, 2, 3・・・と全ての写真に順位をつけてください。全ての写真に順位を付け、「記録用紙」の右上の□に記入して下さい。どうしても順位が決められない場合は、“同順位〇番”と記入しておいてください。（例：重要度 3 位が 2 枚あれば 2 枚ともに“同順位 3 番”と書く）。

II. 写真集をみて、自分について考えたことや感じたことをまとめてみてください。

III. 今回の研究についてお尋ねします。質問について当てはまる答えを○で囲んでください。

1. あなたの研究への取り組み態度はどうか。

- ①非常に不まじめ ②やや不まじめ ③どちらとも言えない ④ややまじめ ⑤非常にまじめ

2. 研究に参加してどのように感じましたか。

- ①非常に面白くない ②やや面白くない ③どちらとも言えない ④やや面白い ⑤非常に面白い

3. 1 週間の撮影期間についてどう思いますか。

- ①非常に短い ②やや短い ③ちょうどよい ④やや長い ⑤非常に長い

→ ③の「ちょうどよい」以外の答えを選んだ方にお尋ねします。

どの程度の期間がよいと思いますか。またそれはなぜですか

[] 日 [理由:]

4. 最低 12 枚という撮影枚数についてどう思いますか。

- ①非常に少ない ②やや少ない ③ちょうどよい ④やや多い ⑤非常に多い

→ ③の「ちょうどよい」以外の答えを選んだ方にお尋ねします。

最小限どのくらいの撮影枚数ならよいと思いますか。またそれはなぜですか

[] 枚 [理由:]

5. これまで写真撮影の方法や技術を学んだ経験がありますか（独学も②の「ある」を選んでください）。

- ①ない ②ある

→ ②の「ある」を選んだ方にお尋ねします。学んだ期間と内容をお知らせください

（例：2 年間、中学校の写真部で顧問の先生から）

[] 年間 [内容:]

6. その他、研究について気づいたことや感想を書いてください。

IV. 小写真集についてお尋ねします。質問について当てはまる答えを○で囲んでください。

1. 出来上がった小写真集の出来ばえについてどう思いますか。

- ①非常に不満足 ②やや不満足 ③どちらとも言えない ④やや満足 ⑤非常に満足

2. 小写真集は「あなたが誰であるか」をどの程度表していますか。

- ①非常に表わさない ②やや表わさない ③どちらとも言えない ④やや表す ⑤非常に表す

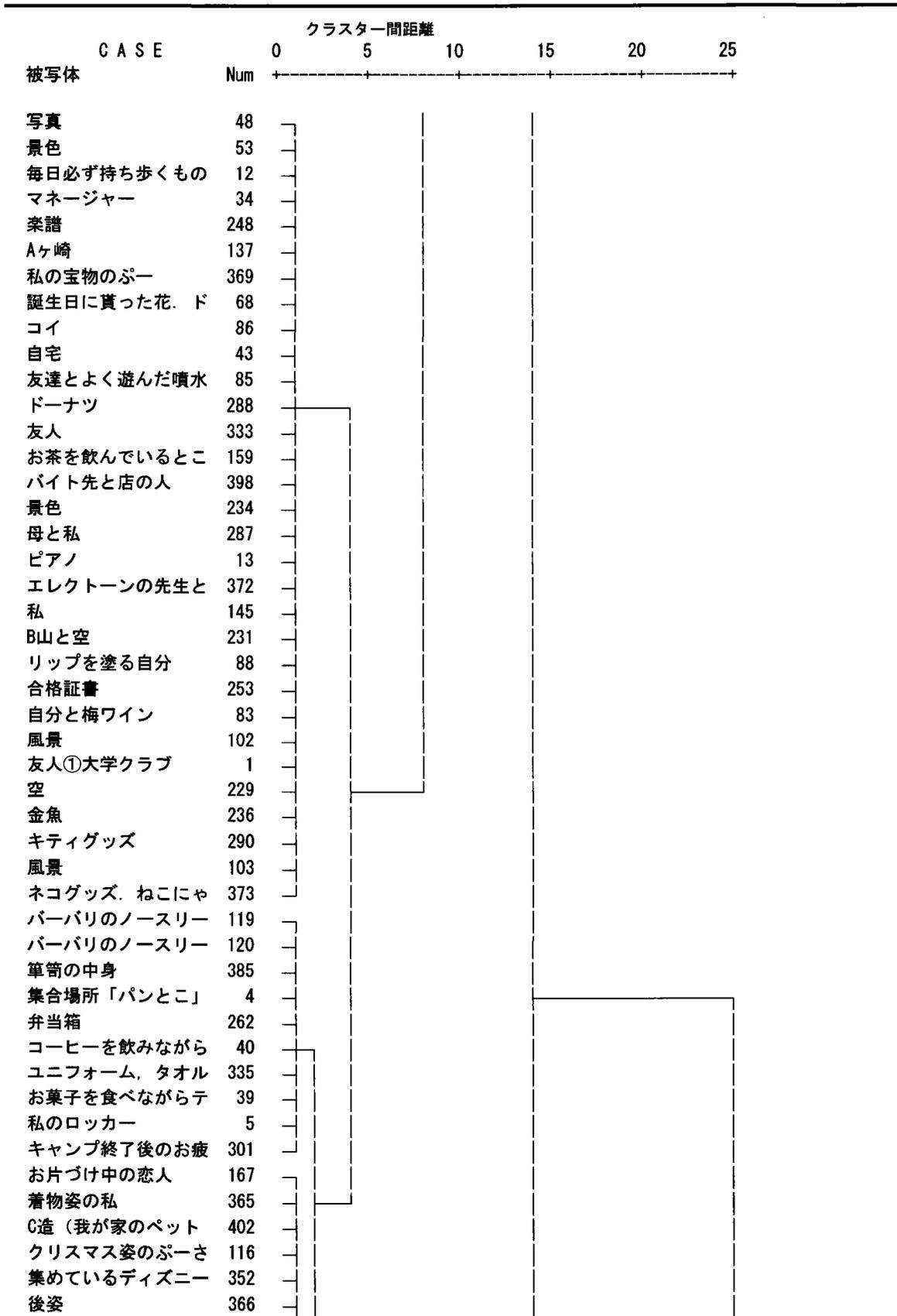
3. 出来上がった小写真集についてどのように感じますか。

- ①非常に嫌い ②やや嫌い ③どちらとも言えない ④やや好き ⑤非常に好き

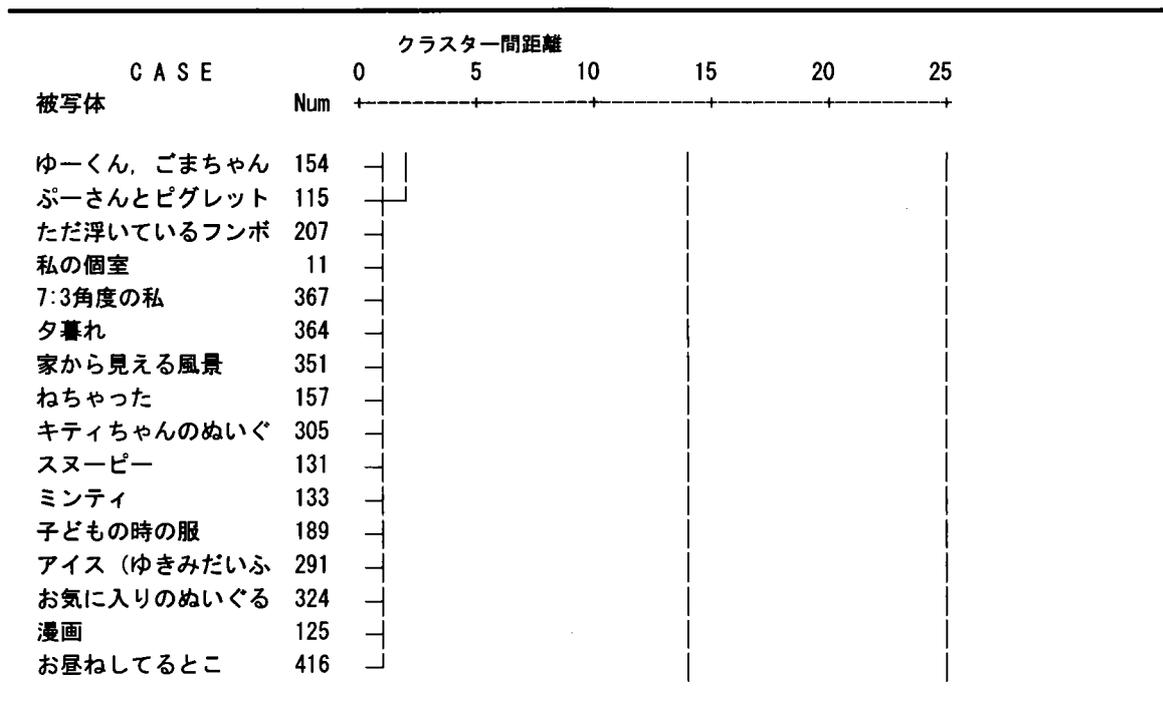
資料5. 高垣（1974）による20答法の分類カテゴリーとその内容

カテゴリー名	カテゴリーの定義・例・下位カテゴリー		
①社会係留的記述 (合意的記述)	自己を社会的集団への所属, 社会的役割に関連させて定義しているもの	1. 人間 2. 性 3. 学校・学生・学年等 4. 年齢・生年月日 5. 出身地・住所 6. 出生順位・家族構成 7. 世代(青年・若者等) 8. 民族・人種・国籍 9. 既婚・未婚 10. 特定の集団への所属 11. 生命 12. その他	
②準合意的記述		1. 生物・動物・地球人等の上位概念によって規定するもの 2. 人間の身体的文化的機能によってあるいは人間の形而上的・宗教的定義によって自己を規定するもの	
③普遍的事実の記述	例: 私は世界中にただ一人. 私は母親の胎内から生まれた等.		
④自己の属性の記述 (自己叙述的記述)	様々な側面にわたる自己の属性の記述	B. 身体的側面	B1. 健康・体質 B2. 容姿・体格 B3. 運動能力・動作
		P. 心的側面	P1. 才能・能力 P2. 気質・性格 P2'. 対人態度 P3. 関心・好み・趣味 P4. 願望・欲求 P5. 主義・意見・その他
		S. 社会对人的側面	S1. 家族関係 S2. 友人関係 S3. 異性関係 S4. 対社会関係
		L. 生活的側面	L1. 日常生活習慣・生活上の事実 L2. 生活態度・生活感情
		T. 時間的側面	T1. 過去の事実・過去への態度 T2. 未来の事実・未来への態度
⑤ ④に入らない全体的な自己についての規定.	アナロジーによる自己規定も含む. 例: 私は神経症である. 私は雪のような存在等.		
⑥自己に対する感情・評価・願望などそのものの記述		1. 對自己感情・評価 2. 對自己願望 3. 私は誰だかわからない, に類する記述 4. 私は私, に類する記述	
⑦記述時の状態	例: 今これを書いている. 早く終わらないかなと思っている.		
⑧その他			

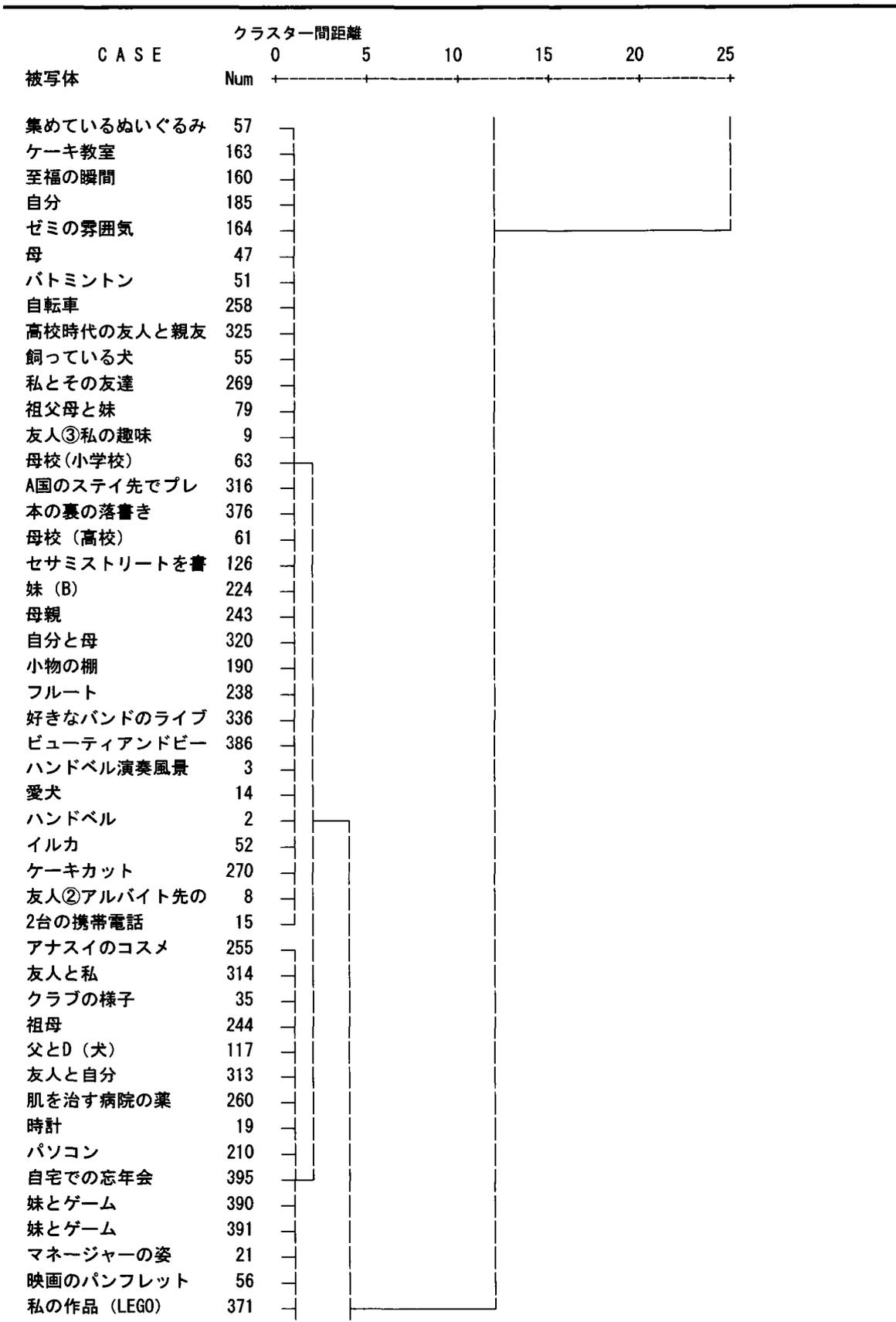
資料 6. 自叙写真のクラスター分析結果の詳細



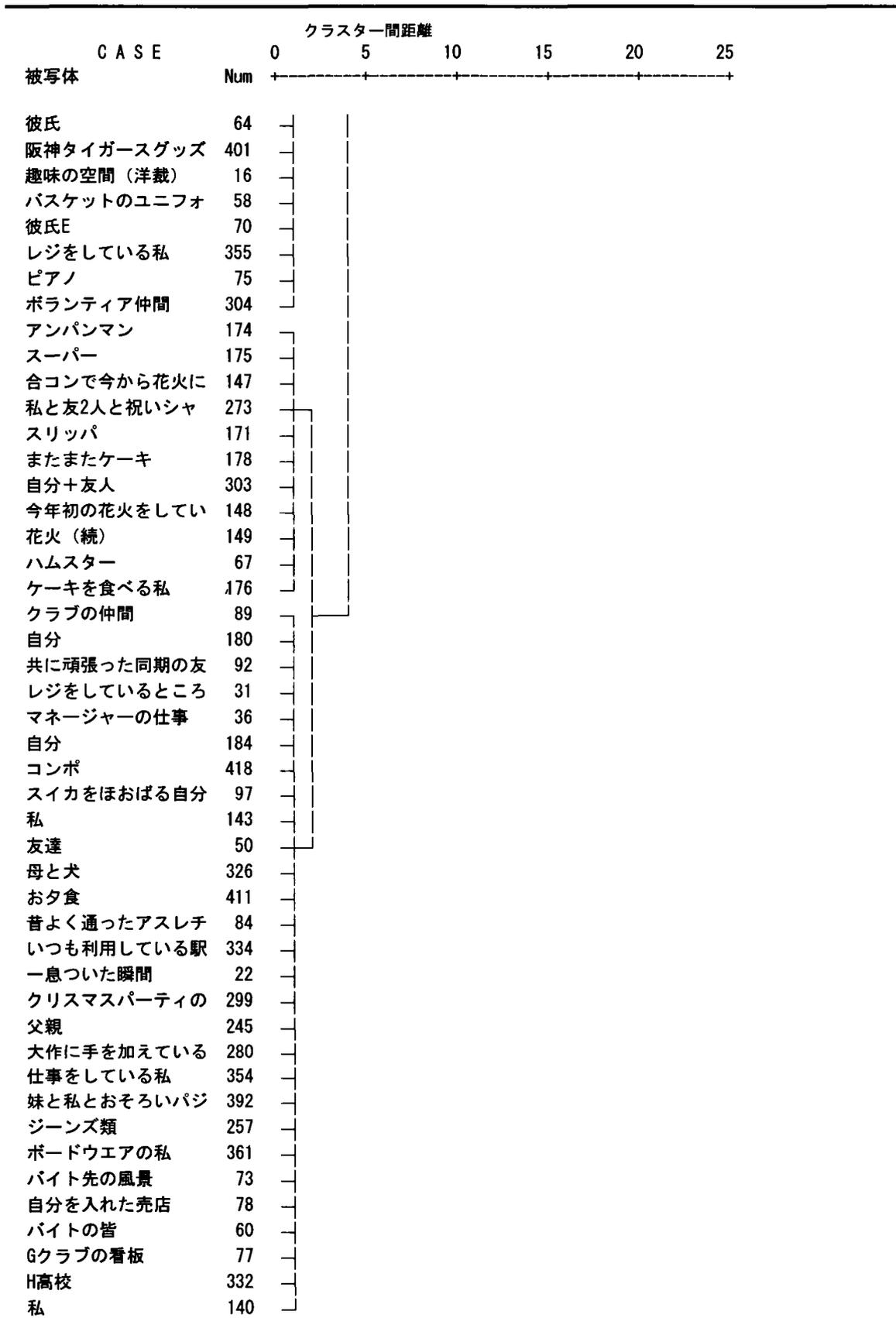
付図 6-1. クラスター1 のデンドログラム



付図 6-1. クラスタ-1 のデンドログラム(続き)

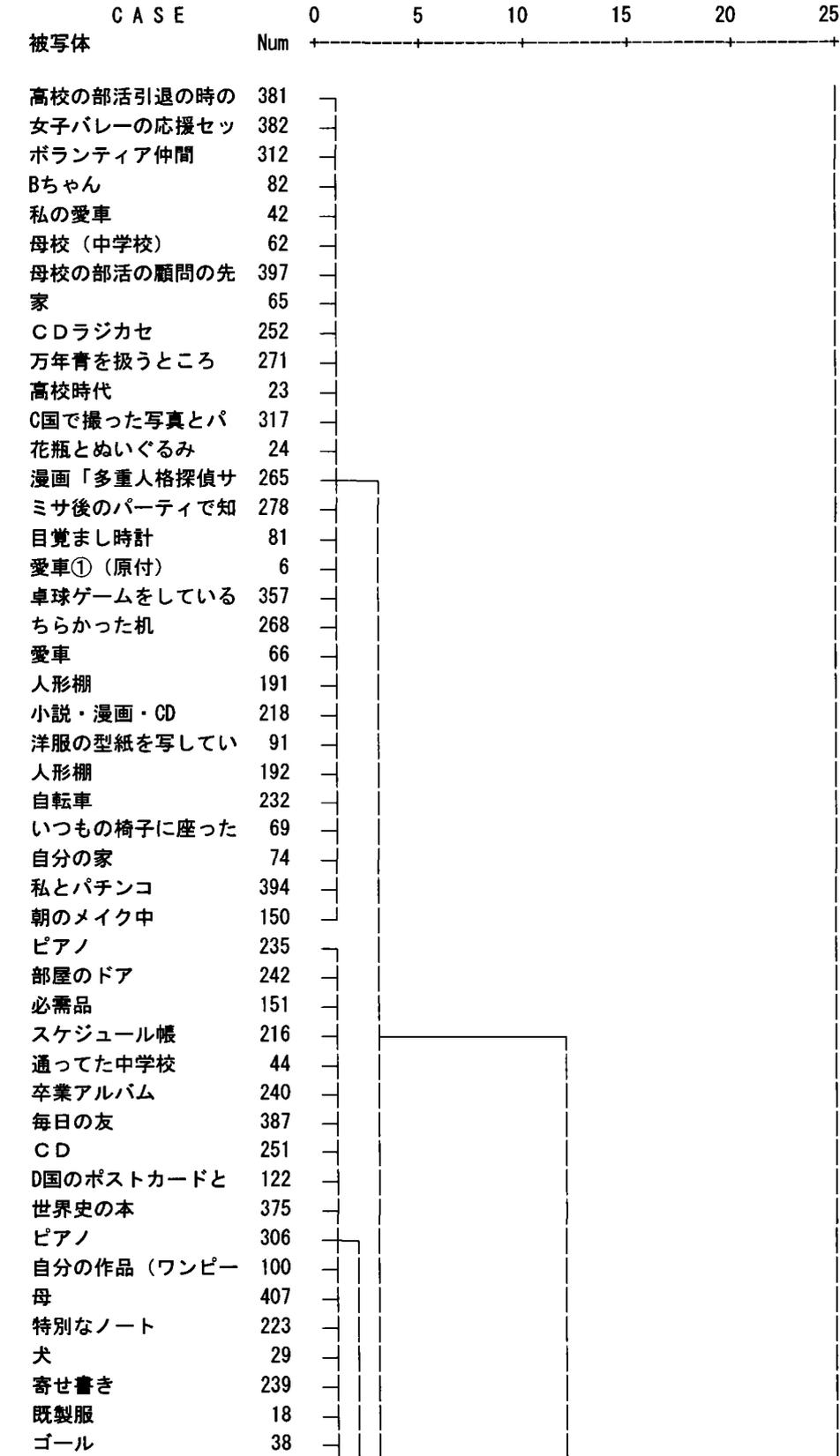


付図 6-2. クラスター2 のデンドログラム

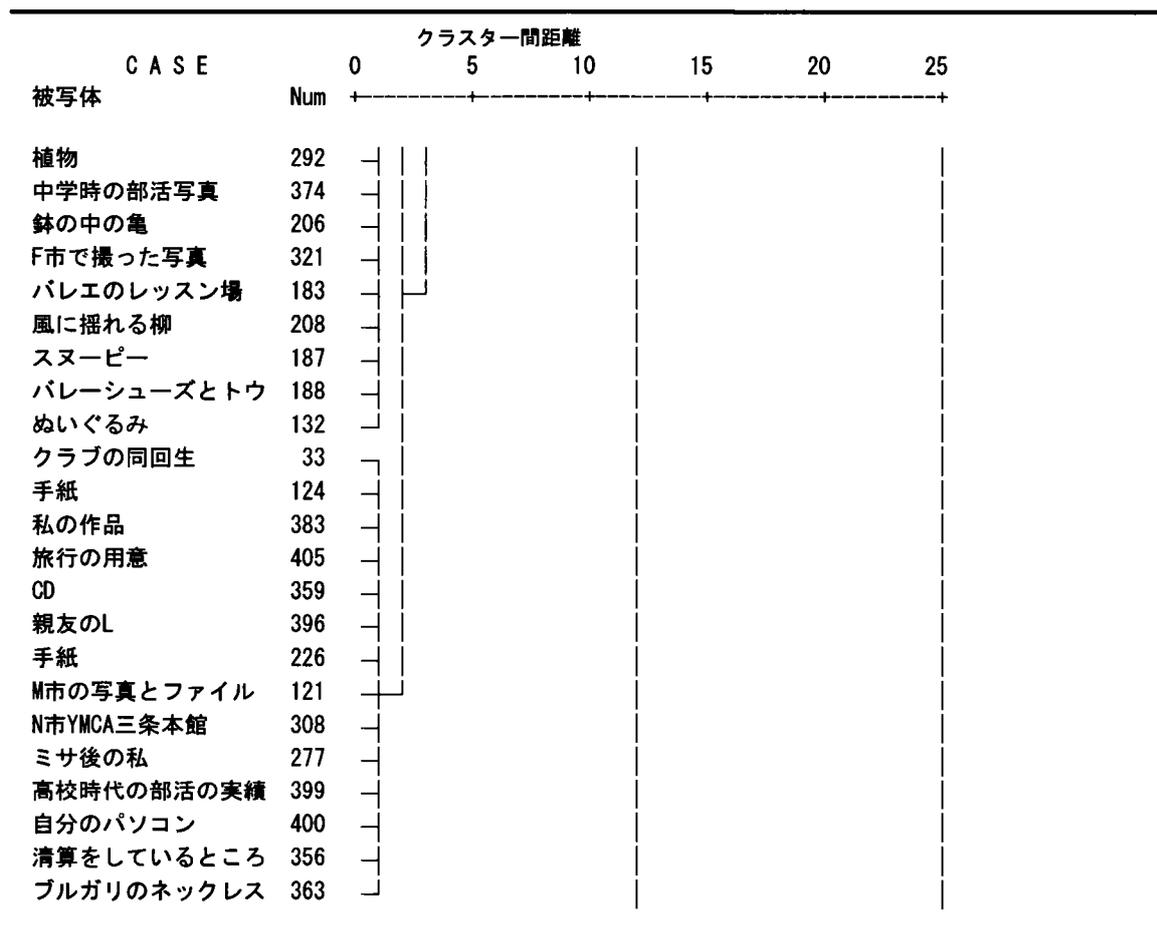


付図 6-2. クラスター2 のデンドログラム (続き)

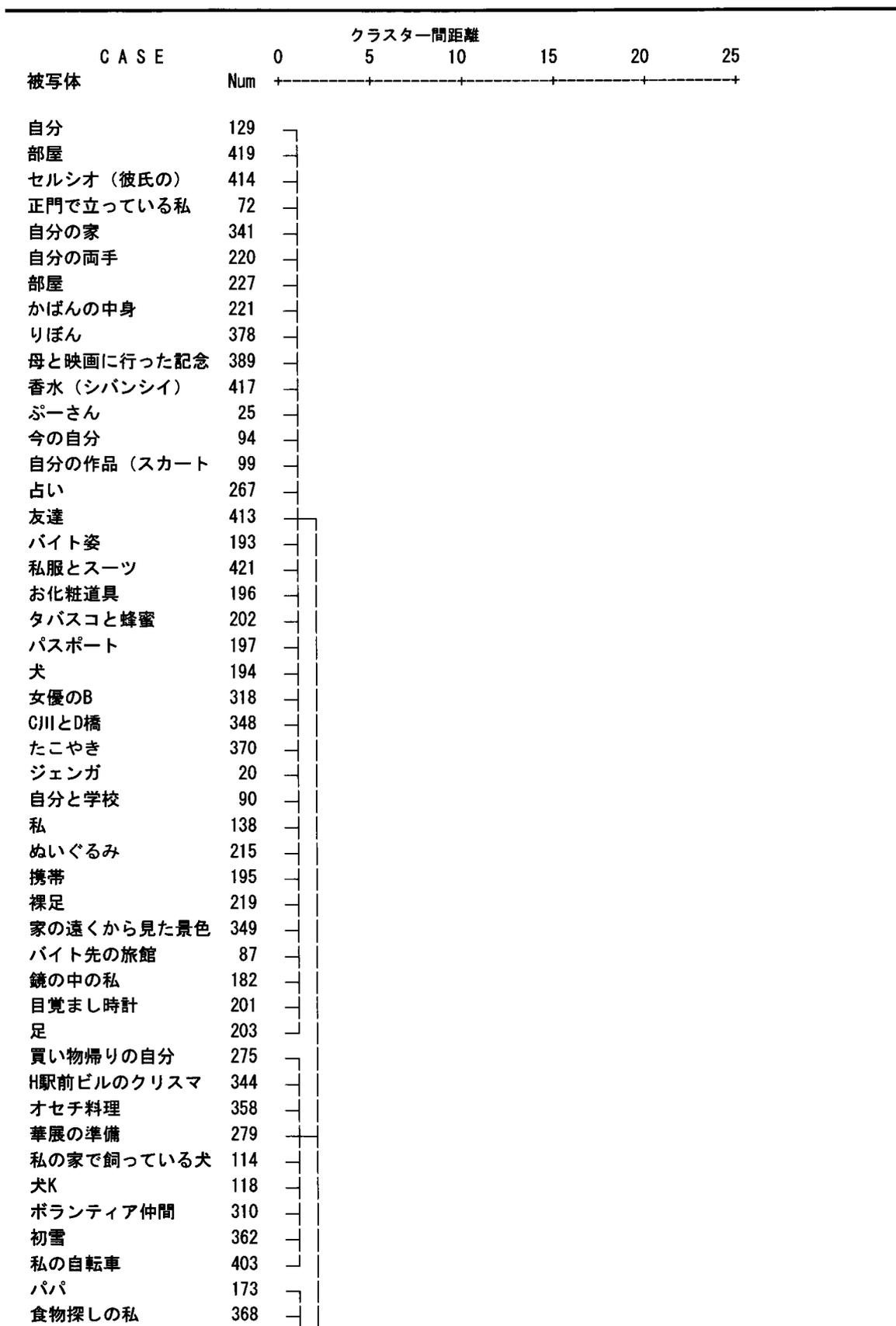
クラスター間距離



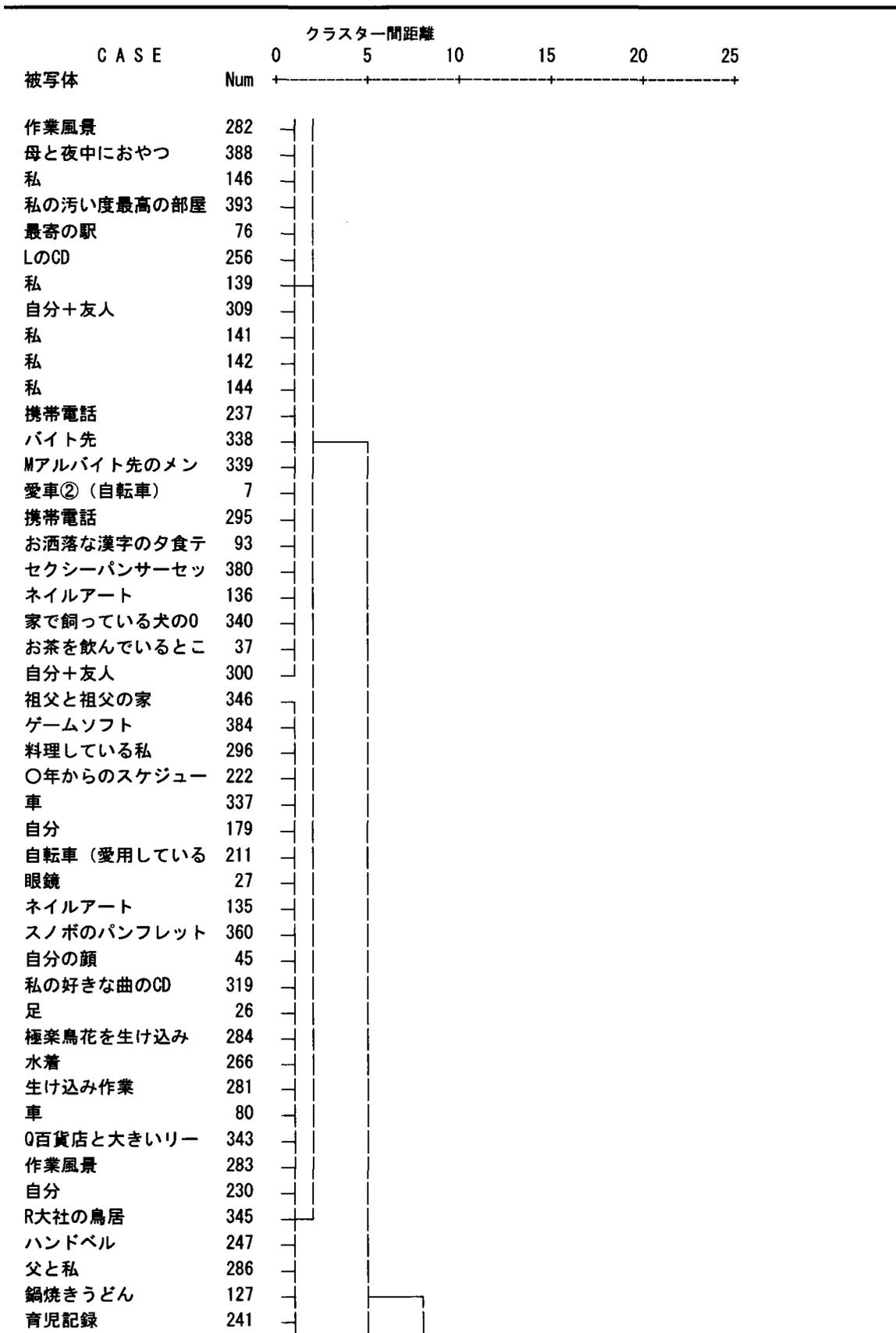
付図 6-3. クラスター3 のデンドログラム



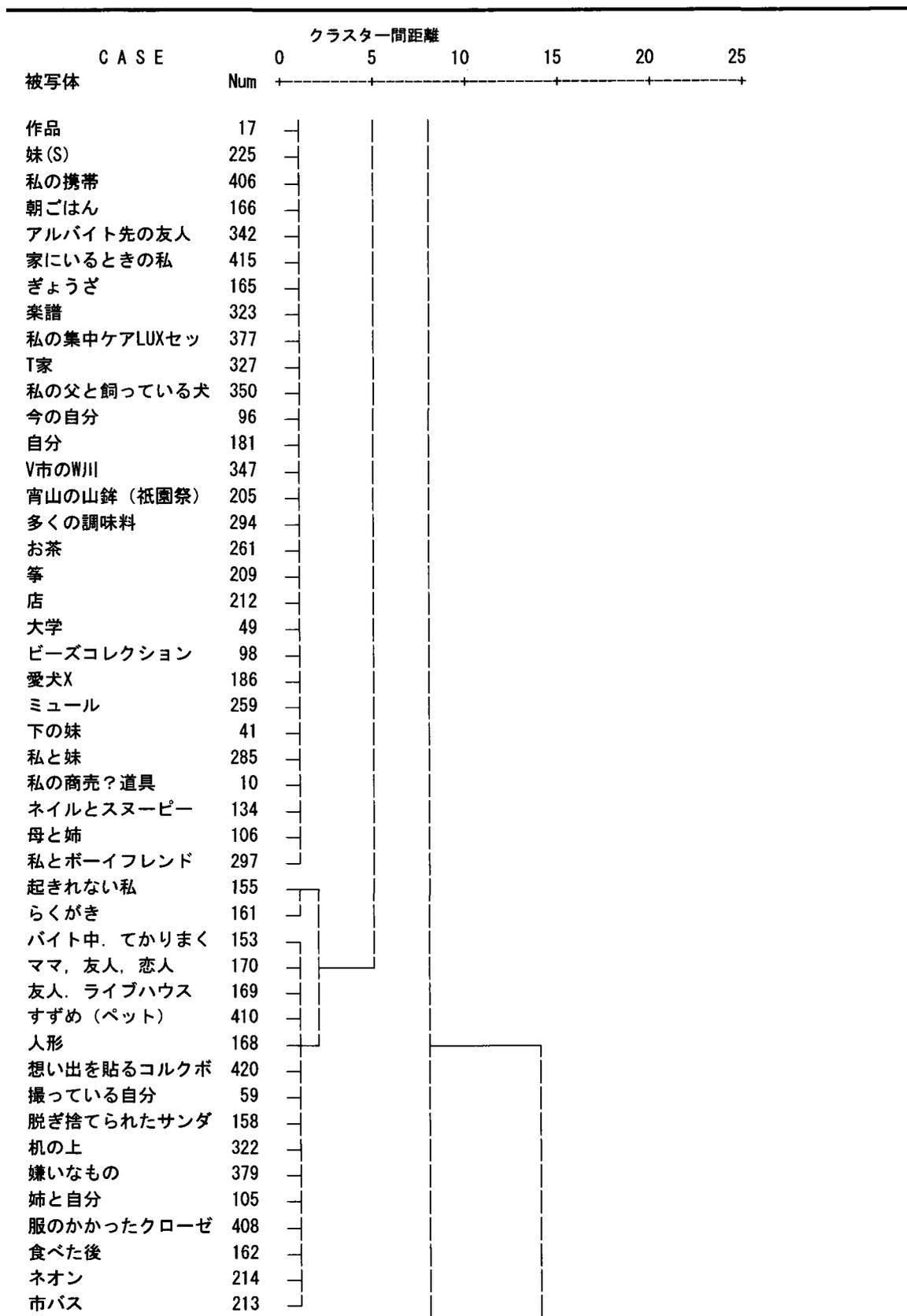
付図 6-3. クラスター3 のデンドログラム(続き)



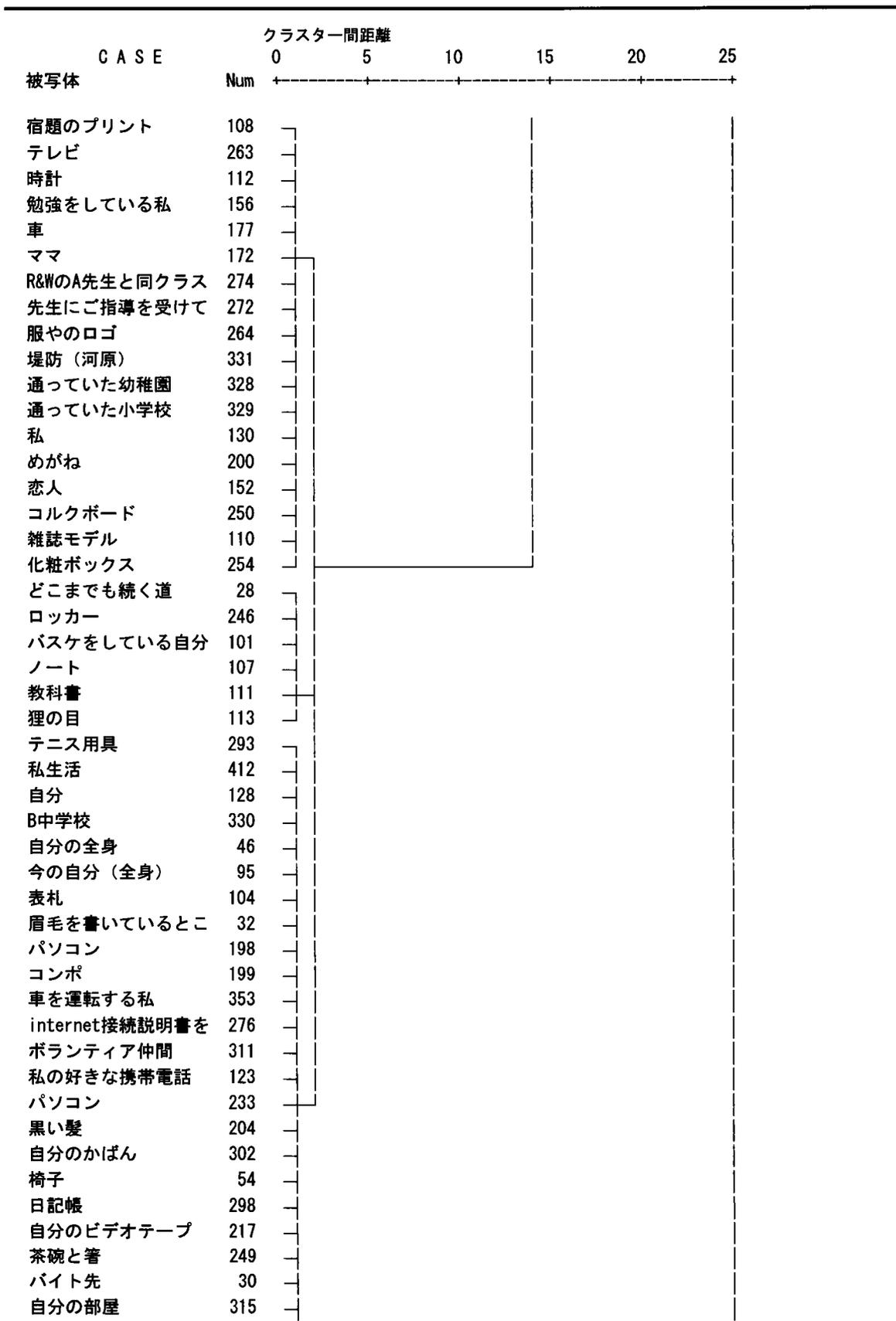
付図 6-4. クラスター4 のデンドログラム



付図 6-4. クラスター4 のデンドログラム(続き)



付図 6-4. クラスター4 のデンドログラム(続き)



付図 6-5. クラスター5 のデンドログラム

C A S E	Num	クラスター間距離					
		0	5	10	15	20	25
被写体		+-----+-----+-----+-----+					
天井	228						
バイト先	307						
自家製鮎寿司	404						
自分のロッカー	71						
携帯電話メール画面	109						
きなこもち	289						
ぷーさんとベッド	409						

付図 6-5. クラスター5 のデンドログラム(続き)

資料 7. 自叙写真のクラスター別の被写体と表現内容

付表 7-1. クラスター1 の被写体と表現内容

Num	群	被写体(何を写したか)	表現内容(何を表そうとしたか)	備考
48	3	写真	これまでの思い出	
53	2	景色	私ののんびりとした性格.	
12	3	毎日必ず持ち歩くもの	ぜったい欠かせないもの、一つでも欠けると一日ブルーになる.	財布・筆箱・携帯・鍵等
34	1	マネージャー	クラブのマネージャーの後輩.	自分と他者3(上半身)
248	3	楽譜	今までに演奏したもの.	
137	2	Aヶ崎	田舎は最高. 心が和む. やっぱのびのび大らかな人間でいなきゃ.	
369	3	私の宝物のぶー	4年間毎晩一緒に寝ているぶー. 大分色あせている.	
68	3	誕生日に貰った花. ドライブ ラワーにしたもの	だんだん年をとっていく自分.	
86	2	コイ	祖父とよく散歩した周辺で懐かしい場所.	
43	2	自宅	生まれた時から住んできた家.	
85	2	友達とよく遊んだ噴水	昔の遊び場.	
288	3	ドーナツ	大好物. ドーナツが好きな人(私).	
333	1	友人	安心. 大学の中で最もよく打ち解けて話せる人.	自分と他者1(上半身)
159	1	お茶を飲んでいるところ	甘いものには目がない.	自分と他者1(上半身)
398	1	バイト先と店の人	生活のほぼ毎日占めているバイト先を撮った.	他者1(上半身)
234	2	景色	家の中で落ち着く場所(好きな場所)から見た景色.	
287	1	母と私	私の大切な人. 何でも相談できる母が大好きな私.	自分と他者1(上半身)
13	3	ピアノ	私の音楽生活. 宝物.	
372	3	エレクトーンの先生と書いた 約束「さきしよ」	話すのが大好き. いつもレッスンほっといてしゃべりまくる.	
145	1	私	あまりにもナチュラルすぎる笑顔.	自分(顔)
231	2	B 山と空	私の好きな風景.	
88	1	リップを塗る自分	普段の生活習慣.	自分(膝上横)
253	3	合格証書	私の持っている資格.	
83	1	自分と梅ワイン	今, はまっているお酒(梅ワイン)とともに撮って好きなもの.	自分(上半身)
102	2	風景	現実逃避.	
1	1	友人①大学クラブ	私のクラブ同級生, 楽しんでいる大学生活.	他者3(上半身)
229	2	空	この空を撮りたいと思った自分. 私の生活する場所から見える風景.	
236	3	金魚	私の家族の一員.	
290	3	キティグッズ	大切なもの. このキャラクターが好きで観ていると安心する.	
103	2	風景	現実逃避.	
373	3	ネコグッズ. ねこにゃん.	猫が好き. でも本物は怖い.	
119	3	バーバリのノースリーブ	私のお気に入りの服.	
120	3	バーバリのノースリーブ(後ろ)	私のお気に入りの服.	
385	3	筆筒の中身	未だに夏物と冬物を入れ替えていない. 私のずぼらさ.	
4	2	集合場所「パンとこ」	1回生の時から友達が自然に集まる場所.	* 遠景人 3
262	3	弁当箱	節約.	
40	1	コーヒーを飲みながらパソコン	コーヒーが好きでパソコンも良く使う.	自分(上半身後ろ)
335	3	ユニフォーム, タオル	熱中. サッカーを観戦する時に欠かせないもの.	
39	1	お菓子を食べながらテレビを見る私	お菓子を食べながらテレビを見るのが幸せ.	自分(全身)
5	3	私のロッカー	皆よりは綺麗です! 少し性格が現われているかなと思って撮った1枚.	
301	1	キャンプ終了後のお疲れモード	頑張ってきました. 疲れましたの表情.	自分と他者2(上半身)
167	1	お片づけ中の恋人	家事分担制.	他者1(上半身横)

365	1	着物姿の私	成人式の着物を着てみた。あまりの苦しさに笑顔が消える。	自分(上半身)
402	3	C造(我が家のペット)		ぬいぐるみ
116	3	クリスマス姿のぶーさんのぬいぐるみ	お気に入りのぶーさんのぬいぐるみ。	
352	1	集めているディズニーグッズ	超ディズニー好きな私。ピンクのぶーさんはディズニーランドにしか売っていない超レアもの。ちょっとした自慢。	自分(膝上)
366	1	後姿	初めて見る私の後姿。うなじのセクシーさを少しアピール。	自分(顔後ろ)
154	3	ゆーくん、ごまちゃん、ぶーちゃん	私のお友達。	ぬいぐるみ
115	3	ぶーさんとピグレットの置物	私の大好きなぶーさんグッズの中で特にお気に入りのもの。	
207	3	ただ浮いているフンボルトペンギン	泳ぎもせずただ浮いている→自然にまかせる。ぼーっとしている。	
11	2	私の個室	いつも寝起きする場所。机は飾り化されている。	
367	1	7:3 角度の私	着物姿では7:3 角度から見るのが一番綺麗と言われて、写してみたがそうでもなかった。	自分(全身)
364	2	夕暮れ	朝はいつも霧や天気が悪く、日の出が見えないが、夕方はきれいな夕日が見える。これは初日の出。	ポスター
351	2	家から見える風景	田畑が広がる田舎の土地に最近 20 階建てのマンションが建てられた。何気に異風景だと感じる。発展も必要だが、私は田舎が好き。	
157	1	ねちゃった	現実逃避。	自分(全身)
305	3	キティちゃんのぬいぐるみ	自分の好きな物。	
131	3	スヌーピー	私のめっちゃ好きなぬいぐるみ。ラブリー。	
133	3	ミンティ	これもD国で私の大きい思い出となった一品。あーD国を思い出すな。	
189	3	子どもの時の服	お母さんの優しさ。	
291	3	アイス(ゆきみだいふく)	大好物。これがあれば風邪も治るほど大好きな私。	
324	3	お気に入りのぬいぐるみ。E国で買ってきたレゴと好きな話の絵本と小さな絵本	かわいらしい。こういう物が好き。	
125	3	漫画	私の一番のお気に入りの漫画。	
416	1	お昼ねしてるとこ	私生活。	自分(顔横)

注) 対象分類欄の番号、1 は人物、2 は場所、3 は物を表す。表中の Num は資料 6 に示したデンドログラムの Num に対応する。

付表 7-2. クラスター2 の被写体・被写体の記述・表現内容

Num	種類	被写体(何を写したか)	表現内容(何を表そうとしたか)	備考
57	3	集めているぬいぐるみ	ぬいぐるみ集めが大好きで、すぐ可愛いぬいぐるみを買ってしまう自分.	
163	1	ケーキ教室	キャピキャピ(ケーキを作っている自分).	自分(全身後ろ)
160	1	至福の瞬間	私の幸せ(ケーキを食べている自分).	自分(顔)
185	1	自分	美味しい顔.	自分と他者1(上半身)
164	1	ゼミの雰囲気	作ったケーキを持って行って食べてもらっている. 楽しいゼミ.	自分と他者5(全身)
47	1	母	私の抛り所	他者1(全身)
51	3	バトミントン	中・高とバトミントン部で今の自分の我慢とか忍耐がついたと思う.	
258	3	自転車	自分の行動範囲. 今無くなると非常に困るもの.	
325	1	高校時代の友人と親友	いつも一緒にいた人で私には欠かせない人を表した. 私の親友 といえばこの右の人.	他者2(上半身)
55	3	飼っている犬	自分が日頃とても可愛がっているので犬を可愛がっている自分.	
269	1	私とその友達	喜び. 自分の誕生日パーティーを行ってもらった. 皆に祝ってもらった.	自分と他者4(上半身)
79	1	祖父母と妹	母方の両親と妹からの私の血縁関係.	他者3(上半身)
9	1	友人③私の趣味	高校以来の親友と共に好きなミュージシャンのライブ会場前で.	他者3(膝上)*遠景人13
63	2	母校(小学校)	小学校に行っていた自分.	
316	3	A 国のステイ先でプレゼント されたモバイル	A 国のホストファミリーとの思い出やすごく仲良くなったこと.	
376	3	本の裏の落書き	友達と落書きするのが好き.	
61	2	母校(高校)	高校に行っていた自分.	
126	1	セサミストリートを書いている 人と友達と私	嬉しそうな私.	自分と他者3(膝上)
224	1	妹(B)	15年間生活してきた人. 切っても切れない人.	他者1(上半身)
243	1	母親	私の家族.	他者1(全身後ろ)
320	1	自分と母	母との仲の良さ.	自分と他者1(上半身)
190	3	小物の棚	小さい頃からもらったり買ったりした小物で一つ一つに思い出がある.	
238	3	フルート	私の趣味. 今の習い事. そして宝物.	
336	3	好きなバンドのライブパンフ レットとCD	宝物. 学ぶことが多くていい音楽に出会えた.	
386	3	ビューティ&ビーストのプレート	ディズニー大好き.	
3	1	ハンドベル演奏風景	私の大学生生活(クラブ)②	自分と他者1(上半身後ろ)
14	3	愛犬	私の性格そっくりに育ってしまった愛犬C. 写真では表せないかもしれませんが.	
2	3	ハンドベル	私の大学生生活(クラブ)①音楽が私には欠かせないものなので.	
52	3	イルカ	イルカが好きでずっと調教師になりたかった頃があった.	
270	1	ケーキカット	喜びの分かち合い.	自分と他者1(上半身)
8	1	友人②アルバイト先の友人	私のアルバイト先の友人. 共に働く良き仲間. 大学生生活もプライ ベートではアルバイト. この友人は外せないの.	他者7(全身)
15	3	2 台の携帯電話	私と彼の携帯. 電話はもちろんメールもするので. 絶対携帯しな ければならないもの.	
255	3	アナスイのコスメ	少しずつ集めている自分のコレクション. 気に入っているもの.	
314	1	友人と私	友人と私の仲の良さ.	自分と他者1(全身)
35	1	クラブの様子	タイムを測っているところ.	自分と他者1(全身)
244	1	祖母	私の家族.	他者1(膝上後ろ)

117	1	父とD(犬)	私とそっくりの父が可愛がっているDと父に甘えるDの姿。	他者1(全身)
313	1	友人と自分	私の友達との仲の良さ。	自分と他者1(顔)
260	3	肌を治す病院の薬	ストレス。	
19	3	時計	自分の性格をあらわした。シルバーの時計は高校時代からずっと愛用しているもので、日までポーとする時間は好きではなく無駄に使わず有効に使うのをモットーとしている。	
210	3	パソコン	頭脳の一部。補ってくれる。よく似ているが少し違った自分が生きているところ。	
395	1	自宅での忘年会	私の父とその友人と私と3人でよく飲むのでそのときの雰囲気。	他者2(上半身・部分)
390	1	妹とゲーム	妹と遊ぶのが大好き。	自分(全身後ろ)
391	1	妹とゲーム	大笑い。	自分と他者1(膝上)
21	1	マネージャーの姿	私は野球部のマネージャーをしているという所属を表した。毎日充実している。	自分と他者1*遠景人2
56	3	映画のパンフレット	映画に行くことが大好きな自分。	
371	3	私の作品(LEGO)	私のセンス。	
64	1	彼氏	普段の自分。	他者1(上半身横)
401	3	阪神タイガースグッズの一部	自分の趣味。	
16	3	趣味の空間(洋裁)	暇があれば装苑という雑誌を見て気に入った服を造る。自分が普段愛用しているミンシ、はさみ、定規などを置き、洋裁しているところを表したかった。	裁縫道具、布、雑誌(型紙)等
58	3	バスケのユニフォーム	中学時代の大好きだったクラブの思い出を忘れられない自分。	
70	1	彼氏 E	自分の周りの人間。	他者1(上半身)
355	1	レジをしている私	レジのことならまかせて！お金を数えるのは得意。	自分(上半身)
75	3	ピアノ	3歳から始め、お世話になったり苦しめられたりしたピアノとの思い出。	
304	1	ボランティア仲間	一緒にキャンプに行った面子。解散直前の一枚。	自分と他者9(全身)
174	1	アンパンマン	おこちゃまな私。	自分(全身)
175	2	スーパー	私スーパー大好きなんです。	*遠景人7
147	1	合コンで今から花火に行くぞ	合コン大好きな私。	自分と他者6
273	1	私と友2人と祝いシャンパン	20歳になった誕生日を友と楽しく祝えるという喜び。	自分と他者2(上半身)
171	3	スリッパ	ママのスリッパ。私のもととはここ。	
178	1	またまたケーキ	ケーキ好き。	自分(顔)
303	1	自分+友人	こんなこともするぞ！がテーマです。おちゃらけた自分。	自分と他者1(全身)
148	1	今年初の花火をしている私	私のはしゃいでいる姿。	自分(膝上)
149	1	花火(続)	はしゃいでいる私。	自分と他者7(膝上)
67	3	ハムスター	大好きなペットを見る自分。	
176	1	ケーキを食べる私	ケーキはやっぱ好き。	自分(上半身横)
89	1	クラブの仲間	ジョイントコンサート後の打ち上げ。学年関係なく皆が一つになったと思う。	自分と他人6(膝上)
180	1	自分	一汗流した後の顔。	自分と他者2(上半身)
92	1	共に頑張った同期の友とジョイントコンサートのパンフレット	自分が所属している場所。	自分と他者1(上半身)
31	1	レジをしているところ	バイト先ではほとんどレジ打ちをしているから。	自分(上半身)
36	1	マネージャーの仕事	ペットボトルに水を入れてる。夏の一番大事な仕事。	自分と他者1(全身)
184	1	自分	今、一番気に入っているはニーアップルティを飲んでいるところ。	自分(顔)
418	3	コンボ	いつも唄を聞いているから。私にとってなくては困るもの。	
97	1	スイカをほおぼる自分	スイカが大好きだ。夏、甘いスイカにあたると嬉しい。叩いても外見も甘さも分からない。本当に好き。昨年おなかを壊したくらい。	自分(上半身)
143	1	私	物色中。どうしよー。F国の友達にリップグロスあげようかな。	自分(全身後ろ)

50	1	友達	大学での私の居場所.	他者 2(全身)
326	1	母と犬	家族. 友達みたいに仲良しの母と家族の一員の犬.	他者 1(膝上)
411	1	お夕食	家族団らん.	他者 2(膝上)
84	2	昔よく通ったアスレチック公園	子どもの時よくきたところから家の周辺の雰囲気.	
334	1	いつも利用している駅と友人	日常生活. 学校に行く時に利用する駅と一緒に通学する友人.	自分と他者 1(全身)
22	1	一息ついた瞬間	クラブの後に食べるアイスクリームがとてもおいしく幸せの瞬間を表した.	自分(胸上)
299	1	クリスマスパーティのお料理	自分が作ったお料理のアピール.	自分と他者 2(上半身)
245	1	父親	私の家族.	他者 3(全身後ろ)
280	1	大作に手を加えているところ	大作に自分も加われる喜び! 外での作業の寒さ!	自分(全身)
354	1	仕事をしている私	服をたんだり, マネキンに服を着せたりとバイト熱心な私を写した.	自分(膝上)
392	1	妹と私とおそろいパジャマ	妹と仲良し. パジャマはおそろいでしかも上だけ交換してある. 2人ともあほなことが好き.	自分と他者 1(全身)
257	3	ジーンズ類	自分にとって楽なもの. 常に身に付けている(回数が多い)もの. 落ち着いたもの.	
361	1	ボードウェアの私	冬は寒くて嫌いだけど, ボードをする時の私は元気いっぱい. 20歳になってピンクのウエアって微妙...	自分(上半身)
73	2	バイト先の風景	私がどんなバイトをしているか.	
78	1	自分を入れた売店	バイト先での制服を写してより雰囲気を出そうとした.	自分(全身)
60	1	バイトの皆	バイト先でいつもどのように過ごしているのかという自分.	他者 5
77	3	Gクラブの看板	小さい時通って楽しみにしていた交通ルール教室が作った看板	
332	2	H高校	最高の場所. 良い友人, 先生に出会えた人生で一番居心地の良い場所.	
140	1	私	おもいきりナチュラルな私.	自分(上半身横)

注)対象分類欄の番号、1は人物、2は場所、3は物を表す。表中のNumは資料6に示したデンドログラムのNumに対応する。

付表 7-3. クラスター3 の被写体・被写体の記述・表現内容

Num	種類	被写体(何を写したか)	表現内容(何を表そうとしたか)	備考
381	3	高校の部活引退の時の色紙とお菓子のおまけの〇ちゃん	高校では〇ちゃんと呼ばれていた。それで調子に乗って大量に集めた〇グッズ。これはほんの一部。	
382	3	女子バレーの応援セット	女子バレーが好き。Aを見てチアを始めた。	洋服
312	1	ボランティア仲間	チームのメンバー。記念。	自分と他者9(全身)
82	1	Bちゃん	入学した当時発見した私の美人像。	他者1(膝上)
42	3	私の愛車	今、私が一番はまっているもの。	
62	2	母校(中学校)	中学校に行っていた自分。	
397	1	母校の部活の顧問の先生	お世話になった先生と今でもコーチとしてよく行く練習前の風景。	他者1(全身)
65	2	家	普段生活している所。	
252	3	CDラジカセ	いつも使っているCDラジカセ。	
271	1	万年青を扱うところ	学びの姿勢。始めてみる植物に対する好奇心。	自分(全身)
23	3	高校時代	本当は楽器を写すはずだったが、最近高校に忘れてきたのでパンフレットなどで吹奏楽部に所属していたことを表した。クラブは私にとっては大きな成長の場であった。	メトロノーム、パンフレット、楽器部品等
317	3	C国で撮った写真とパンフレット	C国の研修で知り合った友達ととても仲良くなれてうれしかったこと。	
24	3	花瓶とぬいぐるみ	自分の性格をあらわす。しっかりしてそうだけど実は天然ボケである	
265	3	漫画「多重人格探偵サイコ」	(唯一持っている漫画)興味のあるもの。	
278	1	ミサ後のパーティで知人の方と	すばらしい人との多くの出会い。今年一年は多くのすばらしい人と出会えた。その中でも特にこの人と一緒に。	自分と他者2(上半身)
81	3	目覚まし時計	毎日私を起こしてくれるアイテムから生活習慣。	足一部
6	3	愛車①(原付)	私の足となって約2年。これに乗って通学中。ケガ(キズつけた)もしていますが、元気です。	
357	1	卓球ゲームをしている私	TVにつなぐだけでゲームができる。コンピュータと対戦し、必死になっている。まだ勝ったことなし。	自分(部分)
268	3	ちらかった机	今の自分の生活。気分。	
66	3	愛車	普段の自分。	
191	3	人形棚	子どもの時から思い出。	
218	3	小説・漫画・CD	ずっと好きな本とCD	
91	1	洋服の型紙を写しているところ	今、自分が夢中になっていること。	自分(上半身)
192	3	人形棚	子どもの時からの思い出。	
232	3	自転車	私の通学の足。	
69	1	いつもの椅子に座った自分	普段の通学手段内での自分の行動。	自分(上半身横)
74	2	自分の家	私の拠点。	
394	3	私とパチンコ	趣味の一つであるパチンコを撮りました。	自分(部分)
150	1	朝のメイク中	これがないと外にでられない。	自分(全身)
235	3	ピアノ	私の昔の習い事。	
242	3	部屋のドア	私の部屋。	
151	3	必需品	これがないと生きられない。	化粧品、財布、携帯、目薬等
216	3	スケジュール帳	私の時間を把握してくれているもの。	
44	2	通ってた中学校	私の中学校。3年間を過ごした場所。	
240	3	卒業アルバム	私の生い立ち。	
387	3	毎日の友	ほとんど離さない体の一部化しているものたち。	携帯、時計、ネ

				ックス、指輪
251	3	CD	私の好きなCD.	
122	3	D 国のポストカードとカレンダー	D 国の思い出.	
375	3	世界史の本	世界史が好き.	
306	3	ピアノ	自分の趣味&特技.	
100	3	自分の作品(ワンピース, 上着)	とても苦労した作品たち. ほぼ徹夜. 一番右が昨日完成したばかりのもの.	
407	1	母	台所にいる母. 母のここに立っている姿が妙にかわいらしくて好き.	他者 1(全身)
223	3	特別なノート	私しか知らないもの. 日記に書き足りない時や思い切り強い感情を目いっぱい好きなだけ書き付けたもの. 特に書きなぐる. ノート自体は普通の文具. 中味が重要.	
29	3	犬	自転車置き場にいるこの犬は E という. 私はとても犬好きである.	
239	3	寄せ書き	私の大切な宝物.	
18	3	既製服	最近秋の服を購入. 夏とても気に入って着ていた服. 今までめったに着なかったパンツをはくようになった. 既製服で気に入っているもの. 好きな服を表した.	
38	1	ゴール	サッカー部なのでゴールをとってみた.	自分(全身)
292	3	植物	下宿で私を癒すもの. とても大切に育てている. 植物好きな私.	
374	3	中学時の部活写真	部活を頑張っていたとき. 頑張っている自分が好きだった頃.	
206	3	鉢の中の亀	小さな鉢の中しか知らない→狭い世間しか知らない. 隙あらば脱走? 好奇心旺盛. 時間の流れはゆっくりと.	
321	3	F 市で撮った写真	F の街が好き.	
183	2	バレエのレッスン場	5 歳の時からずっと変わらないレッスン場.	* 遠景人 1
208	2	風に揺れる柳	風に飛ばされそうで飛ばされない. 意外としっかりしている?	
187	3	スヌーピー	私が生まれたときからずっと一緒にいる大切なスヌーピー.	
188	3	バレエシューズとトゥシューズ	今, 一番好きなこと.	
132	3	ぬいぐるみ	全部 G 国の代表的な動物達. G 国, 最高. 私の可愛い F 国.	
33	1	クラブの同回生	一緒に頑張ってきたクラブの友達.	自分と他者 9(全身)
124	3	手紙	私の H 国のママからの手紙たち.	
383	3	私の作品	特技.	
405	3	旅行の用意	ここ毎年行っている海外旅行. 今年はこれから I 国に行きます.	
359	3	CD	元気の無い時→J. 気分を落ち着かせたり癒す→K の CD を聞いている. 2 枚とも私のお気に入り.	
396	1	親友の L	週に 1, 2 回は必ず会って話す中学の時からのおしゃべり会.	他者 1(上半身)
226	3	手紙	私の大切なものの一つ. 大切な人から貰った数々の手紙.	
121	3	M 市の写真とファイル	私の今までの人生の中で最高の思い出.	
308	2	N 市 YMCA 本館	自分が属している団体.	
277	1	ミサ後の私	平安. 心に満ちた平安. 紙に 20 歳になれた事迎えられたことを祈る. 喜ぶ. 神に感謝.	自分(膝上)
399	3	高校時代の部活の実績	私の自慢.	
400	3	自分のパソコン	自分の趣味.	
356	1	清算をしているところ	今日の売上に満足. 本当はこのお金, 自分の物やったらなーと思っている.	自分(顔)
363	3	ブルガリのネックレス	去年一年頑張ったご褒美にブルガリを購入. 少しお金を奮発してみた. 自分へのプレゼント.	自分(部分)

注)対象分類欄の番号、1 は人物、2 は場所、3 は物を表す。表中の Num は資料 6 に示したデンドログラムの Num に対応する。

付表 7-4. クラスター4 の被写体・被写体の記述・表現内容

Num	種類	被写体(何を写したか)	表現内容(何を表そうとしたか)	備考
129	1	自分	うーしんどい.	自分(上半身横)
419	2	部屋	私生活そのもの.	
414	3	セルシオ(彼氏の)	車が何より好きで特にセルシオがマイファバレットなので. 友達がセルシオと聞くと私を連想してくれるので撮りました.	
72	1	正門で立っている私	大学生である自分.	自分(全身)
341	2	自分の家	A 県から引っ越してきて 10 年住んでいる家です.	
220	1	自分の両手	手はその人をよく表していると思うから. 手をそのままとると私を表す.	自分(部分)
227	2	部屋	自分の部屋の汚さ. 自分だけの部屋. 私の生活感. 歴史. 様々なもの	
221	3	かばんの中身	身の回りのもの. 持ち歩くもの. いつも. 自分らしい.	
378	3	りぼん	近所に住む小さい友人から借りて未だに読んでいる本. この年で読んでいる人はなさそう.	
389	1	母と映画に行った記念	突然に思いついて 2 人でレイトショーを見に行った映画. 似たもの同士.	自分と他者 1(上半身)
417	3	香水(シバンシイ)	この匂いが好きでこの匂いを自分の香りにしているため.	
25	3	ぶーさん	今の私を表した. バイト先が閉店してぶー太郎になっている私.	ぬいぐるみ.
94	1	今の自分	新作のワンピースを着た自分.	自分(上半身)
99	3	自分の作品(スカート)	大学に入ってから作ったスカート. 左から作った順番に並べた. 形も様々. 色もあまり統一していない.	
267	3	占い	困った時に頼るもの.	
413	1	友達	親友という時の私.	自分と他者 1(顔)
193	1	バイト姿	普段の生活の一部.	自分(全身)
421	3	私服とスーツ	服が大好きで普段の私とスーツを着た時の私.	
196	3	お化粧道具	皆に見せる自分をつくるのに必要なもの.	
202	3	タバスコと蜂蜜	食べることが好きということを表そうとした.	
197	3	パスポート	自分が誰であるかを表そうとした.	
194	3	犬	家族.	
318	3	女優の B	私は彼女が好きだということ(特に考え方).	
348	2	C 川と D 橋	高校は E 山に. 塾は F にあったので. よくこの橋を渡りました. 塾以外にも渡っていたけど.	* 遠景人 16
370	3	たこやき	2 年間続けているバイト.	
20	3	ジェンガ	このジェンガは積み上げて 23 段にした. 私は普段人から見られる年齢が 23 歳で外見年齢を表した.	
90	1	自分と学校	自分は今 G 大学に通っているということ.	自分(全身)
138	1	私	今日はよく泳いだなー. 楽しかった. 帰る前のお疲れモード. 産まれたときから一緒にいる→他の人が知らないようなことも知っている(今までの私).	自分(上半身横)
215	3	ぬいぐるみ		
195	3	携帯	自分にとって必要なもの.	
219	1	裸足	自分だけのポロポロの足.	自分(部分)
349	2	家の遠くから見た景色	小学 4 年生から住んでいるけど. 少し上に上ると 10 年前と景色はあまり変わらないこと.	
87	2	バイト先の旅館	バイト先の旅館の風景.	
182	1	鏡の中の私	もう一人の私.	自分(全身)
201	3	目覚まし時計	早起きということを表そうとした.	
203	1	足	足をよく使うということを表そうとした.	自分(部分)

275	1	買い物帰りの自分	安心。家についてほっとする自分。	自分(全身)
344	2	H 駅前ビルのクリスマスツリー	毎年見ている。その下の1でバイトをしている(毎年違うイルミネーションで面白い)。	
358	3	オセチ料理	私の大好物のオセチ。1月1日を楽しみに待っていた。今から食べようとしている私。	
279	1	華展の準備	忙しい事への喜び。花と戯れる喜び。お花の先生の生徒さんたちとの集合写真。皆いい顔。	自分と他者12(全身)
114	3	私の家で飼っている犬 J	べたっと座った可愛い姿。	
118	3	犬 K	すねている姿。	
310	1	ボランティア仲間	チームの雰囲気。	自分と他者5(全身)
362	2	初雪	今年の初雪の美しさに感動。きれいやけどこたつから動けない私がいる。	
403	3	私の自転車	どこに行くにもこの自転車で出かけるので。	
173	1	パパ	私のパパ。	他者1(膝上)
368	1	食物探しの私	毎日冷蔵庫を探っている。今日は私の大好物のサーモンがあって大満足!!	自分(上半身後ろ)
282	1	作業風景	皆で一生懸命頑張っている様子。	自分と他者3(全身)
388	1	母と夜中におやつ	おやつ好き。夜中でも食べる。母とは似たもの同士。	自分と他者1(上半身)
146	1	私	「あーあんたバカー」って感じで友達を軽く非難の目で。まあ、遊びだけど。	自分(顔)
393	1	私の汚い度最高の部屋	掃除しない私。	自分(全身)
76	2	最寄の駅	よく利用していた駅。	
256	3	L の CD	高校時代に大変好きだったグループなので昔の好みを表している。	
139	1	私	友達ととりあえずフィルムを渡して私っぽいのを撮れと言ったらこのショット。	自分(上半身)
309	1	自分+友人	キャンプのおみやげをお披露目。	自分と他者1(上半身)
141	1	私	探索中。久しぶりのお休み。あー満喫。	自分(膝上後ろ)
142	1	私	ナチュラルすぎる私。	自分(顔横)
144	1	私	再び物色中。うーんどうしよう、迷うわ。	自分(上半身)
237	3	携帯電話	今使っているものと、昔使っていたもので、私の携帯電話の好みを表そうとした。	
338	1	バイト先	学びの場。日常生活の中で自分にとってためになることが学べる場。	自分(全身)
339	1	M アルバイト先のメンバー	9月頃からこのメンバーで仲良くなって1ヶ月に1回皆で集まっています。私の安心できる場所です。	自分と他者9(全身)
7	3	愛車②(自転車)	N ツ子には必需品です。短距離の私の足。	
295	3	携帯電話	必要不可欠なもの。これがないと生活が不便になってしまう。	手と携帯電話。
93	3	お洒落な漢字の夕食テーブル・セティングとカクテル	めったにこういうことはしないが、こういう雰囲気の店で食べたり飲むのが好きだ。しかし非常に酒に弱いので一杯も飲めなかった。	
380	3	セクシーパンサーセット	部活の先輩から誕生日にもらった。私やったら使いそうと思ってくれたのに違いない。	
136	1	ネイルアート	ばっきり爪を切って短くしました。それでもネイルアートはかかせないっ！1時間の力作を見よう！	自分(部分)
340	3	家で飼っている犬の O	10年一緒にいる家族の内の一人として。	
37	1	お茶を飲んでいるところ	夏は水分補給が大切。	自分(全身)
300	1	自分+友人	お風呂上りの一枚。	自分と他者1(上半身)
346	1	祖父と祖父の家	壁の色は2年前に塗り替えたけど、部屋の中は明治時代という感じで私は好きです。	他者1(膝上)
384	3	ゲームソフト	私の一人遊び。	
296	1	料理している私	料理が好きな私。	自分(膝上横)
222	3	〇年からのスケジュール表	毎日何か書き込んでいつももっていた。その過程。	
337	3	車	自立。免許を取ってから遠出を自分でできるようになった。遊ぶ時に欠かせない。	

179	1	自分	元気.	自分と他者 1(顔)
211	3	自転車(愛用している)	私の足. P 市内であればほぼ必ず連れてゆく.	
27	3	眼鏡	必需品を表した.	メガネと手
135	1	ネイルアート	一生懸命伸ばしたネイルにグラデーションの感じでネイルしているのです.	自分(部分)
360	3	スノボのパンフレット	スノボツアーを毎日探している. 結局たくさんありすぎて選べない. しかし絶対に行く! 私はなんちゃってボーダー.	
45	1	自分の顔	私の喜怒哀楽を表す顔.	自分(顔)
319	3	私の好きな曲の CD	私はどんな音楽が好きなのか.	
26	1	足	自分の足で一步を踏み出して前に行こうという目標を表した.	自分(部分)
284	1	極楽鳥花を生け込み	没頭. 今年かなりの数の花の名を覚えた.	自分と他者 2(全身)
266	3	水着	苦悩.	
281	1	生け込み作業	共同作業中の混乱.	自分と他者 1(全身)
80	3	車	乗っている車から自分の行動範囲というか手段の一つ.	他者 1
343	2	Q 百貨店と大きいリース	12/25 にアルバイトに行きました. P のアルバイトを 1 年 2 ヶ月もしているので.	* 遠景人 6
283	1	作業風景	没頭.	自分と他者 1(全身)
230	1	自分	自分自身(無防備状態での素の状態).	自分(上半身)
345	2	R 大社の鳥居	今年の自分の願いを聞き入れてくれそうな R 大社の鳥居.	* 遠景人 4
247	3	ハンドベル	所属しているクラブ.	
286	1	父と私	私の大切な人. 父の大切な娘.	自分と他者 1(上半身)
127	3	鍋焼きうどん	私の大好物.	自分(顔)
241	3	育児記録	私の成長と生い立ち.	
17	3	作品	最近私が作って気に入っている服だけを写した. 服が大好きで人とは違う個性のある人が着ていない服に興味がある. 好きな服を表した.	スカート, ブラウス等
225	1	妹(S)	私の前での妹の顔.	他者 1(上半身)
406	3	私の携帯	何をしてもどこに行くにもいつも一緒なのでないと生活できない.	
166	3	朝ごはん	意外にマメ.	
342	1	アルバイト先の友人	クリスマスイブに集まったメンバーの 2 人です. もう一人女の子がいるんですけど, その子を含めて一緒に仲良しです.	他者 2(上半身)
415	1	家にいるときの私	普段の生活感.	自分(上半身)
165	1	ぎょうざ	大好きな餃子(餃子を食べている自分).	自分(上半身)
323	3	楽譜	唄をうたうのが好き.	
377	3	私の集中ケア LUX セット	髪はツヤが命. サラサラヘアを目指す私.	
327	2	T 家	落ち着く場所.	
350	1	私の父と飼っている犬の U	一緒に散歩しています. 私には姉と母もいますが, とりあえず家族の 1 人です.	他者 1(全身)
96	1	今の自分	全身のちょっとポーズして服の自慢.	自分(全身)
181	1	自分	少しお姉さん気分?	自分と他者 2(膝上)
347	2	V 市の W 川	高校の時, よく仲の良い友人と 2 人で遊んでいた場所(女子高なのでもちろん女友達).	
205	2	宵山の山鉾(祇園祭)	町衆の誇り. 明日は本番なのに夜の 12 時になっても明かりが...	
294	3	多くの調味料	料理に凝っている私.	
261	3	お茶	いつも持ち歩くもの. 必需品.	
209	3	箏	箏の音は心を表す→琴は心を表現する媒体の一つ.	
212	2	店	今のものと昔のもの共存→現代のものにも昔のものにも興味を持ち吸収する.	
49	2	大学	私の通っている大学	

98	3	ビーズコレクション	今年入ってから母の影響でビーズ作りにはまった。〇月の連休に集中して作った。	
186	3	愛犬 X	X がなでてもらいたがっているところ。	自分一部
259	3	ミュール	セオリー(何かの本で読んだもの)「いい靴をはいていればその靴がいい所に連れて行ってくれる?!」というもの。	
41	1	下の妹	一番下の妹とは仲が良い。	自分と他者1(全身)
285	1	私と妹	姉妹。よき相談相手。妹のよき相談相手でもある私。	自分と他者1(上半身)
10	3	私の商売? 道具	アルバイトの時はこれを身につけて働いています。必需品の一つ。	
134	3	ネイルとスヌーピー	私の大好きなネイルグッズだけを撮っても寂しいので、スヌーピーも一緒に。	
106	1	母と姉	母大好き。甘えたくてたまらない自分。	他者2(全身)
297	1	私とボーイフレンド	大切な人。支えてくれる人。この人のために頑張れる私。	自分と他者1(顔)
155	1	起きれない私	毎朝の習慣(といっても昼近い)。	自分(膝上後ろ)
161	3	らくがき	明日テストで勉強しようと思ったけど無理だった。	ノートと手
153	1	バイト中。てかりまくりの私	バイト。パーティコンパニオン。	自分と他者1(上半身)
170	1	ママ、友人、恋人	家?	他者3(上半身)
169	1	友人。ライブハウス	昔の私。	自分と他者2(上半身)
410	3	すずめ(ペット)	生活の一部(家族としての1匹)。	
168	3	人形	お裁縫の好きなどころ。	
420	3	思い出を貼るコルクボードと写真	過去の楽しかった思い出を貼り、それをいつも見ている。そういう思い出を大事にしていることを表したかった。	
59	1	撮っている自分	課題をしている自分。	自分(顔)鏡
158	3	脱ぎ捨てられたサンダル	私って本当にめんどくさがり。いい加減。雑。	
322	3	机の上	机の上を片付けるのは苦手。	
379	3	嫌いなもの	嫌いやし、自分は吸わないのに何故か持っているなぞ。	煙草
105	1	姉と自分	姉大好きな自分と引け目を感じている自分。	自分と他者1(膝上)
408	3	服のかかったクローゼット	普段着ている好きな服で、服が好きなことを表したかった。	
162	3	食べた後	すぐお茶したが。帰ってからでいいのに。	ケーキ皿とカップ、携帯
214	2	ネオン	夜行性。	
213	2	市バス	市バスは時間のルーズさの象徴!?	

注) 対象分類欄の番号、1 は人物、2 は場所、3 は物を表す。表中の Num は資料 6 に示したデンドログラムの Num に対応する。

付表 7-5. クラスター5 の被写体・被写体の記述・表現内容

Num	線分類	被写体(何を写したか)	表現内容(何を表そうとしたか)	備考
108	3	宿題のプリント	八方美人.	
263	3	テレビ	自分をダメにするもの.	
112	3	時計	硬い自分. 時間きっちり. 10分前行動.	
156	1	勉強をしている私	テスト前しか勉強しないからとても辛い.	自分(全身)
177	1	車	初心者です. ときどき.	自分(上半身)
172	1	ママ	私とそっくりなママ.	他者1(膝上)
274	1	R&WのA先生と同クラスの子	安堵. 普通の英語の授業後.	自分と他者2(膝上)
272	1	先生にご指導を受けているところ	学びの姿勢.	自分と他者1(全身)
264	3	服やのロゴ	(いつも買ってしまう服のメーカー)自分の好み.	
331	2	堤防(河原)	思い出の場所. 話し合ったり. 待ち合わせしたり. 花火をした り...と思い出の多い場所.	
328	2	通っていた幼稚園	人生の始まり. 私が人との関わりを持ち始めた場所.	
329	2	通っていた小学校	遊び場. 小学生の頃は家に帰ってからまた小学校に来て遊んだ.	
130	1	私	ぐったりとした私. もう無理.	自分(上半身横)
200	3	めがね	自分に欠かせないものを表そうとした.	
152	1	恋人	私の必須アイテム. でも勉強中の彼は嫌い.	他者1(上半身横)
250	3	コルクボード	私の予定と時間割.	
110	1	雑誌モデル	劣等感. 自信欠如.	自分(顔なし)
254	3	化粧ボックス	自分の楽しみ.	
28	2	どこまでも続く道	私の現在. 最近あまり自分らしさが出ていない. 自分らしさ. 自分 探しをしている自分を表した.	
246	3	ロッカー	学校内で私を表すもの.	
101	1	バスケットをしている自分(後ろ向き)	マジメな時はマジメに! を表そうとバスケット姿. でも最近では義務的 に感じているところもあり. 表情の見えない後姿.	自分(全身後ろ)
107	1	ノート	初心者. むかついたこともイライラしたことも本人にぶつける勇気 がなく. ノートに書き連ねる自分.	自分(顔なし)
111	3	教科書	硬い頭.	
113	3	狸の目	人の目がこわい(視線が気になる)自分.	
293	3	テニス用具	テニスが好きで私.	
412	1	私生活	お風呂を出た後. 妹とパジャマでしゃべる習慣.	自分と他者1(上半身)
128	1	自分	ありのままの自分. メイクパッチリ! 今日も一日頑張るぞ!	自分(顔)
330	2	B 中学校	出会いの多かった場所. 近所にあるのでいつも遊びに行く.	
46	1	自分の全身	私の形(外観)	自分(全身)
95	1	今の自分(全身)	自分とくっつをはいた姿.	自分(全身)
104	2	表札	形ではC家の一員だけど...孤独感を感じやすい.	
32	1	眉毛を書いているところ	眉毛を書かなければ外に出れない. 一日で大切なこと.	自分(胸上)
198	3	パソコン	メールが好きだということを表そうとした.	
199	3	コンポ	ラジオを聞く習慣があることを表そうとした.	
353	1	車を運転する私	免許を取って1年になるが. ほぼペーパー. 一人で乗車するのは 超苦手. けっこうびびっている.	自分(上半身)
276	1	internet 接続説明書を読む私	混乱. なかなかメール受信設定ができず. 頭が混乱している自分.	自分(上半身)
311	1	ボランティア仲間	トンネルの中にいる自分達.	自分と他者8(全身)
123	3	私の好きな携帯電話	私の必須アイテム.	

233	3	パソコン	私のパソコン. 私の趣味.	
204	1	黒い髪	自分らしさを表そうとした.	自分(顔横)
302	3	自分のかばん	キャンプにこの荷物を持っていったよ(リーダー名入りで).	
54	3	椅子	立っているのが嫌な私は直ぐに座りたがるから.	
298	3	日記帳	何かあれば日記を書く私.	
217	3	自分のビデオテープ	私の好きな大切なビデオ(映画)たち.	
249	3	茶碗と箸	食事に使う食器で私のものと決まっているもの.	
30	2	バイト先	自分の働いている場所.	
315	2	自分の部屋	私が落ち着く部屋.	
228	3	天井	私は毎晩この天井を見ながら眠る. 最も安らぐ場所からの眺め.	
307	2	バイト先	自分の属しているところ.	
404	3	自家製鮎寿司	授業の一環でつけることにした鮎寿司. 去年最大のイベント.	
71	3	自分のロッカー	私が3年間この大学の生徒であること.	手とロッカー
109	3	携帯電話メール画面	文字が手段になると別人な自分.	
289	3	きなこもち	大好物. これさえあれば元気が出る私.	
409	3	ぷーさんとベッド	生活感.	

注)対象分類欄の番号、1は人物、2は場所、3は物を表す。表中の Num は資料 6 に示したデンドログラムの Num に対応する。

資料 8. 半構造化面接における振り返りシート（面接者用）

※写真を現像して、予め記録用紙に撮影順序と撮影日時を記入しておく。

1. 写真を提示する前の質問（ 月 日実施）

1. 撮影している間、気分はどうでしたか？
2. 撮影は面白かったですか、退屈でしたか？
3. 最低 12 枚を撮るのは大変でしたか？
4. 27 枚で十分に自分を表すことができましたか？
5. その他（自由な語りなど）

2. 写真を提示しながらの質問（別紙の記録用紙を作成）

注）2は写真ごとに必要となるため、実際には写真枚数分作成。

（ 月 日～ 月 日実施）

「これから 1 枚ずつ写真を見ていきましょう」（以下、記録用紙に従って質問。補足質問の順序は任意）。

<div style="border: 2px dashed black; padding: 5px; width: fit-content;">重要順位</div>	写真貼付欄	撮影月日 月 日
		撮影順序 枚目

1. 感情評価（この写真をぱっと見て、どんな感情が湧いてきますか）
2. 写真の説明（この写真について説明して下さい。写真を見たり説明したりする間に思い浮かぶことがあれば、それも自由に話して下さい）
3. 何を撮ったか
4. 何を表そうとしたか
5. なぜこの写真があなた自身を表すのか

6. 撮影場所 () 自宅からの距離：0m 自宅内・徒歩 5 分・ 徒歩 15 分・徒歩 30 分・車 30 分内・車 30 分以上	7. 撮るものは簡単に思い浮かんだか 非常に困難 ・ やや困難 ・ どちらとも言えない ・ やや簡単 ・ 非常に簡単
8. 写真の好き嫌い 非常に嫌い ・ やや嫌い ・ どちらとも言えない ・ やや好き ・ 非常に好き	9. 写真が「あなたが誰であるか」を表す程度 非常に表さない ・ やや表さない ・ どちらとも言えない ・ やや表す ・ 非常に表す

3. 全写真を提示した後の質問 (全ての写真を机上に並べる) (月 日実施)

1. この写真全体を見て、どのように感じますか？ 好きですか、嫌いですか？
2. 写真全体を眺めて、自分を表す上で重要な順に並べ直して下さい。 ※記録用紙を並べ替えるなどして、順位を記録しておく。どうしても順位がつけられない場合は同順位も認める。
3. 1位の写真は、自分を表す上でなぜ重要なのですか？
4. その他 (自由な語りなど)

4. 活動全体についての質問 (月 日実施)

(写真の提示はなし。質問の順序は任意。0~100のスケールで回答してもらってもよい)

「撮影やカウンセリングの中での写真の振り返りを通じて、思ったことや感じたことを聞かせて下さい」

1. この写真撮影の作業を通じて、自分についてどのくらい考えましたか？ →スケールでの質問 (とても考えたを 100、全く考えなかったを 0として数字で答えてみて下さい)
2. 写真で自分をどのくらい表現できましたか。 →スケールでの質問 (とても表現できたを 100、全く表現できなかったを 0として数字で答えてみて下さい)
3. この写真撮影の作業を通じて、昔のことをどのくらい考えましたか？ →スケールでの質問 (とても考えたを 100、全く考えなかったを 0として数字で答えてみて下さい)
4. この写真撮影の作業を通じて、将来のことをどのくらい考えましたか？ →スケールでの質問 (とても考えたを 100、全く考えなかったを 0として数字で答えてみて下さい)
5. この写真撮影の作業を通じて、自分の周りにある物について、どのくらい考えましたか？ →スケールでの質問 (とても考えたを 100、全く考えなかったを 0として数字で答えてみて下さい)
6. この写真撮影の作業を通じて、自分の周囲の人々について、どのくらい考えましたか？ →スケールでの質問 (とても考えたを 100、全く考えなかったを 0として数字で答えてみて下さい)
7. その他 (自由な語りなど)